
Ordinary

今井敏之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ordinary

【Nコード】

N08800

【作者名】

今井敏之

【あらすじ】

京都エンプレスホテルが謎の武装集団に占拠された。ホテル従業員、一般宿泊客、そして修学旅行中の中学三年生と教職員、合計約三百人が人質となる。その中で、偶然難を逃れた中学生、五代明と水神清玄は、脱出不可能状態となったホテルで戦いを開始した。

1・PM07:00

隠蔽されたありきたりな事件、あるいは存在しない平凡な過去に

……

新世紀を目前とした十月の京都。

日本が世界に誇る古都として、神社、仏閣、古城など、数々の古の建築物が今日まで残されている。

それは千年の時を超えて、人々の生きた証を今に残す街。

今生きる者たちの証が、千年先の未来に残ることを証明してくれるように。

その京都へ修学旅行にやって来た葉山中学校三年生たちは、初日の市内観光を終え、予定されている宿泊施設へと向かった。

京都エンプレスホテル。

山間に立てられた十階建てのホテルは、京都の都市部から少し離れた、豊かな自然に囲まれた宿泊施設だ。

夕刻のエンプレスホテル前に停車したバスから、今日の京都見学を終えた葉山中学校三年生と随伴の教職員、総員百四十二名が、順調にホテルにチェックインしていく。

その中の一つ、五代芽の班が、ホテルのロビーで案内状を見ながら部屋割りを確認する。

「ねえ、あたしたちの部屋ってどこだっけ？」

クラスメイトの大滝由美が、案内地図を片手に五代芽に尋ねた。

コギヤルという名称で親しまれている、あるいは軽んじられているファッションを中学生生活で貫いており、生粋の日本人であるにもかかわらず、肌は異なる人種としか思えないほど褐色に日焼けしておまけにケバケバしい化粧を施し、長い髪は薄い茶色に脱色してい

る。奇異ととられる目立つファッションスタイルだが、現在ではさほど珍しくはない。

このファッションを学校内でも行う大滝由美に、中学生生活が始まった当初は、教師も諫めようとしていたが、理事長の孫という立場のためか強く叱られることなく、それに意外と成績が良いこともあってか、二年生に入った頃には誰もなにも言わなくなった。

反対に、五代芽は特にファッションに気を使っている風でもなく、指定された制服を規定どおりに着用している。強いて言うなら、いつも髪をツインテールにしており、小柄な体と合わさって、なんとなく耳を垂らした小犬を連想する。

いささか奇妙な方向性の最先端ファッションに興味心身で、常に実践する大滝由美と、真面目でおとなしく、ファッションに特に興味を持つているわけでもない五代芽の二人が、なぜ友人となったのか、それは誰にも説明できない。気心が通じ合ったと言っしかなく、友人関係というものは、極めればそういうものかもしれない。

「えっと、どこだったかな？」

部屋番号をうる覚えで確信の持てない五代芽の代わりに答えるのは、おなじ班の水神晴玄だ。みずがみせいけん

「おまえらはたしか三階。俺たちは五階だ」

彼の雰囲気は、なぜかシャチャイルカといった、海洋哺乳類を連想するが、別に容貌が人間離れしているわけではなく、寧ろ幼さの残る可愛い顔立ちだ。全体の印象としては地味で真面目で、別に視力が悪いわけでもないのになぜか黒ぶちの伊達メガネをかけていることもあってか、勉強だけを取り柄の文学派の中学生と思われるが、だが、意外と運動神経は高い。

これが五代芽の班の三人。残り一人は今席をはずしている。生徒の人数の関係で、一つだけ少ない班ができたのだが、それが彼らの班だった。

「明くん、遅いね」

大滝由美がなんとなく気になって口にした。

ホテルに入る時にトイレに向かい、ロビーにまだ戻ってこない。
このホテルは一階だけでも広い上に、今日は特に混雑しているので迷ったのかもしれない。

「おい、ツカイツパ！ 早く来いよ！」

正面玄関の方から声がして、三人が目を向けると、別の班の土谷健司けんじが同級生の尻を蹴っていた。その取り巻き三人が追隨するように小突き回している。

土屋健司は県下有数企業の御曹司で、今時ヤクザを気取っている不良という、ある意味天然記念物的な存在だが、保護しようという生徒はいない。今のよう周囲の迷惑を考えずに喚き散らしたり暴れだしたりするので、早く絶滅して欲しいと思っている。

そして当面、そのヤクザ気取りの攻撃的になっているのが、瀬戸口大介。
とくち だいすけ

身長が低い上に猫背で小太りな体格の瀬戸口大介は、見かけを裏切らずに気が弱く、ことあるごとにからかいや嘲笑の対象となり、土谷健司に半ば虐められているが、しかしことなかれ主義の葉山中学校の教師のほとんどは対処しようとしていない。

しかし、幸運にも本格的な虐めに発展しないのは、おそらくある抑止力が働いているからだ、葉山中学全員共通の認識となっている。

「ああ、このノロマが。てめえは飯抜きだ。ブタヤロウ」

陰湿な声で小突き続ける土屋健司の背後に、いつの間にか頭一つ分背の高い生徒が立っていた。

「おい」

低く静かな声に、土屋健司とその取り巻きは、驚いたように振り替える。

声をかけた生徒は、葉山中学校の制服を着ているが、その顔つきは精悍で、中学三年生というには大人びた雰囲気をしている。事実、彼はある事情により、同級生より三つ年上の、十八歳だ。

土屋健司は年上の同級生に憎々しげな視線を向けた。

しかし、下卑な悪意をそよ風とさえ感じていないかのように、彼は瀬戸口大介と土屋健司の間に立つ。

それは無言の圧力。力さえ込められていない瞳が、大物ヤクザを気取っているチンピラでさえない子供を、萎縮させる。

「ちっ」

忌々しげに舌打ちすると、土屋健司はその場を足早に去った。少し遅れて、慌てて取り巻き三人が土屋健司の後を追う。

瀬戸口大介を助けた少年は、不快指数の原因がいなくなったところで、一人残った瀬戸口大介に「それじゃ」と軽く告げて五代芽たちのところへ向かう。

先程までの威圧感は消失し、力強く、そして理知的な優しさがかすかに感じられた。

しかし瀬戸口大介は、どうすればいいのかわからないように、取り残されたような面持ちで立っていた。無理やり引き込まれた土屋健司の班には戻りたくないが、一人で行動するのも問題があるのだから。

大滝由美が小走りで瀬戸口大介のところへ行き、手を引っ張ると楽しいことが大好きだという笑顔で誘う。

「ねっねっ、瀬戸口君。一緒にいようよ。ほら」

「う、うん」

瀬戸口大介は戸惑いながら、彼女に手を引かれて、五代芽の班に混じった。

そして五代芽は、瀬戸口大介を助けた、兄に注意をする。

「放って置いたら駄目じゃない」

「放っておくって、助けたろ」

その後のことを言っているのだが、兄にとっては不良から助けてそれで終わったこととなっているようだ。だから注意されたことの意味がよくわかっていない。

その割り切りかたが、兄らしいともいえるが。

五代明。五代芽の三歳年上の兄だが、事情があって同級生となっ

ている。

中学高校では、年上であるという理由だけで一目置かれるものだが、彼は他の十八歳と比べても、明らかに優れていた。運動神経がよく、成績もいい。特に数学、語学に関しては、高校レベルと比べてもトップクラスに入る。平均より頭一つ分高い身長と、引き締まった体躯に、精悍な顔立ち。これらは決して年齢だけによるものではないだろう

同級生たちがある種の敬意を持っていることは確かだし、あの暴虐無人に振舞う土谷健司でさえ恐れている。彼がまだ本当に好き放題していないのは、明らかに兄が抑止力となっているからだ。本人は気付いていないだろうけれど。

しかし、年が違うということで自然と他の生徒と距離を置くようになり、友達と呼べるものは多くない。

今、班にいたのが、実質的に兄の友人の全てなのだが、友達は多ければいいというものでもない。五代芽は思う。

重要なのは信頼だ。

少なくとも、この場にいる友人たちは、兄を慕い信頼している、同時にどのような事情があるのか話さないが、学歴が遅れることになった五代明を助けてきた。

少なくとも五代芽にとって、兄との中学生生活は楽しかった。

それは優しい恋人が傍にいてくれる感覚に似ているのかもしれない。

いつも気に欠け、守ってくれる、世界で一番信頼できる人だった。一緒に中学校を卒業して、同じ高校に入り、大学も一緒に入るかもしれない。

兄はずっと一緒に生きていく人なのだろう。

お互いに好きな人ができて、離れることのない人。

五代芽はそれを信じて疑わなかった。

なんの根拠もなく。

五代明のことをなにも知らなかったのに。

エンプレスホテルは大まかに分類して、北側に去年建設されたばかり新館と、東側にある旧館の二つに分けられている。どちらも使用されているが、当然旧館のほうが安く、中学校側の旅行費を少しでも軽くしようたいという理由から、修学旅行生はそちらに割り当てられた。

ホテルの修学旅行生担当の係員に案内され、生徒たちは割り当てられた部屋にそれぞれ入る。荷物を降ろし、一休みの後、夕食時間になると、イベントホールへ向かう予定だ。

エンプレスホテルが誇るイベント専用ホール。

一年前新館が建設される時に同時に建てられたもので、千人以上収容できる、ホテルとしては大きなイベントホールで、エンプレスホテルはこれ売りの一つとしている。利用者は多く、有名人の結婚式会場や、セレブのバースディパーティ、講演会、コンサートなど、数多く使用され、それに伴う宿泊客も多く、新館建設による収入は順調と言える。

そして今日、新館完成一周年を記念して、ホテル主宰のクラシックコンサートを開くことになった。

ホテルの宣伝戦略の一環で、当日の宿泊客は無料招待され、当然葉山中学校の修学旅行生も招かれている。

イベントホールは少し特殊な構造をしており、VIPやイベントを行う関係者の入り口は一階だが、一般客席の入り口は二階にある。二階の入り口は席の関係で、修学旅行生が長蛇の列を作っており、五代芽も大滝由美と一緒に並んでいた。

一般宿泊客の姿も少し見られる。彼らは多くの中学生の姿に、少し戸惑っているが、その中で二人だけ、楽しげな様子で修学旅行生を眺めていた。

スーツを着こなした初老の男性で、どうやら日本人ではないらし

い。肌の色から白人系だと思われる人物で、白髪の間じつた茶色の髪をし、髭を蓄えている。顔には年齢による皺が刻まれているが、しかし強い意志の表れとも呼べる活動的な雰囲気から、見た目の年齢ほど老いを感じない。

もう一人は銀に近い薄い金髪に、白い肌をしている。ヨーロッパ北部で多くみられる人種の血を引いている可能性が高い。年齢的には五代明と同じか、それより年下に見える。周囲に対するある種の無関心さも、子供特有のものだ。

似ていないが、二人は親子だろうか。

『いくぞ、マクスエル』

彼らはしばらく通路で佇んで中学生たちを眺めていたが、不意に人の流れを逆行してその場を去った。なにかを話していたが、日本語ではなかったので周囲の人間には誰もわからなかった。

京都は日本有数の観光地で、外国からの観光客は多い。だから日本人にはあまり見られない特徴もさほど不思議ではないのだが、五大芽は、その初老の男の笑みに、なぜか不安感を覚えた。

「ねえ、明くんは？」

不意に大滝由美が尋ねた。そう言えば姿が見えないことに気付く。部屋割りは男女で当然違うため一旦別れたのだが、夕食の時間になっても姿を見せないのはなぜだろう。

「さあ？ どこへ行ったんだろ？」

しきりに周囲を見渡す芽に、大滝由美はどこからかうような笑みで覗き込む。

「女の子と一緒にいたりして」

彼女は五代芽が兄に恋愛に近い感情を持っていることを知っている。それが思春期によくある一時のものだということも。そのことを揶揄してよくからかう。

「ちよつと、やめてよ」

しかしからかわれるほうは、そんな細かいことまで気が回らない。すぐに過剰に反応してしまい、兄が他の女の子と仲良くしているこ

とを想像するだけで、なぜだか腹が立つ。

不意にその兄の姿が見えた。五代明はイベントホールから逆方向に、五代芽たちへ近づいてくる。どうやら先にイベントホールに入っていたらしいのだが、なぜ出てくるのだろうか。

その隣の水神晴玄は、なにがあつたのか、苦しそうに腹部を押さえている。

「芽。水神が腹痛起こしたんで、部屋に送ってくる。少し遅れるって、先生に伝えてくれるか」

用件を伝える五代明の隣で、水神晴玄は力なく呟く。

「……あれがあつたのかな？」

なにか食べたのが原因らしい。そういえばホテルに来る前、市内観光した時に買った土産物の中には、食べ物が多くあつた。兄が土産に買った物なのかと思つたが、水神晴玄がすぐに食べていた。市内で食べ歩きはみつともないと、大滝由美が注意していたのだが、聞かずに一箱丸ごとお菓子を食べていた。

「やーい、あたしの言うこと聞かないからだよ」

大滝由美がはやし立てているのか、怒っているのか、その中間のような感じ。

「デメツ……ううん」

水神晴玄は言い返そうとしたが、腹痛のためか、凶星だからなのか、なにかを言おうとして結局止めた。

「わかつた、お兄ちゃん。先生に伝えておくね」

五代芽が兄に請け負うと、二人は人波の流れとは逆に、宿泊部屋へ向かつた。

それを見送って、五代芽と大滝由美はホールへ向かつた。

イベントホールにホテル宿泊客約三百人が集まり始めていた。ホテル主宰の無料招待ということもあってか、今夜ホテルに泊ま

る客のほとんどが集まったようだ。

後部席は葉山中学校の修学旅行生が占めている。ディナーもテーブルに並べてあり、食事の後、移動することなくクラシックを楽しむ。食事の後特有の眠気を考慮に入れているのかどうか多少疑問に思う生徒もいたようだが、眠るだけなら演奏の邪魔にならないので特に問題ない。

前部席は一般客が大半を占めている。半数以上は今日のクラシックコンサートのことを知らなかったようだが、無料で聞けるということでは足を運んだようだ。

最前列の特等席では、街の名士やホテルの融資者などがある。それは当ホテルに注目していることであり、今後の経営に期待されているということだ。

クラシックコンサート開始前のイベントホールの様子を、支配人の萩野修は満足そうに眺めていた。宣伝効果は十分期待できそうだ。おぎの おさむ初老に到達した彼は、定年後のことを見据えて、そろそろ後継者を育てることを本格的に考えていた。

今回のクラシックコンサートはその線引きと捉えていた。今回を期に、若い者たちに仕事を分担させる形で、仕事から一線を引く。そして五年後には完全に引退となるだろう。

その日も変わらず、この日のように盛況であること期待していた。

「いいですか、静かに聞きなさい。まず……」

イベントホール後部席では、修学旅行生がテーブルマナーに関する説明を受けていた。

皆が早く食事にありつきたいと願っている中、新任教師の早乙女遥はるかの説明は延々と続き、空腹に喘ぐ生徒たちを不満と苛立ちに陥れていたが、早乙女遥はそのようなことを全く気にしていないかのように、あるいはまるで気付いていないかのように説明し続けている。

「早く終われつての。なあ」

大滝由美はム力ついている顔で、五代芽にささやく。

五大芽は少し笑って頷いた。

今年就任したばかりの早乙女遥は教職に情熱を燃やしているらしいが、かなり空回り気味で、生徒全般の評価は悪い。それを不満に思い、さらに熱心になるが、空回りの速度は上がる一方だ。

やがて早乙女遥に、古株教師の佐藤健人さとうたけひとが耳打ちした。佐藤健人は二十年前から教職に就いており、七年前に葉山中学校に来了。温和で授業も丁寧にするためか、生徒の人気は高い。教えるというところが、生徒と教師の対話であるという信念を持っているらしい。

一方的に話すだけの早乙女遥とは大違いだ。

それは外見にも表れている節がある。

早乙女遥は年齢がまだ二十代前半にもかかわらず、人目を人一倍気にしているのか、異様に厚化粧を塗りたくっており、完全に逆効果になっているのだが、客観的に見るということができていないため、いつも変わらず不気味な白粉のような状態になっている。スーツもしわ一つないが、装飾品が多く、かえって安っぽい印象を受ける。

反面、佐藤健人は特別ファッションに気を使っているわけではないが、毎日洗濯しているのか清潔に保っており、アクセサリーの類も全くないが、髪も服装も全体として整えられていて、必要最小限で効果を発揮する、シンプルなセンスのよさがある。

生徒がどちらによい印象を持つかは一目瞭然だが、早乙女遥は佐藤健人が身だしなみに気を使っていないと、軽蔑しているようだ。

「では、みんな、今言ったことをきちんと守るように」

一方的に締めくくって早乙女遥は不快に口を曲げて、佐藤健人と一緒に教職員席に戻った。

問題なのは、教職員席が五代芽の班の近くだということなのだが、どうやら教職員も疲労がたまっているらしく、生徒にそれほど注意を払っていない。生徒も、市内を歩き回った疲労で、騒ぐほどの体

力は残っておらず、せいぜい雑談程度だ。こちらにはそれほど注意を向けないだろう。

そして成長期の子供たちは、一斉に食事を始めた。それはさながら飢えた猛獣の如き勢い。

「おいしー」

大滝由美は口一杯に頬張ると、満足した満面の笑み。しかし五代芽は、隣の空いたまま席を気にしていた。

「明くん、まだ来ないね」

五代芽の内心を読み取った大滝由美が代弁するように言った。
「うん」

水神晴玄の様態が悪いのだろうか。

エンプレスホテル地下駐車場に、二台の大型バスが停車した。

ヨーロッパから招かれたクラシック楽団の一団が到着したのだ。

到着予定時刻を一時間も遅れている。どうも渋滞に巻き込まれたらしい。日本の名物のようなものだが、それを計算に入れて移動するように伝えていたはずなのに、まったく効果がなかった。あるいは、時間にルーズというより、彼らの国の感覚で動いているからなのか。時間に神経質なまでに緻密な正確さを求めるのは、世界中でも日本人ぐらいだという。

ともあれ、もしかしたらクラシックコンサートの開催時間に間に合わないのではないかと焦っていたホテルの担当員は、安堵して迎えた。

彼の案内で約三十人の楽団員が、イベントホールへ荷物を運ぶ。その手際はよく、流れるようにスムーズだ。これなら時間の遅れは問題ないだろう。

「私たちも手伝いましょう」

担当員の流暢な英語での手伝いの申し出を、指揮者と思われる人

物が嬉しそうに承諾した。

大柄な体格で貫禄がある初老の男性で、音楽家特有の儂さや神経質というものはまったくなく、寧ろ大らかな印象を受ける。

『ああ、ありがとう。なにせ、人手が足りないものでね』

音楽のプロは、素人に楽器を扱わせることに不安で嫌がるものだと思っていたが、それは偏見のようだ。それにスケジュールが押していることもあるのだろう。

ホテル担当員は、管楽器らしいケースを左右の手に一つずつ持とうとしたが、予想外に重く、一瞬持ち上がらなかった。

「……重いな」

担当員は、楽器というのは意外と重いのだと、認識の誤りに修正をし、楽器ケースの中から時折金属音が聞こえたが、それは楽器が中で重なっている音だとは思わなかった。

結局二つ同時に運ぶことは諦め、両手で一つずつ運ぶことにした。

『ハンス、急げ』

指揮者が誰かに指示を出した。英語ではなかったのになにを言ったのかわからないが、名前らしい単語だけは聞き取れた。

『了解』

浅黒い肌をしたハンスと呼ばれた男は、同じような楽器ケースを二つ同時に持つて運んだ。軽々と運んでいるのは、自分より頭二つ分は高い身長と、三割増しの体格のためだろうか。

音楽家というのは体力がないものだという先入観があつたのだが、ここにいる人たちは指揮者を始めとして、全員肉体を鍛えられているようだ。楽器を扱うのは意外と体力を要するのかもしれない。考えてみれば、こんな重いものをずっと持つて演奏し続けるのだ。脆弱な体では演奏終了までとても耐えられないのだろう。

ふと、楽団員全員の腰に、通信機らしき物が装着されているのに気付いた。携帯電話ではなく、通信機を使っているのはなぜだろうかと思つたが、国々を渡つて移動する彼らの連絡手段としては、携帯電話は契約などを一々する必要があるため、ああいった物のほう

が利便性が高いのだろうと、深く考えなかった。

そして、心配されていたような問題が起こることはなく、楽器ケースや機材は次々と運ばれていった。

ホテルの一室で二人が話をしていた。

一人は黒い肌をした初老の男。頭髪は白くはげかかっている。メガネを掛けており、全体としての印象は神経質で臆病な雰囲気だった。

一人は若い女性で、黒く長い髪を一本の乱れもなく整えてある。東洋人のようだが、日本人なのかどうかはわからない。ただ、見るものに冷酷な印象を与える、表情の起伏の少なさが、日本人特有のものではあるが。

二人は、それぞれに作業服に似た、市街戦用の軍用服を着用していた。

彼らの姿を見たら、ホテル周辺でサバイバルゲームでもするつもりなのかと、訝っただろう。

初老の男は、手にした小型通信機で状況報告を受けている。そして一通りの説明が終わったのか、通信相手からの連絡がいったん切られた。

『ヨーキ、状況は？』

若い女性が淡々と、初老の男に尋ねた。

ヨーキと呼ばれた初老の男は緊張気味に『ドモチエフスキーは遅れを取り戻し、予定通りに準備を終えた。そちらはどうだ？ ケイミン』

『機材搬入終了。問題なし』

ケイミンと呼ばれた女性は端的に答える。

そしてヨーキは小型通信機を手にとすると告げる。

『ワシントン、準備完了だ。実行命令を』

そして、全ての通信機から同じ声が同時に届いた。

『ミッションスタート
作戦開始』

2・PM08:00

舞台の垂れ幕が上がった。

クラシック楽団に向けられた拍手がイベントホールに鳴り響く。

しかし、垂れ幕に隠された舞台で待っていたのは、クラシック楽団が並ぶ姿ではなく、一人の男だった。

拍手はほどなく疎らになり、そして静まり返り、怪訝なざわめきが広がっていく。

舞台上にはクラシック演奏の準備は全くされておらず、椅子も楽譜台も、そして音楽に必要な楽器も、なにもない。そのため、舞台に立つ男がひときわ目立つ。

年は初老だろうか。茶色がかった髪は白くなっているが、豊かな頭髪を後ろでまとめている。スーツは上品に着こなされ、立ち居振る舞いは堂々として、多くの人を前にしてもまったく臆した様子はない。

最初は何事かと思っていた観客も、男の堂々とした様子に、舞台演出の一つかと納得して、事態の推移を待った。これからどのようなイベントが行われるのか期待して。

「紳士淑女の皆さま、そして修学旅行にこられた葉山中学校の学生の皆さま。こんばんは。私はジョージ・ワシントン。皆様にお会いできたことを大変光栄に思います。ここに、こうして舞台に立つことは、私にとって大いなる名誉であり、喜びです。また皆様の期待に応えるべく、楽団一団となって練習に励んでおりました。しかし

……」

流暢な日本語での説明を、ここでワシントンと名乗る男はいったん切り、観客を一度見渡した。

「しかし、残念ながら、今夜のクラシックコンサートは中止となりました」

観客がざわめき始め、ホテル支配人の荻野修が、予定外の言葉に思わず席から立ち上がった。中止などという報告は受けていない。

「ああ、どうかご静粛に。説明をしますので、ご拝聴をお願いいたします」

舞台の男は、両手で制するように、観客に願う。その些細な仕草に三百人の観客が圧倒されるかのように静まる。

「さて、まずは残念なことからお知らせしなければなりません。今夜皆様にそのすばらしい音楽を披露するはずだったクラシック楽団は、実は昨夜、全員亡くなりました。悲しいことです」

全員が亡くなった。どういうことだ？ 荻野修は怪訝に思う。クラシック楽団は先程到着し、準備を終えたという報告を受けた。

舞台の男が、その心中を察したかのように説明をする。

「いや、しかし、それでは、今夜ホテルに来た者たちはいったい何者なのでしょう？ 楽団のバスに乗って現れ、楽器を運んだ楽団員たちはいったい誰なのか？ 疑問を持たれた方は多いでしょう。その疑問に今、答えましょう」

男は芝居がかった調子で、まるでクラシックの指揮者のように、手を振り上げた。

「それは！ アメリカ！ ロシア！ ヨーロッパ連合！ 世界各国に圧制を引く独裁政権と戦い！ 自由を勝ち取らんとするレジスタンス！ 自由革命同盟リバティ・ベル！」

叫ぶと同時に、舞台脇から二十人のサブマシンガンを持った男たちが現れた。

一列になって登場した彼らは、ステージを降り、迅速にホール全体に展開し、壁を背に規則正しい距離の配置に付くと、銃口を観客に向けた。

その銃口を見ても観客は、まだイベントの演出なのだろうと思い、恐怖を感じることはなく、過剰演出に戸惑っているだけだった。

「皆さま、どうか拍手でお迎えください」

手本のつもりなのか、ワシントンは拍手をして見せる。

つられて拍手をする観客もいるが、しかし今一つ舞台演出が理解できないので、当然疎らで力ない。

荻野修が状況を理解できず、どうなっているのか担当の者に話を聞こうと外へ向かった。イベントホールに四つある扉のうちの一つを開けようとしたが、鍵がかかっているのか、押しても開かない。

ドアを叩いて外側で待機しているホテルマンを呼ぶが、返答はない。

「ああ、支配人」

ワシントンと名乗っていた舞台の男が目ざとく発見した。

「ドアは開かない。外側から鍵をかけさせてもらった。ちなみに、外で待機している君の部下がどうなったのかは、聞かないほうがいいだろう」

その外では、四つの扉の前で待機しているホテルマン四名が殺害され、代わりに武装者が立っていることを、内側からは知りえるはずがなかった。

だが男の言葉のニュアンスから、荻野修は戸惑いながら扉から離れた。その顔が青ざめていることは、照明が薄く落とされた状態でも明確に判別できた。

「さて、皆様。本日現時刻を持って、エンプレスホテルは我らリバイ・ベルが占拠します。無用な流血は我々としても本意ではありません。どうか、我らの指示に従っていただきたい」

「ねえ、クラシックコンサートをやるんじゃないかった？」

隣の席の大滝由美が顔を寄せて、五代芽にささやく。

「うん、そう聞いてたけど」

しかし、今舞台で行われているのは、とうていクラシックコンサートには見えない。なにかの演劇だ。

最初、ジョージ・ワシントンを名乗る男が登場した時、五代芽は

彼がホールに入る直前見かけた人物だと思い出し、楽団の関係者だったのかと納得した。なんの準備もされていないのも、演出だと考えれば不自然ではない。

だが、コンサートは中止になり、楽団員は全員死んだという。そして、ホテルを占拠したという宣言。

ワシントンの説明に、五代芽はようやくある可能性に思い当たった。

「まさか……まさか、本当に……」

「なに？ まさかつて、本当にテロとか？ んなわけないじゃん」

笑い飛ばす大滝由美に、五代芽は笑い返さなかった。

他の生徒たちは大滝由美と同じことを考えているらしく、みなこれからどんな刺激的なイベントが起きるのか、期待している表情をしていた。しかし教師たちは、聞いていた話と違うことに戸惑っているようだ。

そして舞台付近の特等席でも、ほとんどの者は同じように戸惑い、そのうちの一人は怒りを爆発させた。

「ちよつと君！」

小太り気味の男が立ち上がって、ワシントンを指差した。

「いったい何事だね！？ こんな話は聞いていないよ！ クラシックコンサートをするんじゃないのかね！？ ええ！？ ちよつと、責任者を出しなさい！ 責任者！」

周囲の目をまったく気にせずに怒鳴る小太り気味の中年の男は、テレビで見たことのある国会議員だった。名前は忘れたが、すぐに怒ることでも有名だ。テレビ演説や国会でのあれは、演技ではなかったらしい。

その様子にワシントンは肩をすくめる。

「あー。どうやら、状況を理解されておられないようだ。ま、平和な日本らしいがね。羨ましいとも言える。しかし、今は状況を理解されてもらわないと困る。よろしい！」

ワシントンは軽く手を叩くと、スーツの懷に右手を入れた。

「皆様に理解していただくための、代表となつてもらおう」

そして懷から取り出したのは一丁のハンドガン。

銃口を怪訝な顔をしている国会議員に向けた。

一発の銃声。

倒れた国会議員を、隣に控えていた秘書が支えた。

「ひiiiiiiiiiii！」

しかし、その国会議員の秘書は、すぐに国会議員を放り出すと、悲鳴をあげて外へ通じるドアへ走り出した。それは這うように転倒しつつ、ひどく無様な走り方だったが、その恐怖に彩られた表情は、恐怖を感染させることはあっても、笑いを誘うことはなかった。

兵士の一人が、その秘書をサブマシンガンの銃座で殴りつけた。

殴り倒れた秘書は、折れた鼻柱を抑えて苦悶の声。

そして、床に倒れている怒りっぽいことで有名な国会議員の周囲から、悲鳴が波のように広がる。

「死んでる！？」

「死んでるぞ！」

「殺された！」

それはやがてイベントホール全体へ広がる。

「なに、本物？」

「イベントじゃないのか？」

「おい、殴られたやつ。鼻折れてるぞ」

「これ、マジか？」

「逃げたほういいんじゃないか？」

「逃げる！」

やがて扉の近くにいた人々が恐怖に駆られて扉へ向かったが、扉は鍵がかかっており何人もの人間が力を合わせてもまったく開こうとはしなかった。

バラランッ！！

サブマシンガンが天井へ向けて発砲された。その音に反応してイベントホールに集まった観客は、反射的に体を縮こまらせた。扉の前で集まって逃げようとしていた者たちも静まる。

舞台上でワシントンが演劇のように両手を広げる。

「皆様、どうかお静かに。我々の指示に従っていただく限り、危害は加えません。いいですね？」

誰も、なにも言わなかった。

静寂が満ちた。

五代芽は呆然としていた。

倒れた国会議員の姿は、後部席からも見えた。

その命が完全に失われていることも、奇妙に変形した頭部から赤い体液が流れているのを見れば明らかだ。

男たちの持つサブマシンガンが、薄暗い照明に照らされて、禍々しく輝いていた。

五代芽は、ただ呆然としていた。

現実とは思えない光景に、ただ呆然と。

現実以外、何物でもないのに。

エンプレスホテル旧館五階の504号室で、五代明が不意に表情を険しくした。

「どうした？」

微細な変化だったが、ベッドで横になっていた水神晴玄は気付き、その様子に怪訝に尋ねる。

腹の中のをトイレで出してしまうとある程度痛みは治まり、

医者へ行く必要はなくなりそうだが、歩き回るのはまだ辛い。それで、しばらくベッドで休むことにした。今夜のクラシックミュージックは聞けそうにない。興味はないのでどうでもいいが、ディナーを食べられないのは残念だ。

五代明は返事の変わりに、口元で人差し指を立てて、静かにするように伝えたと耳を済ませた。

パパパツ…… パパパン……

連続する破裂音がかすかに聞こえ、水神晴玄は上体を起こす。

「花火？ …… 爆竹？」

イベントホールでなにかしているのだろうか。しかしクラシックコンサートで花火を使うだろうか。それとも、似た音の楽器

「違う」

音の正体を推測する水神晴玄に、五代明は即座に否定した。

イベントホールは防音のうえ、この部屋からは遠い位置にある。

さらに建築物や壁などにさえぎられた状態。イベントホールで大音響が鳴っても届くことはない。

廊下から足音が聞こえた。複数の足音に、扉を開ける音。この階の部屋を順番に確認して回っている。

「まずい。くそ」

五代明は周囲を見渡した。逃げ道や、逃げる場所を探しているように。勿論、日本のホテルにそんなものなど用意されていない。火災時における非難経路も、建物の端に設置されている非常用階段ぐらいた。

「どうしたんだよ？」

「降りろ」

五代明の焦燥の原因がなんなのか、まるでわからず戸惑う水神晴玄を、五代明は強引にベッドから下ろす。

「おい！」

「静かに。早く下に入れ」

水神晴玄は非難するが、五代明は強引にベッドの下に押し込むと、

続いて隣のベッドの下に潜り込む。

「いいか。絶対に音を立てるな。なにがあっても声を出すなよ」

険しい顔つきで伝える五代明に、水神晴玄はなにかたごことではないものを感じ、指示に従うことにした。

足音が部屋の前で止まり、扉が開いた。鍵がかかっていたはずだが、マスターキーを使ったのか。

何者かが二人が入ってきた。部屋の中を確認しているのか、歩き回っており、その足がベッドから見えるが、膝から上はベッドに視界を遮られ見えない。教師が見回りに来たわけでもなさそうだ。他の生徒でも、ホテル従業員でもない。

一人は部屋の中を、もう一人はバスルームとトイレを確認しているようだ。

誰を探しているのか。水神清玄は、直感的に危険を感じ、息を止める。

そして、あることに気付いた。

水神晴玄が寝ていたベッドには、寝た跡のしわが残っている。触れれば直前まで寝ていたことが残留する体温でわかってしまう。そうなれば、部屋の調査をさらに念入りに行われ、ベッドの下で隠れている程度では、すぐに見つかる。

『クリア』

部屋に入ってきた誰かが、もう一人に報告すると、手にしているなにかが少し下がり、水神晴玄の視線の位置に、その先端が入った。サブマシンガンの銃口。

サブマシンガンを持った二人の何者かは、ベッドの下の五代明と水神晴玄に気付かず、部屋を出て行った。ベッドのシーツのしわには気付かなかったようだ。あるいは、取るに足らないことと思っただのか。

二人が部屋から出てから一分ほど経過してから、五代明がベッドの下から這い出た。その行動を見た水神晴玄は、もう大丈夫なのかと、続いて這い出る。

「……おい、いったいなんなんだ？ 今のは？」

小さな声での質問には答えずに、五代明は扉の前に静かに移動すると、聞き耳を立てる。水神晴玄も五代明の隣で聞き耳を立てた。向かい隣の部屋で、誰かが騒いでいる。

「なんだ！？ お前らいつたい！？」

「なによそれ！？ ちよつと、やめ……」

タタタタッ

連続的な破裂音が聞こえ、途絶えて一呼吸してから、ドサリ、となにかが床に倒れる鈍い音がした。

『クリア』

サブマシンガンを持った男たちは次の部屋に向かったようだ。

それからしばらく、扉を開ける音が続いたが、やがて遠ざかり、この付近からは人の気配が完全に消えた。

「……今の、銃声だよな？」

水神晴玄はどこか呆然として聞いたが、五代明はなにも答えなかった。

しばらくして廊下を伺いながら、静かに扉を開ける。周囲を見渡して、誰もいないことを確認すると廊下へ出て、銃声と声のした部屋へ向かった。水神晴玄もその後を付いていく。

向かい隣の部屋の扉が開け放たれたままになっていた。

室内で男性と女性が倒れていた。床の上の柔らかな肌色のカーペットの上に男が、ベッドの上に女性が。

二人の体から飛び散り流れた血で、部屋は赤い斑に染まっている。五代明は女性の首筋に指を添えて脈を確認する。続いて男性。簡単な確認作業を終えると、水神晴玄に向けて首を振った。

死んでいる。ほぼ即死だろう。

水神晴玄は正視に耐えなかったのか、遺体から眼をそらしている。その顔は蒼白になっているが、嘔吐しなかっただけかもしれない。

「……なにが起きてるんだよ？」

力ない水神晴玄の質問に、五代明は答えなかった。

イベントホール占拠の後、ドモチェフスキー、ハンス、マクスエ
ルを指揮官とした二十人の武装者が一階から上に向かって順番に部
屋を見て回っていた。

コンサートを見に行かなかった者たちがいないか確認のために。
そして、結果三十人ほど残っていたことが判明し、そのうちの二
十人はイベントホールへ強制的に連行された。

ほとんどの者は事態を理解できなかったが、武装者の持つ銃が本
物だとわかった時点でおとなく命令に従った。

だが、パニックを起こして騒いだり、あるいは逆らったものはそ
の場で射殺された。その数は丁度十名。

そしてヨーキとケイミンの技術班が必要な機材をホテル管理室に
持ち込み、十数分で全てのホテルの警備カメラを始めとするコンピ
ューターシステムを、全て制御下に置いた。

こうして、京都エンプレスホテルは一時間もしないうちに、完全
に占拠された。

3・PM09:00

五代明が向かい隣で殺された宿泊客の荷物を調べた結果、携帯電話を見つけた。これで警察に連絡ができる。しかし携帯電話を使ったことが一度もないので、操作方法がよくわからないと、結局水神晴玄に渡した。

水神晴玄は、携帯電話は個人的に所持していないが、使い方ぐらいなら知っていた。今年、高校生になった従姉妹が高校入学祝として親に買って貰ったのを、少し使ったことがあった。ちなみに、扱い方をなにか間違えたらしく、あとで高い通話料が請求されたとかで、その従姉妹は物凄く怒り、それ以後、二度と携帯電話と触らせようとしなかった。

しかし今は、通話料は気にしなくていい。緊急時だし、他人の物だ。

他に使えるような物としては、車の鍵が二つ。逃げる時に使えるかもしれないということで、五代明が鍵を一つ渡した。街まで距離があり、徒歩では時間がかかる。ホテルを単独で脱出することになったら、必要になるかもしれない。もっとも、オートバイがどこにあるかわからないし、そもそもホテルから出られるのかも怪しいのだが。

キーホルダーが有名なバイク製造会社のものであることから、オートバイの鍵だと思われる。おそらく、殺された二人は、オートバイでこのホテルの来たのだろう。

五代明は他に、二人が持っていた免許証を見ている。普通自動車免許のほかに、自動二輪も記載されているようだ。

「念の為に確認するが、バイク、運転できるか？」

五代明は尋ねると、水上晴玄は肯いた。

「一応……」

免許は持っていないが。

それから五代明は色々探しているが、他に使えそうな物は見つからなかったようだ。水神清玄も物色しようとしたが、死体が気になつて集中できず、やはり有益な物を見つけることはできなかった。

一旦、自分たちの部屋に戻つて荷物の確認をし、必要となりそうなものを選別しておく。

ほとんどは着替えだが、五代明はマルチナイフとミニマグライトを持っていた。役に立つことが多いので、普段から持ち歩いているらしく、今回の修学旅行にも持ってきた。

医療品は、絆創膏と消毒液ぐらいしかなく、拳銃に撃たれたあとに役に立つかどうか疑問だが、一応持っておくことにした。

他には部屋に置いてあったペーパーナイフ。二本あったので、これも一応二人とも持っておくことにする。なにが役に立つかわからない。

他の部屋に回つて他の生徒や宿泊客の荷物も漁ったほうがいいだろうか。しかし、動き回るとさっきのサブマシンガンを持っていた連中に見つかる可能性が高くなる。それに、鍵がかかっているかもしれない。ここの鍵は旧式で、オートロックとは違い、ちゃんと掛けなければいけないが、しかし空いている部屋を探す手間を考えると、発見される危険がある。

考えながら水神晴玄は、携帯電話で警察にかけようとしているが、繋がらない。

「ダメだ。なんか、電波が届いてないみたいだ。変だぞ、ホテルとかは中継器があるから、山奥でも繋がるはずなのに」

「妨害電波を出しているのか、周辺の携帯電話の中継器を事前に破壊しておいたのかもな」

妨害電波なら敵の通信機なども使えなくなるため、この可能性は低い。中継器の破壊は、このホテルの位置が山間部であることから、山が遮蔽物になり、簡単に電波が届かなくなるため、こちらの可能

性が高い。

五代明が少し説明すると、水上晴玄はいったん諦めて携帯電話をポケットの中に入れた。後でまた使うかもしれないと考えたのか、ただの無意識だったのか。

各部屋に備え付けられた電話機も確認してみるが、予想通り繋がらなかった。受話器からは、電話を切ったあとの音が聞こえるだけ。「こっちもやつぱりダメだ」

「電話線を切ったのか、管理室で操作して使えないようにしたんだろうな。……あ！　まずい、電話切れ」

五代明がなにかに気づいたのか、水神晴玄は言われたとおりに受話器を置いた。

「なんだ？」

「たしか大きなホテルじゃ、サービスとかの関係で、電話の使用状況や使用部屋の確認のための表示がされるはずだ。電話線が切ってあっても同じかもしれない。あいつらがホテル全体を制圧しているなら、当然管理室も押えている。使用している人間がいらない現状で、俺たちが使えば、敵に自分たちの存在を教えるようなものだ」

五代明の説明は推測混じりだが、危険は避けたい。ホテル内に設置された電話は使わないほうがいいだろう。もっとも、繋がらないのでは使用することはないだろうが。

水神晴玄は途方に暮れてソファに座り込む。

「いったいどうなってるんだ？　あいつら、全員殺しまわっているのか？」

「いや、全員じゃない。イベントホールでクラシックコンサートを開く予定だっただろ。ホテルの宿泊客のほとんどはそっちへ行っている。だからそこを狙って最初にイベントホールを制圧した後、部屋に残っている一般客もホールへ連行した。だが、旧館のこの階は、修学旅行に來た俺たちが占めていて、一般客はほとんどいない。人数が一人や二人の場合は、処理したほうが手間がかからないと判断したんだろうな」

処理という言葉で、殺すという意味で使っているのだと気が付き、背筋が寒くなるのを感じた。

「とにかく警察に連絡する方法を考えないと。まず、問題はホテルを占拠したと思われる武装グループがどのくらいの人数なのかだ。その規模によって行動の制限が変わる」

五代明が淡々と説明をしながら、窓から外の様子を伺う。続いて水神清玄も。

エンプレスホテルはし字型の構造をした十階建ての建造物で、旧館の東側と新館の北側に分けられている。自分たちの位置は東側旧館五階。この位置から視線に入るのは、北側新館の部屋側だけ。さらにプライバシーなどの関係で、ホテルの窓は全て半ミラーガラスが採用されており、内部は外から見えないようになっている。

「宿泊室の明かりは無数に点いているから、俺たちのいる部屋が点いていても不審には思われないだろう」

外の様子は暗くてよくわからない。街灯とホテルの明かりだけでは、遠くまで見通せず、占拠犯が潜んでいても判り難い。

北側の西の端にイベントホールがある。新館と半ば融合したような形になっており、一階と二階からはホテル内部から直接移動可能。しかし外見からは正確な位置がよくわからない。ホテルの図面や案内のパンフレットがあればいいのだが、部屋にはなかった。

周辺は山がホテルを囲んだ地形で、電波が通りにくい。中継器を破壊されると、衛星経由可能の高性能の物でなければ携帯電話はつながらないだろう。もし持っていたとしても、軟禁状態にある宿泊客や同級生たちは、迂闊に使えば殺されるかもしれない。あるいは、身体チェックを受けて、取り上げられたか。

「まず、ホテル正面の主要道は使えない」

町へ降りて直接助けを求めるにも、ホテル正面から繋がる主要道は使えないと考えたほうがいい。そこもなんらかの形で警備されているのは間違いなく、そうなると警備が比較的薄いと推測される、樹木が林立する山林を降りるしかない。その場合迅速に移動するこ

とが難しく、また迷わずに町へ降りることができかどうか不安だが、樹木で姿を隠蔽することができるので、比較的安全な方法だ。しかし占拠犯はそのあたりのことも計算に入れているはず。なんらかの対処法を行っていると考えるべきだ。

「それに、その前にどうやってホテルの外へ出るかだ。ホテルが占拠されているなら、たぶん、下の階に見張りがあるだろうな」

ここは五階。エレベーターは使えばすぐにわかるし、階段は見張りがいるのは間違いない。特に一階二階は、外への出入りが可能な場所であるということで、警備を厳重にしているはずだ。

そんな状態で、見つからずにすむはずがない。安易に下へ行こうとすれば発見される。そしてイベントホールへ連行されるか、それとも射殺されるか。

「じゃあどうすればいい？」

水神晴玄が方法を聞く。どこか非難する調子だったのは、苛立ちと不安が混じっているためか。

「エレベーターも、階段も、移動に主要な箇所は全部押えられてるだろうし」

外へ出ることはできない。外へ連絡することもできない。

「本当にどうすればいいんだ？」

水神晴玄はなにも思いつかない。自然と年上の五代明に意見を求める。事情はまったく知らないが、彼は自分より三つ年上で入学してきた。体は頑強で健康そのものであることから、病気や怪我で入学が遅れたということではないというのはわかるが、それ以上のことは全く知らない。

その五代明は扉の前でなにか考えていたが、不意に室内を見渡すと、寝台の引き出しの中から手鏡を取り出した。そして、水神晴玄の前を足早に過ぎて、廊下へ通じる扉の前へ。ノブを慎重に回し、少しだけ開けて廊下の様子を伺う。この位置から見えるのは一方方向だけだが、手鏡を使えば反対側も確認できる。

「なにか思いついたのか？」

水神晴玄がすぐ背後で小声で尋ねると、五代明は驚いたのか、瞬間的に振り向き、ペーパーナイフを構えた。その反応に飛び退いた水神晴玄にすぐに気付き、ペーパーナイフを下ろす。特になにも言わないが、その視線は非難しているように感じた。

「……ごめん」

素直に謝る。今は人が殺されている緊急事態だ。咄嗟に攻撃することもある。驚かせるようなことは間違ってもしてはいけない。

五代明はそのことにはなにも言わず、これからのことを説明する。「今この階には誰もいない。移動するなら今のうちだ。今から上のほうに行つて、火災警報器を鳴らす。ちよつとした小火を起こせば、消防車が来るだろ」

この階で行うのは危険が大きい。火災を起こした階を重点的にチェックするだろうから、発見率が高くなる。勿論、別の場所で行つても、危険があることには変わりはないのだが。

「小火つて、警報機のスイッチ鳴らせば済むんじゃないか？」

大火事になったらどうするのか。

「消防署の確認作業で、間違いだという連絡をされたら引き返すだろ。本当に煙の一つくらいは上げないと。勿論、火事にならないよう注意する」

「でも、大丈夫なのか？ 下手に動き回ったら見つかるかも」
それも、なんとかするしかないだろう。

旧館の十階にある支配人室でリバティ・ベル総指揮官ワシントンは支配人の使っていた椅子で寛いでいた。

壁際ではドモチェフスキーがアサルトライフルを手にして立っている。ワシントンとは対照的に、姿勢を崩さず、厳つい顔で緊張感に満ちたその姿は、いかにも軍人といった雰囲気だ。しかし彼がワシントンの部下というわけではないらしい。二人の会話を聞く限り、

一応雇用関係にはあるようだが、実質的には対等な立場に近いようだ。

入り口両側に占拠犯が二人。彼らの部下だ。

オーディオスピーカーからは、エアロスミスのミス・ア・シングが流れている。この曲は、支配人が個人的に持ち込んだものだ。他にもエルビス・プレスリー、レッド・ツェッペリンなどが揃っている。アメリカンロックが彼の趣味だった。

その支配人の萩野修は、ワシントンと相対する位置にある客席で座っている。

彼は緊張した面持ちだが、恐怖は表れていない。強靱な意志で抑圧し、適切な対応を出せる心構えを崩さない。こういった緊急事態をまったく経験していないにもかかわらず、冷静を失わないのは、エンプレスホテル全体を二十年以上管理している者の、能力と器によるものなのかもしれない。

「いい歌だ。いい趣味をしている」

萩野修は答えなかった。

ホールでの一連の騒動のあと、萩野修は彼らにここに連行された。自分の仕事場で立場が逆になっていることには、特に屈辱であるとか、そういった感情はないが、国会議員を、そして四人のホテル従業員を躊躇いなく、見せしめのためだけに殺したことは憤りを感じている。

国会議員と四人の従業員は、この首謀者である男の命令で片付け作業が行われた。死者を弔うというものではなく、完全にゴミを処理するというやりかたで。

話はしないが、イベントホールに集まらなかった客も何人か、そのように処理されたい。そのことを思うと、特別正義の人ではない彼でも憤怒が湧き上がり、それを押えるのに多大な精神力と労力を必要とした。

「さて、本題に入ろう。単刀直入に聞く。地下金庫のロック解除コードを教えてもらえるかな」

萩野修はかすかに動揺したが、しかし予想していた質問でもあった。

「知っているのか？」

「勿論。そのために来た。新館を建設する際に同時に設置した地下金庫。顧客、利用者は限定され、つまりは単純に金を保管する場所ではなく、もっと価値のあるものを保管するために、特別に作られた金庫。中には、美術品、工芸品、宝石、貴金属は勿論、株式証券など。そして、特殊なデータなども」

萩野修は額に流れる汗を感じた。企業トップシークレット扱いとされ、ホテル従業員も一部しか知らない特殊金庫室の存在をどこから知ったのだろうか。

そして金庫を開くためにはコードだけではなく、鍵が必要だ。それは、この部屋にある。

わざわざイベントホールから離れたここへつれてきたことから、そのことを明らかに知っている。内部に企業スパイがいるのか。

「さて、開くためのコードは？」

萩野修はやはり答えなかった。代わりに質問する。

「目的は金か？」

日本でこんな大規模な武力行使を行うことから、過激派グループによるテロと考え、犯罪者の保釈などを要求すると思っていたのだが、間違いなのだろうか。それとも、それも含めてのことか。

地下金庫室で預かっているものは、現金こそ無いものの、莫大な値打ちのする物だ。これから行うなにかのために強奪しようとしているのかもしれない。

ワシントンは意外と人好きのする笑顔で答える。その瞳には歪んだところが無く、寧ろ真っ直ぐな印象を受けた。さながら、実直なる悪意。

「さて、なんだろうな？ 当面は金だが」

当面は、ということは、やはり本来の目的は別にあるということか。

「まあ、そのあたりはホテルの支配人に説明してもわからないだろう。だが、金はわかるはずだ。経済は全世界で通用し支配する概念であり制度だ。そうだろう?」

荻野修は答えなかった。

「さて、金庫室のロック解除コードは? 教えていただけるかな」
「断る」

端的に拒否する支配人に、ワシントンは肩をすくめて見せて、次に拳銃の銃口を向ける。

「これが最後だ。コードは? 三秒数える」
荻野修は表情こそは変えなかったが、額から汗が滲み出ており、それが彼の心のうちを表していた。

だがワシントンは、目的を達したあとホールに閉じ込められている宿泊客と従業員を、自分も含めて、口封じに全員殺すつもりでいる。特別根拠があるわけではない、ほとんど直勘だが、人となりを見抜くことは、自分の唯一優れている能力であると信じていたし、それだけでホテルの支配人の仕事を全うしてきたようなものだ。今回だけ外れるということがありうるだろうか。

絶対に、言うてはいけない。この男の目的を達成させてはいけない。

目的が達成されない限り、必要な人質は、殺されないはずだ。

「1」
仕事を全うすることが、自分の誇りだ。

「2」
客を守るのが今の自分の仕事だ。

「3」
たとえ殺されても。

「時間だ」
引き金に指がかけられた。

最後だ。人生の最後の瞬間は、この男を睨むことで終わらせる。
この男が自分の眼光を二度と忘れられなくなるように。この男の最

後の瞬間にまで。

ジリリリリリ……

突然ホテル全体に火災警報が鳴り響いた。

ワシントンは思わず引き金から指を離した。

『なんだ？』

壁際で待機していたドモチェフスキーに尋ねると、彼は無線機で連絡を取る。

『どうした？』

無線機から返答がくるが、荻野修にはよく聞き取れなかった。それに日本語以外の言語を使用している。中東で使われる言葉のようだが、種類までは判別できない。

『そうか。ハンス、対応に出ろ』

ドモチェフスキーは無線を切り、ワシントンになにかを伝える。

『わかった』

ワシントンは立ち上がり部屋を出ようとする。

ふと、まるで忘れていた要件を思い出したかのように、荻野修へ声をかけた。

「ああ、あなたはホールへ戻ってもらえますか。他の客と一緒に待っていてください。コードについては、また後ほど」

荻野修はドモチェフスキーと、入り口通路側で待機していた、二人の男にホールへ連行された。

その途中、彼の頭を占めていたのは、命が永らえた安堵ではなく、火災警報器が作動したのは、本当に火災が起きたためなのかという疑問だった。

五代明は、部屋の前で殺された宿泊客が持っていた雑誌とライター、そして備え付けられているタオルを拝借した。

そして十階まで、時折巡回する敵の姿が見えたが、誰にも見つか

らずに無事上がった。

どうやら旧館の最上階は、宿泊するための部屋はなく、事務などの職員専用フロアとなっているようだ。

階段から一番近いトイレに入り、煙が外へ出るように窓を少し開ける。

洗面所の水道の栓を、大きな音を立てないよう注意しながら少しだけ捻り、小さい出水で洗面に水を張る。水を止めて、トイレの隣にあった喫煙所で拝借した灰皿を浮かせると、そこに雑誌とタオルを水に濡れないように置いて、火を点けた。

それは小さな火だが、やがて大きく燃え上がり始め、しかし不純物の多い可燃性物質は、多くの煙を上げ始めた。可燃物は、水面に浮かべるようにしてあるので、周囲に燃え移ることはなく、やがて火は消えるはずだ。

そして、警報装置が作動しそうな頃合いを見計らい、撤退することにする。トイレから出る前に、手鏡で廊下に敵がいなかったことを確認して、階段へ向かった。

突き当たりの階段の手前まで戻り、壁際から階段に敵がいなかったか確認する。

サブマシンガンを持った男が二人いる。なにかを確認するように周囲を見渡している。これでは降りることができない。

ジリリリリリ……

火災警報器が鳴り響いた。

狙い通りだが、思ったより早い。火というものは生物のように、予想困難なのが問題だ。

他に逃げ道がないか見渡すと、通路の奥の、支配人室と記されたプレートがある扉が開き、そこから誰かが出てくる。誰かという疑問を持つまでもなく、敵以外にありえない。

階段と支配人室、両側に敵がいる。このままでは見つかる。停滞するのもまずい。

五代明は即座に、開け放たれたままになっている事務室に滑り込

むように入り、均等に並べられた机の陰に隠れる。このまま敵をやり過ぎすしかない。五代明は警報機が鳴り響くなかで息を潜めて待ち、机の端から顔を少し出して、外の様子を伺う。

階段から先程の二人が上がってきた。そして煙が出ているトイレを見ると、そこへ駆け込む。

支配人室から四人の男が出てきた。どうやらエレベーターへ向かうらしい。トレイに駆け込んだ二人と、なにかを話している。中東で多く使われる言語だ。

彼らの顔を確認する。一人は見覚えがある。ホテルに到着した時に迎えに出ていた、名前は覚えていないが、このホテルの支配人だ。雰囲気からして明らかに連行されている様子から、手引きした仲間ということではなさそうだ。占拠犯からなにか尋問を受けていたのかもしれない。

不意に彼がこちらに目を向けた。それは気配を感じたとか、視界に入ったというわけではなく、何気なく行ったもので、五代明は驚いて対応に一瞬遅れたが、すぐに顔を隠した。次に手鏡を使って確認する。

支配人は何事もなかったかのように歩いている。どうやら、隠れていることから占拠犯の仲間ではないと判断し、そしてこちらのことを占拠犯に悟られないよう冷静に対処したようだ。普通は動揺するものなのだが、さすがに企業のトップに立つ人物だけあって精神力もなかなかのものだ。

連行している占拠犯を確認する。白人と、中東系と思われる者が二人ずつだが、浅黒い東洋系なのかもしれない。あるいは、東南アジア。

サブマシンガンを肩から提げていれば、謎の武装グループのメンバーだと断定できるが。

そして最後に現れた男に、五代明は怪訝に思った。

中年ほどの、肩幅が広く筋肉質の、体格のいい白人の男。東洋系や日本人にはめったにいないこの体軀は、アメリカやヨーロッパ系

でもそうはいない。ロシア系に多い。

だが、五代明は、その人種を疑問に思ったのではない。見覚えのある顔だったからだ。

（ドモチエフスキー。なんで、こんなところに？）

4・PM09:00

警報装置が作動してから、しばらくして五代明が戻ってきた。

「上手く行ったな」

五代明が出てから、戻ってくるまでの間、約十五分。待っていただけの水神晴玄だが、生きた心地がしなかった。人数が多いと目立つからここで待っている、という五代明の指示に従ったのだが、それでも緊張で神経をすり減らす。

しかし、もう心配は要らない。帰ってきた五代明に、親指を立ててみせる。

敵には見つからずにすんだようだが、小火が起きたからには、誰かがいるということには気付いただろう。

「とにかく、後はおとなしくしていよう。警察がなんとかしてくれるはずだ。ああ、いや、その前に消防だ」

少し興奮して、声が大きくなっているのに気付き、水神晴玄は一旦言葉を切る。

そして五代明の様子に気付いた。作戦が上手くいったことを喜んでいる風はなく、どこか心ここにあらずといった感じだ。

「どうかしたのか？」

言われて、五代明は始めて水神晴玄に話しかけられていたことに気付いたように答える。

「え？……ああ、いや。なんでもない」

そして部屋の鍵を施錠して、ソファに腰掛ける。水神晴玄も向かい側に座った。

自分たちのできることはやった。後は待つだけだ。水神晴玄はほとんどなにもしていないが。

それから五分ほど経過して、聞き覚えのあるサイレンが耳に届い

た。

水神晴玄は即座に立ち上がって、窓から外を確認する。サイレンの赤い光が山林を縫うように通された道路から姿を現した。

「やつ！……」

やった！ と叫ぼうとして、大声を出す危険を思い出し、止める。落ち着け。見つからないことが大切なんだ。

しかし喜びが顔に浮かぶのは抑えられない。待ちに待った騎兵隊の登場だ。自分たちをこのホテルから救い出してくれる。

五代明も隣で消防車を確認する。その顔は喜んでいようには見えないが、厳つい顔はいつものことなので気にしなかった。

トイレからはまだ煙が出ている。

気付いてくれ。水神晴玄は祈るように消防隊員に期待した。

消防車から降りた消防隊員は、すぐに火災状況を確認するために、ホテルの受付へ向かおうとした。周囲を見る限り、十階の小窓から煙が少し出ているだけだが、内部ではどうなっているのかは現場を見ないことには不明だ。まずは、ホテルの人間に話を聞く。迅速に、手早く。

しかしその前に、正面の自動ドアから誰かが現れた。

スーツを着た三十代の大柄な男だが、外見の特徴から日本人ではないようだ。混血という可能性もあるが、異なる人種との婚姻が少ない日本では、そのような発想は出なかった。

「状況はどうなっていますか？」

「問題ありません。すぐに鎮火しました」

消防隊員の質問に、男は冷静に答える。

「確認します。出火場所はわかりますか？」

男は東側の建物を指した。先程確認した煙が上がっている小窓。どうやらトイレから出火したようだが、おそらく近くに喫煙所があ

るのだろう。

「案内をお願いします」

大火になっていないようだが、油断はできない。小さな小火が建物全体を覆いつくす炎へ成長することは珍しくない。ホテルの従業員は問題ないと言っていたことから、スプリンクラーが正常に作動して鎮火したということなのだろうが、確認を取るまでは安心できない。

「必要ありません」

だが、ことの重大性を理解していないらしい、ホテルの従業員は、両手の平で消防隊員を制するように、問題は解決したということを伝えようとする。素人判断など信用できないというのに。

「念のためです。出火場所まで案内してください」

重ねて要求する消防隊員に、ホテルの従業員は重ねて答えた。

「必要ないんですよ」

笑顔で答える男に、消防隊員は違和を感じた。

それがなにか、明確な答えとして出る前に、男は懐からなにかを取り出した。

黒光りする金属の塊。

拳銃が眉間に照準を合わせていた。

「……え？」

事態を理解する前に、ハンスが告げる。

「お前たちはここで死ぬんだからな」

銃口から弾丸が発射された。

「え？」

水神晴玄の眩きと同時に、消防隊員は弾かれるように後方へ倒れた。

赤い霧のようなものが、消防隊員の後頭部から吹き出たように見

えたのが、錯覚であって欲しかった。

ホテルの玄関から、そして駐車場の両脇の植え込みの影から、アサルトライフルと呼ばれる種類の軍用銃を持った人間が十人現れ、二台の消防車に向けて発砲を開始した。

一台の消防車が急いで逃げようとバックを始めたが、しかし別の消防車と追突して動かなくなる。混乱を起こしたのか、車内から飛び出した消防隊員が撃たれた。そしてその消防隊員を助けようとした消防隊員も撃たれ、仲間を見捨てて逃げようとした者も背後からある者は正面から撃たれ、十数人の消防隊員は、一分もしないうちに全員地面に倒れて動かなくなった。

「……冗談だろ？ ……おい！ ふざけんなよ！ なんだよこれ！ 簡単に殺すなよ！」

水神晴玄は悲痛な声を上げる。

「おい！ 落ち着け」

五代明に強く肩を掴まれ、我に返るが、しかし泣きそうな表情は変わらない。

「どうしよう？ 俺たち、消防署の人、死なせちゃった……殺して……」

消防車を呼べば事態が収まると、なぜ簡単に考えたのだろう。

「殺した……俺たちが」

連中が簡単に人を殺したのを見たのに。

『そうか。わかった』

イベントホール裏の舞台制御室で、ワシントンが消防車の対応に当たったハンスから、消防隊員全員を処理した報告を受けた。

この制御室は、舞台演出機器の操作を行う部屋で、当然舞台を監視でき、また客席も見渡せる位置にあった。

今のところ人質はおとなしくしている。

『ここまでする必要があつたのか？』

観客席を眺めながら質問するドモチェフスキーの声には、必要以上の殺人を非難している様子は含まれていなかった。単純な疑問と作戦遂行に必要なないことを行つたことによつて、それがなんらかの障害を発生する可能性を指摘しているだけだった。それは同時に、殺人という行為をただの作業としてしか認識していないことの証明だった。

『元々必要だったのだ。これ以上人質を減らさずに、交渉を有利にすることができらるだろう』

確かにそのとおりだが、ドモチェフスキーは釈然としないものを感じていた。だが、すでに計画は始まつている。祖国を失い、行く当てもない我らが、帰るべき場所を手に入れるための作戦は。止めるわけには行かない。

『それより、お前の部下に見逃しがあつたようだな』

ワシントンは冷淡に指摘する。かすかに楽しい調子が含まれていたのは気のせいだろうか。

『再調査させる』

あの小火は明らかに人為的なものだった。ということは、ホテルのどこかに誰かが残つてということだ。そして、その者はホテルが占拠されたことを外部に連絡しようとした。電話はホテル管理室で全て不通状態に切り替えてあり、携帯電話も中継器を破壊してあるため繋がらない。

そのため、なんとか連絡しようとした結果、小火を起こすという手段を考えたのだろうか。

素人にしてはなかなか上手い手考えたものだ。おかげで、無駄な死人が増え、その分弾丸を消費した。

ドモチェフスキーは無線で部下に連絡を入れようとした。

『待て』だがワシントンがそれを制する。『そんなことをしても時間の無駄だ。ホテルに残っているのはせいぜい二人か三人といふところだろう。全員見つけるのは難しく、時間がかかる』

『ならば、どうする？』

『しばらく放置しておこう。作戦に直接支障をきたすことはあるまい。それより、少し早いが、次の段階へ移る』そして無線で連絡を入れる。『ヨーキ、繋がったか？』

無線から少し神経質で臆病そうな声が返ってきた。オペレーティングルームでホテルのコンピューターシステムを管理している技術担当のヨーキ。

『ああ、そっちの電話だけ繋がった。いつでも大丈夫だ』

五代芽はテーブルで縮こまっていた。

ホールに穏やかなクラシックミュージックが流れている。人質を落ち着けるためなのか、あるいは占拠犯たちの趣味なのか。クラシックコンサートを開く予定だった場所は、武装グループに占拠されたというのに、予定通りクラシックを聞いている状況が、ひどく奇妙だった。

人質同士で会話をしても咎められることはないようだが、しかし、大声を出せば確実に占拠犯たちの注意を引くことになるため、自然とその話し声は小さく、囁き声で行われる。

そして、大滝由美も普段の声の大きさはどこへ行ったのか、小声で訊いてきた。

「ねえ、どうしたのかな？」

火災警報器が鳴り響いてから、占拠犯たちの様子が少しおかしい。連絡しあっている回数が増え、ホールと外への出入りが多くなった。「わかんない」

防音処理されたホールでは、外の銃声は届かないため、消防隊員たちの惨劇を、彼女たちには知る由もない。

しかし先程から連中が慌しいことは、誰の眼にも明らかだった。「警察が来たのかもしれないよ。その対応をしているのかも」

もし警察が来たのだとしたら、助かるかもしれない。だが、占拠した男たちの目的しだいでは、状況が悪化する可能性もある。

どちらにせよ、今の自分たちはなにもできない。最初は逃げる方法を模索していたが、ホールの出入り口は武装した男たちが見張りに立っており、そして迂闊な行動をすると、あの国会議員のように殺されるかもしれない。

とにかく、今はおとなしくするしかなかった。

「大丈夫よ」

なぜか教師の席ではなく、生徒二人と一緒に座っている、新任教師の早乙女遥が唐突に笑顔で安心させようとする言葉を繋げる。だが、その視線は誰にも合わず、顔に張り付いた笑顔はひどく空虚だった。

「ただのホテルのイベントなんだから。ほら、楽しいでしょう。さあ、テーブルマナーの練習をしましょう。どんな時でも礼儀正しくできるようにしないと」

場所に合った言葉だが、状況にはあっていない言葉。

現実逃避という言葉が浮かぶ。あるいは、事態を受け入れることができずに、自らの世界に入ったのか。

どちらにせよ、刺激を与えれば、本格的な混乱に陥るかもしれないので、二人は会話を合わせることにする。そうすれば少しは気が紛れるだろうし、早乙女遥を宥めて安心させていなければ、いつものヒステリーを起こすかもしれない。占拠犯の注意を引くと、どうなるか。

「五代くんと水神くんはまだかしら。本当に、規律を乱すようなことをしちやダメじゃない」

以前からこの新任教師は、些細なことを見つけてはあげつらうように注意する傾向にあった。本人は教職に情熱を傾けているつもりらしいが、五代芽はある種の歪んだ精神を常々感じていた。その歪みが、だんだん大きくなってきているような感じがする。

教師は全員同じテーブルで集まっているのだが、早乙女遥は事件

が始まってからひどく彼らを気にしているようにしきりに目を彷徨わせ、唐突に占拠犯が見ている中で、こちらに移動してきた。そして五代明と水神晴玄の二人の姿がないことを心配することなく、ただ不愉快に指摘する。

彼女の状態をうまく言い表すことが五代芽にはできないのだが、とても正常な状態とは思えないのは確かだ。これ以上刺激を与えないようにしなければ。

生徒が教師を守ろうとするのは、逆ではないだろうかという気がするが、現実問題として、彼女は頼りにならないどころか、状況を悪化させる起爆剤になりうる。

「ああ！ ダメじゃない！ テーブルに肘を付けちゃ！」

突然早乙女春かが大声で嗜めた。その眼は血走っており、そして焦点が一致していなかった。

大滝由美が無意識に何気なく肘を付いたのが目に入ったただけだが、異常なまでの過敏反応だ。

「あ、すいません」

大滝由美は即座に謝るが、それは教師の叱責を受けたからではなく、武装した男たちの注意を引きたくなかったからだろう。そして五代芽に困ったように目を向ける。

幸い、武装した男はこちらを少し見ただけで、それ以上追求してくることは無かった。

（……お兄ちゃん。水神くん……）

安堵の息をつく五代芽は、助けを求めるように心の中で呟いた。

二人は無事なのだろうか。

憔悴したような表情で水神晴玄はソファに座っていた。

五代明は特に変わった様子もなく、廊下の様子を伺い続けていた。敵は自分たちがいることに気付いているはずだ。ホテル全体を再

調査するだろうが、自分たちはホテルの外へ脱出する方法がない。そしてホテルのどこへ行こうと危険性が変わるわけではなく、ならば下手に動き回るより、止まっていたほうが安全性はまだ高いと考えた。

もつとも、敵が来るまではだが。

「……連中の目的はなんなんだ？」

五代明がまるで衝撃を受けたり、動揺した様子がないことを、頼もしいと思うより、怪訝に感じながら水神晴玄は尋ねる。

ホテル全てを制圧しているのだとしたら、かなりの人数と武器が必要になる。それだけのことをする目的はなんだ？

「たいていは、政治目的や、金目的だろ。政治犯の釈放を要求するとか、大金を要求する。それぐらいしか思いつかないな」

「じゃあ、俺たちが連絡しなくても、あいつらのほうで警察かどこかに連絡するんじゃないか？」

でなければ人質をとった意味がない。

エンプレスホテルがある区域の警察署の地下資料室で、桐嶋長平きりしまちやうへいは昔の事件の記録の整理をしていた。

警察署内のコンピュータの導入が進み、あらゆる捜査資料がデジタルデータとして保存され、検索閲覧が簡単にできるようになったが、問題は古い資料だった。紙という媒体で保存された資料は、まだデータ化されていないものが多く、これらの資料がなんらかの形で必要になったとき、探すのに手間がかかる。

五十を過ぎて新しいことを覚えるのは大変だったが、桐嶋長平はパソコンの扱い方の基本をなんとか習得し、こうして毎日キーボードと格闘して、資料をパソコンに整理していた。

「署長」

いつの間にか入り口に立っていた副署長が呼んだ。自分より十歳

若い副署長が、こんなところに来るのは珍しい。小太りで度の強いメガネをかけた副署長は、どこかひょうきんな印象を受けるためか、署内では軽く見られがちだが、しかしとても有能で、署長らしい仕事をあまりしない署長に代わって、署内を取り仕切っている。本来の署長が仕事をしないのを咎めたことは一度もなく、彼自身署長になった気分のようで、張り切って代行しているためか、署長が陣取っている資料室にめったに顔を出さない。

その彼がここへ来るとは、なにがあつたのだろうか。

「どうした？」

「いえ、なんだかおかしい電話が入りまして。エンプレスホテルを占拠したとか」

「選挙？ そんな時期だったか？」

選挙の時期はまだ先だったように思う。しかし、薄暗い資料室にいと、季節感が曖昧になる。

「いえ、占拠です。武装占拠」

字を間違えていることに桐嶋長平署長は気付いた。そして事態の深刻性も。

「武装占拠？ ということだね？」

資料整理を中断して、副署長の説明を聞く。

「今、電話で、エンプレスホテルを武装占拠した。証拠をケーブルテレビのチャンネル5で流す、とか。たちの悪いいたずらにだと思つたんですが、一応確認のためにホテルに電話をかけみても、誰も出ないんです」

「誰も出ないのか？」

「はい。今も他の者が続けていますが、誰も」

その電話の内容の信憑性を裏付けけるものだった。

「証拠をチャンネル5で流す、だったな」

「はい、十時のニュースだそうです」

十時のニュース。もうすぐ始まる。

桐嶋長平は資料室の脇に添えられたテレビをつけた。

地方のローカルケーブルテレビ、通称チャンネル5に連絡が来たのは、午後九時の時報が鳴った時だった。

「エンプレスホテルを占拠した。午後十時頃に、ホテル前で証拠を見せる」

電話口から一方的に告げてきたその内容に、報道部課長は怪訝に思ったが、時間が空いていた新人レポーターを向かわせた。

揺れるバンの中で小野阪冬香は、いたずら電話としか思えない内容の確認をさせられることに、自分のどのような評価がされているのか痛感して、落ち込みたくなっていた。

去年、大学を卒業したばかりで、念願のテレビ局に報道レポーターとして採用されたが、人気は今一つ上がらない。同期に採用された同じレポーターは人気がどんどん上がっていった、テレビドラマに出演する話まで出たというのに。

自分には才能がないのかもしれない。少し顔がいいだけでは世の中は渡っていけない。

一度、自分を見直すべきかも知れない。

「もうすぐ到着するよ」

小野坂冬香はカメラマンから声をかけられて、思いに耽るのを中断させられた。

窓から見ると、山間からエンプレスホテルの姿が近付いてくる。

到着まで後数分といったところか。服装を簡単にチェックする。カメラマンもカメラの用意を始めている。

あまり時間をかける必要はない。確認作業だけで終わるだろう。日本で武装占拠などということなどありえないのだから。

これはもしかして、解雇の予告のようなものなのだろうか。無駄足だとわかっていながら向かわせるディレクターの嫌みったらしいむかつく笑みを思い出した。

エンプレスホテル正面入り口の姿が見えた。

突然運転手は急ブレーキをかけ、制動で体がつんのめる。

「ちよつと！ いきなり止まらないでよ！」

小野坂冬香の非難に、運転手は謝罪せず、無言で前方を指差す。

「なに？」

消防車が二台止まっている。普通に停車しているのではなく、一台の後方が、もう一台の運転席にめり込んでいる形で、明らかに接触事故を起こしている。

よく見ようと身を乗り出すと、消防車の周りに、何人かの消防隊員らしきものが倒れているのが見えた。

赤い消防服が、やけに大きいのが、サイズが合った物を着ていないのだろうか。

違う。消防服ではない。

血だ。地面に紅い血が広がっているため、赤い消防服が大きく見えたのだ。

消防隊員の死体が無数に転がり、放置されていた。

カメラマンは慌ててカメラを用意し、目の前の惨状を映そうとする。

「冬香ちゃん……冬香ちゃん！」

呆然としているレポーターを揺すって我に返らせ、マイクを握らせる。

「なにか言つて。なんでもいいから！」

小野坂冬香は現実感を失っていたが、それでもマイクを握って言葉を繋ごうとする。

「今、我々は、エンプレスホテル前に到着しました。目の前には、消防隊員と思われる、あ……」

ここで言葉が途切れたが、唾を飲み込み、多大な精神力を費やして、継続させた。

「消防隊員と思われる遺体があります。明らかに殺害された様子で、放置されているようです。一時間前、チャンネル5に何者からか、

このエンプレスホテルを武装占拠したとの連絡がありました。確認のために着た我々の目の前には、ごらんのように、惨たらしい惨劇が広がっています……」

運転手が、衛星経由で地球上のどこからでも繋がると自慢していた携帯電話で、局に連絡している。本格的に生放送ができる準備をするように伝えているようだ。

やがて冷静になってきた小野坂冬香は、これはチャンスではないかと考え始めた。

5・PM10:00

消防隊員たちが殺されてから十分経過した。

ホテル正面入り口付近には、消防隊員の死体が、ここから確認できるだけで、十二人転がっている。

五代明は窓から外を伺いながら、水神晴玄に目をやった。

水神晴玄は今のところ動かずに静かにソファに座っている。どこか憔悴している様子なのは、連続して人に死に直面したからだろう。慣れていない人間には辛い。慣れても辛いかもしれないが。

脱出の方法、そして芽や他の同級生、そして人質全員を救出する方法を考えなければならぬのだが、正直どう動けばいいのかまったく思いつかない。

警察と連絡を取る方法は今のところなく、下手に動けば発見されてしまい、消防隊員や一つ向かいの部屋のカップルのように殺される。

一人だけならば脱出は不可能ではないが、水神晴玄を置いていくわけにもいかない。それに、あくまでも可能性の問題で、失敗する確率は決して低くない。

ホテルは新館と旧館に別れ、くの字を描いた構造をしている。この旧館は東側。北側の新館は一応視界に入る。しかしここから見えるのは室内側で、通路は見えない。それにプライバシーの問題で、外からの光を反射し、内部の光をあまり通さないタイプのガラスだ。つまり内部の様子はほとんど見えない。敵の動きを知ることがほとんどできないうえ、自分たち以外に潜伏している一般宿泊客がいたとしても、それを見つけることもできない。

本当になにもできないな。五代明は自嘲気味に胸中呟く。以前の自分ならなんとかできただろうか。

「……五代さん、一つ聞いていいかな？」

不意に水神晴玄は、五代明に質問の許可を求めた。改めて聞いてくることから、事件とは直接関係のない、プライバシーに関ることなのだろうと推測できた。水神晴玄はそういったことを自然と尊重する傾向にある。だからわざわざかな年齢差が大きな隔たりとなる学校生活の中で、友人になった。

「なんだ？」

「さっき、銃声が聞こえた時、すぐに銃声ってわかったよな。なんで？」

水神清玄は当初、花火や爆竹だと思ったようだった。日本で発砲音がしても、たいていはそう思う。

五代明は説明しようとして、止めた。ひどく現実味のない、作り話としか思えないような話だ。とてもありきたりな平凡な話なのに、日本ではなぜか誰も信じない。水神清玄はどうなのかわからないが、試す気はなかった。

「……ちよつと、色々あつて」

言いたくないことらしいのだと理解したのか、水神晴玄それ以上追求しなかった。

「うん？」

窓の外に目を戻した五代明は、正面道路からバンが来たのに気付いた。街燈に照らされて車体にチャンネル5と書いてあるのが確認できた。

「……テレビ局？」

呟く声で、水神清玄も外に目を向けて確認した。

占拠犯が犯行声明を出して、テレビ局が報道に来たのだろうか。それとも、まったく関係なく、ホールで行われるクラシックコンサートを報道する予定だったのか。

バンは正面入り口の広場の手前で停車した。散乱する消防隊員の遺体に気付いたのだろう、バンから降りてきた人間は、カメラを向けて撮影を始めた。

二人はすぐに室内に備え付けられていたテレビをつけた。

こんな可愛いワンちゃんに囲まれてとても幸せな……

同時に大音量で音が流れ、慌ててボリュームを小さくする。前の宿泊客のいたずらなのか、ボリウムを最大値設定にして電源が落としてあつたらしい。占拠犯に聞かれなかっただろうか。

とりあえずチャンネル五に合わせるが、今のところこのホテルのニュースは流れていない。他のチャンネルも同じだ。

「犯行声明を出したわけじゃないのか？」五代明は呟く。

「それなら警察が先に来てるんじゃないか？」

あのテレビ局は無関係か。だとするとテレビ局の人間も、消防隊員のように殺されるかもしれない。

「どうする？ どうしよう？」

慌てる水神晴玄の質問に、五代明は答えず、突然扉へ驚愕したような視線を向けた。

ドアノブがちょうど回されて、ドアが開こうとしている。

水神晴玄は少し遅れて気付き、息を呑んだ。

「隠れる」

五代明の行動は早かった。囁くように警告を発すると、音もなく迅速にドア横の洗面所へ身を隠し、扉から見えない位置へ入った。

警告を受けた水神晴玄は、一瞬遅れてから、慌ててベッドの陰に伏せて隠れる。

ドアがゆっくり開けられ、男が現れた。市街戦用軍服を身に着け、サブマシンガンを手をしている。慎重に室内に入り、銃口は真っ直ぐに室内に向けられていた。テレビの音を聞きつけたのだろうか、その音源、まだ点いたままのテレビに目を向けると、男は仲間と連絡を取るために無線機に手を伸ばした。

その手を五代明が横から掴んだ。

潜んでいた五代明に全く気付いていなかった男は、しかし突然の出来事に慌てず、サブマシンガンの銃座で五代明を殴り倒そうとした。

しかしそれより早く、五代明の左拳が男の腹部にめり込んだ。
『ぐ！』

強烈なボディブローに、男は呻き声を上げて体をくの字に曲げるが、苦痛を堪えて右足首に装着していたナイフを抜こうとする。それは痛みというものが日常的で、慣れている兵士だからこそ可能な行動だった。普通ならば、そういった行動自体できなかっただろうし、考えることさえできなかったはずだ。

しかし五代明はその行動を予測し、ナイフを抜く前にその手を蹴り付けた。

地面まで踏みつけるような蹴りは、骨にまで五代明の体重が加わり、ゴキリ、と鈍い音がして男の手首が折れ、当然ナイフを保持することなどできず、ナイフは床に転がる。

『ちっ！』

男はナイフを諦めて、残った左拳で五代明の顎を狙った。

左アッパーカットが入ると男が確信した瞬間、五代明は半歩体をずらしてその一撃を避けた。頬を風圧がなぶるが、ダメージは完全に受けていない。そして驚愕する男の脇腹に、右拳をめり込ませる。二度目のボディブローで男は体が数歩分飛ばされ、ベッドの脇で転倒したが、しかしすぐに立ち上がる。五代明のパンチは強力だったが、命中する直前、男は自分から衝撃の反対方向に飛んで、パンチの威力を弱めていた。

五代明は拳の手応えから判断して、即座に追撃しようとしたが、それより早く男は、腰から拳銃を抜いていた。

銃口を向ける男の、苛立ちに歪んだ眉根は、同時に勝利の確信も混じっていた。

拳銃に構わずに五代明は攻撃を加えようとも考えたが、男は引き金に指をかけている。動けば即座に引き金を引くだろう。弾丸を避けるには、敵が引き金を引くその時、意識が自分から引き金に移る瞬間でなければ。そして、それを見逃してはならない。回避する場所は、隣の洗面所へか、扉が開け放たれたままになっている通路へ

がいいか。

男はすぐに撃たなかった。それは、生け捕りするように命令されていたからなのか、それともなぶり殺しにするつもりだったのか。どちらにせよ、それが命運を分けた。

「ッ！」

男の脇腹に、先程の五代明の攻撃とは比べほどにならない衝撃が加えられた。

いや、衝撃と呼べるものだったのか。

男の体はまったく動かなかったのに、その拳だけが脇腹にめり込んでいた。

水神晴玄の右拳。日本武道、武術の多くに共通するパンチ。いわゆる突と呼ばれる、基本に忠実な、綺麗な姿勢から放たれた一撃は、基本的であるがゆえに威力はもっとも強力。

「……うぐ」

呻き声をかすかに上げた男は、ベッドの脇に誰かが隠れていたのだと理解し、その水神晴玄の姿を眼で捉え、しかしその眼球は裏返るように白目となると、その場で昏倒して崩れるように倒れた。

「……」

水神晴玄は自分の行ったことが信じられないように、しばらく拳を突き出したままの体勢で動かなかった。

五代明は扉の外を素早く確認した。

他に巡回兵はいない。どうやら、なんらかの理由でこの男は単独行動をとっていたようだ。

扉を閉めると、五代明はシーツをロープの代わりにして男の両手

足を背中に回して縛り、口にタオルを噛ませて眼が覚めても声が出ないようにした。そして、バスユニットに放り込んで、胴体部を水道管に縛り上げる。これで二段構えの拘束になり、簡単には外れない。

続いて、男の装備品を手早く点検する。オートマティックのハンドガンに、予備のマジガン一つ。同じ弾丸を使用するサブマシンガンに、予備はマジガン二つ。先程落としたナイフ。腰に取り付けられていた小型無線機。

「こんなものまで……」

手榴弾が一つあった。どうやって日本に持ち込んだんだ。

「……おい」

突きを出したままの体勢でまだ固まったままの水神晴玄に気付いて、声をかける。

「……え？ ああ」

水神晴玄はその声で我に返ったのか、突き出したままの拳を収めた。そして自分のその拳を半ば呆然と見つめる。

「なにかしているのか？」

「え？」五代明の質問の意味が理解できずに聞き返す。

「格闘技とか、そういうの。なにかやってるのか？」

「ああ、家が古流武術の道場をしてるから、色々仕込まれた」

「なるほど」

五代明は納得したが、当の水神晴玄はまだ信じられない思いでいた。

子供の頃から、先祖代々に伝えられてきたという古流武術を、祖父と母から教えられたが、実のところ本気で打ち込んだのは、藁巻きやサンドバックの類だけで、人間に対してはこれが初めてだ。

こんなに威力があったとは、自分のことながら正直驚いている。

（落ち着け。今は偶然だ）

これだけで戦おうとは思ってはいけない。銃を持った相手に素手で挑むなど、無茶無謀もいいところだ。まず、手が届く距離に近づかなければならないし、相手に距離があるうちから撃たれれば終わりだ。今のは、この昏倒している男が、五代明に意識が集中していたからこそできたことで、つまり男の油断と幸運が重なっただけだ。興奮する頭の片隅で、冷静な分析と判断をする。もし浮かれて戦うつもりでいたら、自分は生き延びることができないだろう。

「銃を扱ったことは？」

拳銃を差し出すようにして尋ねる五代明に、水神晴玄は首を振る。拳銃など映画やテレビの中だけの存在だとは思えなかった。

「だろうな。なら、俺が持っているしかないが、それでいいか？」

「ああ」

水神晴玄は同意する。拳銃の扱いを知らない自分が持てば、逆に危険だという気がする。

ふと、音量が押えられたテレビの様子が変わっていることに気付いた。先程までの可愛いペットの話題から、どこか緊張した面持ちのアナウンサーに切り替わっている。

「おい、これ？」

音量を少しだけ上げて、声が聞こえるようにする。

緊急放送です。えー、未確認情報ですが、京都エンプレスホテルにて罎城事件が発生した模様です。警察の発表はまだ行われておらず、確認を急いでおります

緊急ニュースのテロップが流れ、エンプレスホテルの正面の景観が写った。

……現在エンプレスホテルの前に来ております。通報を受けてから一時間が経過しています。……その、現在確認したところ、エンプレスホテル前に、少なくとも十人以上の遺体を発見しました。ごらんになられているでしょうか。消防車が事故を起こしています。えー、ですが私たちが見たところ、死因は銃弾を受けたことだと思

われます。連絡を送ってきた者は、ここで、エンプレスホテルを占拠した証拠を見せるといつていましたが、これがその証拠なのでしょうか。少なくとも、ただ事ではないのは確かです

救急車はまだですか？

え？ あ、はい。えー……私たちが到着してから、彼らを発見して、すぐに連絡したのですが、まだ来ていません

水神晴玄は窓の外から彼らに叫んでやりたい気分になった。

「そんなことより早く逃げろ」

なにを悠長に生放送しているんだ。十数人もの人間が殺されて、目の前で死んでいるんだ。とてつもなく危険な状況だと理解できないのか。

「日本は平和だからな。危機感に乏しい」

五代明が淡々と説明しながら、敵から奪った銃器類を装備している。最後に、ハンドガンにマジガン入れてスライドし弾室に弾入させた。

その様子は手馴れていて、明らかに銃を扱った経験があるとは思えない。アメリカでも行って、ガンスクールで授業を受けたことでもあるのだろうか。

……あ？ いま誰か出てきました

ホテルの正面から三人の人間が現れた。映像の明解度が低く、よくわからないが、一人は消防隊員を殺した男のようだ。

「……まさか」

水神晴玄は、これから起こることを予想して、慄然とした。

テレビのリポーターは、武装グループがホテルを占拠した証拠を見せる、と言っていた。その証拠は殺された消防隊員ではないのではないのだろうか。彼らは、自分たちが起こした小火のために来た、予定外の出来事だ。

ならば、予定されていた証拠とは。

「あいつら、生中継でテレビ局の人間を殺すつもりだ」

「……だな」五代明は同意する。

テレビでは、歩いて接近してくる男から逃げようとせず、マイクを向けている。リポーターがインタビューを行うようだ。

なにを暢気にしているんだ。水神晴玄は窓を開けて思いっきり叫んでやりたかった。

我々の言葉に耳を傾け、実際に来てくれたことを感謝する。これで我々の意思を明確に、そして冗談ではないということが、日本政府に伝わるだろう

ビジネススーツを着た男は、消防隊員の時と同じように拳銃を取り出した。

それでは、さようなら

突然テレビ画面が大きくブレ、どのような状況になっているのか、テレビからはわからなくなる。悲鳴を上げているようだが、銃声がしなかったことからまだ撃たれていないようだ。

走れ！ 速く！

ようやく危険を感じて、全力で逃げだしたらしい。

だが、危険なのはあの男だけではない。周囲には多くの武装者が身を隠しているのだ。バンに乗り込み、車を発進させ、安全圏まで逃げる。そんなことは不可能に近い。アサルトライフルの銃弾の雨を受ければ終わりだ。ライフル弾は日本製自動車の薄い金属を容易く貫通する。

「水神、逃げる準備をしておけ」

五代明は返事を待たずにサブマシンガンの安全装置を解除すると、銃口を窓へ向けた。

水神晴玄は思わず身を引いた。

そして引き金が引かれる。

タタタタン！ 数発の弾丸が、事故防止としてホテル建築の際採用された強化ガラスを、粉々に破壊した。

五代明は、風通しがよくなった窓から身を乗り出すと、玄関正面に立つ占拠犯の男にサブマシンガンの照準を定め、フルオートで引き金を引く。

男の周囲に弾丸が降り注ぎ火花が飛び散る。

突然の銃撃に男は身を屈めて正面玄関へ走った。走りざまに拳銃を五代明へ発砲するが、ろくに狙いをつけられない上、距離のある標的にはまったく当たらない。

もつとも、それは五代明も似たようなものだ。遠距離を想定していないこのサブマシンガンでは、これだけ距離があると、威力が落ちる上に、命中精度も下がる。事実、男には当たっていないようだ。当たったのかもしれないが、防弾服を着ているのかもしれない。

サブマシンガンは三秒で弾切れを起こし、手早く予備のマジガンと替える。

装填すると同時に、木々に潜んでいた十人の兵士が応戦を開始した。やはり待ち伏せしていた。

五代明はその姿を視界の端に捉えると、即座に室内に身を屈めたライフル弾が下から降り上がってきた。窓ガラスが割れ、フレームは砕け、天井に無数の弾痕が生じる。遠距離想定のアサルトライフルは、弾丸の威力が減衰することなく到達する。

水神晴玄も室内の奥で、身を縮こめていた。それが、銃撃を受けた時のもつとも基本的な防御体勢だとは知らないだろうが。

十丁のアサルトライフルから放たれた弾丸の雨が降り止むと、五代明は再び窓から銃口を外へ向ける。

敵の位置を確認、即座に連射。だが、木々が楯となって命中していないようだ。

敵が弾倉を交換している間は短い。五代明が撃ち尽くす前に、反撃が開始された。

だが、それだけで十分だった。テレビ局の人間はバンに乗り、すでに走らせている。だがやつらが追撃する可能性がある。

五代明はポケットに入れておいた手榴弾を取り出すと、安全ピン

を抜く。身を屈めた状態で投擲。窓から、弧を描いて、正面広場の真ん中に落下。

爆発。

手榴弾の火薬量は基本的にそれほど多くなく、爆発も小さいものだが、破片式であるため、周辺に散弾をばら撒くのと同じ効果がある。破片を受ける危険があるため、多少距離があっても防御姿勢を取らなければならない。

占拠犯がテレビ局の車に攻撃を掛けようと身を出した時には、バンはすでに遠距離を走っていた。追撃してテレビ局の人間を殺すのは不可能となった。

桐嶋長平はテレビに流れる映像に釘付けになっていた。

そして事態が一段落着くと、隣で同じように呆然とテレビを凝視していた副署長に指示を出す。

「おい、チャンネル5に確認を取れ。今は本当かどうか。早く！」

「は、はい！」

指示を受けた副所長は、資料室からすぐに走り出した。

チャンネル5に連絡したところ、ドラマなどのフィクションではなく、全て事実だということが判明した。

至急、対策本部の設置が開始された。

6・PM10:00

窓から銃撃を加えたことによって、自分たちの位置は敵に完全に判明してしまった。

敵が来る前に迅速に逃げようと、室内から廊下へ出た五代明と水神晴玄は、突然銃撃を受け、ドアに無数の弾痕が生じる。

外にいた敵が、窓から位置を割り出して、仲間に連絡をしたのだろう。それは予想していたことなので驚かないが、思った以上に早い。だが数はまだ少なく、曲がり角のところに二人ほどだ。数が少ないうちにこの場から離脱し、どこかに隠れれば、助かる望みはある。

五代明はドアの隙間から撃ち返すと、敵は弾丸を回避するために、通路の角に身を隠した。

「走れ！」

その隙に五代明は指示を出し、水神晴玄は即座に反応して、階段へ向かって走り出した。五代明はその後を走りながら、牽制射撃を行う。階段はこの部屋の位置から近いため、敵が反撃してくる前に辿り着いた。

「どこへ行けばいい？」

階段で一旦止まって、水神晴玄が聞く。

上か、下か。

だが、どちらへ行っても敵がいるだろう。しかも敵が集まって来る足音が聞こえてくる。考える時間は短い。

「上だ。屋上に出よう。非常階段があるはずだ」

一旦屋上へ出て敵を引きつけてから、一気に下へ降りれば脱出できるかもしれない。

五代明は言うが否や走り出した。慌てて水神晴玄がその後を追う。

七階まで上がった時には、敵が追撃に階段を上がり始めていた。一瞬目を向けると、人数が五、六人に増えている。その内の二人ほどが、銃撃を開始。

「うお！」

五代明が掴んでいた手すりに弾丸に命中し、火花が散り、思わず手を引っ込める。

八階で敵が正面に現れた。一人だけだが、水神晴玄は一瞬足を止めそうになる。

「止まるな！」

五代明が叫び、同時に待ち構えていた敵に銃撃を掛ける。

敵は、どうやらここで遭遇すると思っていなかったのか、少なくとも待ち構えていたというわけではないらしく、驚いたように通路側へ身を隠す。しかし銃撃が止むと、すぐに撃ち返そうと身を出した。

「フッ！」

占拠犯のすぐ眼前まで接近していた水神晴玄は、サブマシンガンの銃口を蹴り上げた。狙いを大きく外した銃口から発砲され、天井に弾痕が生じる。そして敵の、完全に無防備になっている鳩尾に、左肘を突き込む。

『ゴッ！』

苦悶と言うより、呼吸器官に深刻なダメージを受けたために、声帯が少しだけ動いたような、奇怪な声を上げて、敵が倒れる。

「よし！」

今日は幸運に恵まれているらしい。もつとも、このような状況に巻き込まれたこと事態が、幸運には程遠いのもかもしれないが。

水神晴玄は再走する。屋上まで後二階だ。死の恐怖が、水神晴玄の身体能力と感覚器官を最大限に引き上げていた。

先に五代明が屋上入り口に到着し、ドアノブに手を掛けたが、動かなかった。鍵がかかっている。

「……冗談だろ」

水神晴玄は絶望に呟く。幸運はたった二回で終わりなのか。今日は百回あってもまだ足りないかもしれないと言っのに。

敵の足音がすぐそこまで迫っていた。

三階下、二階下……

五代明はサブマシンガンをノブ向けると引き金を引いた。ドアノブごと鍵がはじけ飛び、五代明はドアを蹴り開ける。

「先に行け」

水神晴玄を促すと、サブマシンガンの最後の弾倉を入れ替え、階段下へ銃口を向けた。そして敵の姿が見えた瞬間、発砲する。

敵は銃撃に怯んで追撃を一旦停止した。上からの攻撃は、圧倒的に有利であるため、下側にいる者は防御に専念するしかない。

水神晴玄は一瞬ためらったが、指示通りに先に屋上に出る。

そして、ここまで来て逃げ道がもうないということを理解した。

屋上には、非常階段がなかった。非常階段を示す表示はどこにも無く、階段も見当たらない。

一陣の夜風が死を告げるように通り過ぎた。

「……冗談だろ」

火災時における緊急避難経路として、外側に階段が設置されていないなければならないというのをテレビで見たことがある。だが、このホテルはその法律を無視したのか。

新館建設のさい邪魔になるので外したという事情を水神晴玄が知る由もない。どちらにせよ建築法に抵触するが。

応戦が一段落ついたのか、五代明が屋上に出てきた。そして開けたドアを閉めると、壊した鍵の代わりに、弾切れになったサブマシンガンとナイフを使って固定する。少しの間だけだが、これで敵は入れない。

「行くぞ」

五代明は迷いなく告げるが、水神晴玄はその言葉を理解できない。
「行かつて、どこへ！？ 逃げる場所はないんだぞ！」

「向こうだ！」

五代明が指差す先は、北側の新館だった。同じ十階建ての新館は、一メートル半ほどの建物間の幅先に、北側練の屋上がある。

一メートル半。落下事故防止用の胸部までの高さほどのフェンスがあるため、助走をつけることができないが、身体能力に問題がなければ、助走なしでも十分飛び越えられる距離だ。

だが、この東側と北側が連結されているのは、三階までだ。もし足を踏み外せば、七階分落下することになる。落下すれば、確実に死ぬ。

ドアから激しく叩く音がする。すぐにでも破られそうだ。
「せつ！」

短い息吹と共に五代明が跳躍した。難なく到達して、着地と同時にフェンスに掴まり、そのままの勢いでフェンスを乗り越える。

「来い！」

行くしかない。水神晴玄は覚悟を決めた。背に当たるフェンスに軽く体重を乗せ、反動をつけて、一步分の助走をつけた。そして膝の軽い屈伸で瞬発力を得て、次に跳躍力に変換する。

その一瞬前にドアが破られた。そして最初に屋上に出た敵の一人が、二人の姿を見つけると同時に、拳銃を向けて発砲し、その弾丸が着地寸前の水神晴玄の足元に命中した。

「！」

着地の意識と、危険を回避しようとする反射的な反応が、相反し、水神晴玄は着地に失敗し、屋上の縁から足を踏み外した。

（まずい！）

五代明が咄嗟に手を伸ばし、水神晴玄も反射的にその手を掴もう

としたが、二人の指先が触れる寸前で、空を切った。

（え？）

水神晴玄が、その事実が信じられないかのように、啞然としたような、どこか呆けた表情で、落下していく。

「水……」

なんのためなのか、その名を叫ぼうとした五代明に、銃撃が襲う。銃撃を避けるため思わず体を伏せた。フェンスを銃弾が破壊してく。

一瞬銃撃が途切れると、五代明は上体を起こして、撃ち返そうと最初に屋上に現れた敵に拳銃の銃口を向けた。

水神晴玄を落下させた原因となった相手を殺すつもりだったのか、それともただの反射的な行動だったのか。少なくとも、その時の五代明には躊躇いは一切なく、いつものように迷いなくその引き金に指を掛けた。

だが、引き金を引かなかった。

驚愕で。

そして同時に、敵も驚愕の表情をしていた。

薄い金髪はほとんど銀髪に近く、肌は有色人種にはありえない白年齢は同じくらいで、中性的な顔立ちをしており、人によっては女性と間違えるかもしれない。

その顔は、あからさまに悪党の顔をしているわけではなく、冷徹な機械のような顔をしているわけでもなかった。

敵がそんな普通の人間であることに驚愕したのか。

違う。五代明はその顔を知っていた。

『マクスエル！？』

五代明が叫んだ。

『ライトマン？！』

マクスエルと呼ばれた少年もまた驚愕で叫んだ。

五代明は驚きから一呼吸も必要とせずに回復し、即座に身を翻して疾走し、背中越しに拳銃を撃つ。狙いをほとんど定めていないそ

れが命中するはずがないが、牽制にはなった。

マクスエルに続いて屋上に次々現れる敵は、その銃撃に怯んで一秒か二秒ほど攻撃が遅れ、五代明にホテル内部に入るドアに到達する時間を与えた。

五代明は運良く鍵がかかっていたいなかったノブを回すと、体当たりするようにドアを開けて中へ入る。そして鍵をかけて敵が追撃できないようにすると、全力で階段を降り始めた。

五代明は七階で降りるのを止め、どこか隠れる場所を探す。敵の姿はこの周囲にはいない今が、身を隠す好機だ。客室はほとんど鍵がかかっている。どこか鍵のかけられていない場所を探し、ほどなく従業員用器具室を見つけ、そこで隠れることにした。

念のため、音を立てないように静かに、鍵をかけておく。耳を澄ますが、付近に敵の足音は聞こえない。どうやら危険はなんとかやり過ごせたようだ。自分だけは。

椅子が重ねて置いてあったので、それを一つとって腰掛ける。急に疲労感が押し寄せてきた。

「……マクスエル」

現在所持する道具類をチェックする。武器は、ハンドガンが一つ。弾丸はマジガン一つ分。マルチナイフが一つ。ペーパーナイフが一つ。そして明かりとして、ミニマグライト。

「水神……」

再び呟いて力なくうな垂れる。

落下する寸前に見たあの顔。

恐怖というより、呆然としていたような。

自分の身に起きたことが信じられないような。

そつ、人は自分の死を信じることができない。

心のどこかで思っている。どんなことがあっても、自分だけは死

ぬことはない。

たとえどんなことがあっても、どんな年月が過ぎようとも、死ぬことはない。

そんなことは、ありえないのに。

死の直前の人間の顔。

何十、何百と見てきた顔。

けして忘れることのできない、恐怖を表した顔よりも恐ろしい、事実を受け入れることができずに呆然とする顔。

仲間の顔。敵の顔。どちらでもない者の顔。

誰であろうと、忘れることができない、死ぬその瞬間の顔。

また一人、忘れることができない顔が増えた。

忘れることのできない顔が増えた。

そしてマクスエル。忘れることのできない顔。もう二度と会うことのないと思っていた顔。

どうしてあいつがここにいるのか。どうしてあいつが日本にいるのか。どうしてあいつはまたこんなことに係わっているのか。

どうして俺は……

「……俺は殺さなかったんだ」

敵を殺すことはできたはずなのに。

狙いを外していた。

命中させることは簡単だった。

だが、当たれば死ぬ。

急所だけを狙うようにしていた自分は、急所だけしか狙ってこなかった自分は、逆に急所を外すということが上手くできない。

そのため大きく狙いを外すしかなかった。

平和な日本で人を殺す必要はない。

宿泊室の向かいのカップルが殺されているのを見たのに、まだ殺すことはないはずだと思っていた。

消防隊員が皆殺しにされても、まだ殺さなくていいはずだと思っていた。

平和な日本では人を殺す必要はなかったはずだ。

だが、水神晴玄は死んだ。

敵を殺さなかったために、仲間が死んだ。

敵は殺さなければならぬ。

平和な日本であるということは関係ない。

敵が存在する。

敵は殺そうとする。

それに対処する方法は一つ。

敵を殺すこと。

それができなければ自分が殺される。

仲間が殺される。

今はそういう状況だ。

ここはそういう場所になったのだ。

「……そうだ、ここは……」

ここは戦場だ。

「は、は、ははっ。やばかった。今のは、やばかった」

水神晴玄は壁に設置された排水用パイプに九階の位置で捕まっていた。

恐怖と安堵によって泣き笑いの一歩手前の状態だが、混乱の寸前で踏み止まっていた。

今しがみついている排水用パイプに手が届いたのは、奇跡と呼べるかもしれない。数メートル落下による重力加速によって増加した自重で、掴んだ時は肩が外れるかと思うほどの負担がかかったが、幸い脱臼することなく、衝撃で手が外れてしまうこともなく、そしてパイプも壊れることなく、しがみつくことができた。

だが、助かったというにはまだ早い。問題なのはこれからだ。頭上で銃撃の音が響き、走る音が聞こえ、そして頭上で敵が跳躍

する影が見えた。

今、五代明と銃撃戦を繰り広げている敵は、銃撃戦が終わり次第、自分が落下した確認のために下を見ることぐらいはするはずだ。そうなると、自分が墜落せず、まだ無事だということがわかってしまう。当然止めを刺そうとするだろう。頭上から弾丸の雨を降らせることで。

それは数秒先のこともかもしれない。その前になんとかしなければ。このパイプを伝って下まで行くのは不可能だ。そんな時間はない。屋上へ上がるのは論外。敵の銃口に身を晒すことになる。

水神晴玄は逃げ道を探して見渡すと、すぐ隣に小さな窓があることに気付いた。手を伸ばせば届く距離だ。縁に捕まって、窓を開け、中に入れば助かる。少なくとも敵の目を逃れられるはずだ。

ただし、鍵が開いていればの話だ。屋上に出る時のように鍵が閉まっていたら、その時は今度こそ絶体絶命となる。

「……やるしかないよな」

水神晴玄は小窓へ右手を伸ばした。パイプを掴む左手を伸ばし、体を伸ばし、それでも指先が届くか否かのところで、届かない。

焦燥に駆られるとバランスを崩し、左手がパイプから外れて落下してしまうかもしれない。あるいはパイプ自体が壊れてしまう可能性もある。その前に敵に見つかるかもしれない。

落ち着いて、迅速に縁に掴まらなければ。

そして、どうか鍵が開いていますように。

「神さま。あんまり信じてないけど、どうかお願い、助けて」

水神晴玄の親戚の家は、神社を営んでいる。古い宗派で、親族会議の結果、なぜか水神晴玄が跡取りに決定したのだが、本人には信心の欠片もなく、家の手伝いの延長線のことくらいしかしたことがなかった。

だが、今はその神の加護をなによりも欲した。

「！」

瞬間、左手が滑った。それはパイプから完全に外れるというもの

ではなかったが、しかし体を支えることが完全に不可能な状態でもあった。

急いで体勢を整えようとしても、絶対に間に合わない。

一瞬の思考、言葉にならないほど短い、感覚としての思考で、水神晴玄は左手を自分から離し、パイプを足場にして跳躍した。

不自然な体勢からは、大きな距離を跳ぶことはできないが、少しの飛距離で十分届くはずだ。

届いてくれ。

右手を縁に思いきり伸ばした。

（届け！）

神はその願いを叶えた。

「や、やった」

小窓の縁にぶら下がった状態で、水神晴玄は神に感謝した。

ともすれば滑り落ちそうになりながらも、小窓に手をかけ、鍵が開いていた時には、さらに感謝した。

小さな窓に頭を入れると、ヘビのように体をくねらせながら中に入る。この窓は換気用で、室内の高い位置にあったが、下は柔らかい絨毯だ。そのまま落ちても受身を取れば問題なく、水神晴玄は上手く着地に成功した。

武術を仕込んでくれた祖父と母に感謝した。無理やり教え込まれて反感しか覚えたことはないが、生還を果たしたら今度はもっと真剣に習います。そして神さま、今度は真剣に神事に取り組みます。守る気のない誓いまで立てるほど、助かった喜びに満ちていた。周囲を見渡すと、豪華な飾り付けが眼に入る。飾りには絵画や美術品。自分たちが泊まっているエコノミーとは違い絨毯やソファも明らかに上質。ベッドは一人用だというのに、ダブルベッドほどの大きさ。

話に聞いたことだけはある、ロイヤルスイートルームだろうか。

誰かが泊まっている様子はなく、ドアを確認しても鍵はかかった状態だった。誰かが出入りした形跡はない。

換気用の小窓はそのままでは手が届かないので、椅子を使って閉めようとした。だが、敵の声が聞こえて中断する。窓を閉めると、その動きと音で位置がわかってしまう。

小窓は屋上からはわかりにくい場所にあつたので、開いているのはやつらには見えないかもしれない。少なくとも居場所が確定されることはないはずだ。

だが、落下したはずの自分の死体が見当たらないとなると、当然助かったのだと考えるはずだ。自分の居場所を知らせるようなことは避けなければ。

やつらの声が聞こえる。

『……おい、いないぞ』

『確か落ちたはずだよな？』

『見間違いか？』

『そんなはずはない。確かに落ちるのを見た』

『助かったのか？』

『この高さで、いったいどうやって？』

『……ニンジャ？ ニンジャか？』

『そうか！ ニンジャか！』

『くそ、ニンジャか。厄介だな』

敵の話している言語は、あきらかに日本語ではなく、英語でもないようだ。中国系統の言語でもないような気がするが、明確にはわからない。英語はまだわかるが、中国語は映画やテレビでしか聞いたことがない。ただ、忍者という単語だけはわかった。妙な勘違いをしているかもしれない。

話し声はしばらくして途絶えた。やがて足音も人の気配もなくなる。

連中は屋上から立ち去ったようだ。少なくとも、このあたりを注視しているわけではないだろう。

音を立てないように静かに窓を閉めた。

急に脱力感が襲う。緊張の連続で体力を消耗している。それに、

忘れていたが腹痛を起こしていたのだ。痛みは感じないが、興奮でまぎれているだけなのかもしれない。

体を休めることにしよう。しばらくは安全だ。

天蓋つきのふかふかした軟らかいベッドに横たわりたいが、気を抜くと眠ってしまいそうなので止めておく。代わりにソファに座る。だが、このソファも、自分の家で作っているソファより遥かに上質で、家のベッドと布団より寝心地が良さそうだ。

考えてみると、スイートルームに入ることができるのは、たぶんこれが最初で最後なのではないだろうか。

こんな事態でなければ心行くまで楽しむのに。棚には高そうな銘柄の酒類が並んでいる。冷蔵庫を開けてみれば、よく冷えた飲み物に果物類。自分が普段食べているものより明らかに高価そうだ。

状況にそぐわないことを考えて、水神晴玄は苦笑した。

「五代さん……」

無事に逃げ切れただろうか。

あの銃撃からは普通は無事だと思えないだろうが、しかし事件が起きてから五代明は、今迄知らなかったなにかを垣間見せていた。銃器類の扱いに長け、状況判断も的確。

自分が古流武術を学んだように、五代明もまたそういう訓練を受けたことがあるのかもしれない。

ならば、足手まといの自分が一緒にいるより、助かる確率は高い。だから、きっと無事のはずだ。

舞台制御室で、ワシントンはマクスエルから報告を受けていた。

『……以上のことから、明らかに未成年だと思われます』

ワシントンは考えるように、右手で顎鬚をなぞる。

『この国の学校が一般的に指定している服装。……まだ子供とはな。日本人は危機感が薄いと聞いていたが、それでもない者もいるよう

だ。それも、まだ子供……」

マクスエルは沈黙したまま直立不動の姿勢をとっている。

「……子供か。なにか他に気になることはあったか？」

マクスエルは、少しの間を置いてから答えた。

「改めて思い返しましたが、特に何も」

「……そうか」

ワシントンはしばらく黙考してから、無線連絡を入れた。

「ハンス、そのまま巡回を継続しろ。例の二人に関しては、特に探さなくていい」

無線機から即座に反論が返ってきた。

「なんだと?! 連中はどうするんだ?! あのガキどもは俺に向かって撃ちやがったんだぞ!」

その怒鳴り声から、かなり頭に血が上っているようだ。

「落ち着け。ハンス、復讐を果たしたい気持ちはよくわかる。だが、考える。彼らはたったの二人だ。これ以上なにもできない。あの二人にこれ以上こだわれば計画に本格的に支障をきたすことになる」

「だが!」

「ハンス。巡回を継続するんだ」

辛抱強く言い聞かせるように命令を繰り返す。

ハンスはいささか感情的で、嗜虐的な性癖が強い。粘着質で、一度恨みを抱くと、執拗に相手を憎悪し続ける。そして、その大半はたいてい逆恨みだ。扱いがやや難しいところがあるが、自分の嗜虐心さえ満足できれば、報酬面や些事にはこだわらないので、それほど問題ではない。

それに今回の作戦には、こういった性格の人物が指揮官の一人に入っていることが理想的なのだ。

無線機からは渋々といった感じで返答。

『了解』

『よし。ああ、ただし、もし偶然発見したら、お前の好きにしてい』

『本当か！？』

途端喜びが声に混じる。

『ああ、発見したらな。だが、計画は崩すな。いいな』
『了解』

今度は意気揚々と承諾する。

ワシントンは続けて他の者にも指示を伝える。

『ドモチエフスキー、イベントホールに例の物の設置を開始』

『わかった』ドモチエフスキーは端的に返答して返事を待たずに切る。

ワシントンはそのまま『ヨーキ、金庫はどうなっている？』

『解除にはまだまだ時間がかかる。だが、なんとかしよう』

『よし、そのまま継続だ。マクスエル、次の段階へ移る。迎撃準備を始める』

『はい』

マクスエルは敬礼すると、舞台制御室から退室した

一人だけ残ったワシントンは誰ともなく呟いた。

『……子供か。あいつ以外にそんな優秀な子どもがいたとは。欲しい逸材だな』

7・PM11:00

桐嶋長平署長は、佐伯真人さえぎ まひとを迎えた。

佐伯真人は警視庁捜査官の一人で、キャリア組と呼ばれる、いわゆる出世街道に乗った人物。オールバックにした一切乱れのない髪と、喪服のような黒いスーツが特徴的といえる。今年で四十歳になるが、周囲にいる数人の部下を従えているあたり、すっかり貫禄が付いた雰囲気だ。もっとも体格は痩せ型なのだが。

「お久しぶりです。桐嶋さん」

左伯真人は警察署正面で桐嶋長平に一礼する。警察階級で言えば、左伯真人が上なのだが、一時期桐嶋長平の部下だったことがある。その時から桐嶋長平こそ警官としての手本であり目標であると、心に刻み込まれている。

桐嶋長平にしても、現場組とは色々確執のあるキャリア組との合同対策は不安があるため、よく知っている人物が担当となるのは心強く安心だった

「よく来てくれました。挨拶はあとで」

警察署の会議室に急遽設立された特別設置対策本部に案内する。テレビ局チャンネル5の放送による事件発覚から一時間後、異例の速さで対策本部が設置されたのは、テレビという公共情報媒体によって市民に情報が流出したことによって、世間に無様な真似を見せられないという危機感と焦燥感、同時に消防隊員の死体をテレビ経由で見た警官たちが義憤を燃やしたことにある。

ほとんどの部署が命令を受ける前から対策を開始し、捜査連携、情報交換などの確認作業だけで終わり、この警察署始まって以来の早さで対策本部が設置された。

警視庁にも連絡されているが、そこから捜査官を派遣するにはあ

と数時間かかる。

しかし、それでは到底間に合わず、偶然他の事件を捜査していたため京都に来ていた左伯真人に、警視庁から命令が下った。

そして一時間後、この警察署に到着した。

「状況は？」

佐伯真人は、会議室へ向かう途中、歩きながら桐嶋長平に質問する。

「今のところわかっているのは、午後九時ごろ、ローカルテレビの通称チャネル5に占拠犯からの連絡があったこと。そして十時の放送で、消防隊員の死体と、銃器類を持った男たちの姿が生放送されたこと。そして一切フィクションではなく、本物だったということ。それから、消防署から確認しましたが、午後九時ごろ、これはチャネル5に連絡があった時刻の少し前らしいですが、占拠されたエンプレスホテルで小火が発生し、火災警報器が作動、消防隊が消火活動に出動しました。しかし、それから十分後、エンプレスホテルに到着したという連絡から、通信が途絶えたそうです」

「つまり、その時出動した消防隊員が……」

「殺害された」

「チャネル5の局員は？」

「無事です。先程まで現場で事情聴取を行っていましたが……」

「今は？」

「仕事を始めました」

「そうですか」

彼らにとってはスクープだ。しかも一番乗り。報道関係者なら銃撃を受けたことも瑣末なこととして喜び、警察の事情聴取は仕事を妨害していると感じないだろう。

「現在エンプレスホテル周辺に警官隊を派遣させています。しかし、占拠犯はどうやら本格的な武装、アサルトライフルなどの軍用銃を装備しており、うちの署の装備品では、太刀打ちできないでしょう」
「それについては心配ありません。警視庁からSATが出動しまし

た」

S A T。警視庁が編成する特殊部隊。対テロリスト鎮圧などを目的とした、攻撃性の高い部隊で、その実力はアメリカ警察特殊部隊 S W A T に匹敵するという。

彼らを投入するということは、警視庁でも危険度を強く見ているということであり、心強い限りだが、しかし東京都間をどうやって来るのだろうか。高速道路は勿論、新幹線を使っても三時間以上はかかる。

「ヘリを使って」

「空輸ですか」

「直接、エンプレスホテルへ向かうそうです」

「直接？ しかし、まだ警官隊も配備していないのに」

どのような状況にあるか調査も行っていないのに突入させるのは、危険すぎる。

「時間をかけると、それだけ人質に危険が及ぶと判断したようです。しかし、我々はなにもなくていいというわけではありません。迅速に、少なくとも S A T 到着前に警官隊の配備を完了させてください」

「わかっています」

警察署内の会議室に到着し、扉を開ける。

中にいた警官、刑事たちが振り返る。

「署長！ エンプレスホテル周辺警官隊、配備完了しました」

早速警官隊の一人が報告した。予定よりも早い、望ましいことだ。

「よし。占拠犯からの連絡は」

「まだです」

左伯真人は桐嶋長平に聞く。

「こちらから連絡は？」

「いいえ。ネゴシエイター交渉人なしで連絡するのは危険だと判断しました」

「わかりました。では、占拠犯からの連絡が入り次第、私が交渉窓

口になります」

桐嶋長平は頷いて了承する。警視庁で正式に交渉訓練を受けた左伯真人が、この場でもっとも適任だろう。

左伯真人は本部長の席に座った。彼の部下も座り、所轄の刑事も着席する。最後に、桐嶋長平が、本部副長の椅子に着席した。

左伯真人は彼らを見渡すと、エンプレスホテル占拠対策本部会議室にいる全員に明確に聞こえるように、宣言した。

「これより、エンプレスホテル占拠事件対策を開始する」

イベントホールでは、人質たちは相変わらずおとなしく静かにしていた。

ただ、事件発生から時間が経過したためか、人質の緊張も緩和し、トイレに向かう者もいた。

幸いというべきか、あるいは当然のことと考えていたのか、そういったことに制限されなかった。トイレはイベントホールの端に設置されていたため、人質を外へ出す必要がなく、そしてこのトイレは、換気口はあるのだが、窓がない。つまり、逃げ出せないということだ。

やがて全体の雰囲気落ち着いてきた。

そうになると、なんとか脱出できないだろうかと相談する者もいる。勿論占拠班が見張りにいるため簡単には実行できないが、それでも隙はないだろうかと観察し、密やかに計画を練っていた。

見張りの人数は十人程度。人質は約三百人。警備に穴が開くはずだ。

「なんか、冷めちゃってる」

その中で、大滝由美がテーブルに出ているディナーを、あまりおいしくなさそうに口に出している。五代明と水上晴玄が結局食べるこ

とができなかった食事は、時間の経過ですっかり熱を失っていた。

五代芽も口にしてみる。食欲が出るはずがなかったが、それでも味の良し悪しは判るくらいの余裕が出てきた。

「でも、冷めても美味しいよ」

「うん。あたし味音痴だから、冷めると全然わかんないのよね」
二人が食事を摘み食いしている隣では、早乙女遙が憔悴した様子で俯いていた。過度の緊張が続いた結果、言葉を出すことも億劫になるほど疲れてしまったようだ。しかし、そちらのほうはまだ問題を起こさないと思えるので、そのままにして置くことにした。

そんな三人を、トイレから戻ってきた瀬戸口大介が見つけた。不安そうにしている彼は、元の席に戻るべきかどうか考えた。指定されている席は、ヤクザ気取りの土屋健司と同席のため、できれば一緒にいたくない。なのに、なぜ同じ班になったかといえば、土屋健司が無理やり引き込んだためだった。荷物持ち兼ストレス発散係として。

だがこんな状況では、ストレス発散がさらにエスカレートするのではないかという心配があった。事実、土屋健司は相当苛付いているらしく、しきりに足を揺らしている。その矛先がいつこちらに向かわかったものではない。

瀬戸口大介は逡巡のあと、五代芽のところへ向かった。

「あの、ここいいかな？」

五代芽は唐突に現れた瀬戸口大介に少し驚いたようだったが、あの天然記念物的存在の不良と同じ班なのだということを思い出してくれたのか、快く承諾する。

「うん、いいよ」

「ありがとう」

そして五代芽の隣、本来なら五代明が座るはずだった席に座る。
「なんか、大変なことになっちゃったね」

「そうだね。でも、大丈夫だよ、きっと」

五代芽は笑顔で答える。それは作り笑いだとわかるものだったが、それでも不安が紛れるような気がした。

「まあ、仕方ないよ。あたしたちにできることなんてなにもないんだし。あ、これ食べる？」

そして食事を示す大滝由美に、瀬戸口大介は少し驚いたが、次は少し小さく笑った。その豪胆さに感心したのかもしれない。

「これ食べていいのかな？」

自分の前に用意されていたディナーを示して、五代芽に尋ねる。

大滝由美が出したのは一応五代明が食べるはずだった物だ。妹の五代芽に許可をもらうべきだろう。

「うん、いいよ。お兄ちゃん、席外してるし」

そして事態が終わるまで、再会できないだろう。

瀬戸口大介は数時間前に五代明が助けてくれたことを思い出した。無愛想でなにを考えているのかよくわからない人だが、良い人なのは確かだ。

「……五代さん、あ、明さんのほう、どうしたのかな？ それに水神くんも」

「わからない。水神くんがお腹が痛くなっただから少し遅れるって言って、お兄ちゃんが付き添ったんだけど……」

結果、イベントホールの中の人質の中には含まれなかった。それが幸運なのかどうかはわからない。イベントホール以外の宿泊客が連行されてきたが、しかし何人か少ないらしいという会話がどこからともなく流れてきた。その少なくなった人たちがどうなったのかはわからない。

連行されてきた人たちの中にいないことが、二人にとって幸運であって欲しいと思う。

「大丈夫だよ、きっと。五代さん、強いから」

瀬戸口大介は今一つ根拠に欠ける慰めを口にする。

効果があつたのかどうか、少なくとも五代芽は笑顔で答えた。

「そうだね。きつと、そうだよ」

その空元気さえも崩すかのようになり、占拠犯たちがにわかに行動を始めた。

ドモチエフスキーがイベントホールにいる十人の部下を指示しながら、機材を設置していく。

二メートルほどのポールを、四箇所の出入り口に二本ずつ配置。その外側にコードで繋がった、金属製のトランクが置かれている。明らかになんらかの装置だが、詳細はわからない。

そして壁にビニールを巻きつけた箱を、二十個ほど均等に貼り付けていく。大きさはカステラ一つ分ほどで、最初本当にカステラかと思った。箱と出入り口の装置は細いコードで繋がれており、足を引っ掛けるなどの事故を防ぐため、コードを壁に金具で固定している。

「……もしかして、C4？」

瀬戸口大介が呟いた。

「なに？ シーソー？」

よく聞き取れなかったのか、大滝由美が聞き返す。

「C4。プラスチック爆薬の一種だよ。小さいけど凄く爆発力が高いんだ。設置されたのが全部そうだとしたら、イベントホールそのものが吹き飛ばんじやないかな」

そんな物をホールに設置して、いったいどうしようというのか。

みなさん。どうか、静かにお願いします

イベントホール全体にスピーカーから声が流れる。姿は見せないが、あのワシントンと名乗る男の声だ。ステージ制御室からだろうか。

現在、革命の同志の作業がごらんになられていると思います。いったいなにをしているのか、疑問に思われた方も多いでしょう。その疑問にお答えします。まず、周囲に設置された二十四個のカステラほどの大きさの箱をご覧ください。それはC4と呼ばれる、いわゆるプラスチック爆薬です。大変強力な爆薬ですが、しかし極め

て安定性が高く、火の中に入れても爆発しないほどです。しかし、起爆装置を使えば話は別。テレビで老朽化した高層建築物の解体作業をご覧になられた方は多いと思います。ああいった作業で使われるほど、大変強力な爆発力を持っています。では、その危険なC4はどのようにして爆発するのか。それが、出入り口に設置されたセンサーです。二本のポールからぼんやりと赤い光の線が縞模様にあざむきながら走っているのが見えますか？ その赤い光に触れると……

ワシントンはその結末を少し焦らした。

BOMB！ 爆発します

イベントホールに異様な緊張が満ちた。

皆様、くれぐれも出入り口には近づかないようお願いします。C4が爆発すると、センサーに触れた人だけではなく、イベントホールにいる方々全てにご迷惑がかかることでしょう。間違っても決して近づかないように。そして誤って誰かが近づいたりしないようにご注意ください

放送が終わった。

人質たちの間で、いつしかお互いに目を向け合っていた。それは、不安の共有で勇気を得ようということではなく、ワシントンの最後の言葉をどこか無意識に実行していたためだった。

逃げないように見張るために。

誰かが恐怖に駆られて自分一人だけで逃げ出そうとすると、センサーに引っかかり、周囲に設置された爆薬が爆発する。

もはや脱出の算段をするどころの話ではない。

見張りの隙を見る必要はなくなった。

人質全員の命は、いまや完全に運命共同体となり、人質を見張るのは人質となった。

「ご飯、おいしくなくなっちゃったね」

大滝由美が呟いた。

土屋健司は苛立たしげに座っていた。くだらない修学旅行に来た挙句に、こんな事件に巻き込まれた。

恐怖感と不安から苛立ち、ストレスを発散しようと、こういう時のために確保しておいたサンドバックを探したが、いつの間にかいなかった。

周囲を見渡すとすぐに見つけたが、なぜか別のグループと一緒にだ。呼び戻そうとしたが、サブマシンガンを持った男が眼に入る。

「ちくしょうが……」

忌々しげに呟く。

クズが勘違いしやがって。なにを楽しそうに話してやがる。お前に楽しむ権利があると思ってるのか。喋るな。下を向いてろ。

これというのも全て五代明のせいだ。あの勘違い野郎が余計なことをしたせいでこうなったに違いない。

まったく筋の通らない理屈で、人質になった恐怖感を苛立ちに変えて、五代明へ向ける。

そういえば、五代明の姿がない。

どこへ行った？

京都エンプレスホテルから、所轄の警察署に連絡が入った。

エンプレスホテルの事件はすでにマスコミに知られることとなり、警察関係の問い合わせやいたずら電話で、警察署の電話回線は混雑していたが、表示された電話番号によってエンプレスホテルからだということはずぐに判明し、すぐに対策本部会議室に接続された。

聞こえているかね、日本の優秀な警察の方々。日本の警察は世界でもっとも有能だと評判だ。よって、我々の意思が極めて真剣で本気であり、まったくふざけていないということがよく理解されたと考えている

予定通り、佐伯真人が対応に当たる。

「君たちが本気だということはよく理解できた。だが、まず確認しておきたいことがある」

人質なら大体無事だ。現在イベントホールに集まってもらい、クラシック音楽を聴いてもらっている。ああ、ただ十五六人殺してしまっただけ

質問を予想して先に答えてきた。だが主導権を相手に渡してはいけない。

「それは、消防隊員のことだね」

当然のことをあえて確認する。だが、返答は予想を裏切る。

いや、ホテルの人質のことだ。消防隊員を入れれば三十人を超えるのか

まるで小学生に算数を説くような口調に、会議室は啞然とする。

まあ、それ以外はいたって問題ない。怪我人も……あー、一人殴られた者がいるが、命に別状はない。少し痣ができるくらいだ。聞きたいことはそれだけかね？

向こうから質問を促してくるが、これは逆に相手が主導権を握っていることを明確に表していた。佐伯真人はなんとか主導権を握ろうとする。

「名前を知りたい。君の事はなんと呼べばいいかな」

動揺を完全に隠蔽していたが、逆に今一つ押しの強さに欠けた。

それが相手に伝わってしまったのか、占拠犯はどこか楽しそうに答える。

名前か。ワシントンだ。ジョージ・ワシントン

ジョージ・ワシントン。アメリカ初代大統領と同じ名前。明らかに偽名だ。なにか意味があるのかもしれないが、ただの皮肉かもしれない。

「では、ワシントン。要求を聞こう」

百億円だ

即座に返答された要求内容に、会議室は呆気にとられた。

葉山中学校修学旅行生と教職員、一般宿泊客、そしてホテル従業員、合わせて三百人以上。無事開放して欲しければ、百億円用意しろ

佐伯真人は説得の糸口はないかと黙考したが、思いついたのはありふれたことだけだった。

「それは、あまりにも莫大な金額だ。すぐには……」

すぐに用意できないことはわかっている。そこで明朝七時まで猶予を与える

明朝七時。残り時間八時間を切っている。

それまでに百億円を用意すること。わかったな

「待ってくれ。そんな短時間ではとても用意できない。もう少し時間をくれないか」

五分に付き一人

「なんだって？」

金の用意が五分遅れることに一人だ

「それはどういう……」

どういう意味かはわかっているはずだ

誰もが理解できた。五分遅れることに人質を一人殺していくという宣言。

明朝七時までに百億円。それでは、また

電話が切れた。

副署長が呟いた。

「……百億円」

そんな大金を用意するにはどうすればいいのか。少なくとも、ここではとても対応できない。

「警視庁には？」

佐伯真人は部下に聞く。

「電話の内容は警視庁会議室にも繋がっています。会話は全て聞いていたはずです」

彼の言葉どおり、警視庁上層部で編成された対策会議室でも話は聞いていた。

そしてすぐに指示が電話で来た。

「本部長、警視庁からです」

会議室の電話担当が警視庁からの電話であることを確認すると、佐伯真人に受話器を渡す。こちらの声は受話器でしか届かないが、向こうの声はスピーカーで周りにも聞こえる。

受話器越しに警視総監が佐伯真人に告げた。

佐伯くん。百億円という大金はとも用意できない。そこで、予定通り、SATを強行突入させる。到着予定時間は十一時三十分。到着しだいすぐに突入開始だ

十一時三十分。もう十分もない。これは連絡を受ける前からSATの出勤と突入を決定させていたということか。

「待ってください。中の状況が判明しないままでは、人質に危険が及びます」

警視総監はしばらくの沈黙の後、答えた。

三十パーセントまで引き上げる

その言葉の意味を理解できたのは、左伯真人と、桐嶋長平だけだった。

桐嶋長平は受話器を取り反論した。

「どういうことですか？ 三十パーセントまで引き上げるとは。人質の半分は中学生なんですよ！」

強行突入に関してはあらゆることが想定に含まれる。人質が殺害あるいは戦闘に巻き込まれ死亡することもある。

人質死亡率は通常十パーセントが想定されている。この事実が公になれば非情なことだと非難されるだろうが、多くの人質をとるか、少ない人質のために全員を危険に晒すか、公平な判断が求められる警察では、前者が採られる。

これは、ここまで割り切らなければ事態が解決されず、また人質全員に被害が及ぶと判断された場合のみの話であり、SAT強行突入はそれだけ判断が慎重かつ重要だということだった。

それでも、十パーセントの人質が死ぬ。

しかし警視総監は、その割り切る命を、さらに三十パーセントまで上げると断言した。

人質約三百人のうちの三十パーセント。およそ九十人。

「いったいどれだけ死ぬと思うんです！」

君は、誰だね？

反論されたことに不愉快そうな声音で誰何する。

「署長の桐嶋です。説明してください。なんのために三十パーセントまで引き上げるんです。犯人たちが指定した時間まであと七時間以上あります。それを有効に使うべきだ！ 急いで解決する必要があるどこにあるんです！」

佐伯くん。ちょっと、この男を黙らせたまえ

警視総監は桐嶋長平をまるで相手にせずに、駄々を捏ねる子供をあやしてくれと頼むかのような調子で命令する。

怒りのあまり、かえって啞然とする桐嶋長平から、佐伯真人も怒りを押し殺すように沈黙して、受話器を取り上げた。

「……佐伯くん」

桐嶋長平は懇願するように佐伯真人を見つめた。

その視線を受けて、佐伯真人は警視総監に説明する。

「警視総監。せめて内部の様子を探る時間をください。内部がまったくわからない状態での突入は危険すぎます。人質だけではなく、SATも」

警視総監はしばらく黙考した。

わかった。突入時間を少し遅らせる。深夜十二時だ。午前零時に突入開始だ。いいな

約三十分後に突入する。

それが最後通告だった。

この会議室にとつても、人質たちにとつても。

ワシントンはステージ制御室から観客席を眺めていた。人質は爆薬の効果もあつてか、今のところおとなしくしている。

誰も動けない。誰も動かない。見張りだけではなく、人質を含めた誰もが監視者となつたのだ。

爆薬設置を終えたドモチエフスキーが、ワシントンの隣で缶コーヒーを飲んでいた。ちなみにワシントンが飲んでいるのはコーラ。一通りの準備が終えたので、他の部下も一息ついている。

『警察は、用意すると思うか？』

『さあな。まあ、今のところ用意する気はないだろう』

ドモチエフスキーの問いに、ワシントンは当然のことのように答える。

『用意する気にさせる』

ドモチエフスキーは断言する。

『勿論だ。準備は終了した。後は向こうの出方次第だ』

8・PM11:00

ヨーキはコンピューターを操作し続けていた。

地下金庫は高度なセキュリティによって防護されているが、決して完璧ではない。コンピューター制御されているならば、必ず解除することができる。

それには時間が必要だが、その時間をワシントンたちがどれだけ稼ぐことができるか。

支配人室にあった金庫の鍵は入手した。鍵を保管してあった金庫その物は、小さなものでたいしたことはなく、裏側を溶接機で開けただけだ。

だが、この地下金庫はそう簡単には行かない。力任せに開けようとすれば、一週間以上はかかる。技術的に、金庫の弱点を見つけ出して解除したほうが逆に早い。

だが、仕事を始めてから三時間以上経過したため、少し疲れを感じて眉間を指で押さえた。

『大丈夫？ 少し休む？』

サポート役のケイミンが尋ねた。氷のような冷徹な印象を受けるが、時々女性らしい細やかな気配りをする。おそらく彼女も自分と同様、このような仕事にかかわる前は普通の生活をしていたのだろう。そして、その生活は失われた。

民主主義を標榜する軍事大国らによって踏みじられたのだ。

『いや、大丈夫だ』

自分の戦う理由をケイミンによって思い出し、改めてコンピューターと向かい合う。世界を悪くしようとする人間は一日たりとも休まない。だからこそ自分も休んではいけない。

『無理をしても捗らないわ。なにか飲み物を持ってくる』

ケイミンは立ち上がり、オペレーションルームから退室する。部屋に備え付けてあるジュースの類を勝手に持ってくるのだろう。そのためわざわざこの階のマスターキーを持ってきたほどだ。実際助かっているが。

ケイミンがオペレーションルームから出ると、そこはスイートルームが並ぶ最上階。

部屋の一室をマスターキーで空けて、備え付けてある冷蔵庫から飲み物を取ると、ヨーキのところへ戻る。

ケイミンが持ってきたジュースを受け取って、蓋を開けると、一口含む。オレンジジュースだ。水分を口にしてみれば咽喉が渴いていたことに気付き、一気に半分までのどに流し込む。それなりに緊張していたのだろう。

『しかし、日本の技術力はさすがだ。民間でさえこれほどのセキュリティを保有するとは』

ヨーキは感心する。同時に、この地下金庫を設計した者のセンスにも。

スイートルームが並ぶ最上階の中心にあるセキュリティ金庫。最上階にあるにもかかわらず、名称に地下金庫と与えるそのセンスは面白い。

そして厄介でもある。

本当に地下ならば、周囲に悟られることなく穴を掘って侵入することも可能だったが、最上階では当然不可能。金庫を破るには多くの作業機械が必要だが、地下なら作業音が漏れることを防ぐこともできるが、最上階ならばそうは行かない。

入る箇所はオペレーションルームからのみ。周囲は合金とコンクリートの分厚い壁。七つの金庫扉。

最上階に存在する地下金庫。

全ては逆転の発想で成り立つ強固な金庫。

だからこそ、ここまでの規模の作戦を行わなければならなかったのだろうが。

ヨーキはオレンジジュースを一息に飲むと、再び作業に取り掛かった。

不意に無線機から通信の音が鳴った。

『ワシントンから連絡』ケイミンが『迎撃準備が整った。こっちも準備を』

『わかった』

コンピューターの一部を操作して監視カメラのモニターをこちらへ写すと、山林に動く影が見えた。

ヨーキは連絡を入れる。

『ワシントン、何者かが山林からホテル敷地内へ侵入しようとしている』

『位置は？』

ワシントンの問いに、ヨーキはカメラの位置から判別して伝える。

『そこなら大丈夫だ。やつらは自分たちの浅はかを後悔することになるだろう』

警官隊はエンプレスホテル周辺に展開していた。

しかし直接接近しているのではなく、正面入り口に繋がる道路とその周辺だけだった。

双眼鏡で見た限りでは、ホテル一階の防犯シャッターは全て下りており、入り口となる箇所は窓の類も全て封鎖されているようだ。

単純な方法だが、効果的だ。

ホテルへ入る通常の経路は三つ。正面に大きな道路。後方に迂回路と、歩道がある。

だが、その三つに全て、明確にわかる形で爆薬が仕掛けられていた。ホテルで使用されている工事や誘導に使われるコーンが並べられ、その根元にプラスチック爆薬とその起爆装置らしき物が設置されていた。

起爆方法は不明だが、センサーの類が掛けられていると、接近しただけで危険だ。

警備がいる可能性は考えられていたが、爆薬とは。これならば警備の必要なく、しかし確実に外部からの潜入を防ぐことができる。残りの侵入経路は山林部。このあたりは当然道がなく、木々や藪を掻き分けて進むことになる。

五人の警官がチームを組んで、侵入を試みる。けして発見されず、あくまでも偵察にとどめることを旨とするよう命令されていたが、彼ら自身は、もし人質を救出できるならば、助けようという考えがないわけではない。ただ、そのチャンスはとも低いとも考えていたが。

音を立てないように藪を慎重に掻き分けて進む。
やがて木々の隙間からホテルの姿が明確に見え、その先に非常口があつた。

「こちらA班。ホテル西側非常口を視認した。周囲に占拠犯の姿はない。これより、接近を試みる」

「了解。注意しろ」

「了解」

先頭の警官が慎重に、周囲を警戒しながら、進んでいく。

ズドン！

突然爆発音が轟き、先頭を進んでいた警官が、後方へ吹き飛んだ。その四肢は無残に引きちぎれ、まだ宙を飛んでいるうちにその命が消失した。

そして後方で待機していた警官もその余波を受け、銃撃を受けたかのように、全身に無数の穴が穿たれた。なにが起きたのか理解するまもなく、おびただしく出血し、生命力は急速に低下し、十秒後には全員死亡していた。

五代明は用具室の中を調べ回ったが、めばしいものは見つからず、今は休息を兼ねて、小窓から外を窺っていた。暗くて何も見えないが、なにか動きがあるかもしれない。無線を傍受する限りでは、イベントホールになにかを設置したらしいが、明確な名称が出なかったため詳細は不明。

状況から推測すれば、爆発物の類だとは思うが。人質を逃がさないためのトラップを仕掛けたのだろう。

それにしても腹が減ってきた。人間、どんな時でも空腹を感じるのであれば、まだ大丈夫だというが、今の自分はどうかのだろう。イベントホールで夕食を摂るはずだったが、メニューはなんだっただろう。芽たちはちゃんと食べることができたのだろうか。それとも、食べる前に事件が始まったのか。もし食事を摂ったのなら精神が持ちこたえる時間は長くなる。肉体と精神は密接にかかわっており、ほぼ同じだと断言しても問題ないほどだ。

今の自分は空腹だ。それでも、空腹に慣れているせいか精神状態は普段とそれほど変わらない。寧ろ精神が鮮明になってきているようにさえある。今の状態が自分にとって普通だからだろうか。

いつも飢えと隣り合わせだった生活は、日本に戻ったことで終わりを告げた。それまで空腹を凌ぐために多くの人間を殺さなければならかったというのに、ここではなにもしなくても、なんの仕事をしなくても、餓えることのない理想郷のような国。

その中で空腹に悩まされるのは、なにかの悪い冗談みたいだ。

不意に山林の中で何かが光った、一秒遅れて爆発音。

（なんだ！？）

仕掛けをしたのはイベントホールではなかったのか。

スイートルームの一室に隠れている水神清玄は、疲労のためソファに座った途端、転寝してしまったため、その音に気付かなかった。

本部。周辺にクレイモア地雷が仕掛けられていて、近づけません。対策本部ではその無線連絡を受けて驚愕した。

「やつらそんなものまで……」

対人指向性地雷。通称クレイモア。地面には埋めず、二対の二脚で地面に立てるだけなので、設置が簡単だが、威力は強力。作動すると、爆圧で無数のベアリングが前方へ向けて扇状に撒き散らされる。さながらショットガンを一斉に放ったように。

無慈悲で相手を選ばない地雷は、国際問題とさえなっているが、その中でも最悪と呼ばれる種類。

いったいどこからそんなものを入手したのか。

爆弾処理班を呼んで、周辺を調査し、設置された地雷を撤去し、進入ルートを作る。

それには時間がかかりすぎる上、危険度は極めて高い。しかも占拠犯に見つかからないようにするなど不可能だ。

「……警視庁に報告を」

桐嶋長平の言葉を受けて、佐伯真人は警視庁に報告する。クレイモア地雷が周辺に設置されている。これだけでも、SATの強行突入を中止、あるいはさらに延期させる十分な理由になるだろう。

だが警視庁からの返答は、対策本部を啞然とさせるものだった。

現在向かわせているSAT部隊の全戦力を投入して突入させ、占拠犯に隙を与える暇もなく、制圧する。

それらしい言葉で装飾しているが、わかりやすく言えば完全に力押しだ。そして、力押しは常に最も犠牲が多い戦法。

「なにを考えているんだ、警視庁は」

いつからこんな冷静さを欠いた、大雑把で杜撰な対策を採るようになったのだ。日本の警察は念密な計画の下に一致団結協力して対

応し、人質どころか、犯人も、死者なしで解決を図るものだったはずだ。

それが、まるで力を誇示するような対応。正気とは思えない。「以前から、こういった傾向が始まっていました。凶悪化、凶暴化する犯罪に対しては、より断固とした姿勢と対策が求められると。ですが、その実情は、ただの力押しというものです」

佐伯真人がうなだれるように説明する。某国の対テロ部隊を参考に、今までの姿勢、方針を改めるという改革案が出されていたが、しかし、参考になっているのは強固な姿勢という箇所だけで、熟練、熟達した技能者、戦闘集団の育成、編成はまだ着手したばかりだ。そしてこれらが効果を出すのは、数年はかかる。

上層部は、それらを理解していない。

書類を提出し、会議で話し、そして命令を出せば、それで成果が出たのだと思っている。

「今回の件では、それが顕著に現れてしまっているでしょう」

桐嶋長平が質問をする。

「突入させるにしても、爆弾をどうするんです？ 近づくだけでも危険ですよ」

「ヘリから降下して、直接ホテルに降りるそうです」

輸送ヘリからの高速ロープ降下によって、直接ホテルに突入する。突入箇所は教えられていないが、地形から考えて、正面入り口と屋上だろう。

周辺の爆薬は回避できるかもしれないが、もし同じ物がホテルに仕掛けられていたらどうするのだ。特に、人質が閉じ込められているイベントホールに仕掛けられていたら。しかも、それが外部の侵入を防ぐためではなく、人質に向けられたものとしたら。

それらの可能性は極めて高かったが、しかし、現場の意見は、警視庁には無視された。

エンプレスホテルに直結している一本道の道路は、ホテルから一キロほど離れた位置で封鎖されていた。

関係者以外は立ち入り禁止のため、当然テレビ局も一切入ることはできない。

チャンネル5もまた、警官隊が封鎖している手前でバンを止めていた。

「どうする？」

小野坂冬香はカメラマンと相談する。このままではせつかくのスクープが、尻すばみで終わってしまう。地方ローカル局に過ぎないチャンネル5は、大手テレビ局が出てくれば、視聴率を簡単に取られてしまう。

「なんとか入る方法はない？　いつそ山の中、強行軍で行く？」

「それ、止めたほうがいいですよ」

機材を扱っているアシスタントが止めた。

「今、警察の無線を傍受したんですけど、山の中に地雷が仕掛けられてあったそうです」

全員が顔を見合わせた。

「地雷！？」

「ええ、クレイモア地雷。警官が五人死亡したと言ってます」

背筋に冷たい汗が流れる。今まで日本で行われたテロといえば、自家製の毒ガスを撒くか、火炎瓶やダイナマイトを投げつけるのといったもの。それが、アサルトライフルを乱射し、さらには地雷まで。未確認情報だが、この道路をホテルへ向かうと、爆薬が仕掛けられてあるという。

テロというより、戦争だ。

「すげえ！　おい、なんとかしてホテルを撮るんだ。いいか、そこまですごいことになっているなら、必ずSATが出動するはずだ」
「過激派テロとSATの銃撃戦が始まる……」

「そうだ！　こいつを撮ればスクープ間違いない！」

だが、実際問題近づくのは不可能に近い。地雷を避ける方法などわからないし、安全なルートは警官が見張っている。

「あのさ……」

話を聞いていた小野坂冬香が手を上げた。

「なに？ 冬香ちゃん」

「この山、たしか山頂辺りに展望台があったと思うんだけど」
「展望台？」

地図を調べてみると、確かに展望台があった。観光客向けに市が建設した展望台は、自然観賞用と市街地展望、両方を兼ねたものだが、あまりにも利用者が少なかったため、閉鎖寸前になっている。エンプレスホテルからの利用者がいなければ、とっくの昔に廃棄されたか、解体されていただろう。

「望遠カメラを使えば、ホテルを取ることはできると思うんだけど」
運転手とカメラマンは早速その方法を検討した。

「行ける。そこは封鎖されていないから、問題なく行けるよ」

「カメラにも十分映ると思う。とにかく行ってみよう。こんなところで手をこまねいているよりずっといいよ」

「冬香ちゃん、冴えてるじゃない」

「おだててもご褒美は出ないわよ」

だが、褒められて満更ではない。

チャンネル5の三人は、展望台へ向けてバンを走らせた。

9・PM12:00/AM00:00

SAT部隊を乗せた二台の輸送ヘリが、ホテルに接近していた。作戦予定では、ホテルの電力をストップさせる時間と同時に、屋上と正面中央にロープで降下し、隊員を展開させ陣形を取り、ホテル内部に突入。占拠犯を一気に殲滅する。

消防隊員の死亡が確認された時点で、犯人の生死は問わないことになった。

同時に人質の犠牲も多少は目を瞑る。

「降下準備！」

輸送ヘリの中、SAT隊長が三十人の部下に大声で命令を下した。それは無線を通じてSAT全隊員の耳朵を打つ。彼らは反射的に装備品を点検、五秒で全装備を確認し返答する。

「……全部よし……」

警視庁特殊部隊は、降下態勢を整えた。

後は降下ポイントに到着するだけ。

対テロリスト装備をしている我々ならば、少し武装した程度のテロリストなど、容易く制圧できる。

操縦士が、夜の闇に満ちた山林の中に、ホテルを確認した。

五代明は用具室の中で無線機を聞きながら、なにか役に立ちそうなものはないか探した。

無線を聞く限り、どうやら警官隊が近付けないよう、ホテル周辺にクレイモア地雷を設置し、さらにイベントホールにも人質が逃げ出せないようにする、なにかを仕掛けたいらしい。推測だが、センサ

ーで起爆される爆薬ではないかと思われる。人質を閉じ込め、さらに外部からの侵入も防ぐ。出入り可能な箇所が限定されるため、効果的だ。

やがてダンボールの中に入っていたホテルの図面を発見した。どうやら業務員用の物らしく、パンフレットに記載されない箇所まで記されている。戦場において、地形を把握してあることは生死に直結するきわめて重要性の高い事項だ。可能ならば、地図を逐一確認する必要があるように記憶しておくことが望ましい。

暗記しようと図面をしばらく睨んでいると、不意にヘリの音が遠くから耳に届き、中断した。

（なんだ？）

用具室に一つだけある小窓から覗いて外を伺うが、ホテルの側面に位置しているため、山林しか見えない。

暗闇の中に人影が見えた。占拠犯の巡回だろうか。あるいは警官か。

警察はホテル周辺の包囲網を固めているらしいが、人影はホテルから一定の距離以上近づかない。クレイモア地雷に気付いたのだろう。先程山林で見た光と爆発音から、接近した誰かが引つかかったのだと思われる。

だが、このヘリの音はなんだ。どんどん接近してきている。

（マスコミか？ いや、違う）

事件が発覚した時点で、安全と対策上の問題で、周辺道路は封鎖され、空は航空規制がされるはず。マスコミが接近することはできない。

（なら、このヘリの音は？）五代明は少しして気付いた。（特殊部隊の強襲突入）

状況から判断すれば、ヘリで特殊部隊を降下させ、一気に制圧しようとしたのだろう。

日本警察の特殊部隊といえば、確かSAT。彼らが出動したのか。だが早すぎる。事件が発覚してからまだそれほど時間が経過して

いない。明らかに内部の様子を知らないまま、S A Tを突入させるつもりだ。

警察はおそらく、ホテル内部に仕掛けられた爆薬のことを知らない。知っていればこんなに早く特殊部隊を突入させることなどしいはずだ。

つまり、特殊部隊が突入に成功した場合は、最悪の事態へ転ずる。人質の半分近くは同級生だ。そして、その中には五代芽がいる。

「……芽」

ここから出て、積極的に戦闘を行うべきか、それともここで事態の推移を待つか、あるいはS A Tの突入を妨害するか。

警察の部隊を援護して、もし成功すれば人質が危険にさらされる。だがここで待機したとしても、同じ結果になるかもしれない。

だからと言ってS A Tを妨害すれば、彼らが危険にさらされる。

不意にホテルの明かりが全て一斉に消えた。続いて非常用電源に切り替えられ、非常灯がつく。警察がホテルへ供給されている電力を切ったのだ。ホテル内部の占拠犯を混乱させるためだろうが、判断が甘すぎる。今ホテルを占拠している武装グループはアマチュアなどではない。プロだ。この程度のことは予想しているはず。寧ろ、それを逆手に取る戦略をとるはず。

（どうする？ 考える……）

へりの音を聞いた占拠犯は、その時にはすでに応戦体制を整えていた。

基本編成は、一部隊に付き十人。一部隊に指揮官が一人。

『マクスエル、配置完了』

マクスエルが率いる部隊は攻撃力の高いアサルトライフルを装備。これらはホテルの外に配置し、山林偽装して潜伏させ、攻撃を行う。『ハンスだ。一人連絡が取れないが、残りは配置完了』

一階にはハンス率いる部隊。基本攻撃装備はサブマシンガンに、手榴弾、焼夷弾、スタングレネード、そしてグレネードランチャーを装備した攻撃兵が、ホテル一階に配置されホテル内部から攻撃する。

『ドモチエフスキー、配置完了だ』

そして屋上にドモチエフスキー率いる部隊。通常のサブマシンガンに、スナイパーライフルを装備。そして今回の作戦でもっとも強力な武器を配置してある。

これが今作戦の全戦力。

イベントホールの人質を見張る必要性がなくなったために、全戦力を対応に回すことが可能となった。このために設置したといってもいい。

管理室のヨーキとケイミンは、次に起きるはずの出来事に集中していた。

屋上に設置されている監視カメラに、上空から接近するヘリの姿が映っている。

不意にホテル内部の電気が一斉に消え、続いて非常灯に切り替わる。

『今だ！』

ヨーキはケイミンに叫ぶように合図をすると、作業を開始した。

『始めるぞ』

ワシントンはイベントホールステージ制御室で音響機を操作した。ワグナーのニルンベルグ・マイスター・ジンガーが無線機を通じて流れ始めた。

『では、諸君。演奏開始だ！』

屋上付近に接近したヘリでは、占拠犯の攻撃を予想して、援護射撃を行うS A Tがサブマシンガンを構えていた。

「占拠犯！ 屋上に確認！ 攻撃準備！」

内密で見敵必殺の命令が下されていた彼らには、逮捕などという悠長なことは考えていない。

凶悪な占拠犯には適切で断固とした処置が必要なのだ。

だが、その認識は遥かに甘かった。

「屋上占拠犯の武装を確認。あれは……」

屋上にて銃器類を構えている占拠犯の中に一人、二メートル近い筒状の金属を担いでいるものがいた。

先端に砲弾が取り付けられている筒状の武器。

「ロケットランチャー！」

S A T部隊員が叫んだと同時に、砲弾が発射された。

「回避しろ！」

しかし新館屋上に接近していた輸送ヘリは、飛来するロケット弾を回避するだけの機動力はなく、対弾処理も基本的な銃器類のものしか想定していなかった。

ロケットランチャーの弾頭がヘリの側面を直撃した。

体の奥底にまで響く爆音が轟き、S A T輸送ヘリは爆煙を上げて墜落を始め、パイロットからの無線もなく、部隊員の悲鳴だけが響き、ヘリは山中へ姿を消し、そして爆炎。

炎が舞い上がり、戦闘開始の狼煙を上げていた。

チャンネル5は山頂にある展望台でホテルを撮影していた。

カメラマンは用意周到で、常に望遠レンズを携帯しており、多少距離があっても、展望台からエンプレスホテルを映すことに、まったく問題はなかった。

そして、警察突入部隊のヘリがホテルに接近する光景を収めることに成功した。

喜ぶ三人だが、更なるスクープを捉える。

そのうちの一機がミサイル攻撃らしきものを受けた。それはしばらく飛行を続けていたが、明らかに飛行を継続できる状態ではなく、すぐに墜落を始め、やがてこちらへ向かってくる。

「え？　ちよつと？　ちよつとちよつと！？」

一瞬こちらに落ちるのではないかと危惧して、思わず逃げ出そうとしたが、しかしその手前で急速に落下し、展望台の手前の山腹に墜落した。とてつもない爆発音が轟き、爆炎が舞い上がる。

「……信じられない」

小野坂冬香は半ば呆然と呟いた。

「撮った？」

カメラマンに念のために聞くと、彼は顔を輝かせて親指を立ててみせる。

「バッチリ」

そしてカメラマンはホテルの姿を遠方からでも、少しでも映像に取ろうとする。ここから伝わる真実がどの程度のものなのか、それでも、銃撃と爆発音、そして火花のように煌く火薬の火花が、カメラに収められていった。

小野坂冬香はマイクを握り締める。

「皆さま、ごらんになられているでしょうか？　これは、映画ではありません！　テレビドラマでも、やらせでもありません！　現在、日本で、京都エンプレスホテルにて、銃撃戦が繰り広げられています！　危険のため、これ以上近づくことはできませんが、ご覧ください。銃撃戦が目の前で行われています！　先程はヘリがミサイルを受けて墜落しました！　これは、紛れもなく、現実に行われていることです！」

小野坂冬香はこのチャンスをもにすべく奮闘する。

ドモチエフスキーは双眼鏡で輸送ヘリが墜落したことを確認。

『一機撃墜！ 次はあの地上に降りたものを狙え！』

ロケットランチャーの弾頭はあと三発。

一発でも命中させれば、突入部隊はほぼ全滅同然となる。

旧館屋上で待機していたロケットランチャー担当は、装填を始めた。

SATは高速ロープ降下を行い、消防車を盾にして攻撃を開始していた。

だが屋上に降下するはずだった部隊が全滅し、攻撃力は大幅に低下。正面入り口の占拠犯に対しても、大きく後れを取っている。そしてしばらくして山林に潜伏していた占拠犯からも攻撃が始まり、完全に劣勢状態に陥り、しかし撤退したくとも、攻撃が激しくそれもできないありさま。作戦は出鼻をくじかれたことによって失敗したのは明らかだ。

このままでは全滅する。

「くそ！ 撤退！ 撤退しろ！」

「どうやって！？」

「なんとかするんだ！」

ハンスはホテル内部二階から、SATへ向けてサブマシンガンを乱射しながら、指示を出した。

『おい！ グレネードランチャー！ 五階、いや、七階へ行って撃つて来い！』

『七階へ?!』

『そうだ!　ここからだ地形が悪い!　上から打ち込んでやるんだ!』

グレネードランチャーはどうしても消防車が邪魔になって命中しなかった。だが上からならば後ろ側へ正確に命中させることができるだろう。

『了解!』

五代明が隠れている用具室にも爆発音が轟いた。

無線機を聞く限り、すでに戦闘が始まっている。だが、ここからでは細かい状況がわからない。直接視認しなければ。

残りの弾数は十八発。ハンドガンマジガン一つ分。これでなんとかするしかない。

五代明は多少の危険を覚悟で用具室から出ることにした。

扉を少しだけ開けて外を伺う。誰もいない。しかし遠くで銃撃戦らしき音が聞こえる。外からか。中腰でハンドガンをいつでも撃てる体勢で構えながら、慎重に進んでいく。

窓から外を伺えば、ホテル正面付近で、輸送ヘリからS A Tが降下している。だが、銃撃に晒され、すでに半壊状態。明らかに敵装備を甘く見積もった強襲作戦だ。

山腹の中ほどでは炎と煙が上がっている。どうやら一機墜落したようだ。しかし、どうやって撃墜した?

通路の奥まで誰もいない。新館七階には誰もいないのか。いるとすればエレベーター付近か階段。

宿泊室に入ろうと、いくつか部屋のノブを回してみたが、全部鍵がかかっている。あのチャンネル五なら今頃、特別番組を放送していることだろうが、これではテレビで様子を知ることができそうもない。

エレベーター付近まで移動し表示を確認すると、動いていた。屋上へ向かっているのか、一階付近から上がっている。

だが予想は大きく外れ、そして悪いことに、この階で止まった。

即座に全力で走って通路の角へ身を隠すと、ちょうどエレベーターのドアが開いた。

『早くしろ！』

『待つてろ。くそ！ 引っかった』

『バカ！ なにをやっている！！』

中東で広く使われる言語で言い合っている武装兵が二人。

なにか木製の箱を運んでいる。音楽に使う箱のようだが、勿論楽器が入っているはずがない。楽器ケースに偽装しているだけだ。それを運ぶためのベルトが、エレベーターのドアの隙間に入り、金具の部分が引っかかりたらしい。SATを攻撃するための武器か。

二人はそれに完全に気を取られている。

『よし、外れたぞ』

『行くぞ』

五代明は突然通路の角から身を乗り出すと、ハンドガンを二人の武装兵に向けた。

『あ！』

正面を向いていた一人が気付き、肩に担いだサブマシンガン向けようとしたが、その時には銃弾を眉間に二発命中。後頭部から脳漿混じりの鮮血が飛び散った。

『なに！？』

残りの一人が、仲間が血を噴出したことで、後方にいる五代明の存在に気づいて振り向こうとした、その前に後頭部へ弾丸を二発命中。眉間の位置から鮮血が飛び散る。

二人は同時に倒れる。

五代明はすぐに二人を調べて死亡を確認。装備品をからサブマシンガン二丁とハンドガン二丁を入手。予備弾薬、サブマシンガン弾倉八。ハンドガンマジガン四。手榴弾二つ。敵が着用している戦闘

用ジャケットを取り、着用してそのポケットの中に全て入れる。

これで多くの武器弾薬を入手できた。しかし持ち運びには限度がある。箱は置いておくしかない。だがその前に、一応箱の中を確認した。

「……こんなものをどうやって日本に持ち込んだんだ？」

思わず口に出るその疑問。

グレネードランチャー。リボルバーシリンダーに六発装填してある。どうやら、これでこの階からS A Tを攻撃する予定だったらしい。

先程の爆発音はこれか？

（こいつでヘリを撃墜したのか？）

こんなものを置いていけば、敵に攻撃力のある武器を回収させることになる。これはなんとか持つていかなければ。

重量があるため、サブマシンガンを一丁諦め、引きずってでも持つていこうとした。だが、途中で絨毯に痕跡が付いていることに気づく。

（ダメだ。道順を教えているようなものだ。どうする？）

五代明は周囲を見渡した。早く決断しなければ、発見される確立が高くなる。

ふと、電気配線の配線盤が目に入った。この中に、サブマシンガンや弾薬類を隠せるのではないだろうか。

開けてみると、中は意外と広かった。どうやら、壁の内部の空洞をそのまま利用する形で配線してあるらしく、多少窮屈だろうが、人が入ることもできるほどだ。サブマシンガン一丁と持ちきれなかった弾薬を中に入れる。グレネードランチャーも入れたほうがいいか、それとも持つて歩いたほうがいいだろうか。

窓から見ると、S A Tはほとんど一方的な銃撃を受けているだけだった。突入作戦は完全に失敗している。なんらかの援護を行わなければ、彼らは全滅する。

ヘリは部隊員を搭乗させようとしているが、攻撃が激しくてうま

くできないようだ。もし防弾を施してなければとうに墜落していただろう。

だがヘリは一機墜落している。サブマシンガンやアサルトライフル以上の攻撃力を持った武器、このグレネードランチャーなどが他にもあるはずだ。

そして攻撃位置はそんなに多くない。

どこだ。五代明は窓から探す。屋上から銃撃する占拠犯の姿が見える。

（あそこか！）

上空のヘリを撃ち落す射撃位置としては最適だ。

そして、占拠犯の一人が身を乗り出して構えているのは、グレネードランチャーではなく、ロケットランチャー。

「あんな物まで！」

あれの一撃を受ければ、ヘリなどひとたまりもない。

五代明は入手した銃器類をいったん床に置いて、窓を開け、グレネードランチャーを構えた。

安全装置解除。

狙いは屋上。ロケットランチャーを構えている武装兵。

『喰らえ』

敵と同じ、中東で広く使われる言語で呟くと、引き金を引いた。

「チクシヨウ！ ダメだ！ 囲まれてる！」

「ヘリに戻れ！」

「銃撃がひどくて近づけない！」

「撃て！ 撃ち返せ！」

SAT隊員は消防車を盾にして応戦しているが、しかし説明されていた敵の装備がまったく異なり、強力な攻撃を一方的に受けるだけだ。

占拠犯は、まるで軍隊並みの武装をしている。

SAT装備のサブマシンガンではまるで役に立たない。

ホテルの電力を切ることと占拠犯を混乱させる作戦も全く効果がないようだ。まるでそんな状況には何度もあっているかのように。

「うあ！」

「くそ！ やられた！」

「スタン！ 投げるぞ！」

言うが否や、スタングレネードを誰かが投げた。

弧を描いてホテル入口付近に落下したスタングレネードは、一秒後、膨大な閃光と轟音を放ち、次には静寂が満ちる。

敵は気絶したのか。

だが、その静寂は少しの間だけで、再び銃撃が始まる。

「ダメだ！ あいつらイヤーウィスパーをつけてるんだ！」

耳栓をしているため轟音は役に立たない。光も目を背ければ防げる。

「撃ち返し続ける！ なんとかしてでもヘリに戻るんだ！」

隊長が旧館屋上へ目を向けた。それは直感だったのか、先に撃ち落されたヘリのことを思い出したためなのか。

ロケットランチャーを構える占拠犯の姿が映った。

ヘリを撃ち落そうとしている。

「屋上だ！ 屋上に撃て！」

その命令が聞こえた者がどれほどいただろうか、隊長の指示に従ったのは、わずか二名。

しかも距離があるため、サブマシンガンの命中精度は落ち、威力もなく、ロケットランチャーを構える占拠犯に命中していないのは明らかだった。

ヘリが撃ち落される。それは今の彼らにとって死刑宣告と同じだった。

発射音が聞こえた時、まさに死刑執行の合図の音に聞こえた。だが、その位置はまるで違っていた。

新館七階の窓から、誰かが発射した。

ヘリではなく、屋上へ向けて。

弧を描いて弾頭が屋上へ進み、吸い込まれるように、ロケットランチャーを持つ占拠犯に直撃した。

爆発音が轟いた。

『もう一発』

五代明は、ホテル正面の武装犯が三人固まっている位置へ狙いを定めた。

七階の窓から発射されたグレネードランチャーは、ホテル正面の占拠犯の一人へ命中した。

爆発が窓ガラスを粉々に砕き、グレネード弾が直撃した占拠犯は、その四肢を四散させた。さらに、装備していた弾薬に誘爆し、弾丸を四方へ撒き散らした。

付近にいた占拠犯二人が、爆風で中に舞い、地面に激突した時には、完全にただの肉塊と化す。

周囲に撒き散らされた弾丸は、さらに周囲の占拠犯を攻撃する。

致命傷こそを負わなかったものの、戦闘は不可能に。

「今だ！ 早くヘリへ戻れ！」

SAT隊長は隊員へ指示を出した。なにが起きたのかは正確には理解できなかったが、占拠犯が一時的にせよ、混乱を起こしているのは間違いない。

離脱するなら今だ。

ヘリのパイロットも同じことを考えたのか、指示が出る前に着陸を開始し、SATは迅速に撤退を開始した。

ヨーキはキーボードを凄まじい速度で叩いていた。

『もう少しだ……』

額に汗が滲み出る。わずかなミスが決定的な失敗となりかねない。

一つの打ち間違えも許されない。

『これでよし!』

最後に実行キーを叩く。

一瞬の静寂。

そして金庫室の四つのドアが一斉に開いた。

『成功』

ケイミンが冷淡に告げた。

10・PM12:00/AM00:00

「うわっ!？」

転寝していた水神晴玄は、突然の爆発音に驚愕して目覚めた瞬間、ソファから落ちた。

ソファで少し休むだけのつもりが、いつの間にか寝入ってしまったらしい。

占拠犯がいるかと焦って周囲を見渡すが、誰もいない。

(今の音は?!)

疑念が起こると同時に、ホテルの外から無数の銃声が聞こえた。外を伺うとヘリが一機、ホテル正面広場に滞空し、そこからロブが垂らされ十数人の人間が降下していた。

ヘリの側面には警視庁の文字。警察の特殊部隊だ。

だが水神晴玄は助かったという気持ちにはならなかった。

ヘリは銃撃を一方的に受け、降下していく特殊部隊員は降りる端から銃弾を受けていく。

一般市民の、戦争には全くの素人の水神晴玄でさえ、まるで無計画な強引な突入としか思えない。

あるいは占拠犯もその程度のことは予想していたのか。

警察の特殊部隊はこのままでは全滅するだろう。

(どうすればいい?)

自問しても水神晴玄はなにも思いつかない。武器もなく、戦う方法も知らない自分に。

突然、視界の端になにかが光った。ホテル正面広場ではない。ホテルの中からだ。

七階からなにかが放たれ、それは真っ直ぐ旧館の屋上へ吸い込まれるように走った。

命中と同時に爆発する。

「グレネードランチャー?!」

水神晴玄は啞然とする。映画で見たことがあるそれを、知識としては知っていたが、現実に関に眼にすることがあるとは。

こいつの音が、眼が覚めた爆発音は。

しかし、これではまるで戦争だ。

だが、疑念が起こる。

グレネードランチャーは占拠犯を攻撃した。警察があんな装備を持っているとは考え難い。占拠犯が持っていた物だろうが、それがなぜ、同じ占拠犯を攻撃したのか。

その答えは一つしかない。

「五代さん」

無事だったのだ。あの銃撃を生き延びて、そして警察特殊部隊の攻撃に呼応して、反撃を開始している。

五代明がさらに一発、ホテル正面付近にグレネードランチャーを放った。

武装犯が爆発に巻き込まれて宙に飛ぶ。残りの武装犯の攻撃の手が緩んだ。

その隙に警察特殊部隊のヘリが着陸し、部隊員が撤収し始めた。突入に失敗したらしい。様子を見ればすぐにわかることだが。

水神晴玄は安堵する。自分たちが助かるにはまだ時間がかかりそうだが、彼らが絶滅するのは免れた。生きてさえいれば、まだチャンスはある。

山頂の展望台で小野坂冬香は、あることを思いついて皆に提案する。

「みんな、ここから降りるわよ」

「降りる? どこへ?」

「ヘリの墜落現場よ！ まだ警察も封鎖していないはずだわ！ 今のうちにカメラに収めるの！」

ホテルの銃撃戦は収束し、静まり始めた。残ったヘリも離脱を開始している。ホテルを写しても、これ以上の進展はしばらくないだろう。

だが、ヘリの墜落現場は違う。これからが本番だ。占拠犯に撃墜された突入部隊のヘリ。そして、彼らは今生存しているのか。

さらなるスクープは間違いない。

小野坂冬香の提案に、二人は力強く首肯した。

この事件は、彼女だけではない、彼らにとってもチャンスなのだ。三人は展望台から下りはじめた。

ヘリの墜落現場は目と鼻の先だ。警察より早く到着する。

ワシントンは舞台制御室で無線報告を受けていた。

「こちらマクスエル。S A T、完全撤退しました。一階、外部、S A Tの銃撃による負傷者五名。グレネードランチャーによる死亡者三名」

「屋上、ドモチェフスキー。グレネードの攻撃で二名が死亡した。

ロケットランチャーも破壊され使用できん」

「ハンスだ。新館七階エレベーター付近で二名殺されている。やつだ！ あのガキがやりやがったんだ！」

ワシントンは報告を吟味するように黙考する。

「全部で七人だ。いや八人だ！ 例のガキが現れてから一人いなくなっている！ あいつもあのガキに殺されたんだろう。もう我慢できん！ やつを探すんだ！ このまま野放しにしていたらどんどん殺されていくぞ！」

「落ちてけハンス」

「落ちていていられるか！ 残りの兵士はあと二十程度。少なくな

ればなるほどガキを追い詰めるのは難しくなる。今のうちに仕留めるんだ！』

管理室で無線を訊いていたヨーキが眉根をひそめ、ケイミンに訊く。

『どうしてあいつを連れてきたんだ？ 敵も聞いているかもしれない無線であんなに簡単に話すなんて』

自分たちの戦力数を口にすれば、敵に伝わる可能性が高い。装備を奪った何者かは、無線の使い方を知っていれば確実に訊いているはずだ。

ケイミンは表情を変えずに答える。

『ワシントンからの指示』

『なにを考えているんだか。まあいい』ヨーキはワシントンに報告を入れる。『ヨーキだ。成功した。残りは二つだけ』

金庫室のプロテクトを破る時間を大幅に短縮するために、停電の瞬間を狙った。そのためにわざわざ警察に連絡をしたのだ。テキストどおりにしか作戦を構築することできない、この日本の平和で無能な特殊部隊を突入させ、ホテルに供給されている電力を大元から途絶えさせるために。

この方法により、四つをほんの数分で解除し、残りはホテルの蓄電によって維持されているプロテクト二つだけだ。

『よし、作業を続けてくれ』

ヨーキがパソコンに改めて向かうと、無線からはハンスの怒鳴り声と、ワシントンのどこか嘲笑するような声が続く。

『ワシントン！ あのガキを探索する！ 見つけ出してぶち殺してやる！』

『ハンス、探し回るのは大変だ。時間がかかる上に、戦力を分散すれば、それだけ危険も大きい。どうやら、例の子供は、極めて適応力と戦闘力に優れているらしい。安易な行動は危険だ』

『ならどうするんだ！？』

『私に考えがある』

どんな考えだろうか。

エレベーターの隣にある配線盤の中で、五代明は息を潜めて聞き耳を立てていた。

戦いが一段落付いた後、敵が来る前に、持ちきれない武器を敵に回収されないように、配線盤の中に武器弾薬を隠し、そして敵が接近する気配を感じた五代明は、慌ててこの中に入り、やり過ごすことにした。

数メートル先で行われる会話は、無線に耳を立てる必要もなく、完全に筒抜けで、敵の情報を多く入手できた。

総司令官らしき人物はワシントンと呼ばれている。そして各部隊の指揮官はドモチェフスキー、ハンス、そしてマクスエル。敵人数は、一小隊に付き十人編成。それが三小隊。それぞれに指揮官が一人ついている。管理室で作業をしている技術者が二人程度。敵人数は合計三十六人。

そのうち七名を排除。残り二十八人。そして最初に発見された時にバスルームに閉じ込めた男も見つかっていないらしい。それを引けば二十七人。

全員を排除するのは危険が多すぎる。先程のように、SATなどの突入部隊と連携すれば話は別だが。正確には、あれは連携ではなく、援護しただけだが。隠密に一人ずつ処理していくにしても、やはり敵数の多さ、そして戦闘地域の狭さゆえに、困難を伴う。なにか方法はないだろうか。それにもっと情報が欲しい。

とにかく、しばらくはここで隠れ続けるしかない。壁一枚、配線盤の蓋一枚先に敵が数人いる状況では。

イベントホールでは、人質たちの会話が少なくなっていた。

もし、隣にいる人が恐怖に駆られて逃げ出したら。

設置された爆薬の効果は確実に出ており、疑心暗鬼が徐々に芽生え始めている。

先程は銃撃戦の音が届き、爆発音まであった。警察が助けに来てくれたのかと期待したが、いつまでたっても救い主は現れない。

先程まで見張りは誰もいなかったのに、逃げ出そうとする者は誰もおらず、見張りが戻った今はさらに不安は増した。

五代芽は、まるで丹念に観察するものがそこにあるかのように、テーブルの上を見つめている。だが、彼女の意識は、テーブルの上ではなく、異なることへ向いていた。

兄は無事なのだろうか。銃撃戦があったようだが、巻き込まれただけでいないだろうか。

大滝由美はだんだん眠くなってきたのか、うとうとし始めた。

早乙女遥が血走った目のまま、どこを見ているのか、ぶつぶつとなにかを呟き続けている。そもそもどうして教師の彼女が教職員の集まるテーブルを離れてこっちに来ているのか、それ自体理解できない。それはほかの教師たちも同じらしく、最初は生徒を落ち着かせるためかと思っただが、どうも違うらしいとわかると、ではなぜかと怪訝に思う。

そして、瀬戸口大介が、先程からなにやら落ち着かない様子で、周囲を何度も見渡している。

「どうしたの？ さつきから」

五代芽が怪訝に尋ねた。拳動不審もいいところだが、逃げ出そうということはないはずだ。設置された爆薬の恐ろしさは、彼が説明してくれたのだから。

「いや、あの」

歯切れの悪い返答しか返ってこない。

「うん？」

「ふああああ……」

不意に目を覚ました大滝由美が、大きく背伸びをすると目をこする。

「……ああ。眠っちゃったのか。クラシックてさ、なんかつまないのよね。変な夢見ちゃったよ。いきなりテロが起きるの。あれ？　ここどこ？」

周囲を見渡し、そして緊張感に満ちているイベントホールに、夢から覚めやらぬ状態から、急速に覚醒状態へ移行する。

五代芽がささやく。

「夢じゃないよ」

「……そうだった」

大滝由美は居住まいを正して、深呼吸し、気持ちを整える。居眠りをして呑気に夢を見ている場合ではない。

「どうしたの？　瀬戸口くん」

そして彼の落ち着かない様子に気付いた。

「いや、その」

やはり歯切れの悪い返答。しかし大滝由美はすぐに理解した。

「ああ、トイレね。行ったら」

何気なく進めるが、瀬戸口大介は青ざめる。今の状況で迂闊に動けばどうなるか。見張りの注意を引くか、それとも他の人質に逃げ出すと勘違いされて、想像も付かない悪い状況になるのでは。嫌な予想だけが思い浮かぶ。

「大丈夫だよ。なんなら、私も一緒にいこうか。私もちょっとしたくなってきた」

五代芽は大滝由美に、あきれたような、半ば憧憬しているかのよな眼差しを送る。

この状況でまったく動じることのない神経の太さは、尊敬に値する。

「あー……うん」

それでようやく行く事にしたようだ。拳動からして、相当我慢していたこともあったのだろう。そういえば彼は、お茶を三杯も飲んで

だ。緊張すると喉が渇くタイプなのかもしれない。

そうして二人は席を立ち、トイレへ向かう。それを近くにいた他の生徒たちが驚いたように視線を向けたが、当然のようにトイレへ向かっていくのを見て、逃げ出すわけではないらしいのだと、安堵するように視線をはずす。

「……あら？」

唐突に、それまで自分の世界に入っていた早乙女遥が、疑念の声を上げた。

「どうしました？」

「大滝さんはどこへいったの？」

「トイレに……」

その一言で、極端な反応を示した。

「トイレ！ トイレですって！」

イベントホール全体に聞こえるほどの大きさを叫び、五代芽は慄然とした。こんな些細なことで、ここまで極端な反応を見せるなどとは。占拠犯の注意を引くのは確実だ。

嫌な悪い予想だけは的中するのか、ステージ近くで見張っていた二人の占拠犯が視線を向け、お互いになにかを話すと、こちらに向かってきた。

それに気付かず早乙女遥は、ヒステリックに叫び続ける。

「勝手にトイレに行っちゃダメじゃない！ 先生に一言言ってからでしょ！ 規律を乱すようなことをするなんていったいどういうつもりなの！？」

「先生、静かに……」

「静かに先生の話聞きなさい！ どうして言うことの聞かない生徒ばかりなの！」

なんとか宥めようとするが、まるで火に油を注ぐ結果となる。

五代芽は焦る。占拠犯はどんどん近づいてくる。だが、早乙女遥かは今までの沈黙の反動のように叫んでいる。それも、占拠犯への恐怖ではなく、生徒への怒りの発露。

職員が集まる席から、佐藤健人が小走りでやってきた。そして腕を掴んで、自分に向かせる。

「早乙女先生、落ち着いてください」

「なにを言っているんです！ 先生がそうやって甘やかすから付け上がるんですよ！」

状況を理解しているとは思えない言動。あるいは現実を認められなくなっているのか。

とうとう占拠犯が目の前に来てしまった。手にするサブマシンガンが不気味に黒光る。

「立て」

占拠犯の一人が、どこか生粋の日本人とは異なる発音で、命令した。

「待ってくれ。騒いだことは誤る。ただ、その、混乱しているだけなんだ」

佐藤健人が占拠犯と交渉を試みる。

彼も五代芽も、恐怖で体の振るえが止まらないが、ここで上手く説得しなければ、どのような事態になるか。

早乙女遙が急に、静かに立つ。そして酷く穏やかな声で占拠犯に謝罪した。

「申し訳ありません。私どもの教育がいたらないばかりに迷惑をかけて。十分注意して、以後このようなことは起こしませんので、どうかお許しください。お願いします」

その精錬された落ち着いた様子は、先程の取り乱していた状態とは程遠く、同一人物なのか疑いたくなるほどだった。

占拠犯二人はお互いの顔を見合わせ、改めて三人に目を向けた。人質たちが息を呑んで事態の推移を凝視している。

不意に占拠犯は肩を竦めると、きびすを返して戻り始めた。どうやら人質が少し錯乱したただだと、相手にしないことにしたらしい。安堵の息をつく佐藤健人と五代芽。

「まったく、騒ぎを起こしちゃダメじゃない」

忌々しげに顔を歪めて注意する早乙女遥。原因となったのは本人だというのに、自覚がない。

あるいは。ふと五代芽は思い当った。あるいは、理解した上での行動なのか。

佐藤健人は早乙女遥を職員たちの席へ戻そうと腕を引っ張った。

「なんです？ セクハラですよ」

「早乙女先生。今は、私たちのところへ」

「つれてってどうするんです？ なにをする気なんですか!？」

再びヒステリーの症状が始まりつつある早乙女遥。これが予想できたから、連れ戻すのを躊躇っていたのだ。そうしているうちに、動くこと自体が危険な状況になった。

しかし、これ以上は本当に一人にしておくのは危険だ。生徒たちにどんな危険に曝すかわからない。

ピピピピピ……

占拠犯の腰の無線装置から、連絡音が鳴った。

『はい』

無線でなにかを話している。日本語ではないためなにを話しているのかはわからないが、しばらくのやり取りのあと、占拠犯は再び五代芽のテーブルへ向かった。

「な、なにか？」

やり過ごせたと思っていた佐藤健人は、腰が引ける思いだったが、生徒へ銃口を向けることがないように、あくまでも自分が対応に出る。

「その女子生徒。来い」

指名されたのは明らかに、五代芽だった。

「わ、私？」

どうして自分が指名されるのか。理不尽に思うより、まったく理解できずに戸惑うことさえできず、頭が空白になる。

「待ってくれ」

佐藤健人が庇う位置に立つ。

「この子になにをするつもりなんだ？　なにか人手が必要なら私が……」

二人の占拠犯はまたお互いの顔を見合わせたが、一人があきれたように首を振ると、その銃口を上げて、佐藤健人に狙いを定めた。恐怖で逃げ出したい衝動に駆られるが、それを全精神力を行使して食い止める。

「……必要ことがあるなら、私がする。だから生徒には……」
引き金が引かれた。

発砲音は何発だったのだろうか。

倒れた佐藤健人は、もう、言葉を続けることができない。肺を撃たれている。

「……あ」

かすかに出るのは、呻き声だけ。

「……先生」

五代芽がその顔を凝視する。

自分を助けるために前に出てくれた佐藤健人先生は、自分の代わりに撃たれてしまった。

「先生！」

駆け寄って佐藤健人を抱き上げようとするが、大人の男の体重は重く、頭を抱えることだけしかできない。

「……ゴ、ダイ」

その名を呼ぼうとして、途絶えた。かすかに上げた手が、力なく落ちる。

「せ、先……」

名前を呼ぼうとしても、声にならない。

「ほら見なさい！　先生の言うことを聞かないからですよ！」早乙女遙が非難を始めた。「すみません。本当に。ほら、早く立ちなさい！　この人たちに付いていくの！」

腕を掴んで、無理やり五代芽を立ち上がらせた。

「ちゃんという事を聞いて、謝ってきなさい！　わかったわね！」

占拠犯に押し付けるように、五代芽の背中を力任せに押し、その腕を占拠犯が掴むと、早乙女遙はなにもなかったかのように席について静かになった。

愕然とした面持ちで、五代芽はその顔を凝視した。

早乙女遙は、酷く強張っているのに無表情という、矛盾した顔で俯いている。

五代芽は不意に理解した。この人は自分のしたことを理解している。最初からわかっていた。ただ不安と恐怖を紛らわすためだけにしていた。どのような結果を招いたのかも理解しており、そして自分の身に危険が及ばないように策を講じてさえいた。

ここまで冷静に判断ができるのに、この人は全く恐怖に耐えようとしなかったのだ。

そのせいで佐藤健人が殺された。

やがて怒りが滲み、テーブルにあったコップを投げつけてやろうと、手を伸ばそうとした。

だが、占拠犯に腕を強引に引かれ叶わなかった。

銃口を向けられ、そしてその銃口でステージ脇を指し示し、おとなしく付いて来いという指示を示した。

五代芽は涙が出そうになりながら指示に従った。

その涙は、恐怖なのか、怒りか、悲しみか。

五代芽が連行されてから一分ほどして、大滝由美と瀬戸口大介が戻ってきた。

テーブルの隣で倒れている佐藤健人に気付き、それが死んでいると理解すると、大滝由美は短い悲鳴を上げた。

「ひっ」

そして周囲を見渡し、五代芽の姿がないことを理解する。

「先生、芽は？ 芽はどこにいるの？」

早乙女遙かは強張った表情のまま、首を振る。

「知らない。私は知らない。知らない。知らない。知らない……」
同じ言葉を延々と続けた。

11・AM01:00

山腹を降りたチャネル5の三人は、その参上に呆然とした。

へりは横倒しになり、尾翼は完全に大破。残った部分も変形し原型を留めていない。

燃料に引火して炎を上げているため、これ以上近づくのは無理だ。木々に燃え移っていないようだが、早く消火活動を行わなければ、山火事に拡大するかもしれない。

巻き上がる煙を吸い込まないように、タオルやハンカチで口を塞ぎ、屈んだ姿勢で移動する。

生存者は絶望的のしか思えないが、一応探したのはスクープを期待してのことか。

「……………うああ……………」

どこからか呻き声がした。

「誰かいるの？」

「どこだ？」

三人が周囲を見渡して声の主を探していると、小野坂冬香の頬に水滴が落ちてきた。

雨が降ってきたのかと滴が落ちた頬に手を当ててみると、それは赤い雨だった。

なぜ雨が赤いのだろうか？ その事実をうまく理解できずに、彼女は頭上に視線を向ける。

数メートル上の木の枝に誰かが引つ掛かっている。警視庁特殊部隊SATの一人。いったいどうなったのか、墜落の時に引つかかったようだ。ただし、腹部から出血し内臓がこぼれている。それなのに、まだその命は終わっておらず、手が助けを求めるように小野坂冬香に向けて伸ばしていた。

その手から流れる血が、小野坂冬香の顔に落ちてくる。

彼女は悲鳴を上げようとしても声が出ず、その場から逃げようとしても体は動かず、硬直したまま、血液を顔に浴び続けた。

「おい、大丈夫か？」

カメラマンがその姿を映しながら声を掛ける。大丈夫なわけがないというのに。

「……た……助けて……」

弱々しく助けを求める。自力では降りることができない状態になっている。しかしどうやればいいのか。

小野坂冬香は極限の恐怖で思考と共に体は停止している。

まだ冷静を保っている二人は木登りすら満足にできない上に、さらに人一人降ろすことなど完全に無理としか思えず、それにうまく下ろしたとして、あの大怪我を手当てするなど、医療知識も技術もない彼らには不可能だった。

「……頼む……助け……」

救いを求めるかのように手を伸ばし、しかしその手が不意に力なく、垂れ下がった。

「……あ？」

アシスタントが疑念の声を上げる。

木の枝に引っかかっているSAT隊員は、そのまま動かなくなっ
た。

「……」

沈黙する三人。

改めて周囲を見渡すと、遺体があった。

それが遺体だと気づかなかったのは、墜落のさいに、人体の原型をとどめていなかったためだった。

三人はその惨状を呆然としてみていた。

小野坂冬香は言葉もない。スクープだというのに、なんにも言葉が思いつかない。なにか言わなければならぬという発想さえなかった。

人が死んでいる。

人が殺された。

消防隊員の時は、それがまるで作り物の人形のようにしか思っていなかった。

ホテルの銃撃戦を見ても、映画のワンシーンにしか感じていなかった。

だが、今は違う。

目の前で生きていたはずの人間が、たった今無残に死んだ。

自分はなにを浮かれていたのだろうか。まるで、テレビに映る出来事は、現実には存在しないかのように、自分には決して直接関ることのない、虚構に過ぎないとも思っていたかのように。

だが、報道というものは、本来真実と映し伝えるものだ。

そんな基本的なことさえわかっていなかった彼女は、現実存在する真実を目の辺りにして、もはやなにも考えられなくなった。

カメラマンだけが、無意識のうちにカメラに映像を収め続けた。

警察署では、S A Tによる強襲は失敗に終わり、撤退した報告を受けた。

そして予想される占拠犯の行動は、報復。

予想を裏切らずに、S A Tが撤退してから十五分後、占拠犯の首謀格、ワシントンから連絡が入った。

警察の皆さん。君たちの答えはよくわかった

「待ってくれ。これは上が勝手に行ったことで……」下手な言い訳だとわかっていたが、他になにも思いつかない。

私の部下が七人死んだ 返答はいささか唐突ともいえる内容。

君たちの上司にもこの意味をよく理解できるようにしよう

それがどういう意味を持つか。

「どうするつもりだ？」

君たちにもはつきりわかるように、一人、殺す

「待ってくれ！」

七人に対して一人。安いものとは思わないか。そうだろう！

最後には明らかに怒りが現れていた。

貴様らの命の価値に十分一致していると思うがね。我々の命を十人分で、貴様らの命一人分。時には百人で一人。千人で一人。それが貴様らの命の価値観だ！

怒りが噴出したが、しかし次には平常に戻る。

今から死ぬ者を君たちにもよく見える場所へ連れて行こう。屋上だ

「誰を連れて行くんだ？」

名前は、五代芽。葉山中学校の女子生徒。可愛そうに、君たちの軽率な行動によって、このような若い少女が死ぬことになるとは

中学生。まだ十四五歳の少女を殺すのか。

「待ってくれ。頼む、チャンスをくれないか？」

どのような？

「君たちの要求を必ず果たすよう上層部と掛け合う。それでその少女を助けてくれないだろうか」

駄目だ。なんなら、後二三人殺してもいいのだぞ。それとも、数を合わせて七人処刑するか？

会議室は言葉もない。

屋上を見物しろ。貴様らの行ったことを思い知るがいい

ワシントンは受話器を置くと、無線で連絡を入れる。

『ハンス、その少女を屋上に連れて行け。だが、わかっているな』

『勿論だ』

ハンスは嬉々として答える。

例の抵抗者は、その行動から推測して、無線を傍受している。そしてS A Tとの戦闘時から周波数は変えていない。

今の内容はホテル内を動き回っているあのクソガキにも筒抜けだから、人質が殺されることも知ることになる。

もし、やつがヒーロー気取りで現れたのなら、その時こそ復讐の好機だ。

新館七階、配電盤の中で五代明は無線からの情報を得ていた。

グレネードランチャーによる攻撃の後、そのまま配電盤の内部で隠れていた五代明は、敵から奪った無線機を使って情報を得ようとしていた。

なぜか敵は周波数を変えておらず、当然情報はほとんど筒抜けで、占拠犯のこれからの行動も知ることができた。

しかし、占拠犯はS A T突入戦のあと、当然本腰を入れて自分の対策を開始するだろうと思っていたのだが、警察への対応を先にするようだ。

そして、その見せしめに選ばれたのは……

「……芽」

どうする？

このままでは確実に殺される。

だが、周波数を変えずに指示を出したことを考えれば、自分が聞いていることを考慮しているはず。

明らかに罠だ。探す手間を省いて殺すために。人質を助けさせることで、自分を誘き寄せる。

妹が選ばれたのは偶然だろうか。それとも、誰かが自分の正体を喋ったのか。しかし、あの人質の数で、誰がいなくなっているのか確認できるとは思えない。やはりただの偶然なのかもしれない。こういう時、なぜか運の悪い偶然が起きやすいのはなぜだろうか。

どちらにせよ、行かなければ妹が殺される。

配線盤から出ると、周囲を確認。敵兵の姿はない。

武器を一通り確認する。サブマシンガン一丁に予備マガジン六つをジャケットの弾倉入れに収納。オートマティクハンドガン二丁を両腿に装着したホルスターへ。ハンドガンマガジン四つをサブマシンガンのもと同じくジャケットに収める。ナイフ二本を両足の脛に巻きつけ、そして袖にペーパーナイフを仕込んでおく。スタングレネードと手榴弾を二個ずつ腰に装備。あとは、胸ポケットにマルチナイフと、ミニマグライト。

敵兵二人分の装備で、武器弾薬は充実している。持ちきれない残りのサブマシンガン一丁と弾薬は配線盤の中に隠したままにしておく。敵の手に渡ることはないだろう。

そして用具室で入手した図面を確認。これは後で必要になるかもしれないので、ポケットの中に畳んで入れておく。

最後に、グレネードランチャーを背に担いだ。かなりの重量だが、多人数と戦うには、破壊力の大きいこれが必要になる。

装備一式を確認、装備すると、五代明は走った。

まず目標はエレベーターだ。あれを使わせるのはまずい。

敵から入手した手榴弾は全部で二つ。エレベーターは二つなので問題ないだろう。

エレベーターの扉をナイフでこじ開ける。エレベーターは下にあるようだが、使えなくさせるにはあまり関係ない。まずは一つ目を破壊する。手榴弾の安全ピンをはずすと、内部で落下させる。

すぐに扉から離れる。三秒ほどして、下に落下した金属の激突音が聞こえ、続いて爆発音。これで、ワイヤーや滑車の類は破壊され、使用不可能となった。

もう一つのエレベーターも同じようにして破壊する。予想外だったのは、エレベーターが上にあつたため、爆発でワイヤーが切断され、突然下降を始めたことだった。金属の擦る耳障りな凄まじい音が響き、次には一階で激突音が轟く。エレベーターボックスは完全

に破壊されただろう。

これで占拠犯は、屋上へ移動するには階段を使っただけでなくなった。次は、自分が下へ移動する。ただし、階段は使わずに。

五代芽がいる場所はイベントホール。そこから移動させるとすれば、今から準備してどの位置で接触することになるか。

用具室で見つけた図面を頭の中で再現し、敵の行動を予測しながら、五代明は消火栓の蓋を開けた。

五代芽はイベントホールから、六人の占拠犯に連行された。

イベントホール出入り口がある三階エレベーター前で、突然連続して爆発音がエレベーター内部から轟き、占拠犯がボタンを押してもエレベーターは動かなくなった。

『なんだ？』

『やつが破壊したようだ』

『小手先技を。階段で行くぞ』

『裏目に出たな。やつは屋上へ行く前に仕掛けてくるぞ』

『よし、二手に分かれる。まず俺たちが先に行く。お前たちは後からこいつを屋上に連れて行け。やつは必ず仕掛けてくる』

『大丈夫ですか？ やつは武器を奪っている。エレベーターも手榴弾で破壊したようだ』

『油断しなければ問題ない。こちらは六人いるんだ』

ハンスは兵士を二人連れて、階段を足早に駆け上がっていった。

それを見送った三人の兵士は、改めて五代芽の腕を引いた。

『来い』

なにを話しているのか、日本語と以外の言語は、英語が少ししかわからない五代芽ではまるで理解できなかった。

しかしこのままでは自分が殺されるらしいということはわかるのだが、か細い自分の腕は、占拠犯の手を振り解くことさえできない。

（お兄ちゃん）

助けを求めるように心の中で呟く。その助けがくるはずがないと思っ
ていながら。

本当に？

不意に窓の外で何かが動いた。

五代明は消化ホースをロープの代わりにして、階段の外壁を下つ
た。

途中で窓から内部の様子を伺うと、占拠犯が三人階段を駆け上が
っていった。どうやら、先制攻撃を仕掛けるつもりで、自分がいる
と予想される七階付近に向かったようだ。

となると、芽を連行している兵士の数が少なくなったかもしれな
い。

そのままさらに下り、四階と三階の間で止まり内部を確認。エレ
ベーター付近の三人の占拠犯と、人質の一人、五代芽を視認。距離
は十メートルもない。

（時間がない。一気に殲滅する）

壁を蹴って反動をつけ、大きく離れたときに位置を修正し、銃口
を構えて二発発砲。窓ガラスが砕け、さらに体当たりして、三階通
路へ突入。

『なに！？』

階段を上がろうとしていた占拠犯は、階段の上を警戒しており、
襲撃してくる位置が完全に予想外だったため、対応が一瞬遅れた。

着地した五代明は、両腿からハンドガンを抜くと、左右の的へ腕
の感覚だけで狙い引き金を引いた。体に染みついた感覚は、視覚に
よる照準を必要としなかった。

異なる方向への同時攻撃は、三人の占拠犯に反撃の隙を与えず、
体に無数の弾痕が生じさせ、まるでダンスを踊っているかのように、

衝撃を与え続け、十二発のドラムミュージックが終わると、三人は同時に倒れた。

五代芽はなにが起きたのかわからず、物体と成り果てた占拠犯に囲まれたまま、硬直して動けなかった。

通路の先、窓ガラスが割れたところに立つ者は。

「お兄ちゃん!？」

消化ホースをロープの代わりにして飛び込んできた五代明に、驚愕する五代芽。これは幻だろうか。本当に助けに来てくれるなんて「来い! 早く!」

五代明は拳銃を収めると、妹に再会を喜ぶ暇も与えずに、その手を引いて移動する。

銃声は周囲に聞こえたはずだ。すぐに応援が来る。

「あ、あの、どこへ？」

「旧館だ」

三階までは新館と旧館は直接繋がっている。

問題はそれまで敵が待つてくれるかどうか。

不可能だった。最初から予想していたことだったが。

旧館側の三階通路から三人現れた。三という数字に縁があるのか。だがあの三人だけではなく、すぐに援軍が現れるだろう。その前に処理しなければ。

五代明は襷掛けしていたグレネードランチャーを構えると、新館と旧館を繋ぐ通路を渡ろうとしている、占拠犯に向けた。

「しまった!」

「逃げる!」

威力を秘めた武器に気づいた三人の占拠犯は、すぐに隠れようとしたが、しかし逃げる方向は後方のみ。左右は三階分の高さ。

グレネードランチャーを発射。グレネード弾が真っ直ぐに飛び、撤退しようとしていた占拠犯の背中命中した。

人体が爆散し、爆風と爆炎を受けた他の二人は、左右の窓ガラスを破って外へ吹き飛ばされた。

悲鳴が尾を引き、地面に激突して、途絶える。

背後の方向から敵が接近する。五代明は直感的に知覚すると、即座に振り向き、グレネードランチャーを発射。

突き当たりに現われた一人の占拠犯は、反射的に横へ転がって直撃を回避。

壁に命中して爆発する。もう一発、再度発射した。壁に命中して爆発。敵にダメージを与えたのかどうかはここからでは確認できない。

グレネード弾はこれで弾切れだ。グレネードランチャーを窓から投げ捨てると、五代芽の手を引く。

「行くぞ」

連絡通路で爆発した、人間の切れ端を踏みつけて、旧館へ入った。妹が怯えて足を止めかけたが、無理に引っ張って死体の上を進ませた。

旧館に入ると、すぐ階段がある。そこを下り一階に到着すると、窓の外から占拠犯が接近している姿が遠くに見えた。逃走経路を予想していたのか。

一階は敵が多く撃退するのは困難だ。それに攻撃力の高いグレネードランチャーはもうない。銃器類はサブマシンガンとハンドガン二丁、手榴弾が二つ。これだけでは心もとないうえに、足手まといとなる五代芽がいる。

五代明は妹の手を引いて、通路の角を曲がりトイレに入る。

「ちよつと、お兄ちゃん、ここ男子トイレ」

男子トイレに入ったことで、なにか気恥ずかしさでも感じたのか、小声で呼ぶ。状況を理解しているとは思えないが、極限状態では返って日常的なことが気になってしまう現象はよくある。

五代明は気にせずに、窓を開けた。周囲を見渡して、外に誰もいないことを確かめると、五代芽を促す。

「出る」

運動神経がやや鈍い傾向にある五代芽を持ち上げて窓から出すと、

次に自分が外に出た。

外は暗く、明かりに入らないよう、身を低くして移動。周辺は木々が生い茂り、二人はその中に入る。暗闇の茂みの中に入ってしまったらしばらくは発見されない。

ホテル内で占拠犯が自分たちを探している姿が見える。発見しだい射殺するようにとの命令を受けたのか、サブマシンガンを構えながら探索している。

だがこの位置から発見するのは難しいだろう。しばらくして、占拠犯は別の場所の探索に向かった。

なんとかやり過ごせたようだ。

「……このまま逃げるの？」

五代芽は木の根元で腰を落ち着かせると質問する。どこか罪悪感があるのは、自分だけが人質の中から逃げることでできたからなのか。

「いや、ダメだ。ホテルの周辺に地雷を仕掛けてあるらしい。山林部に入るのは危険だ」

兄は否定すると、懐から数枚の紙を取り出した。暗くてわからないが、なにかの図面らしい。

「これは、用具室で見つけたホテルの図面だ。古いやつなんだが、これを見ると旧館から地下へ繋がる通路があるらしい。ここから下水路に繋がっている。下水路は川までほぼ一直線に繋がっている。ここからなら逃げられるだろう」

やはり逃げるのだ、自分たちだけで。五代芽が罪悪感と、当然のように逃げる算段をする兄に対して非難めいた感情が生まれたが、五代明は付け加えた。

「ただし、地下へ降りる入り口は一つだけ。連中に見つからずにそこへ行けるかどうかかなり難しい。それに、降りた先で本当に地下

通路があるかどうかわからない。今は封鎖されて出入りできなくなっている可能性がある。おまけに、そこに連中がいたら間違いないが発見される。今度は奇襲攻撃じゃないから、正面きつての銃撃戦になる。おまえ、銃は使えるか？」

五代芽は首を振る。その顔は驚いているようでもあり、困惑してもいるのは、兄が当然のように銃撃戦を前提として動いていることだろうか。

そして、先程救出された時、兄が人を殺した事実を、今頃になって思い出し、実感として理解した。自分を連行しようとした占拠犯通路から向かってきた三人。少なくともこの六人は確実に死んでいる。

兄が人を殺した。五代芽は身震いする。その恐怖は殺人という罪のためなのか、兄自身にたいしてなのか。

五代明はそんな五代芽の様子に気が付いていないのか、そのまま淡々と続けた。

「だろうな。となると、俺一人で、お前を守りながら戦うことになる。はつきり言って、勝算は低い」

「ここで、じつとしていれば……」

「ここで動かないでいると、そのうち発見される」

期待を込めた言葉は、酷薄な現実を断言され却下された。

「とにかく、安全な場所を探さないと」

それも敵に発見されずに。

「あの、その図面、もう少し見せてくれる？」

五代芽は図面を受け取り、少ない光で何とか読み取る。

「……あのね、その、他の方法で行けると思う」

五代明は少しだけ目を見開いた。

12・AM01:00

水神晴玄はスイートルームで役に立つものはないか、室内の物を調べていが、特に役に立つようなものはなく、懐中電灯がおいであつたくらいだ。

状況を脱するような物はない。とりあえず懐中電灯だけはポケットの中に入れておく。なにがあつたのか、先程からずっと明かりが途絶えたままだ。警察が突入した時にホテルに供給されている電気を切つたのだと思われる。非常灯だけ付いているが、たぶんホテルの非常用電源なのだろう。

ふと、ポケットの中に携帯電話が入っているのに気付いた。そういえば、事件が発生した時に入手したものを、拝借したままだった。何気なく表示を見てみると、電波が届いている状態を示す、アンテナの表示が立っている。

「……通じてるよ」

五階の低さでは山間という地理条件で電波が届かなかつたが、九階のここは高い位置にあるため電波が届くのだ。ここからは街の姿が山間から見ることできる。

「そうだった」

水神晴玄は期待を込めて、携帯電話の番号を110と押す。日本全国共通の警察への緊急通報番号。たとえ最寄りの警察への連絡先を知らなくとも、必ず繋がる。これを発案した人は天才だ。普段考えもしないことを賞賛しながら、受話器から繋がる音を聞いた。

そして、三回目のコールで電話が通じた。

「よし！」

思わず声を上げる。

どうされました？

「あの、今エンプレスホテルから掛けています。占拠事件がおきている、京都エンプレスホテルです」

……それで？

「いや、それでって……」

返答はひどく冷たく、水神清玄は少し戸惑う。占拠事件はテレビで流れているし、警察関係者なら知っていると思ったのだが、知らないのだろうか？

「今、人質になっていたというか、ホテルの中を逃げ回って。とにかく、安全な場所に隠れることができたんで、なんとか連絡を入れたんですが。……あの、占拠事件のことは知ってますか？」

勿論です。ついでに言いますと、占拠事件に関する質問は受け付けられません。それに、ホテルからかけているという内容のいたずら電話はすでに百件を超えています。いいですか、エンプレスホテルは緊急事態に陥っているんです。いたずら電話は止めてください
「いや、いたずらじゃ……」

通話が一方的に切れた。

「おい、冗談だろ」

苛立ちにもう一度掛ける。今度はワンコールですぐに繋がった。

「もしもし」

さつきと同じ人ですね

「そうです。ちょっと、話を聞いて……」

その声、まだ子供ね。いい、いたずら電話はいけません。お父さんとお母さんにそう習わなかった。いい加減にしないと怒るわよ
再び一方的に電話が切れた。

ダメだ。警察はどうやら占拠事件に関係するいたずら電話の類が多く、自分もいたずらだと思われるしまっている。このままでは埒が明かない。

他の誰かに掛けないと。事情を信じる誰か。だが誰に掛ける。誰なら信じてくれる。

「……実家しかないよな」

暗記している実家の電話番号を押した。しばらく無音状態だったが、やがて接続した音が聞こえ、独特のプルプルという音が聞こえた。

「出してくれよ」

十秒ほど経過して、誰かが出た。

はい、水神です

その声に、少しだけ水神晴玄は驚いた。

「鈴奈か!？」

受話器の向こうでも驚いた声が返ってくる。

晴玄!？」

やはり鈴奈だ。同じ町に住んでいる一つ年上の従姉妹。

だが仲が良いわけではなく、ここ一年間は話をした記憶がない。

もつとも、正月とお盆は親戚の集まりの関係で、必ず顔を合わせることになるので、声を聞けばさすがにわかるが。

状況をしばし忘れ、しばらく気まずい空気が流れ、数秒間沈黙する。しかし、事態をすぐに思い出し、話を切り出す。

「……鈴奈。エンプレスホテルで占拠事件が起きているのは知っているか？」

え？ ああ、うん、知ってる。おばさんたち、今その話で学校へ行ってるわ。それより、あんた、大丈夫なの？

「なんとか無事だ。とにかく、そのエンプレスホテルの中からかけてるんだよ。携帯電話で」

あんた、携帯電話なんて持ってたっけ？

以前、鈴奈の携帯電話を勝手に使って、高い請求料を出してしまい、そのことで携帯電話を持たせると、清玄の両親に言ったらしい。それが理由なのかどうかはわからないが、少なくとも親は携帯電話を清玄に買い与えることはなかった。

「拾ったんだ。そんなことより、今、イベントホールで三百人くらい人質になっていて、俺は色々あって、人質にはならずにと逃げ回ってた。それで、今はなんとか安全な場所に隠れているんだが、

とにかく、警察と連絡したい……」

ピー、ピー、ピー……

携帯電話から甲高い音が鳴り始めた。

表示を見ると、電池残量がなくなっている。

「冗談だろ、こんな時に」

さらに部屋のドアノブが動いた。外側から誰かが扉を開けようとしている。その動きは乱暴で、明らかに中に人がいると確信している。電話をする声が大きく、外に聞こえてしまったのか。

ようやく外部と連絡が取れたかと思えば、もう電池切れ。さらに敵には発見される。やはり今日は幸運に恵まれていない。

晴玄！

占拠犯に見つかったことはわからないだろうが、電池が切れかけていることは向こうにも伝わったらしい。

時間がない。なにか伝えなければ。なにを伝える？ 警察への連絡内容？ それとも両親と祖父への言葉？

「……鈴奈。帰ったら色々話をしよう」

出てきたのは、受話器の相手への言葉。

あんだ、なに言って……

「話、ほとんどしてないだろ。従姉妹なのに、親父たちが知らないうちに許婚にしたせいで、変に意識して。だから、色々話したい。だから、必ず帰る。必ず無事に生きて戻る。親父と母さんにもそう伝えてくれ」

晴玄……

電源が切れた。

電話の切れた受話器を鈴奈は握ったまま呆然としていた。

「晴玄……」

鈴奈と水神晴玄は許婚となっている。親同士で決めたもので、本

人の意思は無関係だ。

三年前、水神晴玄と初めて会った時に、両親からその事実をいささか唐突に告げられた。二人の両親はそれで仲がよくなることを期待したらしいが、結果は逆で、気まづくなり、お互い避けるようになった。

もつとも、同じ町に住む親戚同士ならば、顔を合わせる機会は多く、会おうとしなくても会うことが多い。

だが、その時も話をするとはなかった。

そのことを悔いるかのように、晴玄は唐突にたくさん話をしたいと言いつ出す。

まるで、もうすぐ死ぬかもしれないように。

生きて帰ることを約束することで、奇跡が起きることを期待するかのよう。

水神晴玄は電池の切れた携帯電話をポケットのしまうと、周囲を見渡した。

九階の部屋。非常口に該当するようなものはなく、逃げる経路はない。最初の時のようにベッドの下に隠れても、念入りに探索されれば終わりだ。隠れる場所もない。

残されたのは三つ目の選択肢。戦うしかない。

だが、こちらは素手だ。こんなことなら、扱ったことがないなどと言わずに、一丁くらい拳銃を受けとっておくべきだったか。しかしそんなことをいまさら言っても仕方がない。

ない、ない、ばかりだ。

せめて武器となるものがあればいいのだが。

ふと、座敷部屋に目を向けた。寝室は洋風だが、リビングルームは和風の座敷の部屋で、装飾品として、壺や掛け軸があり、そして壁には日本刀が掛けられている。

本物ということはないだろうが、それでも木刀の代用としては十分使えるかもしれない。

日本刀を手にとると、意外な重量が手にかかる。まさかと思いつながら、簡単に抜けないよう柄に掛けてあった留め金を外し、鞘から少しだけ抜いてみると、白銀に輝く刀身が現れた。

「……本物だよ」

いったいなにを考えて本物の日本刀を飾りとして置いてあるのか。間違つて抜刀して怪我をすることは考えなかったのだろうか。

いや、自分も模擬刀だと思い込んでいた。同じようにホテルも模擬刀だと勘違いしていたのかもしれない。

だが最高の勘違いだ。やはり今日は幸運に恵まれている。錯覚だという気がしなくてもいいが。

ドアノブを回す音がなくなった。占拠犯が諦めたのだとは、水神晴玄は考えず、次に起きることが予想できた。

タタタタン……

銃撃を受けてドアノブが吹き飛んだ。

ハンスは二人の部下をつれて階段を上がっていた。

奴はエレベーターを破壊し、移動手段を階段に限定させ、そこを攻撃するつもりだ。初歩的な戦法だが、効果的だ。ただし、こちらが予想していなければの話だ。

相手が現れるのを待つつもりはない。こちらから攻撃を仕掛ける。人質を盾に使うなど迂遠な方法など必要ない。人質は逆に邪魔になる。

そしてハンスは九階まで到着した。

まだやつの姿は現れない。別の階にいるのだろうか？　しかし破壊されていたエレベーターは九階で止まっていた。そこから予想したのだが、早計だったか。それとも見落としたのか。

ハンスは別の場所へ向かおうとして、途中かすかな音を聞いた。それは小さいが、確かに耳に届いた。

『ここを探索する。油断するな』

部下二人に探索方向を指示すると、自分は逆方向へ向かう。

『気をつけてください。やつらはニンジャかもしれません』

日本に古来から存在する、隠密行動を専門とする戦闘集団の話は聞いたことがある。ハンスの故郷のアメリカでも、一昔前ブームとなり、多数の映画が作られたこともあった。

もつとも、真実の姿は謎が多く、フィクションは誇張や虚偽がほとんどだ。

しかし、そういった存在がいるということそのものは、フィクションではないだろう。あらゆる軍隊では、隠密作戦を専門とする部隊が必ずといっていいほど存在する。日本だけが例外というわけではないだろう。

だが、たとえ伝説のニンジャといえども、所詮は日本人。半世紀以上の平和で、すっかり骨抜きになり、戦争というものの自体が、それこそテレビや映画の中のフィクションとしか考えていない連中だ。数々の戦場を渡り歩いてきた自分の敵ではない。

ハンスは、リバイ・ベルの敵と呼ぶべき、アメリカ軍の出身だった。

己の強い肉体は、平和な国では使い道のないことに、鬱屈した不満を持ち続け、米軍に入隊し、厳しい訓練を経て、湾岸戦争へ向かった。ようやく実戦だと意気込んだというのに、報道されているような戦闘は経験せず、戦いへの渴望だけが蓄積されたままの状態で、湾岸戦争は終結した。

その鬱憤を晴らすように、米軍を辞めたあと、米軍と敵対関係にあった、中東の民間軍事会社に就職した。

その後、ハンスは無数の戦闘を経験する。それは歓喜に満ちた日々。

銃撃、爆撃、襲撃、敵を殺す毎日。

拷問、略奪、強姦。敵を撈る毎日。

これこそ戦争だ。これぞ望んだものだった。

ハンスは傭兵として派遣された先で、成果を挙げた。米軍や多国籍軍のように人道的などというおためごかしなどない、まさに自由に戦うことのできる日々。

それはゲーム感覚の享樂。

彼はただ楽しかった。

敵を殺すたびに伴う、自分が強いのだという実感が、快樂だった。殺すことへの抵抗感はまるでなかった。最初の殺人に対する衝撃も、ただ面白いという感覚しかなかった。

次の仕事として受けたこの作戦も、第三国での貧しい者たちを救おうなどと、浮ついた戯言しか口にできない、平和で幸せそうな顔をしたバカどもをビビらせるためだけに来た。

いい気分で仕事をしていると、そこに水をさしてきたガキどもが現れた。

少しばかり教育してやらなければならない。

それは、戦闘という状況下でありながら、自分だけはけして攻撃を受けることがないという、一種傲慢な思想が生む、加虐心の表れだった。

「……すず……」

九階スイートルーム付近。確かに声がした。

部屋は全部で四つ。そのうちのどれかにやつが潜んでいるのかもしれない。

いや、間違いなくそうだ。

ハンスは断定して、そのうちの一つに耳を済ませた。確定してから攻撃を行いたい。

無線で連絡を入れようとして、しかし止めた。子供一人など自分

だけでどうともなる。寧ろ、楽しみを邪魔されたくない。自分に弾丸を浴びせかけたことをたつぷりと後悔させてやる。

嗜虐的な笑みを浮かべて、ドアの一つに耳を近づけた。

「……エン……ス……で占……件……いる……知っ……」

断片的だが、聞こえた。誰かと話をしているようだ。となると二人いるのか。

「……無事……とに……ホテルの……から……電話……」

電話？ 電話は使用できないはずだが。

「……拾っ……より……イベント……人質……全員……俺は……逃げ回って……警察……連絡した……」

警察と連絡したのか。どんな手段を使って。

「……冗談……こんな……」

まずい。早く仕留めなければ、内情を警察に知られてしまう。ハンスはドアノブに手を掛けた。しかし鍵がかかっている。

『くそ』

あせって何度回してから、中にいる人間に気付かれるということに気付いたが、もう遅い。

強硬手段に出る。サブマシンガンに向けて、発砲。

ドアノブを破壊するとドアを蹴破り、即座に室内へ向けて、弾切れになるまで、横薙ぎにフルオートで発砲。

窓ガラスに穴が開き、ソファのクッションが撒き散らされ、高価な壺が碎ける。

しかし、人間には命中しなかった。室内には誰もいなかった。

いないはずがない。確かに声がした。迂闊にドアノブを回そうとしたため、悟られてしまい、どこかへ隠れてしまったのだろう。

弾倉を素早く交換し、サブマシンガンを構えたまま、室内へ入る。

（どこに隠れやがった？）

スイートルームは広く、隠れられる場所が多い。

だが、どこかにいるはずだ。

水神晴玄は居間の襖を挟んだ場所で、壁側に体を張り付かせて隠れていた。

位置的にはドアの真横のため、銃弾の雨の範囲からは逃れられたのだが、目の前の一步分の襖に、いくつか穴が開いているため、実際にどの所だったとも言える。

こうなると、完全に本気で戦いを挑むしかない。それも敵の数が少ないうちに。

ただ問題は、自分に人を殺すことができるのか、という点だった。技術、攻撃力では問題ないだろう。技術的には古流武術を幼い頃から仕込まれている。攻撃手段も本物の日本刀を手に入れたため、接近戦に持ち込めば、銃器類が相手でもけして引けはとらないだろう。

問題なのは、精神的な方面。

人を殺す覚悟。

人間は人を殺すことにためらいを覚える。それは物心のない子供にさえある。

同種を殺すことを忌避するということは、ほとんどの生物に存在する本能らしく、生来存在するものだ。

勿論、必ずしもというわけではないし、成長にしたがって、そういった禁忌をなくす者も少なくなく、それに切羽詰らばなくす程度のものだ。

だが水神晴玄は、平和な日本で、殺人は罪であり、人を殺すことはよくないことだと、物心付く以前から教えられ、それを当然のこととしてきた。

それが突然、殺人を行わなければならない状況になったからといって、なんの躊躇いもなく殺すことはできない。刷り込みのように精神を拘束している。

だが、自分の命と他人の命。天秤に掛けてどちらが重いのかと問

われれば、自分の命と答える。

それに、今部屋に入ってきたやつは、人の命を躊躇いなく殺すやつだ。

なにより自分を殺すために来たのだ。

遠慮を覚える必要などない。まったく必要ない。

覚悟を決めろ！ 殺らなければ殺られる！

鈴奈と約束したのだ。必ず生きて帰ると。

水神晴玄は、柄を握った。

水神晴玄は襖を蹴破って突進した。

ハンスは即座に反応して銃口を向けた。

水神晴玄は刀身の切っ先を、銃口の先端に突き刺した。

銃口がはじかれて、ハンスは異なる方向へ発砲。壁に斜めに弾痕が連続して生じる。

水神晴玄は敵の右斜め前方へ大きく踏み込み、刀を右肩から左下へ振り下ろす。

ハンスは身をのけぞらしてかわし、不自然な体勢だが銃口を再度、敵へ向ける。

右手を柄から離し、水神晴玄は銃身を腕で弾いて弾道線から外す。再び発砲されたが、天井に横なぎに弾痕。天井の破片が粉になって降りかかる。

水神晴玄は左手だけで、敵の右脇を狙って切り上げた。

ハンスは後方へ円回転しながら移動し、刀線から外れる。同時に弾切れになったサブマシンガン捨て、脇に装着したハンドガンを抜いて、構えた。

水神晴玄は回転しながら、左へ移動し銃撃を避ける。同時に腰を落とし左膝を床に付いて、敵の足を狙って横薙ぎ。

とっさに跳躍して刀を飛び越えたハンスは、頭部に銃口を定めた。

水神晴玄は横に薙いだ刀の遠心力を殺さず、刀に引つ張られるようにして、受身で床を転がる。右こめかみを弾丸が掠める。

ハンスは着地と同時に改めて照準を定めた。

受身から構えなおした水神晴玄は、その銃口を見てとっさにテールブルの灰皿を投げつけた。

引き金が引かれ、弾丸が発砲。空中にある灰皿に命中して、軌道が変化し、水神清玄の脇を掠める。

水神晴玄は右回転して衝撃を分散させ、そのままの勢いで踏み込み、逆袈裟。

ハンスは拳銃を構え直して狙いを定める。

銃声。弾丸が水神晴玄の後方の壁に。

ハンスの右腕が宙を舞い、弾痕の生じた箇所につかつた。自分の体にあるはずの右腕がないことに気付き絶叫を上げた。

通路側から新たな敵が二人現れた。音を聞きつけたのだろう。水神晴玄は、即座にその敵へ向かって疾走。

室内で行われていることを理解し、そして敵が接近していることを悟った占拠犯は、サブマシンガンを構えた引き金を引いた。だが、引き金が引くことができない。

安全装置がかかっているという初步的なミスに気付いた瞬間、喉奥に冷たい感覚が侵入してきた。

水神晴玄は刀の切っ先を、貫通するまで占拠犯の喉に突き刺した。通路側にいたもう一人の占拠犯が驚いてサブマシンガンに向けて発砲。

水神晴玄は、刀を突き刺した占拠犯の体を掴んで引きよせる、それを盾とした。

まだ生命活動を行っていた占拠犯に、十数発の弾丸が命中した。自らのとてつもない失敗に気づいた占拠犯は、銃撃を止めた。

その瞬間を狙って水神晴玄は喉から刀を抜くと、一気に間合いを詰める。

占拠犯は一瞬の動揺から立ち直り、すぐに銃口を定めようとした。

一線。肩から腹部に掛けて、刃が通った。

体に違和感が生じ、構わずにサブマシンガンを発砲しようとしたが、なぜか指に力が入らず、その両腕がなくなっていることに気が付き、その意味を理解しようすると、自分の体勢は変わっていないはずなのに、視点が移動し始めた。それが、斜めに切断された胴部の断面で、体が滑り始めているのだと理解するまもなく、その命は途絶え、胴体から二つになって床へ倒れた。

ハンスが絶叫しながら室内から発砲し始めた。それは仲間を殺されたことからなのか、腕を切断されたことによるのか。

水神晴玄はそのまま通路を走った。後ろは振り向かなかった。

殺した。

殺した。

殺した。

間違いなく、人を殺した。

自分が、人を殺した。

水神晴玄は走りながらそのことを実感とし始めた。

覚悟を決めて、人を殺した。

殺すつもりで、人を殺した。

「ああ……」

叫び声をあげようとしたが、出たのは弱々しい呻き声。

ひどく罪悪感というものがなかった。

享楽も感じなかった。

いふなれば、呆氣に取られた。

こんなにも簡単なのか。

人を殺すということはこんなにも簡単なのか。

人はこんなにも簡単に死ぬのか。

殺せば、簡単に、死ぬ。

人を殺すと、異様な興奮を覚えると聞いたことがある。それは恐怖でもあり、歓喜でもある。

誰だ、そんなでたらめを言ったやつは。

まるで、なにも感じない。感じなさすぎる。

自分に感情が欠落しているようだ。

殺人に対する抵抗が始めからないようだ。

水神晴玄は、隠れる場所を探した。頭のどこかでいまだ冷静な自分がいる。それが救いだ。

階段へ到着した。この階に居続けるのは危険だ。他の場所へ移動しないと。だが、階段は見張りがいるかもしれない。

少し確認してみたが、見張りの姿はないようだ。

なぜかはわからないが、好都合だ。

水神晴玄は階段を下りる。警戒して慎重に、だが素早く。

不意にどこからか、爆発音が聞こえた。

また警察の突入が始まったのだろうか。それとも五代明が戦っているのか。

階段に警備がないのは、そのためかもしれない。

とにかく、今のうちに隠れなければ。

『ちくしょおおお！ あの野郎！ 俺の腕を！ 俺の腕おおお！』

ハンスは絶叫していた。

平和な国の戦いなどまるで知らないはずの、それも子供が、百戦錬磨の兵士の腕を。

『切りやがった！ あのクソガキい！ 俺の腕を切りやがったあああ！』

まるで抵抗することさえ、神に逆らうかのように不遜だという怒りで、ハンスは叫び続けた。

対策本部会議室では、突入に対する報復として人質一人を処刑する宣告を受けたことによって、重苦しい空気が流れていた。

それでも人質を救出すべく、仕事に取り掛かり続けるしか彼らにできることはない。

警視庁の対策本部では要求された金額を準備することが決定したらしい。彼らの切り札とも呼べるSATが早々に迎撃されたのだからそれも当然だろう。だが制限時間は五時間を切っている。準備に間に合うだろうか。それに、もし要求金額を出したとしても、彼らは本当に人質を解放するのか。

佐伯真人は今、撤退したSAT隊長から、電話で直接報告を受けていた。彼らからの情報が、人質救出の糸口になるかもしれないという希望を持っているが、しかし状況を考えれば、その可能性は薄い。

桐嶋長平はすでに、ホテル周辺に配備された警官隊からの報告を受けている。SATが撃退された結果となった今、彼らが人質救出を果たさねばならない。だが、専門的な特殊訓練を受けたSATにもできなかったことを、一般の警官にできるだろうか。

屋上にはまだ誰も姿を現していないという報告だ。まだ五代芽は処刑されていないということだが、やつらが報復を止めたとは考え難い。なんらかの理由で手間取っているのだろう。そして彼女が屋上に連行される前に、なんとか救出する方法を考えなければ。

そして桐嶋長平はチャンネル5が流していたテレビ映像の録画を、何度も繰り返し見ていた。

「副署長、ちよつと来てくれ。やっぱりおかしい」

「なにがです？」

呼ばれた副署長は、所長が見ているテレビを覗き込む。

「ここだ」

エンプレスホテルで行われたS A Tと占拠犯の銃撃戦の光景。日本で戦争さながらの銃撃戦が行われ、さらにはテレビで生中継される日が来るとは。

しかし、それ以外に別段気になることはない。

「もう一度映すぞ」

少しビデオを巻き戻して、映像を流す。

S A Tと占拠犯の銃撃戦が行われ、屋上で爆発が発生し、続いて正面入り口で爆発が起こる。

「これがなにか？」

やはりわからずに聞き返す。

「この爆発、どう見ても、占拠犯が攻撃を受けたとしか見えない」

「S A Tと銃撃戦をしたんですから、当然でしょう」

「だが、S A Tは爆発物を持って行っていない」

持つて行っていない？

「つまり？」

「今回S A Tが使用した武器は、サブマシンガンとハンドガン、あとスタングレネードだけだ。爆発を起こすものといえば、強いて言うならスタングレネードだが、しかしこんな爆発は起こらないだろう。それに、屋上に届くわけがない」

「占拠犯の武器ということは？」

「それだと、占拠犯から武器を奪って攻撃したということになるが、それも少しおかしい」

桐嶋長平はビデオを巻き戻して再び映像を繰り返した。

「いいか。まず屋上で爆発。それから五秒後には、正面入り口付近で爆発。どうやったと思う？」

「どう、とは？」

「S A Tは正面入り口だけにしかいなかったんだよ。屋上から降りる予定だったS A Tはロケットランチャーで撃ち落されて、降下に

失敗している」

そう、正面入り口にいたS A Tに屋上を攻撃する手段はない。それに、数秒で同じ攻撃がまったく異なる場所で起きている。

桐嶋長平はこの映像の意味を考えた。

「S A Tに連絡は取れるか？」

「それは本部長に聞いたほうが……」

そのとおりだ。桐嶋長平は早速、佐伯真人のところへ向かい、その後を副署長が付いて行く。

「本部長、S A Tと話はできますか？」

電話をしていた佐伯真人は唐突な質問に、少し面食らったようだが、可能だと答えた。

「今、彼らから詳細報告を受けています。なにか気になることが？」

「代わってもらえますか？」

「ええ。隊長、今副本部長と代わります」

電話機のボタンを押して、ハンズフリーに切り替えた。これで電話機周辺の人間全員との会話が可能になる。

S A T隊長です。なにか聞きたいことが？」

「あなたたちは、突入の際、屋上に攻撃を仕掛けましたか？」
行った

「爆発を伴う武器で？」

いや、サブマシンガンで撃っただけだ

「では、正面入り口で爆発が起きています。占拠犯はそれに巻き込まれているようですが、その攻撃はあなたたちが行ったものですか？」

いや、違う。占拠犯が榴弾の扱いに失敗しただけだと思うが

「では、S A Tの誰かがホテルに入ることになりましたか？」

いや。完全に失敗した。面目ない

それだけ聞けば十分だった。

「ありがとうございます」

桐嶋長平は一方的に会話を打ち切ると、再びビデオへ向かった。その姿を見送る佐伯真人は、どこか懐かしそうな目を向けていた。桐嶋長平の下で警官をしていた時も、彼はああいう風だった。事件解決の糸口を見つけると、周りのことが見えなくなり、思考に集中する。

「相変わらずだな」

しかし、なにか気付いたのだろうか。事件解決の糸口を。

「隊長、残りの報告は、電子メールで送ってください」
了解

佐伯真人は、桐嶋長平がパソコンでビデオ映像を解析している。彼は年に似合わず、パソコン関係に強い。五十歳をすぎてから学び始めたというが、それより前から扱っている自分より遙に熟達している。

「なにか気付いたのですか？」

「ああ、佐伯くん。とんでもないことに気付いたよ」

ビデオ映像の一部を拡大する。

「まず、屋上に爆発。次に、正面入り口。これは、明らかに同じ攻撃だと見ていい。それも占拠犯へ向けてのものだ」

占拠犯に向けての攻撃。だがSATは爆発を伴う武器は持っていなかった。スタングレネードでは、確かにこんな爆発は起こさないだろう。

「この二つの攻撃は同じ位置から行われたものではないかと推測してみた。そこで、角度を計算した。屋上と、正面入り口。この二つに攻撃できる角度だ。大体の位置を割り出ただけだが、しかし、映像の中に、こんなものが映っていた」

新館七階の窓を拡大された。

誰かが映っている。拡大されているため画像が荒く暗い。パソコン処理で画像解明度を上げているが、それでも人間が映っているの

が判別するのが限度だ。

「……なにかを持っている？」

そのなにかが光った。少し遅れてもう一度。その後、人影は移動したらしく、遮光ガラスの窓に遮られて見えなくなる。

「わかるかい？」

「……ホテル内部から誰かが攻撃した」

タイミングを考えれば、七階から屋上と正面入り口の占拠犯を、手にしているなんらかの武器で攻撃した。それが二度の爆発の正体。しかしS A Tはホテル突入に失敗しているのではなかったのか。

「一人だけでも入ることに成功したのか？」

「いや、時間的に考えて、それはありえない。屋上からも、正面からも、七階のこの位置に移動するのは、どう考えても不可能だ」

距離があるうえに、敵がいる。状況から考えて、短時間でこの位置に行くことはできない。それに、イベントホールから離れたこの場所に行く必要性もない。

「それに、先程一緒に聞いていただろう。S A T隊長に確認したが、侵入に成功した者はいない」

「……では、この人物は？」

S A Tではない。当然、占拠犯でもない。

「……まさか」

佐伯真人は、桐嶋長平がなにに気付いたのか理解した。

「そうだ。ホテル内部で、宿泊客か従業員の誰かが、占拠犯と戦っているんだ」

イベントホールにて報告を受けたワシントンはしばらく思索していた。

『失敗に終わったようだな』

ドモチェフスキーが非難するような目で見ている。

人質を囚とした罫は、確かに障害となっている少年を引き出すことに成功したものの、その結果さらに犠牲を増やすこととなった。部隊指揮をとっているハンスも右腕を切断された。今治療させているが、作戦終了まで戦力にはならないだろう。今後の仕事にも使えないかもしれない。

ワシントンは珍しく居心地の悪そうに、姿勢を少し直した。

『あー、確かに、彼らの能力を過小評価していたことは認めよう。まさか、平和な日本の学生が、ここまでするとは思っても見なかった。過大評価さえしていたつもりだったのだが』

銃器類の扱いに精通し、消火栓をロープ代わりに壁を降りて人質を救出した、アクション映画顔負けの少年。

日本刀一本だけで、サブマシンガンを持った兵士三人と渡り合った、ニンジャキッド。

日本は不思議な国だと聞いていたが、まさに信じられないようなところだ。

ドモチエフスキーは無線を手にする。

『やつは見つかったか？』

いいえ。どこにもいません

『外へは逃げていないはずだ。山林部へ入ったのなら、クレイモアにかかっている。必ずこのホテルの敷地内にいるはずだ。探し出せ』

『探すのは難しいだろうな。彼らのおかげで人員が少なくなった。』

現在の兵力は、我々を含めて、ちょうど二十名か』

ワシントンが指摘するが、どこか人事のような説明でもあった。

それは、殺された者たちが自分の部下ではないからなのか。今作戦に動員されている兵士は、ほとんどがドモチエフスキーの部下だった。

ワシントンの部下は、マクスエル、ハンス、ヨーキ、ケイミンの四人だけ。これだけではホテルを占拠することなど当然できるはずがなく、その人員を求めてドモチエフスキー率いる傭兵部隊を雇ったのだ。

傭兵は時に捨て駒として扱われる。それは承知の上であり、いまさら怒りなど感じないが、それでも不快感がないわけではない。しかしドモチェフスキーはいつも厳つい顔をしているためか、ワシントンは微妙な感情の変化に気付かなかったようだ。

『ならば、もう一度やつらから出てきてもらうしかあるまい』

ドモチェフスキーの言葉に、ワシントンは怪訝な顔をする。

『なにかいいアイデアでも出たか？』

『うむ。敵に勝つには、まず敵を知ることから始めなければ。兵法の基本だ』

イベントホールに放送が流れた。

「皆様。気付いている方もおられるかもしれませんが、実は人質にならずに、ホテル内を逃げ回っている人物がいます。我らが同志からの報告では、その人物はどうやら学生とのことです。学生といえば、そう、葉山中学校から修学旅行にこられていました。ともかく、その学生について情報が欲しい。ご協力くださった方は、感謝の証に、ホテルから開放しましょう」

ワシントンはマイクを置いた。

『こんなことで本当に出てくるかな？』

正直懐疑的だった。人質をおとなくさせるために強い恐怖を与えておいたため、助かるために情報を渡そうと考えるより、寧ろ下手に話せば殺されるのではないかと考える可能性が高い。

『だが、やつらの情報がわかれば、選択肢が多くなるだろう。やるだけ損はないはずだ。そもそも、やつらは本当にただの学生なのか？』

『どういう意味だ？』ワシントンは目を鋭く細める。

『こんなところで高い戦闘技術を持った子供、それも二人もうつつきまわっているなどと考え難い』

『計画が漏れていたと？』

『その可能性もある』

『しかし、いまさら中断するわけにはいかん』

『勿論だ。だが、作戦は多少変更せざるを得ないだろう』

ドモチエフスキーの説明を受けて、ワシントンは無線を手にした。
『ヨーキ、進行は？』

なんとか半分まで進んだ。さすがに残り二つはプロテクトが硬い。
しかし、時間さえあればなんとかなりそうだ

『わかった。計画変更の必要があるかもしれん。できるだけ急いでくれ』

ところで、彼はどうなった？ 例の抵抗者は

『今も我々の手から逃れ続けている』

信じられないな。本当に中学生なのか？ マクスエルの見間違い
ということとは？

『わからん。ただ、学生服を着ていたことは間違いない。とにかく、
そのまま作業継続だ。それと、子供には注意しろ』

了解

ワシントンは無線を置いた。

『さて、計画を変更するにしても、ヨーキとケイミンが地下金庫を
破るまでは、目途を立てられないな』

『それに、やつのも未解決だ』

『しかし、お前のアイデアは進展していないようだ』

イベントホールの客席では、特に情報を渡すものはいないようだ。
『修学旅行の中学生たちは？』

『仲間意識が強いのか、それとも本当になにも知らないのか、今の
ところ自発的に話すようなものはいないようだ』

周囲でささやき声が聞こえる。

「ねえ、誰だろ？」

「今いないのって、水神さんと五代くんだよな」

「じゃあ、やっぱりあの二人か？」

「きつとそうだよ。二人ががんばってるんだ」

「じゃあ、俺たち助かるかも」

「ばか、簡単に考えるな」

「でも、あいつらがなんとかしてくれるかも」

「警察に連絡してくれたのかな？」

「あ、だから突入部隊が来たんだ。ほら、さっきの銃撃戦の音」

「そうか。今も五代ちゃんと水神くん、がんばってるんだよね？」

「二人が上手くやってくれば、俺たちは助かるかもしれない」

周囲の話し声を聞きながら、土屋健司は考えた。この優秀な頭脳を駆使すれば、答えはおのずと見えてくる。

どうやら何者かが妨害しているため、占拠犯は計画が上手く行っていないらしい。警察の突入の失敗もそいつが絡んでいるに違いない。そのために佐藤健人が殺され、五代芽も見せしめに殺された。

そして、その妨害している誰かとは、他でもない、あの勘違い野郎だ。

「あのクズが」

五代明はヒーロー気取りで状況を引つ掻き回し、事態を悪化させたに違いない。

本来ならとくに開放されていてもおかしくないのだ。

全ては五代明が原因だ。

他の連中は、五代明が上手くやってくれたから、まだ助かっているのだと勘違いしているようだ、そんなはずがない。五代明にそんなことができるはずがないのだ。

逆に、このまま五代明に好き勝手にやらせていては、最悪の状況になるに違いない。

土屋健司は席を立ち、一番近くにいた見張りへ向かった。

「なあ、本当に開放してくれるのか？」

『敵は！』

『いません』

『近くにいます。探せ』

頭上からかすかに占拠犯の音がする。だが五代芽にはその言語はわからず、ただニュアンスからして中東で使われる言語のように思えるが、それも推測にすぎず、結局なにを話しているのかまったく理解できない。

兄が先に進んでいる。匍匐前進というのは聞いたことはあるが、初めてなので上手く行かない。

「大丈夫か？」

「うん、なんとか」

ホテル基底部の空洞を、二人は這って移動している。建築物において、地面と床が直に接しているということは少なく、たいていの場合、数十センチの空洞が設けられる。それだけあれば、なんとか移動できた。

時折虫や小動物がまわり付いてくるのがわずらわしいが、銃弾に比べれば些細なことだ。

「着いたぞ」

目的の換気口に到着した。三十センチ四方の金網で蓋がされている。

五代芽が図面から読み取る限りでは、ここが地下通路の入り口に接している。

顔を接してみると、五代芽の読みどおり、通路があった。左右に視界を動かして確認するが、敵の姿はない。ここから床まで二メートル程度。通風孔は、多少狭いが、なんとか通れないこともないだろう。

五代芽が照らすミニマグライトの明かりを頼りに、五代明はマル

チナイフのドライバーで留め金のネジを外し、金網状の蓋を開けた。床へ落すと大きな音が発するため、こちら側へ引き寄せる。

「俺が先へ行く」

通風孔は狭く、このままでは通ることは不可能なので、五代明は身に着けていた装備品をはずして、体面積を可能な限り小さくする。まず左手を入れ、次に頭を入れた。次に右肩。そしてヘビのように体を蠢かしながら、少しずつ通路へ。小さい通風孔を無理に通ろうとするため、ちよつとしたミスで身動きが取れなくなってしまうかもしれない。

だが、幸い引つかかってしまうようなことはなく、無事通風孔を通過し、床へ頭から落下するが、両腕で着地して、肘のクッションで上手く落下の勢いを緩和し、転がって分散させ、音もなく怪我一つなく、通路へ入ることに成功した。

「芽、拳銃を」

端的に指示を出して、通風孔から出された拳銃を、手を伸ばして受け取る。そして銃を構えて、周辺の確認作業を行った。

通路は単純なL型をしており、通風孔のすぐ近くには、金属製の扉が二つ。地下管理室と、下水に通じる扉。反対の、角を曲がったところに地下駐車場に通じる金属製の扉があった。全部鍵がかかっている。

敵の姿は地下通路のどこにもない。もしかすると、この通路の存在は、あの紙の図面だけにしか残っておらず、他のデータベースなどには記録がなくなっているのかもしれない。

「いいぞ。先に武器を下ろしてくれ」

通風孔に戻ると、残りの武器を全て受け取り、最後に五代芽を下ろす。妹には自分で着地するという芸当は無理なので、受け止めてよつと、両手を広げて待ち構える。反面、彼女は体が小さいため、

換気口を難なく抜け出ることができた。

「よいしょ、っと」

受け止めた妹の体は、羽のように軽かった。

兄は妹を壊れ物のように優しく地面へ降ろした。

下水道への扉は金属製で、極めて頑丈。鍵も簡単に出入りできないように、通常のシリンダー鍵と、U型の二つが付けられている。扉の鍵を、ナイフを使って開けようとしたが上手く行かず、手を止めて思案した。一人で動き回れるときに、マスターキーを入手するべきだったか。

銃で破壊するのは難しい。金属の種類や強度によるが、跳弾が起る可能性がある。手榴弾で破壊すれば、敵に聞こえてしまうので、当然除外。

となると、残りはもう一つの扉。こちらは同じく金属製だが、軽く叩けば明らかに薄い音が返ってくる。中は空洞で強度はほとんどなく、弾丸は貫通する。この扉の向こうに小部屋があるのだが、そこに鍵が保管されている、あるいは鍵を開けることができる道具が見つかるとは思えない。

「芽、少し離れてろ」

五代明は妹に距離をとるよう指示すると。制服の上着を脱いで、それを拳銃と腕に巻きつけた。

銃口をドアノブに向け、三発発砲。ドアノブごと鍵が破壊された。上着を即席の消音装置にすることによって銃声は抑えられ、五代芽には布団を軽く叩いたような音にしか聞こえなかった。上着は使い物にならなくなってしまったが。

「入るぞ」

扉を開けて伺うが、当然人の姿はない。占拠犯は勿論、自分たちと同じように逃げ回って隠れている人間もいなかった。

中は旧式のパソコンや、書類が並んでいる、小さな事務室のようだ。配線類が壁に剥き出しになっており、今では懐かしいダイヤル式の黒電話が一つデスクに置かれていた。

下水道に繋がる鍵を探すが、どこにもそんなものはなく、引き出しの中を全て調べても、発見できたのは小さな工具類だけ。ペンチ類であの鍵を破壊するのは難しいだろう。

とりあえず、壁に立てかけてあった折りたたみ式の椅子を、五代芽の分も用意して座った。

「どうやら、脱出は無理だな」

五代明は結論を伝える。

「うん」

五代芽はそれに衝撃を受けるわけでもなく、淡々と頷いて理解の意を示した。兄と一緒にいることで安心しているのかもしれない。兄と一緒にいるからといって、安心できる根拠などどこにもないのだが。

その兄の五代明は自問する。ここからどうすればいい。

芽は助けた。だが、人質は依然としてホールに捕えられたまま。

占拠犯の目的も不明確。

どうも、嫌な予感がする。

こんな大掛かりな占拠事件を起こし、テレビ局を呼んで宣伝までしたのだ。警察や政府になんらかの要求を突きつけたのは確実だ。

詳細や目的は不明だが、その要求は一部の例外を除いて、たいいてい受け入れられることはない。ドモチェフスキーならばその程度のこととはわかれると思うのだが、彼が今回の事件の首謀者であるとは限らない。少なくとも指揮を執る立場にあるのは確かだが。

あるいは、絶対に要求を通すことのできるなにかがあるのか。

占拠犯の行動に、ある種の不合理性を感じるのだが、具体的にどうおかしいのか、上手く指摘することができない。直接的な危険とは異なる、漠然とした感覚。情報が少なすぎるからか。

無線を聞いてみても、ノイズだけでなにも聞こえない。地下だか

らかもしれないが、おそらくは周波数を変えたのだ。自分を誘き出す作戦は、もう使う気はないということだろう。無線から情報を得ることはできなくなった。

「芽、イベントホールの状況を教えてくれるか」

「聞いてどうするの？」

まさか、助けに行くのだろうか。

「一応聞いておきたいだけだ。なにか役に立つかもしれない」

五代芽はわかつている限りの情報を伝えた。

クラシック楽団に扮して侵入したらしいこと。名前が思い出せない国会議員が殺害されたこと。ホテルの従業員も四人ほど殺されたらしいこと。C4爆薬が設置され、出入りが不可能になったこと。自分が連れて行かれる時は、見張りは五人ほどに減っていて少なかったこと。

そして佐藤健人先生が自分をかばって殺されたこと。

「……そうか、佐藤先生が……」

日本の中学校の教師は、たいてい威圧的で独善的、概して大人気なく年の割には幼稚な者が多い印象しかもっていなかったのだが、その中であって佐藤武人は敬意を持つ数少ない教師だった。

彼から教わったこと、おそらくは彼自身が自覚せずに教わり学んだことは多く、それは勉強や授業以外のことに多かった。

多くの人間を殺しておきながら、どうして人の死を悼むことができるのか。そんな疑問など意味はない。今感じていることが事実であり、真実だ。

だが、それも少しの間だけで、五代明はすぐに気持ちを切り替えて当面の問題に集中する。

「他になにかあったか？」

五代芽は首を振る。その切り替えの早さに、少し戸惑いながら。

「そうか。じゃあ、ちょっと現在の状況をまとめてみるぞ」

一。エンプレスホテルは謎の武装グループに占拠されている。人数は三十五人前後。そのうち排除したと確定できるのは十三人。

二。人質の人数は約三百人。死亡人数は、はっきりしているのは九人。

三。外へ脱出することができない。下水道の扉の鍵を開ける、もしくは破壊することができない。また、ホテルの周囲は見張りが巡回している上に、クレイモア地雷が仕掛けられている。これを突破するのは危険が高い。

四。イベントホールには爆薬が設置されており、人質が脱出することも、外から内部へ入ることもできない状態にある。

五。S A T突入は失敗に終わっている。次がいつ来るか不明。ただし、イベントホールの状態を知らない場合、再度の突入が成功すると、逆に人質が危険に晒される。

六。電話は管理室の制御で使用不能にされており、また携帯電話の中継器が破壊されているため、外と連絡を取ることができない。

七。敵の目的は現在不明。

「こんなところか。他に何かあるか？」

「えっと……ないと思う」

状況を確認し、五代明は付け加えた。

「あ、いや、まだあった」

八。ここは安全だと思われる。事件が終わるまでここでひたすらおとなしくするだけで助かる可能性が高い。

「ここで終わるまで待つのか？」

「少なくとも、事態が好転するような、あるいは悪化するなにかが起きない限り、動かないほうがいい。迂闊に動けば自分たちから危険に飛び込むことになる」

正論だろうが、自分たちだけ助かるというのは、釈然としない気持ちがあった。勿論自分たちになにができるのか。それに他の人質が死ぬと決まったわけでもない。

「殺されるだろうな」

五代明は断定した。

「どうして？」

「占拠犯は顔を隠してなかっただろ。自分の顔を見られているのに生かしておくわけがない。始めから殺すつもりだから、顔を隠していないんだ」

五代芽は途端に蒼白になる。

「たぶんイベントホールに仕掛けたC4を使って、最後の仕上げをするつもりだろう」

「なんとか助ける方法はないの？ このままじゃみんな殺されるよ」
懇願する五代芽に、助ける方法は実質一つしかないことを兄は説明する。

「それには、占拠犯を全員排除する必要がある。だが、SAT突入の時は、SATが敵を引き付けていたからだし、おまえを助ける時は、奇襲攻撃にグレネードランチャーがあつたからなんとかあったが、今は完全に俺の存在を知っていて、その上で対処しようとしている。この状況で敵を殲滅するのは不可能に近い」

敵を殲滅するという言葉を当然のように使っている五代明に、五代芽はかすかに恐怖を感じた。今まで知っている優しい兄とは程遠いような。それに、拳銃や武器をどうして使うことができるのだろうか。

五代明はそのことに気付いていないのか、続けて「もし事態を好転させる何かがあるとすれば、外と連絡を取ることか」

「外と連絡？」

「ああ、警察と連携すれば、人質を救出できる可能性が……かもしれない」

警察と連絡。五代芽の視線は電話に向けられる。

「電話はダメだ。電話は使えなくなっているし、それに管理室で使用する状況が表示されるかもしれない。これを使っているのが表示されたら、自分の居場所を教えるようなものだ」

そして逃げ場のないここに敵が押し寄せてくるだろう。そうならば今度こそ終わりだ。

だが、五代芽は考えてる。

「えっと、確か……」

視線をパソコンに向ける。そしてパソコンを覆っているシートを外すと、コンセントを確認し、パソコンの電源を入れた。電子音が鳴り、起動する。

「それ、使えたのか」

五代明はてつきり使い物にならないと思っていた。埃をかぶっている上、コンピューターに疎い兄でさえ古いと思うものだったので、もっとも、五代芽にしても動くと思信していたわけではないのだが。

「ちょっと待ってて」

五代芽はパソコンを操作し始めた。画面に様々な記録が映し出される。このホテルに係る図面に、電子書類。

五代明はコンピューター関係に明るくない。まったく使えないわけではないが、素人同然だ。

しかし、五代芽は違う。通信教育で情報技術に関する資格をいくつか習得している。普段は気が弱く、自分の意思を出すということがないため、学校では軽く見られているが、知能指数百五十の天才児だ。

しばらくして、五代芽は兄に明るい笑顔を見せた。それはこの状況下で、希望の光を見出したことによる喜び。

「大丈夫、管理室に表示されずに外と連絡できるよ」

マクスエルは一階付近を巡回していた。

サブマシンガンを手にながら、周囲の気配を探る。

人質で逃げ回っているのは、あのライトマンの他のもう一人いる。どういふ奴かはわからないが、かなりの強さを持っているらしい。

人質をおとりにした作戦で、兵士が数人殺され、ハンスも右腕を切断されたという。

そいつの武器は日本刀一本。それだけで銃器類を装備した傭兵を相手に渡り合い、その前には屋上から落下したにもかかわらず生存している。

ドモチエフスキーたちは日本のニンジャなのではないかと考え始めているらしく、真偽はともかく、便宜上ニンジャキッドと呼ぶことにしようだ。

マクスエルは正直、本物のニンジャだとは全く思っていなかった。ニンジャやサムライなど、戦争の無い平和な日本が、かつて存在したものを誇張して伝えただけの、幻想だ。

ハンスや他の者たちがやられたのは、油断か、あるいは必要以上に恐怖を持ってしまったためにすぎない。

問題なのはその恐怖には根拠があることだった。

『……ライトマン』

マクスエルは呟く。日本に帰ったとは聞いていたが、まさかこんな所で遭遇するとは。それとも、なんらかの情報を得てこのホテルに待ち伏せしていたのだろうか。

どちらにせよ、今は敵だ。最初は思わぬことに動揺し、そしてワシントンへ伝達することを躊躇い怠ったが、次に出会う時は全力で排除しなければならない。

今度は嘘を報告するつもりはなかった。

かつての仲間を見逃すのは、一度だけだ。

階段の付近まで移動すると、不意になにかの気配を感じて足を止めた。ライトマンだろうか。それともニンジャキッドか。

しかし気配を感じたと思ったそれは、改めて探しても何もなかった。

気のせいか。実戦も経験していない者が気配を絶つことなどできない。ましてや平和な日本の学生にそんなことができるはずがない。ライトマンに遭遇したために、多少神経過敏になっているのかもしれない。

銃を構え続けて疲れたので、少し体を伸ばすと、マクスエルは再び巡回を開始した。

数メートルほど歩くと、背後の再び気配を感じたような気がした、即座に振り返ったが、やはりそこには誰もいなかった。

やはり神経過敏だ。少し休んだほうがいいだろう。

九階のスイートルームでの戦いから、水神晴玄は逃げ回り続けた。宿泊室は鍵がかかっているため入ることができず、しかし鍵が開いている場所は、どう見てもすぐに見つかりそうな場所で、巡回兵の目を避けながら移動し続けた結果、一階に到着した。

階段の真下にある空洞は物置のスペースになっており、そこに身を潜めて巡回の様子を伺う。壁などがあるわけではなく、シーツなどが入れているダンボールが置いてあるだけだが、それでも隠れるには十分だった。

三十分以上ここで動かないでいるが、それは恐怖で動けないのではなく、単に疲れているだけだ。修学旅行で京都を歩き回った上に、この事件だ、疲れて当然だろう。睡魔が先程から耳元で囁いていることもある。

疲労と睡魔と格闘しながら、水神清玄はなんとか意識を保つ。

占拠犯は一連の戦闘で数が少なくなったらしく、発見されずにすんだ要因となったようだ。一階も二人姿が見えるだけで、素人の自分でも、なんとか隠れて移動できる。

だが、ここで隠れ続けるのは危険だ。そろそろ移動しなければならぬ。第一ここは位置が悪く、発見された時の逃げ道がない。もしあるとすれば、外。この位置は外へ出る扉のすぐちかくだ。ここからならば屋外駐車場へ出ることができる。駐車場には多くの自動車が駐車しており、あの数なら車体の陰に隠れるには十分。

少なくとも、ここにいないよりは発見される確立は少ない、と思いたい。

五代明なら、確信を持って行動を判断できるのだろうが、屋上ではぐれてから合流できないでいる。探せる状況でもない。

巡回兵が階段の前で止まった。音を立ててしまい、ここに隠れていることに気付いたか。

ダンボールの隙間から、光に当たらない位置で動かないようにして、水神清玄は巡回兵の動向を注視する。

サブマシンガンを手にしてこちらを窺っているようだ。

自分とそう変わらない年代のように見える、白人の男。銀色に近い金髪で、少女のように整った顔立ちは、戦場に生きているものとは思えない儚さだが、その目は異質なまでに冷徹。それが彼の生きてきた世界を物語っていた。

水神晴玄は刀を握ろうとして、止めた。気配を鎮め消すことに集中しろ。この巡回兵は確信していない。なにもないと判断すれば、立ち去るはずだ。

家の道場での禅を思い出す。なにも考えず、考えないということも考えず、ただ心を風にする。坐禅は組まなくとも、毎日のように行ったそれは、心を風にしてくれた。

予想通り巡回兵は、すぐに視線を変えて大きく伸びをすると、再び歩き始めた。

（今のうちだ）

しばらくして水神晴玄は音を立てないように、足早に外へ出た。建物の明かりから逃れるように、身を低くして影から影へと移り、大型SUVが駐車してある場所に到着、その車体の下に潜り込んだ。駐車場には巡回兵がおらず、建物からではこの位置は発見されないはずだ。少なくともしばらくは。

しかし時刻は二時を過ぎている。草木も眠る丑三つ時だけに、正直眠たい。だが、危険を考えれば、眠るわけにはいかないだろう。それに、肌寒い。秋の真夜中なのだから当然だ。

手にする刀を握り締め、体を横にして丸める。

ふと、停めてあるバイクが目に残る。なぜか見覚えがある。どこで見たのだろうかと記憶を探り、思い当たってポケットの中のキーを出す、同じロゴが入っていた。

この鍵で始動できると思うが、しかしバイクで逃げようとするれば、間違いなく銃撃を受ける。

今は諦めるしかない。だがあとで使うことになるかもしれないので、念のため駐車位置は覚えておく。

先程の戦いを思い出す。人を殺したことに対する罪悪感はあるではない。自分の中にはそういう感情が欠落しているかのようだ。それとも、緊張状態のため、一時的に麻痺しているだけなのだろうか。

鈴奈の顔を思い出す。一つ年上の従姉妹。自分の許婚。初めて会った時、正直可愛いと思った。あの、とても優しく明るい笑顔は忘れられないほど。

だが、笑顔を向けてくれたのは一度だけだ。初めて会った時が最初で、最後。

自分と対面している時の鈴奈はいつも、どこか警戒しているようだった。両親が勝手に婚約者にしたのが原因だとはわかっているが、しかし自分にはそれ以上どうしようもない。女の子と話をするのは得意ではないし、警戒感を持っている相手となればなおさら。話をしてもどこか気まずく、自然と疎遠となり、合った回数も両手を使

えば足りる程度。

鈴奈は、自分が人を殺したことを知ったら、どんな顔をするだろうか。

もう、二度と笑顔は見せてくれないだろう。

彼女と話をしようと約束した。

だが、生きて帰ったあと、彼女となにを話せばいいのだろう。
人殺しになった俺が。

五代芽がパソコンの蓋を開けて、黒電話と電線をいじっている。
古びているとはいえ、室内に工具類があったのは良かった。手持ちのマルチナイフだけでは対応できなかっただろう。

「これで、よし。お兄ちゃん、繋がったよ」

五代芽は電話機をホテルが使用している経路とは異なる経路で接続させた。

インターネットは電話線を使用しているのだが、通常の電話とは異なる信号が使用される。占拠犯がどのように電話を切ったのかは不明だが、物理的に切断したのではなく、管理室で操作して使えないようにしただけならば、インターネットには繋げることが可能だ。そして、このホテルのパソコンは、常時インターネットに接続されている状態のため、パソコンを使っても管理室に特別表示がされるということはない。そこで、パソコンと電話を接続させ、電話をパソコン経由でつなげた。つまり通常の電話回線ではなく、ネット回線を経由して電話が繋がるようにした。

正確には違うのだろうが、妹はわかりやすいよう、簡略で簡単に説明してくれた。

「……110は、ダメだろうな」

テレビで事件が発生してから、事件に関する問い合わせや、いたずら電話の類は多いだろう。ここで、ホテルの中から連絡している

といっても信じてもらえるかどうか怪しい。

「清一郎さんにかけてよう」

「おじいちゃん？」

「たしか携帯電話、持っていただろ」

小さいながらも貿易会社の重役である祖父は、仕事の関係で携帯電話を持っている。

配線接続に成功していれば、繋がるはずだ。

五代芽がキーボードで祖父の携帯電話の番号を入力すると、受話器から接続される前にかすかに鳴る電子音が聞こえた。

「……」

五代明は次の瞬間を待つ。正常に接続されると、高いがどこか柔らかい調子のベルのような音が鳴る。

五代芽も耳をそばだてて待った。

ルルルルル……

「繋がった」

五代明は妹の頭を乱暴に撫でた。

髪の毛がくしゃくしゃになるが、五代芽は構わずに兄の手の平の感触に喜んだ。

受話器からの音が約十秒経過して、消えた。変わりに祖父の声が届く。

現在電話に出ることができません。ご利用の方は発信音の後に、三十秒以内で、お名前とご利用件を入れてください

留守電だ。なんらかの理由で出ることができないようだ。あるいは、携帯電話をどこかに忘れたのか。

とにかく用件だけでも入れる。

「清一郎さん。俺だ、五代明だ。今」、エンプレスホテルの中から連絡している。これを聞いたら、留守電を解除して待っていてくれ。また掛けなおす」

電話機を置いた。

「留守電だったの？」期待が外れて残念そうな五代芽。

「ああ。でも、しばらく待ってからまた掛ける。そうだな……」腕時計を見る。「十分おきに掛けよう」

葉山市中学校では、深夜になっても修学旅行生の家族が集まっていた。

ニュースを知った家族が警察へ殺到し、それがきっかけで他のまだ知らずにいた家族にも連絡され、そして百人以上の人間が集まったのだが、市内の警察署では百名を越す人数を収容できる場所はなく、葉山中学校に協力を要請して、体育館へ集まってもらった。

そして警察関係者による臨時説明を行った。

修学旅行宿泊予定の京都エンプレスホテルで武装占拠事件があったこと。修学旅行生は人質となったこと。現在警察が全力を挙げて事件に取り組んでいるが、解決の見通しはまだ立っていないこと。

「どうしてくれるんだ!？」

「あんたたちに子供を任せたのが間違いだ!」

「責任は誰が取るんだ!？」

非難の声が上がる。それは警察に向けられたものでもあり、中学校職員に向けられたものでもあった。

その中で、五代清一郎は比較的落ち着いた様子で静かにしていた。隣に座る五十年來寄り添ってきた、妻の恵津子が数珠を持って、御仏に祈っていた。

「どうか、お願いします。あの子達をお救いください」

恵津子の願いは切実なものだった。

五代夫妻の娘と婿は、そして明と芽にとっての母と父は、十年前に亡くなっている。時を同じくして五代明は行方不明となった。状況から考えれば、両親と共に死亡したと考えるしかなかった。

一人残された孫娘の芽は二人にとってかけがえのない大切な宝となった。寂しくないようにと、いつも構っていたが、幼い頃はとも

かく、やがて年齢の違いというものが現れ、しかし内気な孫娘は友達が少ない、いつも寂しい顔をしていた。

そして三年ほど前、死んだと思われていた五代明が発見された。行方不明となっていた七年間、どこでなにをしていたのか一切話さなかったが、その年齢に相応しくない険しい顔は、けして安楽な少年時代を送ったのではないということが、容易に想像がついた。

それから老父母は、明が今までの過酷な境遇を忘れるようにと、大切に見守って育ててきた。

芽も兄にすぐに懐き、二人は仲のよい兄妹となった。

五代夫妻にとって、あの二人が全てだった。

二人の孫が、二人のかけがえのない大切な宝物だった。

ブルルルル……

五代清一郎の携帯電話が鳴った。

周囲の人たちの注意を引き、五代清一郎はその場を立つた。おそらく仕事関係の連絡だろう。留守電にしてあったが、音を切るのを忘れていた。

「すぐに戻る」

体育館を出ると、電話は切れた。留守電に内容は入っているだろうが、確認せずに、無音設定にして、すぐに体育館に戻る。

五代清一郎の仕事は夜遅くまで行われるもので、こんな時間に連絡があることも珍しくはない。

「あなた、お仕事はいいんですか？」

妻の恵津子が聞く。その声は、ここは自分だけで構わないから、仕事に戻ることを進めているようでもあった。それは妻なりの心遣いなのかもしれないが、しかし五代清一郎は、この年代には珍しく家庭を第一とする人格で、仕事は家庭を支え守るために手段でしかなかった。

「仕事などしている場合ではない」

携帯電話からバイブレーターが振動した。無音設定にしたが、今度はバイブレーターを止めていなかった。内ポケットの中で震える

携帯電話は、周囲に迷惑はかかっていないようなので、放って置くことにした。

「以上が、現在判明していることです。何かご質問は？」

警察の説明が続くが、明確な内容はなく、事件そのものが判明している事が少ないのだということがわかる。同時に、発表できることが少ないのだと。

「息子は無事なんだろうな！？」

「娘は？！ あの子は生きているの！？」

「いつ帰ってくるんだ！？」

わかるはずのない質問が浴びせられるが、当然警察は、人質はただ無事だという、ありきたりな答えだけ。

五代清一郎は妻の手を握り締めた。

「大丈夫だ。あの子たちはきっと」

五代恵津子は気丈に笑みを浮かべる。

「わかっています」

二人の絆はなにより強く、その絆が二人の孫に繋がっていることを信じ、それが二人の命を救ってくれる絆であると信じていた。

ブルルルルル……

携帯電話がまた振動を始めた。よほど緊急の要件なのか、何度も繰り返してくる。

「すまない」

五代清一郎は立ち上がって体育館を出る。

こんな時に何度も電話を掛けてくるとは、会社の連中はどういう神経をしているのだ。苛立ちにボタンを押して受話器へ向かって怒鳴る。

「どういふつもりだ。今どんな状況なのかわかっていいのか！」

清一郎さん！ 俺だ！ 明だ！

その返答に、五代清一郎は一瞬呆気にとられた。

「……明？」

エンプレスホテル占拠事件対策本部にその連絡が入ったのは、午前三時近くだった。

「本部長！ 署長！ エンプレスホテルから人質が連絡を取ってきたそうです！」

慌ただしく会議室に入ってきた副署長が叫んだその言葉は、全員の注意を引いた。

「どうということだね？」

桐嶋長平署長が尋ねる。

副署長はテーブルに置いてあった、本来なら本部長が飲むはずのお茶のペットボトルを握ると一息に呷り、少し落ち着いてから説明を始めた。

二十分ほど前、人質となった家族が集まっている葉山中学校で、集まった家族の一人、五代清一郎の携帯電話に、孫、五代明を名乗る人物が電話を掛けてきた。

五代明は葉山中学校修学旅行生の一人で、現在エンプレスホテルの中から電話を掛けており、そして至急警察と連絡したい旨を伝えた。

そして五代清一郎は、すぐに中学校に来ていた警官に連絡をした。

「犯人が、脅して掛けさせたということか？」

「あるは、偽者か」

そんなことをする必要がどこにあるのか、しかし人質となっているはずの子供が、なぜエンプレスホテルから電話を掛けられるのだろうか。

「声から判断して、本人に間違いないそうです。向こうの署でいくつか質問をして確かめたところ、家族しか知らないはずのを知っていたことから、少なくとも本人に間違いないと判断したようです」

「こちらから連絡はできるか？」

佐伯真人は尋ねる。事態を正確に把握するには、直接話をするのがもっとも早い。

「いえ、向こうから掛けてくるそうです」

「どうやって？」

「警視庁の命令で、こちらの電話番号を伝えたそうです。それで、午前三時にこっちに掛けてくると」

午前三時。あと五分だ。

「会議室とつなげられますか」

「もうつながりました」佐伯真人のテーブルにある電話を指差し「その電話につながります」

会議室は静寂に満ちた。

15・AM03:00

京都エンプレスホテル占拠事件対策会議室で、本部長席の前に置いてある電話が鳴った。

佐伯真人はテーブルの上に設置された電話の通話ボタンを押した。

……もしもし。聞こえているか

スピーカーから会議室全体に声が聞こえる。

「聞こえている。君は五代明くんだね」

そうだ。あんたは？

「対策本部長の、左伯真人だ」

警察でいいんだよな

「勿論」

……は……

脱力したようなため息が聞こえた。安堵の息だろう。

「大丈夫かい？」

一応、無事だ

「怪我は？」

ない

受け答えは短いが明確で、動揺や混乱した様子はなく、意思の強さが現れていた。質問などにはしっかり答えられるだろう。

「よかった。早速だが、いくつか質問があるんだ。いいかい？」

ああ

「君はどうやって電話を掛けているんだい？ 人質の中から掛けてきているのかな？」

いや、別の場所だ。旧館の地下にあった管理室。今は使われていないみたいだが、機能は残っていた

「君は人質の中から逃げて、そこに隠れたということかな？」

違う。事件が発生した時は割り当ての部屋にいたんだ。まず、占拠犯は宿泊客のほとんどがいるイベントホールを制圧して、その後ホテルに残っていた人間の対応に当たったらしいんだが、その時なにかやつらに見つからずにすんだ。後はあちこち逃げ回って、まあ色々あつて旧館の用水路につながる地下に逃げ込んだ

「なるほど。では、どうしてすぐに連絡ができなかったのかな？」

ホテルの電話が、ホテル管理室の操作らしいが、使用不能状態にされていて、部屋に取り付けられている電話じゃつながらなかった。それでここにあつたパソコンを使って、インターネット経由で電話をつなげた

「君はコンピューターに詳しいのかい？」

違う。つなげたのは別だ。今、代わる。ほら

声が女の子の声に変わった。

もしもし

「君は？」

五代芽です

「無事だったのか！？」

占拠犯が報復に殺すと宣言されていた女の子の名前。そのことに会議室はにわかに喜びに包まれる。

お兄ちゃんが助けてくれました。それで、その、さっき、なんとか電話をつなげて、それで……

上手く言葉をつないで説明することができないようだ。恐怖と興奮、安堵もあるのだろう。

「とにかく、無事でよかった。明くんに代わってもらえるかい」

代わった。状況を説明しておきたいんだが、いいか

五代芽は不安と恐怖でやや混乱しているようだ。五代明は極めて冷静で、事態を把握し、必要なことがなにか理解しているようだ。

「頼む」

まず被害状況。正確な人数は不明だが、人質のうち少なくとも九人が殺害されたようだ

ワシントンが説明していたとおり、すでに被害者は出ていたことが裏付けられた。

504号室に宿泊していた二人 五代明は名前を告げる。これは、運転免許証を見て確認した。それから名前は不明だが、ホテルの従業員が四人殺害されたい。それと国会議員、これも名前は知らないが、よくテレビですぐに切れて騒動を起こす人らしい国会議員がエンプレスホテルのクラシックコンサートに招かれた情報は入っていた。彼も殺されていたのか。

これで、少なくとも八名が殺されていることが判明した。

「……あと、一人は？」

九人が殺されたと説明していたが、まだ一人残っているので促したが、返答がない。

「五代くん？」

……最後の一人は…… 水神晴玄……

水神晴玄。すぐに会議室の端で担当員がその名前の照合を始めたが、その名前が誰の者なのかは、五代明が説明した。

俺のクラスメイトだ。……逃げている時に、銃撃を受けて屋上から転落した

左伯真人は、桐嶋長平と顔を合わせた。五代明は、クラスメイトが殺されるのを見たのか。

「そうか。……気の毒に。とても残念だ」

……ああ

しばらく沈黙が続いた。受話器の向こうで、先程の女の子、芽のすすり泣く声が聞こえる。彼女も知っている人物、おそらくは友人だったのだろう。

水神くん……どうして……

どうして水神清玄が、まだ中学三年生という若さで死ななければならなかったのか。

誰もが悲しみを覚え、怒りを覚えた。

水神清玄の実家で、学校から戻った水神清玄の母親と祖父が、彼の従弟であり許嫁である鈴奈から、一時間ほど前の電話の話を聞いた。

「どういうことだ？」

祖父は本当に理解できないという風に眉根を顰めた。

「いえ、私にもよくわからないんですけど、とにかく人質にならずに逃げまわっているみたいなんです」

鈴奈はこれ以上簡単な説明は思いつかなかった。清玄からはほとんど説明らしい説明がなかった。というより、携帯電話の電池が切れて説明できなかったのだ。もっとも、あの清玄だ、携帯電話の使い方間違えたのかもしれないが。

「お父様、警察に連絡したほうが……」

水神清玄の母が、進言する。

祖父は厳つい顔で黙考する。細い顔つきだが、鋭い眼光は並のチンピラやヤクザなど圧倒する。その彼の顔で沈黙されると、周囲は落ち着かなくなるらしいが、この場にいる二人は見慣れているので、特に何も感じなかった。

「電話はつながらないのだろう。ならば止めたほうがいい。警察の仕事に返って障る」

電話で連絡を取り合えば、ホテルの内部を知り、また連携した行動がとれるだろう。しかし携帯電話の電池が切れているのならば、なんの意味もない。

「でも、あいつ無事なんですよ！ 連絡して助けてもらわないと！」
鈴奈は思わず叫ぶ。その口調が非難するようだったのは、冷酷とも思える判断だったからか。

「警察が清玄を助ける時は、他の人質を救出する時に一緒に救出されるということでもある。あいつ一人を外へ出すというのは不可能だろう。もし仮に、それをすれば、あいつ一人を救出するために、

他の人質を危険にさらすことになるということになる」

「そんな、見捨てるんですか!？」

鈴奈は祖父の言葉が信じられなかった。手塩にかけた孫を、他の人質の安全のために見捨てるなど。血のつながった者ならば、他人よりも自分の家族のほうを大切に思うのが当然のはずだ。

「心配するな。あいつにはみつちり仕込んである」

祖父は拳骨を作って見せた。老齢に達しているにもかかわらず、その腕には隆々たる筋肉が浮き上がる。物心ついた時から武術の修練に明け暮れた者の、見せかけではない本物の筋肉。

「あいつはまだまだ細っこいが、技のほうはなかなかのものだ。簡単にくたばりません。きっと今頃、占拠犯どもをぶちのめしとる」

その水神清玄はSUVの下で眠っていた。

食べられなかった豪勢なディナーの夢を見て。

対策本部で佐伯真人は告げる。

「五代明くん、しっかりして欲しい。友達が亡くなって辛いのはわかる。君たちには残酷なことだろう。しかし、今はしっかりしてほしい」

わかってる。敵の情報を伝える

「頼む」

占拠犯はイベントホールに人質を集めている。さつきも説明したが、当初クラシックコンサートが開かれていたイベントホールを制圧。その後、ホテル内に残っていた人間の処理に当たったらしい。その後は、巡回を継続している。人質の人数は正確には不明だが、三百人以上だと思われる。敵の数は、当初は少なくとも三十六人。

三部隊編制で、一部隊十人。それぞれに指揮官が付いている。そして総指揮官が一人。それからホテル管理室で、ホテルの電話などを管理している技術者が、たぶん二人。合計して三十六人。現在は二十三人ほどだと思う

その説明に気になるところがあった。

「現在は二十三人ほどというのは、どういう意味かね？」

…… 占拠犯のうち、少なくとも十三人を、俺が殺した会議室はにわかに騒然となる。

中学三年生の少年が、占拠犯を殺害した。その事実を彼らを大きく動揺させた。

…… おい、聞いているか？

「ああ、聞いている。…… 確認するが、占拠犯三十六人のうち、十三人を、殺害したんだね」

そうだ

五代明の声には、占拠犯を殺したことに對する罪悪感はないように聞こえるが、だからと言って誇らしげでもなく、どこか事務的に答えている。あるいは、冷静を保とうとしてそのように聞こえるだけなのか。

「…… 五代くん」

さすがに呆然として次の言葉が継げない佐伯真人に代わり、桐嶋長平が五代明に尋ねる。

あんたは？

急に声が変わったことで、五代明は怪訝な声。

「副本部長の桐嶋長平だ。一つ聞くが、S A Tが突入したことは知っているかい？」

警察の特殊部隊だな。ロケットランチャーでへりを撃ち落とされて全滅しかかっていた

「そうだ。彼らをホテル内部から何者かが援護していたらしいのだが、それは君なのか？」

俺だ。奪ったグレネードランチャーで、占拠犯を攻撃した

これではつきりした。SAT突入の際、ホテル内部からの援護を行った者の正体。

五代明。この中学三年生の少年が、突入部隊を救ったのだ。

あいつらの装備品について説明する

会議室は気を取り直して、彼の言葉に集中する。

アサルトライフル。スナイパーライフル。サブマシンガン。オートマティックハンドガン。グレネードランチャー。手榴弾にスタングレネード。あと、もう知ってるだろうけど、ロケットランチャーだ。

大まかな種類を説明したのち、五代明は具体的な説明を始めた。銃器の種類、製造メーカーなど。模造品なども混じっているだろうが、ほとんどの銃器類を五代明は詳細に説明した。なぜそんな知識があるのか、会議室では疑念に思う者もいたが、軍事マニアなのだろうと深く考えなかった。

しかし占拠犯はそれほど充実した装備をいったいどこから調達したのだ。

ロケットランチャーは、俺が破壊した。一応あいつらから奪った無線を持ってるんだが、それで傍受した限りじゃ、グレネードランチャーを屋上に打ち込んだ時、直撃して破壊されたい。それからグレネードランチャーも使った後、三階から投げ捨てた。たぶんもう使えなくなってるはずだ。あれ一つだけだったらの話だが。あと、まずいことに、C4爆薬が仕掛けられている。イベントホールに十数個、センサー感知式。センサーはイベントホールの出入り口に配置。たぶん赤外線式で、中に入ろうとしたり、人質が逃げようとする、センサーが感知して、起爆される

つまり、救出するのも脱出させるのも困難。もしSATの突入が成功していたら、人質は全滅していたということか。これは、不幸

中の幸いというべきなのだろうか。

あとは、ナイフとかだ。これくらいか？　まだ説明していないことってあったか？　質問してくれ

「占拠犯の顔を覚えているかい？　特徴があれば教えて欲しい」

ああ、そうだった。占拠犯は外国人が多い。ロシア系が半数。あとは中東と白人、東洋系を三人見たが日本人かどうかはわからない。排除した占拠犯の遺体を何人が調べたが身元に繋がるようなものはなかった。それと、一人知っている顔がいた

知っている顔？

「誰だ？」

旧ソ連軍大佐、ドモチエフスキー。旧ソ連軍で特殊部隊スベツナズを率いていたって聞いている。ソ連崩壊後は中東の警備会社、というか民間軍事会社、つまり傭兵派遣会社に係わっていた。ソ連が崩壊したさい、軍に所属していた兵士の多くが職を追われたって聞いたことがある。細かいことは知らないが、路頭に迷った彼らを拾って設立したらしい。ただ、四年前に中東で起きた内乱で、政府軍に雇われた時に、行方不明になったことで、死亡したんじゃないかって言われてたんだが。まあ、ここで生きているんだから、潜伏していただけなんだろうな

「ちよつと待ちなさい」

佐伯真人は若干厳しい口調で制止した。
なんだ？

「どうして、君はそんなことを知っているんだ？　君は中学生だろう。そんな事情をどこで知ったんだ？」

平和な日本の中学生が、ここまで軍事情勢に詳しいなどありえない。ましてや、それが個人的なことになればなおさら。軍事マニアだとしても、その範疇を超えている。

旧ソ連軍大佐ドモチエフスキー。警察でさえ知らないような名前を、どこで知ったというのだ。どうやって知ることができるのか。
受話器からは返答はない。

地下で五代明は受話器を手に沈黙していた。

説明に信憑性がないと疑われ始めている。ある程度予想していたことなのだが、しかし、信じて貰わないことには話が進まない。助かる確率も低くなる。

となると、今まで誰にも話さなかったことを話す必要があるだろう。誰にも話したくなかったことを話さなければならぬ。

五代君、どうなんだね？ なぜ君はそんなことを知っているんだい？ 今は緊急事態だ。いい加減なことは冗談でも口にしてはいけない。君にはわかつているはずだ

厳しい口調で受話器から対策本部長の佐伯真人が聞いてくる。

不意に五代明は、妹に目をやった。

「……お兄ちゃん？」

その視線に五代芽は少し動揺したような顔をする。妹を動揺させるとは、今の自分はどんな顔をしているのだろうか。

しかし、五代明はなにもなかったかのように受話器に戻る。

「清一郎さんと恵津子さんは、この話を聞いているのか？」

清一郎と恵津子…… 佐伯真人には一瞬誰のことを言っているのかわからなかったようだが、すぐに祖父母のことだとわかったのかいや、彼らは聞いていない。ただ、警視庁には聞こえている

「そうか……」

五代明は再び沈黙し、一つ深呼吸をする。

「……五代くん？」

「1990年八月。イラク、クエート侵攻。1991年一月。イラク軍と多国籍軍による戦争開始」

呼びかけに答えるように、だがいささか唐突な内容の話を始めた。それが、どうしたんだい？

「俺は当時、クエートにいた」

会議室に緊張感が漂った。

1990年八月、イラク、クエート侵攻。1991年一月、国際連合が多国籍軍派遣決定。

これらの一連の戦争は、湾岸戦争と呼ばれる。

当時貿易会社に勤めていた五代夫妻は、七歳だった明を連れてクエートに出張していた。

妹の芽は、四歳とまだ幼かったため、祖父母の所へ預けられていた。

そしてイラクの侵攻が始まる。その戦闘に巻き込まれた五代夫妻は死亡。七歳だった五代明はわけもわからずに一人戦場に取り残される。

「当時の俺には、どうすればいいのかわからなかった。なにかあった時には大使館に行けと言われていたが、大使館は軍に占拠されていた」

イラク政府は各国大使館を包囲し、人質として扱ったことに、国際条約に反すると世界中から非難を浴びた。

両親が死に、助けを求める先もなく、怯えて隠れるしか生き延びる方法が思いつかなかった五代明を助けたのは、皮肉にもイラク側に雇われていた傭兵派遣会社だった。

怪我の手当てをし、食事を与えられ、安全な場所にまで運んでくれた。

「だが、ただで助けられたわけじゃない」

その傭兵派遣会社はある特殊な兵士で構成された傭兵部隊であり、またある特殊な人材を育成することで有名だった。

その特殊な人材とは、年齢十七才以下の少年兵。チャイルドソルジャー。

現在世界で三十万人以上の未成年者が兵士として戦争に狩り出さ

れている。その少年兵を専門的に扱う会社。

明はそこで育てられることになり、数々の戦闘技術、武器、兵器の扱いを教え込まれ、自身も貪欲に学んだ。

生存するにはそれしかなかった。生き延びるにはそれしか方法がわからなかった。

その必死の思いが自身を支えたのか、あるいは元々才能があつたのか、若干十歳で少年部隊、スモールボーイユニットを率いる優秀な兵士となっていた。いかなる不利な状況であつてもけして勝機を見逃すことなく、確実に勝利を捕らえる。その強さに敬意を表し、元々の名前と重ねて、勝利の光明、ライトマンと呼ばれるようになった。

そして1997年、中東の小国で発生した内戦に少年兵派遣会社が政府軍に雇われ参戦。この時、ドモチエフスキーの率いる旧ソ連傭兵部隊も参戦しており、共同作戦を実行する予定だった。

しかしその作戦直前に総指揮官ロイヤルハントが銃撃を受け、死亡。

作戦の指揮官の突然の戦死、またその他にも、敵の奇襲を受けるなどの要素と重なって、作戦部隊は壊滅的打撃を受ける。

ライトマンが率いる少年部隊の十三名は、本隊が消失した事実により、完全に孤立する。

会社の会長でもあつたロイヤルハントが死亡したため少年兵派遣会社は事実上瓦解した。本社に戻っても、おそらく権力争いが始まり、それは殺し合いと同義であり、それに巻き込まれて死ぬ確立が高い。

そこで、ライトマンは生存を第一優先として、紛争地域を一気に横切り、百キロ先の難民キャンプへ移動。PKOに保護を求めることにした。

それは危険が高かったが、見事に死亡者無しで成功し、PKOに保護され、その後戦災遺児センターに移された。

当然、自分たちが兵士であることは誰にも話さず、所属は紛争に

よって壊滅した村の出身と偽った。そこでは戦争遺児を匿っており、そのために国籍が混在しているのだとも。

その時、国籍が明確な者はそれぞれの国へ送られ、五代明も日本へと帰った。この時十四歳。

「日本に帰った後でも、七年の間なにをしていたのかは、誰にも言わなかった。何度聞かれてもな」

そして祖父母の存在がわかり、二人に引き取られ、妹と七年ぶりの再会を果たした。

二人に聞かれても、七年間一体なにをしていたのか、けして答えなかった。それでも、両親の面影が確かにあったのか、祖父母は保護者となり、今までのぶんまで大切にしてくれた。

ただ、些事ではあるが、義務教育の問題があり、文部省からの指示でテストを受けた結果、小学校は特例で免除されたが、中学校へは行くようにと指示される。

半年後、1998年四月。五代明、十五歳。中学校へ入学。三歳年下の妹と同級生という少し奇妙な学生生活が始まった。

その後は小さな問題を起こしつつも、大過なく平和に過ごす。

会議室本部は異様な雰囲気満ちていた。

中学三年生だが十八歳という年齢から、なんらかの事情があるという推測はされていたが、これは想像を遥かに超える。

ファックスで送られた五代明の関する書類を見る。当然、少年兵としての経緯は記されていないが、彼の話しと照らし合わせて、矛盾するようなことはない。

おい、聞いているのか？

五代明が聞くと、半ば呆然としていた佐伯真人は我に返る。

「ああ、聞いている。その、なんと言えればいいのか……」

戦災遺児センター経由で日本に帰ったから、その辺を調べれば記

録が残っていると思う。といっても、俺を日本へ送ったって言う程度だろうが

「その記録なら、ここにある。君の事に関することは、わかる範囲で一応事前に調べておいたんだ。確かに、矛盾するようなことはない。それにしても……」

うん？

「大変だったんだね。よく、無事で帰ってきた。無事に生きて帰ってきてくれた」

五代芽は泣きそうな顔で兄の腕を握り締めた。

「……お兄ちゃん」

両親が死んだことで、自分が不幸だと考えたことは一度や二度ではない。自らの不幸を儚み、悲しみに浸ったことも。

だが、それがどうしたというのだ。

自分が日本で安全に生きている間、祖父母に大切に育てられている間に、兄はどんな過酷な状況下にいたのか。

それこそ、比べ物にならない。

「お兄ちゃん……」

妹は、その温もりを確かめるように、兄の腕を抱きしめた。

兄は、その温もりを確かめるように、妹の頭を撫でた。

「改めて聞くが、そこは大丈夫なんだね。今、隠れている場所は、安全かという意味だが」

ああ、まず大丈夫だ。地下一階にある管理室、の跡みいただが、今は使われていないらしい。地下駐車場への入り口も鍵が閉まっていたから、占拠犯はたぶん、ここを閉鎖して安全と見たんじゃないかと思う

「そうか。よくがんばった。後は我々に任せてくれ。君たちは、そこで休んでいなさい」

わかつている。ところで、聞きたいことがあるんだが？

「なんだい？」

やつらはなにを要求したんだ？ ホテルを占拠してなにもしないなんてことはないだろ

佐伯真人は少し答えるのを躊躇ったが、桐嶋長平が話すのを視線で促す。

「……現金百億円」

……それだけ？

「そうだ。十分大金だと思うが？」

いや、それは、そうなんだが。要求したのは、金だけなのか？

「そうだ。なにか気になることでも？」

ここまで大規模なことをするより、普通に金庫破りでもしたほうがまだ危険も少ないと思うんだが

指摘されて会議室の全員が考えた。確かにそのとおりだが、単純にそこまでの技術がなかったただけなのかもしれない。そのような多額の金額、あるいはその金額に順ずるもの、金塊や宝石、美術品を保管する金庫はセキュリティが高い。破るには高度な技術が必要だ。そもそも百億円なんて金額、簡単に用意できるはずがないだろ。

人質を取って脅迫すれば可能とか、そういう問題じゃなくてだな、用意することそのものが困難なはずだ。そんなことがわからない連中じゃないはずだ

佐伯真人と桐嶋長平は顔を合わせた。お互いの表情から、同じことを考えていたことを確認する。

「確かにそのとおりだ。我々もそのことに関しては考えていた。しかし、情報が少ないためこれといったことが思いつかなかった。君は今までになにか気になることを見たり、聞いたりしたかい？」

「いいや、なにも。強いてあげるなら、ホテルの支配人が尋問を受けていたようだ

「尋問？」

ああ。あまり気にしてなかったが、なぜかイベントホールから離れた旧館の支配人室に連行されていた。いいか、占拠犯の総指揮官はイベントホールの舞台管理室を陣取っているらしい。なにか聞きたいことや、脅しをかけるならそこで十分だろ。なんでわざわざあんな離れた場所に連行する必要があったんだ？

旧館の支配人室になにかあったからか。

「なるほど」

だけど、あまり深い意味はなかったのかもしれないが。情報が少なすぎてなにも思いつかない。それらしいことといえば、これくらいだ

「わかった。では、君たちはそこで隠れていてくれ。後は私たちがなんとかする」

ああ。頼む

アー、あー

唐突にスピーカーから声が流れた。

マイクのテスト中。マイクのテスト中

男の声だ。おそらくは占拠犯の誰かだろう。

がんばっている中学生。少し話がしたい。近くの電話に出てくれないだろうか。内線ボタンを押してくれればすぐにつながる

五代明は放送を聞いてどうすべきか少し迷う。どう考えても誘き寄せる罠だが、しかし占拠犯は呼びかけに素直に答えると考えているわけがないだろう。

予想通り、次の声が届く。

五代、聞けよ。俺だ。土屋健司だ。いいから出て来い。おまえが余計なことをすると、みんなに迷惑がかかるんだ。これ以上めっちゃくちゃなことをする前に、おとなしく出てこいよ。わかったな？

そしてワシントンの声に戻る。

このとおり、君の友人の土屋健司くんが君の事を教えてくれた。実にすばらしい友情だ。真の友は、真実というものを教えてくれる。わかるだろう？

よくわかる。

おそらく、抵抗する者の正体を教えてくれた者は解放するとしても言っただろう。

そして、その言葉を真に受けて、のこのこ出てきたバカが一人いたわけだ。少し考えれば、いや、考えるまでもなく、情報を引き出すための嘘だとわかりそうなものだというのに。

「対策本部、今のは聞こえたか？」

警察署対策本部会議室への電話はつないだままにしてある。

聞こえた

「とりあえず、あいつらと話をしてみる」

待つんだ。どう考えても罠だ。君が行けば、殺されるだけだ。人質に取られたクラスメイトを助けるために彼らの前に出れば、確実に殺される。十人以上も殺したのだ、たとえ子供でも容赦しないだろう。事実、占拠犯はSAT突入の報復に五代芽を処刑しようとした。

「やつらの前に入るつもりはない。電話に出るだけだ。あとは、今

までと同じように逃げ回る。芽、おまえはここに残れ」

「お兄ちゃん!?」五代芽は、本気で出るつもりなのかと驚愕する。
「ここは安全だ。おとなしくしている限り大丈夫だろう。おまえはここで、対策本部に中継していてくれ。そのパソコンを使えば、内線の会話を中継できるよな?」

確かに可能だ。しかし、問題なのはそんなことではない。敵の罠に自分から入る込む兄のほうの問題だ。

「お兄ちゃん! 行っちゃダメ!」

しかし、このまま沈黙を通せば、イベントホールの人質は、さらに危険に晒されるのは間違いない。

「大丈夫だ。なんとかする」

五代明は武器を手早くチェックする。ハンドガン二丁に予備マジガン三つ。サブマシンガン一丁に予備マジガン四つ。スタングレネードが二個。足にナイフ。袖にペーパーナイフ。胸ポケットにミニマグライト。

「それじゃ、おとなしく待っている」

待ちなさい! 危険だ! 出るんじゃない!

受話器から自制するよう叫ぶ声が聞こえたが、五代明は構わずに外へ出た。

五代明は直接ホテルへ出るのを避けて、地下駐車場の扉を選んだ。地下から地下駐車場へ向かう扉は鍵がかかっているが、鍵は内側のほうから開けられる。これは地下に閉じ込められることがないようにとの配慮かもしれない。反対に、地下下水道へはホテル側が鍵をかけられるようになっており、外側からは空けられない。

音を立てないように静かに鍵をはずし、それでもかすかに金属音が鳴ったが、突然攻撃を受けることはなかった。

少しだけ開けて、いつものように手鏡で周辺を確認、誰もいない

ことを確認すると、地下駐車場へ出る。

巡回兵の姿は一切ない。警戒しながら進み、なるべく妹への危険を少なくするため、遠くの新館のほうへ入った。エントランスホールが見えても誰もいない。

壁の影になる位置に立って、念入りに確認するが、やはり誰もいない。

（どういうことだ？）

今までの占拠犯の対策は、索敵巡回のために戦力を分散させていたため、結果的に各個撃破できた。これを教訓として敵がもっとも効果的な方法を考えたのなら、おそらく自分を電話に出させることで位置を正確に割り出し、そこに戦力を集中投入することで、反撃を受ける余裕を与えずに、処理する。そう考えるのが自然だろう。五代芽を処刑する時にこれをしなかったのは、なんらかの形で自分の存在が警察の突入部隊に知られ、それに協力するような形で強襲を再開された時のことを用心してか。あるいは単純に、誘き出しさえすれば、多くの戦力を使わずとも、簡単に処理できると考えていただけなのかもしれない。

だが、二度目の今は、多少の危険を覚悟で、完全に排除するつもりか。

周囲を確認しながらエントランスホールに入った。公衆電話を見つけて手に取るうとしたが、少し考えて、三つの公衆電話の受話器を全て開けた。そして受付の電話も開けると、最後に奥の事務室に入る。逃走経路として窓を確認、いつでも逃げ出せるように鍵を開けておく。

これで、エントランスホール全体の電話が使用状態に入り、正確な位置を掴むのに少しの手間がかかる。ほんの少しの時間、十秒程度かもしれないが、一瞬が命取りになる戦場だ、なんでもしておくべきだ。今まで、その少しのことで生きながらえてきたのだ。

そして、事務室の受話器を手にし、内線ボタンを押した。

イベントホール制御室にて、電話が着信を知らせる音を鳴らし始めた。

ワシントンとドモチェフスキーが顔を合わせる。ワシントンは楽しみに、ドモチェフスキーは忌々しげに。

受話器をとると、ワシントンは親しげな口調で確認する。

「やあ、君が五代明くんだね？」

すぐに返事が返ってくる。

そうだ。あんたは？

「今ホテルを占拠している革命軍のリーダーだ。ワシントンと呼んでくれ」

あんたがワシントンか。それは、ジョージ・ワシントンと関係あるのか？

「はっはっはっ。関係なくもない。かの初代大統領がアメリカ合衆国を独立させ自由を勝ち得たことに敬意を払い、そう名乗らせてもらっている。もっとも、今ではあの国は、暴虐な軍事帝国と化しているが」

まあ、そうかもな

「興味がなさそうだな」

俺には関係ない

「関係なくもないだろう。日本はアメリカと同盟を結んでいるんだ」
民意が政治に反映されたことなんてあったか？

ワシントンは顔に浮かべていた笑みを落とした。そして、真剣な顔つきになると、口調も親しみのあるものではなく、厳格なる軍人であり、政治家であり、革命家のものとなる。

「……ふむ、なかなか鋭いな。子供にしては厳しく現実を当てている言葉だ」

それより、俺となにか話をしたかったんじゃないかったのか？

「そうだった。君の活躍はなかなかのものだ。我らが自由の同志は、君にすでに十人以上倒されてしまった。しかし、そろそろお開きにしてもらいたい。つまり、投降してもらおう」
断る

「そう言うと思ったぞ」

どこか嬉しそうに言うと、ワシントンは向かいにいる土屋健司に受話器を渡した。

「なあ、五代、俺だ」

いつになく馴れ馴れしい親しげな口調で話しかける。普段は顔を合わせるだけで、忌々しい目を向け、不快に舌打ちするというのに、土屋健司は続けて、理解力に乏しい人間に、その頭の悪さを馬鹿にしながら、丁寧に説明するように話し始める。

「いいか、な。おまえが一生懸命がんばっているのはわかるよ。でもな、この人たちは、目的が終わったらみんなを解放するって言ってるんだ。おまえが変なことをすればな、ますます話がこじれて、俺たちが解放されるのが遅れるだけなんだ」

五代明は返事をせず、土屋健司はそのことに苛立つ。こいつはいつもこうだ。自分の都合が悪くなると、すぐに沈黙して、適当にやり過ぎそうとする。そういう蛆虫の性根をしているカス野郎だ
「なあ、聞けよ。いいから投降しろ。あとはこの人たちと警察に任せれば、上手く行くから。な、わかったな？」

……土屋

「おつ、わかったか？」

土屋健司はまるで、七歳の子供にとっても面白い物事を教えたように、得意げに確認してくる。

相手を軽んじるのは、この期に及んで治らないのか。
中学生生活の二年目のことだった。なにが原因なのか、土屋健司は

ちょっとした騒動を起こした。

椅子を振り上げて廊下の窓ガラスを順番に割り始めたのだ。奇声を上げながら暴れる土屋健司に、皆は怯えて近づかずその様子を見ていた。

二階の廊下の窓だ、割れたガラスの破片は外へ落ち、下にいた者たちに降り注ぐ。騒ぎですぐに避難しただろうが、何事かと窓から覗き込んだ誰かが怪我をしたという。

そして土屋健司を、五代明が取り押さえた。

なにせ、教師まで遠巻きにするだけで、止めようとしなかったのだ。明らかに異常をきたしていると思えない土屋健司を止めるには、言葉よりも腕力のほうが迅速かつ確実で、しかも安全だった。平和な日本の、チンピラでさえないやくざ気取りの中学生など、戦場を日常としていた五代明にとってなんら脅威ではなく、椅子を振り上げて威嚇するさまも隙だらけで、まるでお話にならなかった。簡単に取り押さえ、気絶させた土屋健司を教師に渡した五代明は、それまでが終わったと考えていたのだが、少し物事を簡単に考えすぎていた。

次の日、校長室に呼び出され、処罰を受けたのは、なぜか五代明だった。

土屋健司は県下有数の企業の社長の息子で、その辺の手回しで、土屋健司の行いは、すべて五代明がしたことにしてしまったらしい。五代明はそのような事態に、怒りよりも寧ろ啞然としたが、養ってくれている祖父母に迷惑がかかると思い、自分が無罪だと主張するのはやめ、おとなしく停学処分を受けた。

その時の、土屋健司の勝ち誇った卑しい笑みは、今も思い出しただけで苛付く。

自分に逆らったことは恐ろしいことで、そんな真似をすることは不遜なのだということを教えて満足した、下劣な笑み。

土屋健司は親の力を自分の力と思い込み、自分は五代明よりも強いのだと勘違いしていた。おそらく、学校の中でもっとも重要な

は、あるいは世界の全てにおいてもつとも大切に重大な人間は自分だけののだという幻想を抱いている。そういう傾向は特に珍しくないが、普通は大人になる前に、それがただの妄想だと悟る。

五代明は七歳の時にその幻想を捨てた。戦争という圧倒的な暴力の嵐の中で、安逸な妄想を捨て、現実を認めて向き合った。

だが、土屋健司は中学三年生になった今でも、世界の中心が自分だと思い込んでいる。その勘違いは、死ぬまで治らないと思っていたが、死んでも治らないだろう。

「土屋。おまえは引っ込んでろ。友人面するな」

おいおい。友達だろ。なあ、このままじゃ、俺が殺されるよ
全く殺されるとは思っていない口調で、土屋健司は相手の良心を呼び覚まそうとしているが、神経を逆なでしているだけだった。

「ワシントン、聞こえているだろ。たぶん、俺のことを話せば自由にするとか言っただろうが、そいつは俺の友達でもなんでもない
ただ学校が同じだっただけだ。友人は友人を売ったりはしない」

向かいに座るワシントンは、予想通りといった表情で、短く嘆息する。

そして受話器を土屋健司から取る。

「あー、まあ、それは始めからわかっていた。ただ、それでも君のことはよく知ることができたよ」

こっちも始めからわかっていることがある

「なんだね？」

そいつを自由にする気は始めからないだろ

土屋健司が顔色を変える。

「まあ、そのとおりだ」

そのくらいは予想されるだろうと思っていたのか、寧ろ予想どおりで楽しそうなワシントン。

まあ、そのことはどうでもいい。人質の中に返してやれ。他の連中に五六発は殴られるだろうが

土屋健司が顔色を変えて身を乗り出す。

「おい、冗談だろ？ 解放してくれるんだろ？」

懇願する土屋健司に、ワシントンは安心するような笑みを浮かべた。

「さて、どうしたものかな？ 私が質問する以上のことを教えてくれたんだ。警察との交渉を考えて、解放してやってもいいかもしれないな」

止めてくれ。そいつを人質の中に戻してくれないか。俺のことを色々喋って危険に晒してくれたんだ。もう少し怖がらせてやってくれ

「そうだな。しかし、それは残酷というものだろう？」

土屋健司はワシントンの言葉に安堵と期待の笑みが浮かんだ。五代明はやはりクズだ。自分が助かりたいがために、俺を人質の中に戻して危険に晒そうとしている。

五代明を売ったことなど棚上げにして、自分を正当化しようとしている土屋健司は、しかし交渉する二人の立場が、逆になっていることに気付いていなかった。

占拠犯であり人質を必要とするワシントンが開放するといい、人質のために戦っていた五代明が人質に戻せという。

彼は、その意味を理解できるほど頭がよくなかった。もっともそれに気づけるだけ頭がよければ、始めから情報を渡したりしなかっただろうが。

じゃあ、俺の変わりに五六発ぐらい殴ってくれないか。なんなら十回ぐらい蹴ってもいい。と言うか、そうしてくれ

「君は友達に随分な仕打ちをしようとしているな。友人なら、たとえ仲間を売ったとしても許してやるのが友というものだろう？」

そいつは友人じゃない！

苛立ちに叫んだ五代明。それが焦燥による失態だと、土屋健司は

気付いただろうか。

「実を言うと、始めから解放してあげるつもりだったんだ。情報を渡してくれたことには感謝するが、仲間を売るような人間は嫌いだ。たとえば友人でなくとも、同じ危険に晒されている仲間を売るなどと、子供と言えども許されるものじゃない」

……よせ。止める、ワシントン

ワシントンは拳銃を、土屋健司に向けた。

「……え？」

解放してくれるんだろ。なんでそんなものを向けるんだよ。

その疑問は一発の銃声によって消滅した。

答えを得られぬまま。

五代明は受話器を壊れるぐらい強く握り締めた。

人質が悲鳴を上げているのが聞こえることから、土屋健司がどうなったのか、簡単に想像できる。

こうなることは予想していた。

ワシントンの言う解放が、殺すという意味だということは。占拠犯を殺したことにたいする報復という意味だということは。

そんなことも理解できず、自分では頭がいいと思い込んでいた土屋健司は、のこのこ殺されに出て来た。

聞こえるか、この悲鳴が。次は君の本当の友人を殺す

「てめえ……」怒りで唸る。

本当の友人というのが誰なのか予想が付いた。土屋健司が全て話したのだとしたら、一人しかない。

五代くん……

受話器から大滝由美の声がした。おそらく銃で脅されているのだろう、その声はいつもの活発さはなく、消え入るように弱々しい。さあ、どうする？ 彼女の安全と引き換えに投降するかね？ な

に、君を殺したりはしない。土屋くんと違い、君はとても優秀だ。強い精神を持ち、適応能力に優れている。すばらしい逸材だ。そんな将来を期待できる子供を殺すのは私の主義に反する。私は優秀な子供が好きなんだ

その言葉になにか引つかかるものを感じた。なにか、根源的なものに。

この声。この言葉。どこかで。もっと違う。だが、同じ。

私は優秀な子供が好きなんだ……

『……私は優秀な子供が好きなんだ』

五代明は中東で多く使われる言語に翻訳した。

この言語の発音、声音には明確に記憶に残っている。

ワシントンは相手に合わせて同じ言語を使用した。

『その声は、まさか……』

五代明は、日本語では発音が異なるためわからなかったが、しかし馴染んだ言葉ならば、その声音を明確に、確信を持って思い出すことができた。

『おまえ、ロイヤルハントか!?!』

『貴様、ライトマンか!?!』

二人の会話の言語が代わったことに、大滝由美は怪訝に眉根をひそめる。

『なぜだ!?! おまえは死んだはずだ!?!』困惑し、動揺して五代明は疑念を叫ぶ。

『死んだだと? ならば、ここでこうして生きているわたしは何者だろうな?』驚愕からすぐに元の精神状態に戻り、どこか面白そうに問うワシントン。

『なにが目的だ!?! 俺への復讐か?』

『さて、おまえがここにいるということ自体、私自身驚いているのだが』

『偶然だというのか?!』

『そう言うしかあるまい。おまえを狙っているのならば、こんな回

りくどいことはしない。ましてや、我々の計画はおまえのために支障をきたしているのだ」

まるで世間話でもするかのような調子で、会話を続けるワシントンことロイヤルハント。

あの時とまったく代わっていない。

あの灼熱の戦場と。

『それにしても、随分上手く溶け込んでいるではないか、ライトマン。平和な日本で、ここまで自然に生活できるとは、偽装技術はさすが巧みというべきか』

『偽装じゃねえよ。こういう生活が普通なんだ』

『本当にそう思っているか？ おかしいとは思わないのか、この日本が』

『……なにが言いたい？』

『わかつているはずだ』

二人は沈黙する。

その意味を理解できた者はいるのだろうか。

警察署対策本部室では、二人のやり取りを沈黙して聞いていたが、日本語以外の言語が使用された時点で、少し混乱が生じた。つまり、二人がなにを話しているのかわからなくなった。

「この言葉は、どの？」

桐嶋長平が誰ともなく呟くと、佐伯真人が答える。

「おそらく、五代明くんのいた、中東で使われている言葉なのではないだろうか……」

推測できるのはそこまでだ。そもそも言葉がわからない。

中東は石油産出国が多く、日本は大部分をそこから輸入し頼っているが、しかし文化的な交流はほとんどなく、そこで使用される言語は英語、中国語に次いで、世界中で使われているにもかかわらず、

日本では教える学校、機関がほとんどないのが現状だ。

日本の奇妙とも特殊とも呼べる価値観、世界観に起因して。

「誰か、理解できる者は？」

桐嶋長平の求めに、誰も返答しなかった。誰もわからないのだ。

『さて、ライトマン。積もる話はあるが、しかし今は差し迫った問題がある。おまえの存在によって作戦に大幅な支障をきたした。おとなしく出てきてもらえるか？』

『……』

『断った場合はどうなるかわかるだろう？ 今度は、おまえの本当の友人を殺す』

五代明は受話器を握り締めて答えた。

『……わかった』

『それでいい。なに、約束する。おまえを殺すことだけはしない。おまえは私が手がけた作品の中でも特に優秀だ。破壊するようなことはしたくない。しばらく、閉じ込めさせてもらうがな』

優秀な作品か。五代明は胸中苦笑する。最強の兵士。最強の戦士。最高の少年兵を育て上げることに、執着とも呼べる情熱を持っていた男。その熱意の元は、芸術作品を作り上げる欲求と同じだったのか。

『どこへ出ればいい。ここで待っていればいいのか？』

『そうだな、イベントホールまで来て貰おうか。そこで、武装を解除しろ』

『了解、ロイヤルハント』

どこか皮肉な口調で、かつて部下だった時と同じ言葉で答えた。不意に、受話器から弱々しい声が届く。

「……だめ」

「……だめだよ」

大滝優実が震える声でささやくように呟いた。それは、なぜか電話越しの五代明にまで届く。

「ダメ！」

突然、大滝由美は両脇にいる占拠犯のことを忘れたかのように、ワシントンへ向かって走った。

ワシントンは銃口を向け、牽制しようとするが、まるで目に入らないかのように、大滝由美は構わずに、ワシントンの持つ受話器を奪い取るうとする。

「来ちゃダメ！ 来たら殺される！ 五代くん！ こいつらの言うことを信じちゃだめ！」

大滝！

『来ないで！ 殺される！』

少女が発した言葉に、五代明もワシントンも驚愕した。この少女は、二人の使っていた言語を習得しており、理解していたのだ。日本ではほとんど使われない言語を。

ライトマンとロイヤルハントの会話も完全に理解していた。

自分を助けるために、自分の身を占拠犯に差し出すことを。

それを知った少女が取った行動は、自分のために死ぬかもしれない友人に警告を発すること。自分の身の安全と引き換えに。

「こいつらはたくさん殺したの！ たくさん死んだの！ だから来ないで！」

ドンッ！

銃声が一発。

大滝由美は受話器を両手で握り締めたまま、腹部に目をやった。制服が右脇腹から少しずつ朱に染まっていくのを見て、ひどく場違いなことを思った。

ああ、もうこの制服、着れないな。

そして、不意に力が抜けたように、倒れた。

大滝！ 大滝！

受話器から呼ぶ声がする。

「……来ちゃ……だ……め……」

「大滝！」

五代明は受話器に向かって叫んだが、大滝由美の返答はない。

代わりに返答したのは、かつて五代明を救った男。そして友を殺した男。

……残念だ。彼女は実に勇敢な少女だったよ。このような有望な子供が死ぬとは、なんとも惜しいことだ

ロイヤルハントはまるで、子供の友達が死んでしまったことで、子を慰め、死の意味を諭す父親のような声。

それが演技なのではなく、本心からだということも五代明には理解できていた。

『てめえ！』

だからこそ、五代明は憎悪で歯軋りした。

さて、改めて交渉しよう。おまえがおとなしく出てきたのならば、これ以上の被害者は出さない。約束……

ロイヤルハントの言葉を最後まで聞かずに、五代明は受話器を壁に叩きつけた。

そしてハンドガンを向けると、二発発砲。

受話器が粉々に砕け散った。

五代明は呼吸が荒く、手にする拳銃を握りつぶすかのように、手に力を込める。

「……大滝」

五代明はその年齢の問題と、そして今まで平和という環境から隔絶していたために、秘密にしてもなお、漠然とした壁が存在する人間関係の中で、大滝由美はまるで当然のことのようにその壁を素通りして、友人として接してきた。

それは自分が日本に存在することが間違いのような、まるで旅の

途中で偶然立ち寄っただけのような異邦人になってしまったかのような自分にとって、心安らぐことのできる、数少ない存在だった。

水神清玄や、五代芽のように。

居場所がないというだけで、とてつもない孤独感に襲われ苛まされる中、休息のような安らぎを与えてくれる者たち。

それが、こんなに、簡単に消えてしまうのか。

いや、わかっていたはずだ。

人は簡単に消える。

人間は簡単に死ぬ。

死の別れなど日常だ。

平和という幻想の中でのみ、死の別れは特別になる。

現実という真実では、死別は日常だった。

それでも平和という幻想に浸っていたかった。

その幻想は消えてしまったのに。

「俺は……」

俺はなにをしていたんだ。

俺はなにを考えていたんだ。

どうして、俺は……

「……俺は殺さなかったんだ」

敵を殺すことはできたはずなのに。

殺すことを避けていた。

やろうと思えば不可能ではなかったはずだ。

だが、理由をつけて避けていた。

敵はプロ。数が多すぎる。自分一人で殲滅することなど不可能だと。

そして、ここは平和な日本だ。

平和な日本で人を殺す必要はない。

宿泊室の向かいのカップルが殺されているのを見たのに、まだ躊躇っていた。

消防隊員が皆殺しにされても、まだ殺さずにすむ方法はあると考

えていた。

SATが全滅しかかっている、できる限り殺さないですむ方法をとった。

芽が処刑されそうになった時も、最も戦いを避ける方法をとった。地下で事態が収拾するまでおとなしくしていれば、それだけで助かるとさえ考えていた。

平和な日本では人を殺す必要はなかったはずだ。

だが、水神晴玄は殺された。佐藤健人は殺された。大滝由美は殺された。ム力つくやつだが、土屋健司だって死ぬ必要はなかった。

敵を殺さなかったために、仲間が死んだ。

敵は殺さなければならぬ。

平和な日本であるということは関係ない。

敵が存在する。

敵は殺そうとする。

それに対処する方法は一つ。

敵を殺すこと。

それができなければ自分が殺される。

仲間が殺される。

今はそういう状況だ。

ここはそういう場所になったのだ。

「……そうだ、ここは……」

ここは戦場だ。

ワシントンは受話器を置くと、ドモチェフスキーに結果を告げる。『まずいな。逆効果になった。これでやつは我々を殲滅する行動を取るだろう』そして無線機を取りホテル管理室のヨーキに連絡を取る。『ヨーキ、ライトマンの場所は？』

『エントランスホールの電話が全て使用状態になっている。たぶん

そのどれかを使っているんだろう。だが、兵は向かわせないほうがいい」

『なぜだ？』

『なぜ？！ やつはライトマンだ！ どんなに不利な状況からも勝機を見出し捉える、戦場の勝利の光明！ あんたが育てた息子たちの中で最強の兵士！ 今いる兵の中で、やつに適う者がいるのか？ ライトマンと戦えば無駄に死人が増えるだけだ。いや、最悪、作戦そのものが全てだめになるかもしれない！』

『落ち着け。ヨーキ、進行は？』

『あと二時間、いや一時間で終わらせる』

『わかった。とにかく急いでくれ。作戦を切り上げる。ドモチエフスキー、一旦兵を引き上げさせる』

ドモチエフスキーは顔の表情を陰しくした。

『なんだと？ 作戦を中止するつもりか！？ 百億円はどうなる？！ 百億円で私たちは作戦に参加したのだ！ 反故にするならばどうなるかわかっているだろうな！？』

『落ち着け！ 政府に百億円は必ず支払わせる。だが、ライトマンと正面から戦うのは得策ではない。ヨーキの言うとおり、おまえの兵士では荷が重い。やつを倒すにはさらに十人の犠牲を出さなければならぬだろう』

ドモチエフスキーはしばらく沈黙して『……わかった。だが、ライトマンをどうやって始末する』

『ライトマンに対抗できるのは、同じ存在だけだ』ワシントンは無線を手にした。『マクスエル。今どこにいる？』

屋上でマクスエルは眺めていた。

大地に漆黒の闇。

空には無限の星。

これまで失われた命を著すかのように。
今まで奪ってきた命を現すかのように。
これから消えゆく命を表すかのように。

『マクスエル。今どこにいる』
無線機から連絡が入った。

エントランスホール周辺に展開していた一部隊、合計十人の兵士は、その動きを止めた。

『なんだと？』

『撤退しろとの命令だ』

『なぜ？ やつを包囲したんだぞ。今度は奇襲でも不意打ちもできない。完全に袋のネズミだ』

『しかし、今までも必ず倒せると確信していたながら、やられた』

『油断していたからだ。今は違う。今度こそ倒せる』

『だが……』

『仲間を殺されたんだぞ！ あいつらの仇を討つんだ』

仲間を殺されたという怒りが後押しして、十人の兵士は、命令を無視して行動を開始した。

現在エントランスホールに集まっているのは、本来外を警戒している担当だった。しかしホテル内部の巡回兵は、半数以上がやられてしまい、部隊立て直すのに、少し時間が必要だった。

だが、抵抗する人物を処理するためには、時間が惜しい。

兵士二人がドアの両脇に移動。一人がドアノブを開けると、続いてもう一人がドアを蹴り開ける。

そして二人は同時に部屋に突入、アサルトライフルを一斉掃射。パソコンが碎け、イスや机に弾痕が生じ、書類が飛び散る。

だが室内には誰もいなかった。アサルトライフルから立ち昇る硝煙が漂うだけ。

兵士が疑念に思った瞬間、頭上からかすかな音が聞こえた。

ドアの真上で五代明が、壁と天井に両足を着けて、その力だけで強引に張り付いていた。

二人の兵士が上を向いた瞬間、五代明はその額に弾丸を連続して撃ち込んだ。

半秒の差もなく銃弾を受けた二人の兵士の後頭部から、おびただしい血が脳漿と共に流れる。だが、どういうわけか、二人は立ったまま、奇妙な痙攣を続けていた。

『いるぞ！ 撃て！』

兵士の一人が驚愕して発砲を開始。だが、防音処置をしてあった壁は、ライフル弾では貫通することはできない。

そして流れ弾がまだ立っていた二人の仲間に命中し、そのことに気付いた彼らは発砲を止めた。

二人の仲間はそれでも倒れることなく、ゆっくりと仲間のほうを向いた。左右のその目は全く異なる方向を向いており、身体はまともに機能していない。破壊された脳でそれでも思考したのか、仲間に助けを求めるように二つ三つ歩き、だが、そこで二人は同時に床に崩れる。

事務室のドアが銃撃の影響でゆっくりと閉まった。

残り八人の兵士はアサルトライフルを構え直した。今度は自分たちからは動かず、敵の出方を見るが、それは先の失敗からではないだろう。かすかに後悔と恐怖の念をその目に表している。

不意に事務室のドアが開いた。だが、まだ攻撃はしない。敵がなにをしてくるかわからないのだ。

なにかが事務室のドアの隙間から床を転がってきた。
スタングレネード。

『伏せる！』

最初に見つけた兵士が咄嗟に飛び散って床に伏せ、腕を組んで顔を埋める。膨大な閃光と轟音から視聴覚を庇うためだが、それだけで完全に防ぐことができるわけではない。それに反応できたのは半

分の四人。残り四人は間に合わなかった。

スタングレネードが爆発した。耳を劈く爆音と膨大な光の量がエントランスホールに満ちる。

五代明は張り付いていた天井から両足を離し、床に着地すると、屈んだ状態のまま状況を確認。

床に伏せているのが四人。この四人の視覚は麻痺していないが、立ち直るのに五秒以上かかる。

立ったままふらついているのが四人。視聴覚が一時的に麻痺し、行動不能になっている。前後不覚の状態で、敵が姿を現していることにも気付かない。

五代明はハンドガンを両手に構え、手前二人に向けた。両手それぞれに二度発砲、二人の頭を撃ちぬく。

撃ち抜かれた二人が殴られたような衝撃を受けて倒れた。

立っていた残り二人が、耳はまだ聞こえないはずだが、気配を感じたのか、それとも混乱したのかめちやくちやに発砲した。だが、その銃撃は味方に命中。胸部から腹部にかけて十発近くの当たった兵士はなにが起きたのかわからずに絶命し、天井に向けて発砲しつつ倒れる。

もう一人の兵士に五代明は二つの銃口を向けて、二度発砲。右手のハンドガンの銃撃で、手にしていたアサルトライフルを弾き飛ばして銃弾がこちらに向かないようにし、それはちょうど立ち上がるうとしていた一人に向けられ、その兵士は胸に五箇所の弾痕を受け即死。

そして五代明の左手のハンドガンが、まだ混乱している兵士の頭部を撃ちぬく。

残り三人。伏せていた兵士がスタングレネードのショックから回復し、立ち上がって五代明の姿を確認。アサルトライフルを同時に向ける。

五代明は向かって右側へ全力で跳躍。一瞬後の空間を弾丸が通過する。着地すると同時に右手のハンドガン捨て、変わりにすぐ隣に置かれてあった来客用の椅子を掴み、もっとも近い兵士に投げつけた。

アサルトライフルを構えて防御したその瞬間に、五代明はその兵士へ走る。兵士が銃口を構え直す前に、五代明はアサルトライフルを手で弾いて、その勢いで兵士の後方へ回り込み、首に腕を回して締め上げた。

仲間を助けようと残り二人が撃とうとするが、仲間を盾にされた状態で撃つのを一瞬躊躇った。

その隙を半秒たりとも逃さずに五打明は発砲。左側の兵士に二発、その隣の兵士にも二発撃ち込む。

『おおお！』

仲間が全員やられたことでか、五代明に捕らえられた兵士が雄叫びを上げて、力任せに腕を振り解いた。同時に五代明の左手のハンドガン弾を飛ばす。間合いを取って、アサルトライフルを向け、同時に射撃開始。

五代明は横へ跳躍して避け、床を転がり、殺した兵士の隣に転がっていたアサルトライフルを手にする。

ガチン。乾いた金属音がして兵士の連射が止まった。弾切れだ。そして五代明には弾丸の入ったアサルトライフル。

『ひ！』

短い恐怖の悲鳴を上げた時には、その銃口から火を吹いた。

暑い砂漠だった。

暑い砂漠で戦った。

何人殺しただろうか。

何十人殺しただろうか。

数えることを止めたのはいつからだっただろうか。

石油の値段のためだけに起きた戦争に巻き込まれ、両親と死別して放浪した日々。

故郷へ帰る手段もなく、乾きと飢えに苦しみ、やがて自分もまた両親のように死ぬのだと悟り始めた頃、あの男が救いの手を差し伸べた。

『私は優秀な子どもが好きなんだ』

そして男は二人目の父となり、戦争という環境で生きる方法を教えた。

かつては自身が最強の兵士と称えられた父は、自身の技術と知識を受け継ぐ優秀な子供を育てることを生きがいとしていた。

その為に、最高の兵士を育てるための組織を作り、最強の戦士を育てる訓練計画を練り上げ、そして必要な人材を集めた。

その中で、彼から教わることをごく当然のように覚え、一つを習得すれば、二つを会得し、三つを体得すれば、四つを開発する。

才能はあったのだと思う。望むと望まざるとかわらず。

暑い砂漠で、熱射病にかかったように、戦い続けた。

一面の砂漠が血で染まるまで。

気がつけば故郷に帰る意思はなくなっていた。

ここにはたくさんの仲間がいる。

兄弟と姉妹たちがいる。

そして父がいる。

それで充分だった。

それで満足だった

戦場こそが自分の故郷になっていた。

両親の死が、父にあったと知ったのは、ごく些細なことだった。崩壊し失われた国から来た軍人と、父との会話。

少し立ち聞きたただけのその会話の内容。

貿易会社を隠れ蓑とした諜報員の話と、その対策。

そして、処理したこと。

その子供を偶然発見し、兵士として育てたこと。

その時、自分はなにを考えたのか、なにを感じたのか、よく思い出せない。

ただ、次の日の作戦時、ライトマンはロイヤルハントを背後から撃った。

その後、なにもなかったかのように部隊に戻り、父の死を始めて聞くかのように振る舞い、そして日本へ帰るための作戦を独断で開始した。

血に染まった砂漠を渡って。
死を踏み越えて。

エントランスホールに十体の死体が転がっていた。

無数の、弾痕、血痕、傷痕。

中央に立つのは、光をもたらす男。

彼らに与えたのは、天の光か、地獄の炎か。

ただ、死を撒き散らしただけか。

『さすがだな、ライトマン』

いつの間にいたのだろうか、マクスエルが数メートル先に現れた。手にする大型ナイフを鞘から抜く。両手に抜き身の刃が銀に輝く。彼はナイフをもっとも得意の獲物とした。

『……なぜだ、マクスエル。なぜ、戦場に戻ってきた』

ライトマンは戦友に聞く。

戦闘の光明に匹敵する唯一の存在。

勝利の確立を捉えるもの。

ロイヤルハントの息子たちの中で、二人は同時に最強と呼ばれる存在だった。

だが、マクスエルはイギリスへ帰った。自分が日本へ帰ったように、あの時の仲間らはみな、生まれ故郷へ帰った。

それなのに、なぜ？

『ここが、俺の故郷だとわかったからだ』

『こんな場所が故郷なのか？』

死に満ちた戦場が。

『そうだ。平和な国はどうだった？ もうわかっているだろう、ライトマン。平和は、力のない者が力ある者を食い物にし、低能な者が上に立ち、有能な者が陥れられ貶められる。全てを曖昧にし、自分を確立することさえ愚かしいこととされ、虚言と虚構が支配し、真実と現実がゴミクズのように扱われる』

『強者が搾取され、弱者が君臨する。正当なる理論より、都合のよい屁理屈。厳しい現実ではなく、甘い虚構』

そう、中学生生活でそれは十分理解した。

無能な者の責務を、能力あるものに不当に押し付けて背負わせ、それが正しいことなのだと言われる日本。

土屋健司のように、なんの力を持たないものでも、他者の力を借り、それを己が力のように振舞っても、何一つ改められることなく生きていける。

真実を直視し、自らの力のなさを認め、現実には立ち向かう者は、バ力を見る。

戦場で真実を見ないものは生き残れないというのに、平和では真実を見たものが生き残れない。

『俺は、俺を見失わないために、俺が俺であるという確信を得るために、戦場に戻ってきた。そして確信したよ。俺が生きるべき世界は、ここだ！ この戦場こそが俺の生きるべき世界だ！ いや、世界の真実の姿は、これなのだ』

両手を広げて自らの世界を示す。無数の死体に囲まれた、血と硝煙に満ちた世界。

『……それが、おまえの答えなのか』

五代明は苦悶に耐えるように呟く。

『そうだ！ さあ、戦おうライトマン。おまえも俺と同じはずだ！

おまえの生きる場所はここだ！』

マクスエルが疾走した。狙いは右首筋。脳へ繋がる動脈は、切断されれば数秒で死に至る。

五代明は弾切れになったアサルトライフルを捨て、迫るナイフを一瞬のステップで避ける。紙一重、皮膚がかすかに切れるが肉まで届いていない。いったん間合いを取る。

（どうする？）

五代明は思案する。銃器類は重量があるため、先の戦いに入る直前、天井に張り付くため外している。床に落ちている武器を拾う余裕をマクスエルが与えるはずがない。足に仕込んだナイフを抜く余裕も与えないだろう。強引に武器をとろうとすれば、マクスエルはその隙を逃さずに攻撃を加え、自分は避けることは不可能だろう。

つまり素手で戦うことになる。素手ではマクスエルには勝てない。ナイフの扱いを含めた近接戦闘では、マクスエルのほうが上だ。

マクスエルは続けて、右手で左腹部を狙った。内臓に損傷を与えれば、時間は十秒以上かかるが、同じ結果となる。

五代明は膝を跳ね上げた。肋骨を避けるために水平に刺してきたナイフを膝で弾くと、足を戻す動作に合わせて肘を打ち下ろす。

マクスエルの左手に肘が命中、ナイフを落としたが、左足で握りの部分を跳ね上げた。蹴り上げられたナイフが五代明の喉元に迫る。五代明は大きく仰け反り、ナイフは右頬の皮膚一枚を切って天井に突き刺さった。そして、そのまま背転し、同時に左足をマクスエルの顎を狙って蹴り上げる。

マクスエルも大きく仰け反り、そのまま背転してかわした。

お互い距離を大きくとる。ナイフを一本離すことに成功したが、マクスエルにはまだ一本残っている。

やはり素手のままではやられる。武器が必要だ。あるいは、それ

に準ずるもの。

『さすがだ、ライトマン』

マクスエルは五代明のかつての名を、少年時代もっとも多く使用した言語で呼ぶ。

『その名前で呼ぶのは止める』

戦友であつても、その名は不快感がある。

かつては誇りに思い、しかし本来の名を取り戻した今となつては、忌まわしいだけだ。

『新しい名を受け入れたのか？』

五代明が動いた。直線にマクスエルへ疾走する。右拳をためて大きく振りかぶり、顔面を狙って突き出した。

マクスエルはボクシングのフットワークで難なく避ける。

『新しい名は、おまえを弱くしただけだ！』

マクスエルはカウンターで、ナイフを五代明の眉間を狙って突き出した。回避不可能の距離、速度、タイミング。

ギン！

鋼が激突する。

『なに！？』

五代明の右手に握られたミニマグライトで、ナイフが逸らされた。胸のポケットに入れてあつたマグライト。

マグライトは航空機体にも使用される合金で製造され、その耐久力は並外れており、各国の警察、軍の多くが採用しているほどだ。

緊急時に警棒の代わりにもすることを想定しており、ナイフ程度ならば受け止めることもできる。

「今の名が、本当の名だ」

マクスエルのナイフを持つ右手の腕に、自分の左手を巻き込むように絡め、肘関節を固定した。そして体をそのまま反転させ、体重を掛ける。

『ぐっ！』

ゴキン！ 鈍い音がして、マクスエルの右肘が折れ、ナイフが手

から離れた。

五代明はそのナイフを拾おうと身を屈めた。

マクスエルはその行動を予測し、痛みをこらえて右足で脇腹を蹴りこむ。

その右足を五代明は腕で掴んだ。

『しまっ！』

己の動作によって、相手の行動を誘う、戦闘の基本。

フエイント。

ナイフを拾うことによって、阻止するために必ず蹴りを行うと考えていた五代明は、その足を完全に捕らえた。そして右足首を肘の内側で固定すると、自分の体全体を回転させて、捻った。

ゴキリ。足首から鈍い音がし、続けて筋のいくつかが切れた音が伝わった。

足首を骨折させ、筋を切ったマクスエルの足は、もう用を成さない。治療を行っても、二度と歩けるかどうか。右肘も折った。関節が外れただけかもしれないが、どちらにせよ役に立たなくなった。

『ああ！』

床に倒れたマクスエルが、渾身の力を入れても、それを伝えるベきものがつながつていないため、それは体の中で意味もなく発散されるだけ。

五代明はマクスエルに背を向けると、周囲の遺体から武器を拾い始める。

『……なぜだ？ なぜ止めを刺さない？』

『マクスエル。もう戦えないはずだ。これで、終わりにしよう』

五代明は背を向けたまま答えて、足を進め始めた。

イベントホールには人質がいるが、占拠犯の戦力はすでに十人程度。十分殲滅可能な人数だ。単独での救出作戦も十分可能となった。

少なくとも状況を確認し、その方法を探すことには問題ないだろう。

そして、マクスエルはもう戦力にはならない。
戦えないのならば、殺す必要はないはずだ。
せめてかつての仲間だけは。

マクスエルは打ちのめされていた。

ライトマンは始めから殺すつもりなどなかったのだ。

自分は殺すつもりで戦っていたにもかかわらず、殺す覚悟と意思があつたにもかかわらず、殺す意思と覚悟の無い者に、負けた。

自分はこれで終わりなのか。

幼い頃から戦争に明け暮れ、そのためにだけに生きた自分は、戦争の無い平和な国ではどこにも置く場所が無かった。

優秀な能力を持つ者が認められず、劣悪な能力しか持たない者たちが人脈とコネだけで引き立てられる歪んだ世界。

平和な世界などという安逸な妄想に終止符を打ち、戦場に戻ってきたというのに、戦う意思を持たない者に劣るというのか。

自分は、たったそれだけの力しかなかったというのか。

平和が歪んでいたのではなく、自分自身が歪んでいただけだというのか。

自分の戦いはこれで終わりなのか。

『……終わりではない』

マクスエルはその足で立ち上がった。筋が切断され、もう機能しないはずの足で。

『生きている限り、死が訪れない限り、戦いは終わっていない！』

マクスエルの手に、圧縮注射器が握られていた。

内容されていたのは高純度の麻薬。

『ライトマン！』

麻薬によつて痛みを麻痺させ、感覚を鋭敏にし、筋肉だけで強引に足を動かし、ナイフを振り上げて迫る。

麻薬で身体能力を強引に上げ、それはすでに致死量寸前まで達しているても、それでもなお戦うことを止めない。

さながら戦争中毒者のように。

『マクスエル！』

五代明が振り向いた。マクスエルが完全に後戻りできない状態にあることがわかつているはずだが、それでも叫ぶ。

『止める！ マクスエル！』

『うおおおおお！』

二人が衝突し、肉を切り裂く鈍い音。

『……う』

五代明は呻く。

『……ばかやろう』

マクスエルの胸にペーパーナイフが突き刺さっていた。ホテルの備品として各部屋に置かれており、事件勃発当初に、袖に仕込んでおいた安物のペーパーナイフ。

それは心臓を貫いていた。

マクスエルのナイフは、五代明の肩をかすめて、しかし切ったのは皮膚と少しの肉だけ。

マクスエルの胸から夥しい量の血が溢れる。力を急速に失い倒れる。

それでも麻薬の影響なのか、かすかに呼吸をしていた。

だが、もう、助からない。

マクスエルは五代明に、かつて戦場を共にしていた時のように、仲間への笑みを浮かべた。

『ラ……ライト……マン。いい……勝負……だったな……』

かすかな呟きを最後に、その少年兵はその命を終えた。

ヨーキは金庫を閉ざすプロテクトを破るべく集中していた。しかし高度なセキュリティに守られた金庫は、固く閉ざされて、その内を見せようとはしない。

人間の心のように、一度閉ざされた扉は簡単に開こうとしない。それがセキュリティだ。

だがその扉もあと一つ。同時にそれは最大の難関。スーパーコンピュータを使わなければ解けないのではないかと思うほど、難解なパズル。

「……ん？」

ヨーキは不意に、奇妙な違和感に気付いた。それは些細な感覚だったが、しかしコンピュータの専門技師としての直感は、それが重大なことだと告げていた。

「……待て。待て、ケイミン。手を止める」

ケイミンは珍しいことに、怪訝に眉根を顰めて、しかし指示通りに手を止めた。

「これは、まさか」

ヨーキは作業を止めた理由を説明せず、脳裏に閃いたことに思考を集中した。

「そうか、そういうことか」

ヨーキには珍しいことに、喜びに笑みを浮かべた。それは金庫を破る突破口を見つけたことなのか、あるいは単純に子供がパズルを解いた時の喜びと同じなのか。

「ケイミン、これはダミーだ。いくらやっても絶対に解除されない」
そう、金庫をロックしているセキュリティは、偽物だ。コンピュータでいくらハッキングをしても、絶対に開くことはできない。

『ダミー？ なら本物は？』

『ないんだ』

ヨーキの返答を、ケイミンは理解できなかった。

『ないんだよ、ケイミン。これはロックなどないも同然なんだ。いや、正確には、僕たちは解除しようとしていたつもりで、ロックしていたんだ』

ヨーキは興奮気味に語る。まさか、こんな方法を使うとは、まさに逆転の発想だ。

『ケイミン、システムの接続を全部切ってくれ』

『なんですって？』

『システムの接続を全部切るんだ。それでロックはほとんど解除される。これはシステムがつながっている状態の間、ロックするようになってるんだ』

不正規の手段で金庫を開けようと抜け道を見つけようとすればするほど、無駄に時間が過ぎていく。その開け方を知らない限り、どんな方法を用いようと、正しい手段以外絶対に開くことはない。

単純であるがゆえに、発見は困難。それに気付けたのは、奇跡に近い。

『そう、これは人間の心理を利用した、セキュリティ。扉を開けるには今までとは逆の必要があるが、あったんだ。そうすれば、扉は簡単に開く』

ケイミンは指示通り、システム接続を解除した。

途端、それまでの強固さが嘘であるかのように、ロックが解除された。

ヨーキはテーブルに置いてあるセキュリティカードを手にする。

支配人室の金庫に保管され、最初にシステムに認証承認を行うためのカード。

『これが、金庫を開けるための最後の力ギ』

そしてヨーキは扉の横にあるスロットにセキュリティカードを通した。

マクスエルとの連絡が途絶えた。

エントランスホールで銃撃が行われたことから、部下は撤退前に戦闘を行ったということなのだろう。

その後マクスエルとライトマンが戦闘を開始したようだ。

そのマクスエルからの連絡は途絶え、ドモチェフスキーの部下からの連絡も無い。

『……マクスエルが倒された。おまえの部下も全滅したようだ』

ワシントンがどこか人事のように指摘する。

ドモチェフスキーは憤怒に拳を壁に叩きつけた。その音は客席まで届き、人質たちが恐怖と驚きでビクツと体が飛び上がる。

その怒りは部下を殺されたことなのか、それともたった一人によって部隊が壊滅状態に追い込まれたことに対する口惜しさなのか。逆にワシントンは冷淡さを崩すことなく、次の行動を思案する。

二人の少年、特にライトマンの行動によって、作戦を遂行する最低人数を完全に下回る事態となった。状況から判断して、ホテルを脱出するしかない。まさかライトマンがここまでやるとは、完全に予想外だった。

あるいは、もう一人の少年、ニンジャキッドが要因として加わった結果とみるべきかもしれない。別々に行動しているらしいが、別行動による連携なのか、たんに合流できないだけなのか。少なくともライトマン一人では、ここまで追い詰められることはなかっただろう。

どちらにせよ、せめて例の物だけは入手したいのだが。

『ヨーキ、どうやら撤退するしかなさそうだ。状況は』

朗報だ、ワシントン。解除した。金庫を開けたぞ

興奮気味に伝えるその伝達に、ワシントンは不適な笑みを浮かべた。

『本当か？』

ああ。例の物を入手した。これであの男との取引が可能になる。
あとは……

『その話は脱出してからだ。ヨーキ、ケイミン、撤収だ』

残存する残りの兵士にも同じ命令を伝えと、無線機を切る。

そして、ワシントンはドモチエフスキーに改めて伝える。

『ドモチエフスキー。残念だが、撤収する。もうホテルの占拠を維持できる状態ではない。百億円は諦めるしかない。だが、多少の金額なら支払える。それで手を打ってもらえないだろうか？』

ドモチエフスキーは沈黙して答えない。

『ドモチエフスキー、おまえの残りの部下は撤収させる。いいな』

傭兵隊長は少しだけ頷いた。

『先に行っている』

ワシントンはそれ以上声を掛けずに、舞台制御室から出て行った。その姿を見ることがもなく、ドモチエフスキーは沈黙したまま、その場で肩を震わせていた。

ドモチエフスキーはソ連の将校だった。かつて存在した国は、今は無い。資本主義化にともない、故郷は失われた。

故郷は金で買われたようなものだ。

だが、自分はまだましなほうだった。

軍人との使命を受け、そのためにだけに訓練を受けてきた部下たちは、軍そのものの消滅によって、路頭に迷うことになった。他にやれることのない彼らは、職にあぶれ、その日暮しを続け、飢えで死ぬ者さえいた。国のために全てを捧げた彼らは、その国を戦うことなく失った。

そして自分は軍を去り、彼らを拾った。

故郷のために培った彼らの能力を生かす場所を与えるために、ド

モチェフスキーは民間軍事会社、傭兵部隊を設立した。

それからは戦場で生き続けた。部下も、自分も、故郷のためではなく、生活のために戦った。ただ日々の糧を得るために、国のために培った能力を使い続けた。

だが、このまま終わるつもりはなかった。

資本主義によって奪われた故郷を取り戻し再建する。

そのためにこの作戦に乗ったのだ。

勿論、たった百億円で故郷を再建できるとは考えていない。だが、その準備をするには十分な額だった。全ては手始めに過ぎない。

しかし、それも思わぬ分子によって崩れ去った。

『おのれ！ ライトマンめ！』

かつて共に戦った少年兵が、今や最大の敵となった。

ドモチェフスキーは、アサルトライフルを手にした。

ライトマンを倒さなければ前に進めない。

たとえ一人だけになろうとも、この作戦を完遂する。

それは十分可能だ。人質はまだ確保したままだ。爆薬によって外に出られない状態。そして日本政府は、現在どうなっているのか、状況を知らない。

一人だけでも、交渉におけるブラフで作戦遂行はまだ可能だ。ワシントンの、ロイヤルハントの力など必要ない。自分一人だけで達成してみせる。

失われた故郷と、死んだ部下のために。

マクスエルに死の別れを告げて、五代明はイベントホールへ向かった。

装備品の確認。ハンドガン二丁。サブマシンガン一丁。弾薬は敵の装備品から可能な限り補充した。そして足に仕込んだナイフ。サブマシンガンを威力の高いアサルトライフルに変更するか少し考え

だが、屋内ということもあって、取り回しに難のないサブマシンガンを選択。

通路は一直線。突き当たりにイベントホールへの扉が見える。陰に隠れて様子を伺うが、敵の姿もなく、待ち伏せの様子は無い。

だが、完全に敵対行動をとった現在、全力を持って倒しにかかるはずだ。

五代明はサブマシンガンを構えて、ゆっくりと進み始めた。

カタン……

通路の向こうで音がした。反射的に銃口を構える。通路の曲がり角の影に誰かがいる。そいつは隠れたままなにかを投げてきた。

手榴弾。

五代明はすぐ隣にあったドアへ、サブマシンガンに向けてフルオートで発砲。ドアノブを破壊すると中へ飛び込んだ。

同時に爆発音が飛び、金属片が四方八方へ飛び、通路の壁に穴を穿つ。

床に伏せていた五代明はすぐに立ち上がり、壁を盾にして通路の様子を伺う。同時に弾倉を交換。

一瞬姿が見えた。ドモチエフスキーだ。元ソ連軍将校。現在は傭兵部隊の隊長。

だが、見えるのは彼一人だ。他に敵兵の姿は見当たらない。どうということだ？

五代明は室内へ戻った。罠の可能性はある。どこか別の場所から攻撃しなければ。あるいは、一端退却するべきか。

窓の外から駐車場が見えた。ロイヤルハントと数人の兵士が地下駐車場へ入っていく。兵士の人数は五人ほど。あれで全員だとすると思っていたより少ない。それとも別の場所で行動しているのか。

問題なのは、あの行動にどういった意味があるのか。

（撤退するのか？）

ロイヤルハントが直接動いていることから推測すれば、それが間違いないと思われる。全戦力を使っても、ホテルの占拠が維持でき

なくなつたと判断したのだろう。

だが、なぜドモチエフスキーだけがなおも戦っているのか。

五代明は再び通路側へ身を寄せて、カマを掛けてみる。

『止める！ ドモチエフスキー！ もう決着はついた！ ロイヤルハントは撤退する！ 戦う理由はないはずだ！』

『あるぞ！ おまえを倒し、部下の敵を討つ！ そして日本政府に必ず身代金を出させる！ あの資本主義者の腐敗し落ちぶれた独裁者どもから！』

どうやら予想は当たつたらしい。ロイヤルハントは撤退する。もう作戦を遂行できる人数ではなくなつたのだ。だが、ドモチエフスキーだけは、誇りと意地に賭けて最後まで作戦を完遂するつもりだ。そのために、最大の障害を排除する。

同時に、イベントホールの人質を助けるにはドモチエフスキーを倒すしか方法はなく、そして彼を倒せば脅威は排除されるということでもある。

だが彼は、かつてソ連将校として特殊部隊を率い、そして故郷を失つた後は傭兵として戦歴を積んだ、まさに歴戦の兵士。

平和な日本で暮らしていた自分とは、歴然とした差がある。

（それでも、やるしかない）

ドモチエフスキーのアサルトライフルが火を噴いた。フルオートで発砲された弾丸が、壁の端を削り取っていく。弾切れになるまで撃ち続け、マガジンを一秒も掛けずに交換すると、相手に反撃を与える間もなく、今度は走りながら発砲。ライトマンが隠れる部屋へ突進した。

ドアの前に到着すると、即座に室内へ銃口を向ける。だが、肝心のその姿がない。窓が開いており、そこにライトマンの背後が見えた。すぐに車の陰に隠れる。どうやら、室内では不利と見て、屋外

で戦うつもりのようだ。いいだろう、乗ってやる。

手榴弾の安全ピンを抜くと、窓から投擲し、身を伏せる。爆発して一秒後、窓から躍り出た。手榴弾の破片を避けるために、ライトマンも同じように身を伏せているはずだ。その間ならば移動しても攻撃を受けることはない。

ライトマンはまだ少年だ。たとえかつて歴戦の兵士より優れた素質を賞賛されても、その才能を伸ばす機会が失われたままだ。

歴戦の戦士である己ならば、勝てる。

コンパクトセダンの影にライトマンの姿を捉えた。三連バーストに切り替えて発砲。ここから先は無駄な連射は隙を生む。

ライトマンは影に身を屈めて銃弾をやり過ごしたようだ。命中していないが、それは予想の範疇。

手榴弾を投擲、弧を描いて車体の向こう側、ライトマンが身を潜めている箇所に落下した。

ライトマンが躍り出た。同時にサブマシンガンを連射。弾幕を張って牽制し、山林の方角へ疾走。後方で手榴弾が爆発。その影響は受けなかったようだ。

木々に隠れるつもりなのだろうが、ライトマンが山林へ入る前にドモチェフスキーは反撃。

ライトマンは転倒したように付近の車体に退避。その動きから足に命中したようだ。

（ふん、なかなかやる）

ドモチェフスキーは胸中で忌々しげに賞賛した。現在の状況で、敵の力を認めるのは、不愉快ではない。

だが実際ライトマンはよく戦っている。今までの部下たちとの戦いで疲弊し、まったくの無傷ではないだろうに、ここまでやるとはしかし、それも長続きしないだろう。やつの動きを見れば明らかだ。疲弊しており、銃を正確に構えることもできていない。状況判断も雑だ。

それに比べてこちらは体力を温存していたためか、感覚が鋭利で

的確だ。

これだけでも勝敗は決まったと言える。

ワシントンは姿を現さない。銃撃の音は聞こえているはずだが、加勢するつもりはないようだ。どうやら本当に撤退するつもりらしい。

まあいい、あとは自分一人だけでやる。

逆に言えば、やつがいなくなったために、身代金を全額手に入れることができるわけでもある。

ロイヤルハントの目的は別にあつたようだが。このホテルの地下金庫にある、あの男が欲しがっているデータ。それを入手するためにこれだけ大規模な占拠事件を起こした。ここまでしなければ入手できなかったデータだ。

あるいは、それは百億円より価値がある。だから作戦中止も躊躇わなかったのかもしれない。

だが、もしそうだとしても、ドモチエフスキーにとって百億円は必要だった。

ドモチエフスキーはここで決着をつけることにした。手榴弾残り二つとも手にした。やつが隠れている自動車の両側へ投擲すれば、必ずダメージを受ける。そして姿を現したところで、アサルトライフルをフルオートで攻撃。やつには、機転を利かせる余裕もないはずだ。

まずアサルトライフルの設定を変更しようとした。

だがかすかな音が耳朵に届いた。

ライトマンが隠れていると思い注視していた自動車の陰からではない。

左斜め後方から。

(いつの間に!?)

ドモチエフスキーは驚愕して、まだ安全ピンを抜いていなかった手榴弾を手から落とすと、アサルトライフルをそちらへ向けて構えた。

学生服を着た少年の姿を確認すると、即座に引き金を引く。

三連バースト。三つのライフル弾が飛ぶ。それは狙いどおり命中し、少年を後方へ弾き飛ばした。

「！」

そしてドモチェフスキーはミスをしたことに気付いた。

水神晴玄は銃声で目を覚ました。

いつの間にか眠ってしまったらしい。そのため体が凍えている。眠るだけでも体温が低下するのに、気温が下がっている真夜中だ、もしこれが冬だったら確実に死んでいた。

これではいけない。迂闊な行動は死に繋がる。

目が覚めると、腕時計で時間を確認する。五時近くになっている。東の空がぼんやりと青白く、明るくなり始めているが、秋という季節柄、日の出時刻は遅く、山間部であることもあって、肝心の太陽はまだ顔を出していない。

薄暗い朝の光はまだ明るいとはとても言えないが、それでも暗闇だった状態より、遥かに視界がよくなった。

（……よくない）

眠っている間に、事態が悪くなっていることに気付いた。

闇に紛れて移動することができなくなった。薄暗い光が、夜よりも遙に遠くまで見渡せてしまう。発見される可能性が格段に高くなっってしまった。

（俺のアホー！）

こうなると行動は大幅に制限される。ことによると、事件が終わるまでこの車の下に隠れ続けることになるかもしれない。

だが、問題がもう一つ発生した。

（……トイレに行きたい）

まだ我慢できるが、それもあと一時間程度だろう。

車体の下を張って周囲を見渡した。

地下駐車場へのシャッターが開いている。ここに隠れる時は閉じていたはずだが。

誰かが出ていた。サブマシンガンを持っているそいつは、周囲を見渡すと、内側からシャッターを下ろした。

（なんだ？ あいつら、なにをしているんだ？）

不意に銃声が響き、続いて窓ガラスが破られる音。

誰かがホテルから窓を割ったようだ。だが、ここからだ位置の問題で見えない。

続いて銃声、しばらく途絶えたかと思うと、爆発音が轟く。この音は手榴弾だろうか。

この駐車場で誰かが戦っている。誰が、などという疑問を持つ必要はない。戦っているのは一人しかない。

五代明。

敵の人数は不明だが、少なくともまとまって戦っているのだとしたら、確実に劣勢になるだろう。

加勢しなければ。だが、こちらの武器は日本刀一本。向こうは明らかにマシンガンを乱射している。近づく以前に、ここから出るだけで流れ弾が命中する可能性がある。

眠っている間に、とんでもない事態に発展してしまっていた。

（ああ、俺のドアホ。眠っちゃやばいつてわかっててなんで眠ったんだ）

成長期の子供にとって睡魔は強敵だ。ましてや疲労が蓄積されている状態なら、横になっただけで眠りに入る。

とにかく、隙を窺うしかない。

銃声が何度も響き、さらに手榴弾の爆発が再び起こる。

かなり近い。銃声に至ってはすぐ近くではないだろうか。

目の前を、誰かが通り過ぎた。見たのは足だけだが、五代明ではないということだけは判別できる。

通り過ぎた誰かは、三つ前の自動車の陰に身を屈めた。そこから

アサルトライフルを構えて攻撃している。五代明への攻撃だろう。

だが、肝心の五代明のほうは、特に攻撃をしている様子はない。見えない位置にいるため、本当に五代明が戦っているのか確認できないが、だが他に戦っている人間がいるはずがない。それに、もし五代明以外だとしても、目の前にいる男が敵であることは間違いないさそうだ。

自動車の下から慎重に、音を立てずに這い出た。

数メートル先にいる敵は、背中を向けていてこちらには気付いていない。攻撃するならいまだ。

大柄な男だ。髪の色から日系ではないようだ。大滝由美のように脱色したか染めたのなら別だが。

水神晴玄は静かに刀を抜いた。真剣の戦闘と殺人は数時間前に経験済み。だが、手が震えそうになるのは、それでも戦いに恐怖しているのか、それとも殺人に抵抗があるからか。

落ち着け。峰打ちでも構わない。とにかくこいつをおとなしくさせればいいんだ。

上段に構えて、慎重に接近する。

男が榴弾を手にした。まずい、安全ピンを抜いたあとに攻撃すれば、ここで爆発することになる。投げた後ならば、五代明の身が危険だ。

即座に攻撃に移ろうとした。

だが、その瞬間、男が振り向いた。

気が付かなかったが、焦燥して小さな音を立ててしまったのかもしれない。水神晴玄は、咄嗟に刀を眼前に構えた。

男は発砲し、銃声が三つ聞こえた。

腕に衝撃が伝わり、後ろへ倒れる。その勢いのまま受身を取り、後ろへ転がって勢いを逸らし、自動車の陰へ隠れ、そのまま身を屈めたまま走った。

銃撃を受けたはずだが、なぜか怪我をしていない。

だが、その疑問の解消は後回した。

見つかったからには攻撃される。それも相手は距離があっても問題のない銃だ。一箇所にとどまるな、自動車を盾にして逃げる。

ドモチエフスキーは背後から接近してきた少年へ発砲したが、命中したはずの少年はまるでダメージを受けていないかのように、そのまま逃走した。

なにか防弾効果のある物を着ていたのかもしれないが、問題はそんなことではない。

ライトマンではなかった。

報告にあったもう一人の少年。失念していたが、彼もまだ無事だったのだ。

そして自分がライトマンから見て、完全に背後を見せている。攻撃が加えられる位置に立って。

二人が連携して動いていたのか、それともただの偶然なのか。どちらにせよ、致命的な失敗だ。

『クソッ！』

すぐに振り返りライトマンの方角へ銃口を向けようとした。

遅かった。

ライトマンがサブマシンガンを構えていた。

無限に暗い銃口の奥から火が噴いた。

体に無数の衝撃を受けて地面に倒れる。

『が、がはっ』

ドモチエフスキーは血を吐いた。

胸に弾丸を受けた。肺を打ち抜かれたのかもしれない。焼けるように熱い。それなのに体が凍えるように冷えていく。

出血が激しい。早く血を止めなければ。そしてライトマンを排除し、警察と交渉するのだ。

祖国を取り戻さなければ。

奪われた故郷を取り戻し、部下たちを家族の元へ帰すのだ。
そう、あの広大なる大地を。

地平線の彼方まで続く白い大地。

あの美しい光景。

『……ああ』

見える。

我が祖国。

愛する大地。

偉大なる故郷。

五代明はドモチエフスキーの死亡を確認した。

その顔は、なぜだか安らかな笑顔だった。まるで魂だけは彼の国へ帰ったかのように。

ドモチエフスキーは最後の瞬間、なにに気を取られたのだろうか。それが勝敗を分けた。

五代明はドモチエフスキーの装備を回収すると、イベントホールへ向かった。

ワシントン・ロイヤルハントが撤退したのなら、問題なく辿り着けるだろう。

だが、人質は簡単には解放できない。

まだ爆薬が残っている。

おそらく、撤退する直前、なんらかの罠を仕掛けたはずだ。

やつが証拠となる人質を残すわけがない。

急がなければ。

警視庁の会議室から、非難と叱責の声が、佐伯真人に容赦なく浴びせかけられていた。

どうして行かせたんだね？！

止めることはできなかったのか！？

この責任はとれるんだろうね！？

答えられるはずの無い質問の全ては、自分たちに責任が及ぶまいとして、佐伯真人に押しつけるためだけのもので、五代明の安否を本当に案じているものは皆無だった。

「質問には後で答えます。切ってください」

静かにだが明らかに怒りがこもった返答の、最後の言葉は、副署長へのものだった。

副署長は本当に会議室への通話を切ってもいいのか、判断することができず、困惑しているようだった。

なにを言っているんだね？！ どうするつもりなのか答えるんだ！

副署長が決断するより早く、桐嶋長平が電話を切るボタンを押した。

「さて、どうする？」

桐嶋長平の静かな質問は、警視庁の責任逃れのものとは違い、解決のための質問だった。

「警官隊を突入させ、占拠犯を取り押さえます。それしか方法がありません。幸いというべきか、占拠犯は五代明君のために、占拠を維持するのに困難を要し始めている。しかし爆弾処理班が爆弾を解除しない限り中へ突入することはできません」

ホテルへつながる主要道に仕掛けられた爆弾は解除されていない。

やはりセンサーが仕掛けられており、接近すること自体危険だ。解除にはまだ時間がかかるだろう。

「警官隊はすでに組織してある。解除終了しだい、いつでも突入できる状態だ」

それは警視庁がS A Tを突入させたことと同じだが、現状においてはそれしか方法がないのも事実だ。結果的には警視庁の判断は正しかったように思えるが、決定的に異なるのは、イベントホールに爆弾が仕掛けられていることを知っている点にある。知らずに突入していたら、確実にイベントホールにいる人間全員が死亡していた。「百億円は？」

百億円を支払えば、あるいは見せ金として交渉に使えば、状況を有利にすることは可能かもしれない。

しかし佐伯真人は首を振る。

「上は、用意する気が始めからありません。今から準備を始めても、時間には間に合わないでしょう」

「五代明くんから連絡は？」

占拠犯の首謀者と見られるワシントンを名乗る男となにかを話した後、突然通話が切れ、それきり音信不通。直前の様子では、五代明の同級生が二名殺されたようだ。

五代明は怒りで受話器を破壊したらしい。あるいは彼らと再び戦いを始めたのか。

「五代芽くん。お兄さんから連絡はあったかい？」

ありません。さつきまで銃声がここにも聞こえていました
その声は涙ぐんでいる。

早く来て。助けにきてください。お兄ちゃん、殺される

「大丈夫、君のお兄さんは、そう簡単に死んだりしない。だから大丈夫。すぐに君たちを助けに行くから」

根拠もなく請け負って、五代芽を安心させようと勤める。それがどれほど効果があるのかわからないが、今の佐伯真人にできることはこれくらいしかなかった。

そして佐伯真人と会議室の全ての人間が、一刻も早く爆弾が解除されること祈っていた。

全速力で逃げる水神晴玄の背後で銃声が聞こえたが、それが自分への攻撃なのか、五代明への攻撃なのか判別できなかった。

しかし確認する精神的な余裕もなく、全力で逃げた結果、十秒もしないうちに駐車場の端まで到着した。

新館のすぐ側で、非常口が目に入った。敵の姿は見当たらず、銃声もいつの間にか途絶えている。

少し余裕ができて、駐車場へ目を向けたが、誰かが戦っている様子はなく、他の占拠犯も攻撃していない。少なくとも、先の男も攻撃を仕掛けてくることはなさそうだ。五代明は無事なのかどうか確認に戻るべきか迷ったが、とにかく一旦非常口から中に入った。ここで立ち止まっていると、流れ弾を受けるかもしれない。入ってすぐ隣の階段の陰に隠れ、心を落ち着けて、改めて状況を考える。

五代明が戦っている駐車場へ戻るべきか、それともここで隠れ続けるか、あるいは別の場所へ移動するか。

直接戻ったところで自分が戦力になるとは思えない。こちらの武器は日本刀一本。相手はアサルトライフル。まず接近戦に持ち込まなければならぬ。屋内ならばなんとかできるかもしれないが、屋外では不可能に近い。先程背後をとれたのは、完全に偶然だ。

だからといって隠れ続けるなど論外。すぐ近くで、五代明が戦っているのがわかっていのに、怯えて隠れているわけにはいかない。ならば、三つ目の妥協案。駐車場を窺える場所へ移動し、状況を確認。その上で、五代明を援護できるかどうか判断する。

（それにしても、どうして無事なんだ？）

先程見つかったとき、自分は撃たれたはずだ。しかし痛みは特になく。アサルトライフルの弾が命中しなかったのかと思ったが、左

腕に衝撃が走ったのは確かに感じた。

よく見ると、右腕から出血している。だが、皮膚が切れている程度で、肉は挟られたわけではなさそうだ。銃声は三回だったような気がする。そのうちの一発はこれだろう。

しかし衝撃を感じたのは、刀を手に使っていた左手だ。

（刀？）

刀を見てみると、弾丸が一つ、刃に切り込んだままになっている。咄嗟に眼前に刀を構えたのが、結果的に盾になったようだ。意図してできることではなく、ただの偶然だが。もし刀を持っていなかったら、そして反射的にでも刀を構えていなければ、間違いなく、弾丸は自分の体に至近距離で命中していた。

しかも、この刀は銃弾を受けていながら折れていない。物凄い名刀なのかもしれない。やはり今日は幸運に恵まれている。

周囲を見渡すと、占拠犯の姿はまったくない。先程地下駐車場に姿を見たが、もしかすると、占拠犯は脱出の段階に入っているのかもしれない。

まだ不安は残るが、イベントホールの人質がどうなっているのか確認できるかもしれない。だが、その前に駐車場の確認だ。

水神晴玄は周囲を警戒しながら移動し始めた。

まだ占拠犯の出入りがあるかもしれない一階は止めたほうがいいだろう。発見される確立が高い。

水神清玄は二階へ上がる。ここは新館の端に位置するため、駐車場がよく見える。

もう戦いは終わったのか、それとも別の場所に移動したのか。銃声も途絶えたままだ。

誰かに発見されないよう周囲を注意しながら駐車場を窺う。誰かが戦っている姿は見えない。

先程男に銃撃を受けた場所、自分が隠れていたSUVの近くに、誰かが倒れているのを発見した。

あのアサルトライフルを持っていた男だ。胴体部から大量の出血

がみられ、全く動かない。数発の弾丸が命中していると思われる個所は、肺の位置ではないだろうか。

おそらく、死んでいる。

五代明とあの男の戦いは終わったのだ。

水神清玄は不快に右手で自分の頭を掻き毟った。

結局、自分はなにもできなかった。水神清玄は自分の力の無さをふがいなく思う。もつとうまく立ち回れば、五代明を援護して合流することができたかもしれないのに。

水神清玄がドモチエフスキーの注意を引いてくれたおかげで、五代明が生存できた事実を、当の本人が知る由もなかった。

水神清玄は頭を振りほらい、次のことを考える。

占拠犯は地下駐車場へ移動していた。そしてホテルには占拠犯の姿がまったく見られない。おそらく占拠犯は脱出しようとしているのだろ。う。なら人質を救出するのは今のうちかもしれない。少なくとも確認はできるだろ。う。勿論、占拠犯が全員いなくなっているとは限らないので、注意を怠ってはいけな。い。が。

イベントホールは反対側だ。そこまで誰にも見つからなければ問題ない。

通路は途中まで真っ直ぐ。中間にエントランスホールの空間があり、少し迂回する形になる。確かガラス張りだから、一階部分が見えるはずだ。うまく身を隠せば、一階から見えない位置で、エントランスホールの状態を確認することができる。

とにかく水神清玄は、イベントホールへ向かうことにした。

五代明は足の怪我を庇うように移動した。ドモチエフスキーの戦いでアサルトライフルの弾丸が腿にかすった。幸い大きな怪我ではないが、肉が抉られており、一応シャツを巻いて止血しておいたが、力が上手く入らない。筋肉まで損傷を受けたわけではないので、肉

体が自律的に強い痛みを麻痺させているためだろう。

ロイヤルハントを追って地下駐車場へ行くか、人質を確認するためにイベントホールへ向かうか、どちらを選択するか迷ったが、人質の安全確保を優先することにした。

イベントホールにはC4爆薬が仕掛けられている。強力なプラスチック爆薬。ロイヤルハントと戦うことになった時、それを脅迫材料に使われるのは避けたい。それに、あの男のことだ、証拠隠滅のためにホテルを爆破するつもりだろう。どちらにせよ解除するに越したことはない。

他の敵に遭遇することなく、ホテル一階にあるVIPやホテル関係者が使うイベントホールの扉に到着し、両手で開けた。

突然差し込んだ外からの光に、イベントホールの人質全員が一斉に視線を向けた。

後光を背負うかのように立つ少年は、肩を扉にもたれさせて、疲れた微笑みで挨拶した。

「……どうも」

それはヒーローの登場には酷く不似合いなほど、何気ない挨拶。まるで、占拠事件などおきなかったかのように。

だが、その体中にある血痕を見れば、彼がこの数時間どのように過ごしていたのか、一目瞭然だった。

「占拠犯は、全員倒しました。残っている連中も、逃げたみたいですよ」

短い説明に、イベントホールは静寂に包まれる。こんな少年が、たった一人で、武装した占拠犯を倒したというのか？ 俄かには信じがたく、中には占拠犯の仲間ではないかという疑いを持つ者もいた。事実、入口に程近い席の人々は、手にする銃を見て後退る。

「五代だ」

「五代君」

「五代さん」

だが、同じ中学校の同級生は、その姿を見て、にわかに喜びに包まれる。中には駆け寄ろうとしたものもいた。

五代明は思わず制止する。

「まだ外に出るな！ センサーを解除していない！」

その言葉に、彼らは爆発の恐怖で足を止める。

荻野修が支配人席から立ち、五代明の所へ走った。

観客たちは、本当に助かったのかどうか懐疑的で、誰も動くことしない。それはセンサーが仕掛けられているからということもあるだろうが、それ以上に恐怖からだ。

しかし支配人である彼は、確認する必要がある。仕事の立場から宿泊客の安全を確認しなければ。

センサーの前で止まり、静かにだが興奮がかすかに表れた声で、

五代明に尋ねる。

「終わったのか？」

「ああ」五代明は肯く。

支配人の顔は覚えている。ホテルに来た時の修学旅行生への挨拶で。そして小火を起こした時、連行されていた支配人と一瞬目が合った。

「あんた、無事だったんだな」

「ああ。君も無事でなによりだ」

支配人のほうも覚えていたようだ。こんな状況下のホテルで、あんなところに隠れていた人間の顔なら、覚えていて当然だろう。

「しかし、君は本当に占拠犯と戦って、勝ったのか？」

彼の様子を見れば、虚言だとは思えないが、まだ中学生であるにもかかわらず、武装したテロリストの集団と戦い、しかも勝ったと言われても、にわかには信じがたい。

「一応、連中は撤収したようだ。どうやって逃げるつもりなのかはわからないが、もうホテルには残っていないはずだ」

五代明はポケットからマルチナイフを取り出してセンサーの解除に取り掛かる。

「大丈夫なのか？ 警察を待ったほうがいいのではないのかね？」

荻野修は怪訝に尋ねる。爆弾の解除は専門家でも危険だと聞いたことがある。

「問題ない。昔使っていた物と同じだ。解除方法はわかる。このタ
イプは、一つを解除すると全て停止するようになっていて、安全性
を優先した物だ。まあ、手に負えないようなら警察を呼ぶ。とにか
く、どういう状態なのか確認するから、少し待ってもらえるか」
昔使っていた？ その説明に気になることがあったが、今はそれ
どころではないので、追及するのはやめておく。

五代明はパネルを空けた。そして表情を落とした。

「どうした？」

「……まずい。解除はそっち側じゃないとできない」

五代明の呟きはなぜかイベントホールのほとんどに聞こえた。

「そっち側？」

荻野修の疑問に、言い難そうに答える。

「ホールの内側。あんたたちのいるほうからじゃないと解除できな
い」

再びイベントホールに静寂が満ちる。

「では、君が中に入って……」

「無理だ。センサーが全部起動している。出入り口には全てセンサ
ーが仕掛けられているんだろ」

「つまり、入れる場所がない」

ロイヤルハントがホテルから退避するときに、占拠犯が出入りす
る箇所も作動させたはずだ。これで、人質は完全に閉じ込められ、
やつらは逃げる時間を得る。

「それと、もう一つ」

「……なんだ？」

「タイムリミットがあと十分を切った」

配線盤の中のデジタルタイマーがカウントしていた。一秒ごとに表示時間が一秒減っていく。警察の爆弾解除の専門を呼ぶ時間も、五代明が中に入る方法を探す時間もなさそうだ。

荻野修の判断は早く、従業員へ大声を出して叫ぶ。

「おい！ 誰か！ 爆弾解体の経験者、いや、せめて電気関係に詳しい者はいないか！？」

誰も返答をしなかった。予想通りだが、電気関係の専門はいない。それらに関することを学んだ人間も皆無だろう。

「お客さま！ お客さまの中に、爆弾解体の経験者、または電気関係に関する技術知識をお持ちの方はおられませんか！？」

宿泊客に頼るのはホテル経営として問題だが、そんなことを言うていられる状況でもない。

だが、返答はない。それは経験、知識という以前に、爆弾解体ということに恐怖してのことだとは誰の目にも明らかだった。

だが、しばらくして返事をする者が一人いた。

「あの……俺なら」

修学旅行生の中から誰かが立ち上がった。弱々しい声で、しかしはつきりと断言する。

「俺、爆弾のことなら、少しわかります」

前に出たのは、小柄で小太りの気の弱そうな少年。瀬戸口大介だった。

「……わかるのかい？」

荻野修は少し驚いたふうに尋ねた。電気配線に詳しいのではなく、爆弾のことがわかるということに。

「このタイプなら、実物を見たことがあります。配線も大体覚えてる」

五代明は納得したようにうなずく。

「そういえば、おまえ軍事マニアだったな」

もっとも爆弾解体の実経験などないだろうが、それでもいいよりはかえました。

支配人の荻野修が他に誰か解体に名乗り出るものがないか、イベントホールを見渡したが、誰も動こうとしない。

こうなれば、この二人の少年に頼るしかない。不安も残るが、時間がなく、警察も来ない今、他に頼る者がいないのも確かだ。

「二人とも、頼む」

荻野修は二人に信頼の言葉を告げた。

ホテル支配人の言葉に、二人の少年はお互いの顔を見合わせると、決意したかのように肯きあった。

「よし、瀬戸口、今から俺の言うとおりにしろ」

「はい」

瀬戸口大介は、ポケットからいつも日常的に持っている十得ナイフを出した。

宿泊室の一室で、ハンスは切断された右腕の治療を行っていた。

麻酔を注射したというのに、鈍痛がなかなか治まらない。

「おい、もっと打て」

三人の兵士に命令する。だが彼らはお互い見合わせて、困ったように首を振った。

「もう、これ以上打つのは危険です。あとは、麻酔の効果が出るのを待ったほうが」

「いいから打て！」

ハンスはいらだたしげに再度命令した。

「これ以上は危険なんです」

兵士の言葉に、ハンスはハンドガンを向けた。

「これ以上は言わねえぞ。麻酔を打つんだ」

兵士は仕方なく注射を取り出した。ただしブドウ糖液で薄めたものを注射器に入れ、濃度を薄める。ハンスは気付かなかったようだ。『これが本当に最後です』

腕に針を刺して麻酔薬を注入する。

心なしか痛みが治まってきたような気がしてきた。プラーシーボ効果だろうが本人は勿論気付いていない。

『よーし。いいぞお。あー』

ハンスは満足そうに息を吐く。麻酔による陶酔状態が始まっているのかもしれない。

無線を聞いていた兵士の一人が、伝達する。

『ワシントンから連絡。撤退するそうです』

『なに？ 政府の連中、金を払ったのか？』

ハンスが怪訝に確認する。

『いえ、どうも作戦中止らしいんですが』

『中止！？ 金も貰ってねえのに中止だと！？ とういうことだ！？』

『それが、部隊が壊滅状態になったと』

『壊滅？ まさか、あのガキどもにか！』

『そうらしいです』

三人の兵士は顔を見合わせて、お互い同じことを考えていることを確認する。

中学生のために部隊が壊滅した。とても信じられる話ではない。

だが、事実ハンスを振り返りにし、腕を切り落としている。その時に仲間も二人やられたと聞いた。SAT突入の際は七人。

『日本は信じられないようなところだ。平和ボケしているなんて誰が言っただんだ？』

『やっぱりニンジャだ。東洋の魔術を使うニンジャなんだ』

フィクション映画でしか知らないが、彼らにはそうと思えなかった。

ハンスが怒鳴りつける。

『ぐだぐだぬかしてんじゃねえ！ とつとあのガキを探し出せ！』

『ですが、撤退命令が……』

『ああ？！ そんなもん関係あるか！ いいから探し出すんだ！』

三人の兵士は顔を合わせて、目で相談した。口には出さずに結論を出す、それぞれ武器を手にして室内を出ることにした。

探しにいくと見せかけて、ハンスを放置して、撤退してしまおう。これ以上この男に付き合っていられない。

そして扉を開けると、そこに中学生がいた。

水神晴玄がエントランスホール二階へ向かう途中、突然ドアが開き、危険を感じるよりも、呆氣に取られた。

こんなところに誰かがいるとはまるで考えておらず、ドアが開いた時に思ったのは、他にも宿泊客が隠れていたのかだった。

だが、現れたのはサブマシンガンをした男。何気なく、警戒するでもなく、ごく当然のように廊下に出てきた。

彼らもドアを開けたすぐ前に、少年がいるのを見ると、呆氣に取られたようだった。

『う……』

やがて恐怖を見せる兵士。

「あ……」

やがて恐怖を見せる水神晴玄。

『うわあああ！』

占拠犯は悲鳴を上げてサブマシンガンを向けようとした。

一閃。水神晴玄は、抜刀と同時に袈裟切り。

兵士の体が、右肩から左腹にかけて滑らかに滑り、分離した。サブマシンガンを持つ腕まで切断され、一緒に床へ落ちる。

『撃て！』

室内にいた誰が、聞き覚えのある声で叫ぶ。

水神晴玄は咄嗟に横へ飛んで、弾丸の雨を避けた。

だが、この状況はまずい。中の占拠犯たちが通路に出てきて一斉に撃たれたら終わりだ。ここからでは逃げる場所がない。通路を全

速力で走っても、後ろから撃たれる。

床に落ちているサブマシンガンが目に入った。今、反射的に切った占拠犯が持っていた物。銃撃を受けずにすぐに拾える位置だ。

すぐに手を伸ばして拾うと、ドアの隙間、蝶番によって壁とドアがつながっている隙間へ、銃口をねじりこむ。ここからなら無理に身を乗り出さなくても室内へ撃つことができる。命中するかどうかは別として。

水神晴玄は構わずに撃った。丁寧に狙ってもあたるとは思えないし、そんな余裕もない。

「うわあああ！」

ドアの隙間からサブマシンガンを乱射。

正確に構えてもいない、まるで玩具を扱うような撃ち方だったが、ドアと壁の隙間に銃口をねじりこんだのが幸いし、それはある程度固定された状態で、銃撃の反動であらぬ方向に銃口が向くことなく、全弾室内に撃ち込むことができた。

『アギ！』

『ガア！』

銃声で聞き取りにくかったが、悲鳴らしきものが室内から発せられた。命中したらしい。

弾切れを起こすと同時に、水神晴玄は即座にその場から離れた。

（逃げる！ 逃げるぞ！ 逃げるってどこへ！？ くそ！ まともに見つかった！ つーかどこへ逃げる！）

直接発見されてしまい、少し混乱気味の頭でなんとか考えをまとめようとするが、うまくいかない。

イベントホール二階を全速力で走りぬけ、一階に無数の死体があることにも気づかず、逃げる場所を求めて目に入った階段を上がり、三階へ向かった。

ハンスはベッドの陰に身を伏せて銃弾をやり過ごした。

銃撃が収まり、室内を伺ってみると、兵士二人が無数の銃撃を受けて倒れている。二人ともほぼ即死だ。通路に出た兵士は、体が二つに分離している。両腕も切られているようだ。いったい、どうやったら一瞬であんなことができるのだ。

『あのガキイ!』

だが、ハンスはすぐに頭に血が上り、畏怖という謙虚な思念を失う。

またもやこの俺に銃弾を浴びせかけてくれた。しかも刀を持っていたことから、明らかに俺の右手を切断してくれたやつだ。

ハンスはサブマシンガンを手にとると、怒りに任せて通路へ向けて発砲した。全段撃ち尽くして弾倉を交換。

通路へ飛び出しサブマシンガンを構えるが、その時にはすでにガキの姿はなかった。

『ちくしょお! ぶち殺してやる!』

ハンスは叫んで探し始めた。

20・AM05:00

イベントホール中央に宿泊客が集まり、急いでテーブルなどでバリケードを作り始めた。即席バリケードの中に入り、爆風から身を庇う。万が一のことを考えて、可能な限り被害を最小限に抑えようという試みだ。

正直、効果のほどは疑わしいが、やらないよりはましだろう。当初一部から子供に解体を任せることに不信の声が上がったが、しかしエンプレスホテル支配人である荻野修が、全従業員に命令を出した。爆弾解体を彼らに任せ、宿泊客の安全を確保しろと。そして宿泊客を説得した。宿泊客らは完全に信用したわけではなかったが、現在二人の少年以外に頼れる者は、完全にいない。

残り時間はすでに八分を過ぎている。

五代明が可能な限り安全を確保したのを見ると、指示を出し始めた。

「始めるぞ。瀬戸口、そんなに難しいものじゃない。落ち着いてやれ。まずパネルを空ける」

瀬戸口大介は慎重に配線盤の止め螺子を外す。

「光センサーの類は付いていないはずだ。そのまま外していい」
光を感知して起爆されるセンサーは、爆弾テロならば有効だ。発見されても解体しようとして蓋を開けた途端爆発する。だがこういった状況下ならば、不測の事態で仕掛けた犯人が爆弾を解除する必要に迫られる可能性がある。よって危険度の高いセンサーはつけることができない。

同じ理由で振動に反応するセンサーもないだろう。それにこんな大人数の人質がいる場所に仕掛けているのだ。振動で起爆するのなら、とつくに起爆している。

パネルを開けると、背戸口大介側からもタイマーが見えた。七分を過ぎている。

「いいか、正面から見て右側の螺子を外すと、配線盤が一つ外れる。ただし、つながっている配線は切るなよ」

ゆっくり螺子を外し、配線盤を外した。

「その中に二本のコードがあるのが見えるだろ」

「ああ、やっぱりあると思った」

瀬戸口大介は、最後まで説明される前に、力なく呻いた。

「想像が付いたか？」

「どちらか片方を切断すれば止まる。だけど、間違えたら、爆発する」

「そのとおり」

配線板の奥にあるコードは赤と黄色。危険の赤。警告の黄。

「赤と黄色、どっちを切ればいいんですか？」

五代明はしばらく考えて、答えた。

「……わからん。自分で決めてくれ」

瀬戸口大介は、十得ナイフを握り締めて、考える。どちらを切ればいい？

五代明に頼つてもだめだ。これは確立の問題で、五代明の選択もただの勘でしかないなら、それに頼ることも選択の一つでしかない。自分で選択しなければ。

瀬戸口大輔はいわゆるオタクと呼ばれる趣味を持つ。

虚構の世界に没頭し、現実の世界を見ない人種だと馬鹿にされ、酷い時には現実と虚構の区別がつかない頭の悪い人間だとさえ蔑まされる人々の一人。

だが、彼にとってそれは逃げ道だった。唯一の逃げ場だった。

容姿は人並み以下。体力も運動神経もなく、かといって成績も優秀とは言いがたい自分は、周囲から常に軽んじられ馬鹿にされる存在だった。

なにをしても周囲の人から発せられるのは否定的な言葉。

なにをしても周囲の人から発せられるのは否定的な態度。

そんな言葉だけを聴かされ続け、そんな対応だけをされ続けた彼にとって、現実はその苦痛でしかなかった。

虚構の世界に没頭している時だけ、ほんの少しだけ楽しいと思えた。

特に熱中したのが戦争だった。

銃。大砲。戦車。戦闘機。軍艦。

こういった物があれば力のない自分でも力を得ることができる。

瀬戸口大輔は夢中になって、そういった本や雑誌を読み漁った。

虚構の武器に。

だが、彼は理解していなかった。それらが全て現実に存在するものだと、理屈ではわかっていたが、感覚として理解していなかった。本の中、テレビの中にあるものは全て虚構だと、無自覚に感じていたことが、全て現実に存在するなどと考えもしなかった。

そして今、虚構の世界の中に逃げ込み続けた彼に突きつけられたのは、存在するはずのない武器が目の前に存在し、自分に突きつけられているということ。

自分が今まで夢中になっていたのは、現実に存在する殺人兵器だと言う事実。

恐怖に身を竦ませ、恐怖になにもできないまま、彼は優しくしてくれた人を見殺しにしてしまった。大滝由美。佐藤武人。五代芽。だから、今は恐怖に勝ちたかった。

イベントホールにいる人たちを助けられるのは自分だけだ。

今まで逃避でしかなかった行為が、現実に役に立ち、命を助けることができる。

そしてもっとも責任ある決断に迫られた。逃げるわけには行かない。

自分で選ばなければ。

二者択一の、命をかけた選択を。

なぜ彼らは問題を起こすのだろうか。

私が一生懸命注意しても、騒ぎにならないように頑張っても、彼らはそんなことをお構いなしで問題を起こすのだ。

今日も修学旅行だというのに、ケンカを始めている。

ホテルの人にも迷惑がかかるのに、これじゃまた評価が下がってしまう。

どうして彼らはいつもわけのわからない理由で問題を起こすのだろうか。

拳銃を撃つたり、爆弾を仕掛けたり、人を殺したり。

拳銃？ 爆弾？ 殺人？

私はなにを考えているのだろうか。

こんなこと現実起こるわけがないではないか。

きっと疲れているのだ。

彼らが問題ばかり起こすから。

彼らが問題ばかり起こすから、おかしい夢を見ているのだ。

虚構の夢を見ているに違いないのだ。

五代明は突然強烈な殺気を感じ、反射的に仰け反った。

「！」

左肩に痛みが走り、その後方の壁に弾痕が生じた。

五代明はそのまま床を転がって、置いてあったサブマシンガンを手にし、立ち上がりざま、新たに現れた敵に銃口を向けた。

だが、敵のほうが早かった。銃身に弾丸が命中。衝撃でサブマシンガンが手から離れ、宙を回転して落下する。幸い手や指に命中せずすんだが、武器がなくなった。

『……よくも、やってくれたな』

占拠犯の一人、消防署員を殺した男がハンドガンに向けていた。
なにがあつたのか、右手首から先がなくなっている。

そして、脇にはテレビのリモコンのようなものを挟んでいる。だが、安易に触れないようプラスチックの蓋でカバーしていることから、なんらかの危険を含んだ物だと思われる。

『あのガキはどこだ？』

『なに？』

聞き返した途端、男はハンドガンを発砲。左腿をかすった。皮膚と脂肪を少し抉っただけで、筋肉には損傷を受けていない。脅しだろうが、次は外すつもりがないのは、その憎悪に満ちた表情でわかる。

『あのガキはどこだ！』

なんのことかわからない五代明は、攻撃に転じようと、沈黙して次の発砲の瞬間を待つ。それしか方法はない。

『動くんじゃねえ！』

しかし、予想通りだが、見抜かれている。動きに合わせて撃つことはこの男にとって簡単だろう。ここまできて終わりか。五代明の額に汗が滲み出る。

「日本語ならわかるか？ いいか、このリモコンはその爆弾の起爆装置だ。こいつを押されなくなったら早く言え。わかったか！？」

ああ！ あのガキはどこだ？！」

一陣の疾風。

唐突に現れたそれを表現するならば、そんな古風で詩的な言葉が相応しかった。

それが誰なのか、それを理解する間もなく、ハンスのハンドガンを持つ左腕が、ゆっくりと滑らかにずれ、粘性のある体液の系を引いて、落下した。

『……あ？』

次の瞬間、血が吹き出た。

『あああああ！？』

右手だけではなく、左手まで失ったハンスは、その意味を理解すると同時に、半狂乱に叫ぶ。

「そのガキはここだ」

そして、対照的に冷静に返すのは、水のように澄んだ刃を持つ少年。

「水神！」

水神清玄は発見されたあと、三階に上がると、手すりの影に隠れて二階を窺った。

『どこに行きやがった』

二階で誰かの声が聞こえた。日本語ではないので正確にはわからないが、だいたい理解できるのは、こういう時の科白は世界共通なのだろう。

男の姿が見え、周囲を窺うが、自分には気付かず、そのまま一階へ降りて行った。

水神清玄は安堵の息をついて、イベントホールに向かった。明確に目指していたわけではないが、元々の目的も同じだ。もっとも現状では呑気に偵察している余裕などないだろうが。

イベントホールの扉を開けようとしたが、鍵がかかっている。もう一つの扉も同じだ。

イベントホールは少し特殊な構造をしている。一般客が入る席は二階と三階にあり、舞台関係者やVIPの入口は一回にある。しかし完全に切り離されているわけではなく、通路の端には業務員用連絡階段があつてつながっている。

二階の扉も確認しようと、階段を降りると、なにか声が聞こえた。二階からではなく、もっと下。一階からだ。

占拠犯なのか、それとも別の誰かか。

パンッ！ 突然銃声が響いた。

一瞬自分が銃撃を受けたのかと思ったが、しかし体になんらかの衝撃や痛みはなかった。

パンッ！ 再び銃声。

今度ははつきりと位置が分かる。声のした一階からだ。

手摺から少しだけ顔を覗かせて窺うと、そこには五代明がいた。

そして自分から向かって右側に、右手首がなくなっている占拠犯。スイートルームで戦ったあの男だ。

五代明は完全に劣勢。あの体勢から反撃に出るのは難しい。それにサブマシンガンが離れた位置に転がっていることから、武器も持っていないだろう。

「日本語ならわかるか？ いいか、このリモコンはその爆弾の起爆装置だ。こいつを押されなくなったら早く言え。わかったか！？」

ああ！ あのガキはどこだ？！」

男がリモコンを持つとうとして体を動かし、顔が水神清玄とは反対の方向へ向いた。

極限状況下にいたことが、今迄の武術の修練が極限に発揮されたのか、一瞬の隙を見逃さずに、思考が結論を出すより早く、体が動いていた。

疾走し、占拠犯の左腕、ハンドガンとなにかのリモコンを持つ手を、居合抜きで切断した。

「そのガキはここだ」

五代明は驚愕の声。

「水神！？」

ハンスは憤怒の声。

『てめえええ！』

血の吹き出る腕をめちやくちやに振り回して、ハンスは突進する。もう攻撃手段がないことは、錯乱した頭から忘却している。

水神晴玄は鞘に収めた刃を抜刀。

一閃。交差すると同時に右胸を薙ぐ。

二線。振り向きざま左肩から腰に掛けて袈裟切り。

三尖。下半身と分かれた上半身を壁に縫いとめる。
死染。おびただしい血がその場を染め上げた。

昆虫標本のようになって絶命したハンスをしばらく見つめてから、
水神晴玄は五代明へ向くと、右手を差出した。

その手を信じられない思いで五代明は掴んだ。その手は確かに掴
むことのできる、現実存在する右手だった。

「……どうやって助かったんだ？」

屋上から落下したはずだ。あの高さから落ちて無事だったとは到底
思えない。

「なんていうんだったか？ 雨水を排水するパイプに、手が届いた」
興奮しているのか、疲れているのか、どこか言葉少なく説明する。

「そうか」

五代明は水神晴玄の首に腕を回し、背中を軽く数回叩いた。

「とにかく、無事でよかった」

「五代さんも」

不意に、水神晴玄は床に腰をつけた。

「おい」

「大丈夫。ただ……疲れた」

焦燥した笑みを浮かべる水神晴玄。

仲間と合流したことで安堵し、力が抜けたらしい。

なにかあったのかはわからないが、あれから水神晴玄も戦い続け
たのだろう。それも、自分のような経験があったわけでもないのに
よく、一人でここまで戦えた。感心するほどだ。

「いやあああああ！」

突然中央に避難していた宿泊客の一人が叫んだ。

「もういやああああ！！」

早乙女遙が絶叫して立ち上がると、開いた出口へ向かって走り始めた。まだ、センサーが解除されていないにもかかわらず。

五代明を始めとした、その場にいる全員が慄然とする。

このままでは時間切れを待たずして、十秒後には爆発することになる。

「止めろ！」

荻野修が叫ぶ。同時に、ホテルの従業員を含め、一般宿泊客までも止めにかかった。

「いやああ！ 帰るの！ 私はかえるのおおお！」

だが、半狂乱と化した早乙女遙は、細い体のどこに力を秘めていたのか、服を付かんだホテルマンの手を引き剥がし、腰にしがみついた小柄な男の頭を灰皿で殴りつけ、腕を掴んだ男の右頬を右眼球がえぐれるほど深く引っかき、なりふり構わず振りほどいて、走り続ける。

「かえるうう！ おうちにかえるうううう！」

極度の緊張状態が続いた結果、幼児退行を起こしたように叫び、それに伴い走るフォームも手足を振り回すようなひどく幼稚なものとなっている。

「わあ！ ああ！」

瀬戸口大介が混乱しながらも、早乙女遙を止めようと身構える。だが、狂乱状態の彼女に脅えて腰が引けており、それに三人の男が止められないほど興奮状態にあったのだ、瀬戸口大介一人では止められないだろう。

「止まれ！」

叫んで五代明はハンドガンを構えた。撃つても止めなければ。ただし、外せば背後の人に当たる可能性がある。それに、動き回るのは当てにくい。

五代明は自分の銃の扱いの致命的な欠点を今ほど悔恨したことは

なかった。

常に急所を狙ってきた自分は、逆に急所を外して撃つということが、うまくできない。

だが、危険を覚悟で撃たなければ、このままでは大惨事确实だ。早乙女遥は、センサーが仕掛けられていることさえわからなくなっているのだ、五代明のハンドガンも見えていない。

最悪、早乙女遥を殺すことになっても止めなければ。

「かぁええるうのおおお！」

やるしかない。五代明は引き金に指を掛けた。

「プギヤ！」

早乙女遥が、唐突に蛙が潰れたような声を立てて、転倒した。

だが、五代明はまだ発砲していない。

身構えていた瀬戸口大介も、そのまま硬直したままだ。

「……あ？」

倒れた早乙女遥の足を誰かが掴んでいる。

「……大滝？」

床に這い蹲っている大滝由美が、早乙女遥かの足をしっかりと掴んでいた。

そして、その間に追いついたホテル従業員が、一斉に早乙女遥を取り押さえた。

彼女はまだ暴れているが、多勢に無勢のうえ、今度は完全に押しさえられている。

しかし、五代明が注目するのは、早乙女遥ではなかった。

「大滝！？」

大滝由美が生きている。

腹部から血を流しているが、確かに彼女は生きている。

床に這い蹲り、ここまで這って移動してきたようだ。舞台から血痕が続いている。

「……爆弾……はやく……あ……」

その声にすぐに状況を思い出す。

爆発までの時間はすでに一分を切っている。

「瀬戸口！」

瀬戸口大介は言われて、再び二本の配線に取り掛かった。早く切らなければ爆発する。

赤と黄色。どっちだ。

どうして赤と青じゃないんだ。普通はその二色で、仕掛けた本人がわかりやすいように、危険の赤を切断すればなんとかなるものなのに。

「……か……」

大滝由美が小さな声でなにかを言っている。

「……あいつらが言ってた。赤だって……」

赤。それが解除するコードなのか。

瀬戸口大介は赤のコードを手にとると、ナイフを掛けた。

「……！」

瀬戸口大輔は覚悟を決めて切断した。

ピー……

電子音と共にタイマーが停止した。

大滝由美の手当てが行われる。宿泊客の中に医者がいいたのは幸いだった。

彼女の応急処置が終わり次第、五代明にも行うと言っていた。重症の大滝由美が優先されたということだ。

横になっている大滝由美が、五代明に手を伸ばす。五代明はその手を握った。

「大丈夫。命に別状はない」

「……明くん。芽ちゃんが……」

「大丈夫だ。助け出した」

「……ほんと？」

「ああ。いま、地下に隠れている。あとで会えるよ」

大滝由美は安堵したように笑みを浮かべた。

「……よかった」

「あまり喋るな。傷に触る」

「うん……」

大滝由美は、心の底から喜んだように笑うと、その瞳を閉じた。様子を見ていた人々の顔が強張ったが、医者は特に表情を変えずに説明する。

「大丈夫、気を失っただけです。緊張が続いた上に、怪我をして、出血もあつたためでしょう。ですが、幸い内臓に損傷は受けていません。直接命にかかわることはないでしょう」

周囲から安堵の息が漏れる。

ホテル支配人の荻野修が警察に連絡を入れている。周囲の地雷が撤去され次第、警官隊が救出に来るだろう。

多少時間はかかるが、もう安全になった今では、待つことは苦痛にはならない。

ともあれ、これで全てが終わった。

ワシントンことロイヤルハントは撤退したようだが、五代明は構わなかった。自分にはもう関係ない。

ここは、日本。戦争のない国、戦争に関することのない国なのだから。

妹が心配している。そろそろ迎えに行かなければ。

「ところで……」

椅子に座って休んでいた水神晴玄が、不意に五代明に尋ねる。

「占拠犯、逃げたって言ったけど、どうやって逃げるんだ？」

ホテルの周囲は警官隊が囲んでいる。武力突破するにしても、今の人数では不可能だろう。

地下駐車場に入るのを目撃したが、あそこからどこかへ通じる箇所があるわけではない。

「どこかに逃げ道がある？」

「逃げ道……」

思案した五代明は、不意に顔を上げた。

「……しまった」

逃げ道はあった。

五代芽は地下の事務室でおとなしく静かにしていた。

しかし、どれだけ待っていても兄から連絡はない。

「お兄ちゃん、帰ってこないの。どうしよう?」

涙目で受話器に向けて話す。

警察署の会議室で、婦人警官が安心させるために対応に当たっていた。

大丈夫。お兄さんは、戦争にだって生き延びたんだから。きっとどこかに隠れているだけよ

その言葉を素直に信じるほど、五代芽は子供ではなかった。あるいは、つい先程兄の境遇を知ったときからか。

おとなしくしているという兄の言葉に従い、ここで静かにしているが、内心は不安が満ちていた。

戦いに向かった兄を止めるべきだったのではないだろうか。

このまま兄はいなくなってしまうのではないだろうか。

もう二度と会えないのではないだろうか。

「……お兄ちゃん」

お願い、帰ってきて。

芽ちゃん。今連絡が入ったわ 担当の婦人警官が喜びの声を上げた。人質になっていた人たちが助かったそうよ。あなたのお兄さんが助け出したんですって。詳しいことはまだよくわからないけど、お兄さんは無事だそうよ

「本当ですか」五代芽は喜ぶ。

ええ。もうすぐ迎えに来てくれるわ

扉の向こうで音がした。誰かがドアノブを回す。

「お兄ちゃん！」

五代芽は思わず歓喜の声を上げた。

だが、ドアを開けて現れたのは、兄ではなかった。

「これはこれは、お嬢さん。また会えて嬉しい限りだ」
ワシントンだった。

21・AM06:00

対策本部会議室は、エンプレスホテルの支配人、荻原修から連絡を受けた。

というわけで、ホテルを占拠していた犯人たちは全員撤退したようです

会議室が歓声に満ちた。電話の声が聞こえなくなり、慌てて副本部長であり、彼らの署長である桐嶋長平が制する。

「静かに。静かに！」

彼らはそれで支配人の声が聞こえなくなること気付いて、すぐに静かになる。だがその顔にある喜びの顔は消えなかった。

爆弾は一応解除されましたが、安全を考えて宿泊客と従業員全員は、イベントホールから移動させていません。まだ危険が残っていないとも限らないので

そして宿泊客たちにホテルの飲食品をすべて無料で配っているところだった。宿泊客たちはそれで不安が完全になくなったわけではないが、随分落ち着いている。

大体の説明は以上です。なにか質問はありますか？

「占拠犯を撃退したという少年ですが、それは五代明くんですか？」
佐伯真人が確認する。いつもと変わらず生真面目で表情を変えていないが、かすかに喜びの色があるのを桐嶋長平は気付いた。

はい、そうです。この電話番号も彼が教えてくれました
「彼は無事ですか？」

大丈夫です。少しケガをしているようですが、命には全く別状はないと、先程見てもらった医者が言っていました。あー、五代君は、今は姿が見えませんが

イベントホールのどこかで体を休めているのだろう。

「ありがとうございます。ホテル正面道路の爆弾を解除しだい、救助に向かいますので、そのまま宿泊客と従業員をイベントホールから移動させないでください」

わかりました。それでは、ないかありましたら連絡を
通話を一旦切る。

佐伯真人は一息ついて、桐嶋長平に眼を向けた。

「やってくれたな」

その賞賛の言葉は、五代明へ向けたものだった。

佐伯真人もその賞賛には賛成だった。

「凄い少年だ」

過酷な過去を経て、再び戦場に巻き込まれた少年は、今度は自らの命だけではなく、三百人も命を救ったのだ。

「ああ、そうだ。五代芽さんに連絡を。お兄さんの無事を知らせないと」

桐嶋長平はホテルの地下管理室にいる五代芽に連絡をとろうと、婦人警官に任せていた電話に目を向けた。

しかし婦人警官は困惑気味に、何度も五代芽の名前を呼んでいる。

「どうした？」

「それが、返事がありません。いきなり連絡が途絶えたんです」

佐伯真人は桐嶋長平と顔を見合せると、すぐにその受話器をとった。

五代明が地下に隠れているはずの五代芽を迎えにいった時には、そこには誰もいなかった。

「くそ！」

壁に拳を叩きつける。

嚴重に閉じられているはずの、用水路への扉が開いている。

ホテルに存在する地下道。ここを通れば川まで一直線。警察の包

囲も簡単に通過できる。自分たちが逃げ道と判断して見つけたここが、やつらの撤退経路だったのだ。そんな場所のすぐ隣の管理室に、安全な場所と断言して妹を置いてきてしまった。

床に転がっている受話器から声がする。

芽くん?! 五代芽くん! どうしたんだ!? 返事をするんだ!

五代明は受話器を取った。

「誰だ? 本部長か?」

そうだ。その声は、五代明くんだね。なにがあった? 先程君が人質を助けたという連絡を支配人から受けたばかりなんだが

「ああ、人質は無事だ。イベントホールの爆弾も解除した。だが、やつらが撤退した」

そうか。とにかく、きみたちはもう安全なんだね。後のことは私たちに任せて、救出が来るまでホテルで休んでいなさい。ところで、芽さんは?

五代明は承諾の返答はせず、撤退経路の説明をする。

「やつらは下水道を使って逃げた。ああ、ここだよ。芽が隠れていたここが、撤退する経路だったんだ。芽がやつらに連れて行かれた!」

会議室で再び緊張が走る。報復処置として処刑すると宣告された少女は、兄に救出され、そして再びやつらの人質となった。

「これから追跡する。なるべく早く着てくれ」

追跡?! なにを言っているんだ!? 君はよくやった。もう我々に任せて安全な場所にいるんだ。芽くんは私たちが必ず助け出す!

「やつは俺の情報を土屋から聞き出した! 芽が俺の妹だということもやつは知っている! 脱出した俺への報復に殺されるんだ!」

五代明はそれ以上の説明をせずに、下水道へ向かった。

追いかけてきた水神清玄は、五代明が下水道に入っていたのを見て立ち止まった。

下水道はかなり大きく、深さも十分だ。占拠犯はたぶん小型ボートを使って移動したのではないだろうかと思う。それならばかなり早く迅速に移動できる。

五代明は走って追いかけるつもりらしいが、いくらなんでも追いつけないだろう。

五代くん！ 待つんだ！

大声で叫ぶ声が床に転がっている受話器から聞こえる。水神清玄は受話器を手にする。

「もしもし」

五代明くんか？！

「いや、違う。今ここにはいない。下水道の中に入っていた。占拠犯はここを使って逃げたらしい。五代さんは、それで追跡に行きたみたいだ」

そうか。もう行ってしまったのか

「ところで、あんたは？」

水神清玄は警察だというのはわかるが、具体的に誰なのか疑問に思い尋ねる。

警察だ。対策本部長の佐伯真人。君は？

「修学旅行に来てた葉山中学校の水神晴玄」

水神晴玄！？ 無事だったのか？！

その驚愕の声で、五代明が警察になんと報告したのか見当がついた。

「ああ、一心生きてるよ。っていうか、やっぱり五代さん、俺が死んだと思ってたんだ？」

もつとも屋上から転落すれば死んだと思って当然だが。

そう聞いていた。だが、とにかく無事で何よりだ。それより、ホテルは開放されたと連絡を受けたのだが

爆弾が解除された後、五代明が伝えた電話番号で、牧野修が警察に連絡を入れていた。

「ああ、そうだ。支配人さんから連絡は受けたよな？」

勿論。とにかく、きみたちはおとなしく待っていてくれ。すぐに救出に向かう

「わかった。早く着てくれ」

水神晴玄は答えると、受話器を置いた。そしてポケットの中に入れたままだったキーを取り出す。有名なバイク制作会社のロゴが入ったキーホルダーが取り付けられている。

五代明は下水道を走った。緩やかな坂が続く下水道の右側面には、業務用通路があり、汚水の中に浸からなくてもすみ、その分早く走ることができる。

事務所で拝借した懐中電灯は、光度が足りないため、奥まで照らすことはできず、十数メートル先は闇だ。ミニマグライトはマクスエルのナイフの一撃を受けた時に壊れてしまった。いくら頑丈といっても大型ナイフには一撃が限度だった。

もっとも強い光だと敵に発見されやすい。それ以前に追いつくことができるかどうか怪しいのだが。

「くそ」

前方からエンジンの音がかすかに聞こえる。反響して大きな音が届くのだ。

やつらは、どうやら小型ボートを使っているらしい。持ち運びが簡単なゴムボートだろう。下水用水路では幅の問題で最大速度は出せないだろうが、それでも足より速い。

そして、その足で走っている自分では、いつまでたっても追いつけない。全力で走れば速度は若干上かもしれないが、全力疾走は十秒も続かない。

息を切らして壁に寄り掛かる。昨日の夜からずっと睡眠をとっていない上に、留学旅行で京都中を歩き回り、さらにホテル占拠で闘い続けたのだ。体力は限界に達しつつあり、時折目眩がする。

「芽」

ロイヤルハントは人質をいつまでも生かしておくわけではない。用済みとなれば処理する。それも、復讐をかねた方法で。絶対に追いつかなければ。

ビイイイイイ……

後方からエンジンの音が聞こえ始めた。一瞬、疲労と暗闇での前後の位置が判らなくなってしまったのかと思っただが、ライトの明かりが急速に近づき、五台明の前で止まる。

銃を構える五代明に、水神晴玄の声が聞いた。

「走って追いつくつもりだったのか？」

オートバイに跨った水神晴玄は、五代明に乗るように促す。

「それ、どこから持ってきた？」

五代明の問いに、水神晴玄は鍵を指差す。宿泊していた部屋の向かいで殺された二人が持っていた鍵と同じ物。鍵を一つ水が見晴玄に渡してあった。

「あの二人のだよ。何時間か前に駐車場で見つけた。それより早く乗れ。芽ちゃんを助けないと」

徒歩よりも、こちらのほうが早いのは自明の理だ。五代明は水神晴玄の助けに乗った。

後部座席に五代明が乗ると、水神晴玄はアクセルを踏んだ。一気に速度が上がリ、しかし安定した姿勢で通路を進む。比較的広いとはいえ、所詮は下水水路の業務用通路だ。あまり大きな動きはできないのだが、水神晴玄は二人乗りにもかかわらず難なく走らせる。少なくとも今日始めて乗ったわけではないらしい。

「バイクの運転なんてどこで覚えた？」五代明は問う。

「親戚にレーサーがいて、そいつに少し習った」

「そうか。だが、いいのか？」

「なにが？」

「このまま行ったらお前も戦うことになるぞ」

水神清玄は当然のように答えた。

「乗りかかった船だ。最後まで付き合う」

二艘の小型ゴムボートが、汚水の上を、後部に取り付けられたエンジンで進む。

五代芽は銃を突きつけられて無理やりゴムボートに乘せられた。逆らいたかったが、恐怖で身が竦んでまるで力が入らず、結局言われるままに連行されてしまった。兄の強さの半分でもあればいいのにと、心底思う。

占拠犯の人数は全部で五人。これで全員だとすると、人数が少ない。残りの人たちは、兄に倒されたのだろうか。

『この少女はどうしますか？』

占拠犯の中で唯一の女性が、ワシントンになにかを聞く。

『到着しだい処理する』

『わかりました』

なにを話しているのかわからないが、とてつもなく不穏なことをいつているような気がしてならない。不安が恐怖となって押し寄せてくる。

同時に五代芽は、ワシントンが手にするコンパクトディスクが気になっていた。

ここに入る直前、占拠犯の一人がリーダーであるこの男に渡したものの。

目的を達成できなかったのに、なぜかワシントンが意気揚々としていることに、疑念に思う。

「これが気になるかね？」

CDを見せて、流暢な日本語でワシントンが尋ねる。

芽は脅えてなにも答えられなかったが、しかし気になるといえば気になった。一体それはなんなのだろうか。

「そうだな。君には特別に教えてあげよう」

ワシントンは推理小説で犯人のトリックを暴いた探偵のように得意げに告げる。

「これが、我々の目的の物なのだよ」

芽は恐怖よりも好奇心と疑念が勝り、震えながらも言葉を出す。

「お金じゃないの？ 警察に百億円を要求したとかつて」

どうやって警察に要求したことを知ったのか、ワシントンは疑問に思わなかったのか、深く追求せずに自分の説明を続ける。

「ホテルを占拠した目的が金だということは変わらないが、日本の警察や政府が支払うとは思っていなかった。ただのブラフだ」

本当にそのちっぽけな一枚のCDが目的だというのだろうか。いったい中にあるデータはなんなのだろうか。

「このディスクに記録されているのは、日本円にして総額五百億に達する金の在り処を記した情報だ」

「……五百億円」

その巨額に現実感が伴わない。そもそも、そんな額をどこに隠すというのだろうか。

「勿論莫大な現金や宝石金塊の類を、その辺の地面に埋めているというわけではない。このデータは正確には、世界各地の銀行口座の位置と、その暗証番号を記してあるのだ。つまり、巨額の金を世界中に分散して保管してあるわけだ。そして、これがその全てを記している」

「どうして、そんなものを？」

「エンプレスホテルが保管していたものだよ。あのホテルには高度なセキュリティに守られた特殊な金庫があり、顧客が預けたものを保管している。これもその一つだ。もっとも、貴重品を預かること事態は犯罪ではないがな。ホテルがなにか貴重品を預かること自体は。それが、公にできないものでも、本人が知らないといえば、問

題なくそれで終わる」

五代芽が聞きたかったのはそこではなかった。なぜそんな莫大な金額の所在を示したディスクを知っているのかということだった。

「なぜ知っているのか気になるか？ まあ、それに関しては話すと長くなる」

「……そのお金、いったいなんなの？」

普通の預金にしては額が多すぎる。大企業のものかもしれないが、それならばなぜホテルなどに隠しているのか。犯罪にからんだ金だからだろうか。

「これは、香港マネーだ」

「香港マネー？」

「そうだ。1997年。イギリス最後の植民地、香港は、中国に返還された。だが、それは同時に資本体制から、共産体制に移行することでもある。つまり、経済都市でそれまで資産家が蓄えてきた莫大な金は、中国政府の手に渡る。それを回避するため香港の資本家たちは海外に資金を移そうとした。だが、時間が少なかったため完全ではなく、そのうえ、移した金の所在が不明になるという事態まで起こしてしまった。このディスクは、その紛失した金を記したものの一つだよ」

「じゃあ、始めからそれが目的で」

「そうだ。地下金庫を破るには時間がかかるのでね」

それに必要な資材を運び、地下金庫を破る時間を稼ぎ、そして電力を大元から遮断する。それらの全てを可能にする方法は、ホテルを占拠するしかなかった。

「そして、もう一つ」

「もう一つ？」

「実のところ、君のお兄さんがいることは知っていた。実験演習は成功だ。まさかここまでの動きを見せてくれるとは、マクスエル以上だ。私の考案した方法は大成したと見ていいだろう。やつには感謝しなくてはな」

五代芽は怪訝に思う。兄がいることを知っていた？　いつたいなにを言っているのだろうか？

不意に、エンジンの音に、異なるパターンが混じったような気がした。

『なんだ？』

いや、気のせいではない。

後方からヘッドランプが急速に接近していた。

「時間を与えると、攻撃の余裕を与えることになる。可能な限り早く接近しろ」

「わかった」

五代明の指示に従い、水神晴玄は、アクセルをフルスロット。エンジンがひととき大きな咆哮を上げる。

狭い通路で走ることができる限界寸前まで速度を上げ、ゴムボートまで一気に接近した。

五代明がハンドガンゴムボートへ向けた。

応戦しようと、二人の占拠犯がサブマシンガンを向ける。

発砲したのはどちらが早かったのか。

五代明の放った弾丸は、正確にゴムボートのエンジンを打ち抜いた。急速に速度が低下し、コントロールが効かなくなる。

『横転するぞ！』

誰かが叫んだと同時に、五代明はゴムボートへ向かって跳躍。オートバイを運転していた水神晴玄は、反動で大きく揺れたがなんとか持ち直す。ゴムボートへ着地した五代明は、即座に五代芽を抱きかかえた。ゴムボートが横転する瞬間、再度通路へ向かって跳躍。芽を庇うように転がる。幸い二人とも特に怪我はなかった。

ゴムボートが横転した。

『ケイミン！』

初老の男が、占拠犯の中で唯一の女性を汚水の中から引き上げ、もう一台のボートへ乗せた。

ワシントンはゴムボートが横転する寸前、五代明と同じように、通路へ跳躍した。転がりながら衝撃を分散して、難なく立ち上がる。残ったゴムボートは速度を落としていたが、それでも流れの関係で進んでいく。

『ヨーキ！』ワシントンはヨーキにCDを投げた。それをキャッチしたのを確認すると『行くんだ！ なにがあっても立ち止まるな！』冷酷ともいえる指示を出す。命令をしているのは、見捨てられることになるワシントンだった。

一人を救出しようしたために、全員が退避不能になることは避けなければならぬ。たとえそれが指揮官であっても。もはや四人だけしか残っていない状態で、それがどれだけ意味があるかわからないが、しかしこの人数に減ったからこそ、成し遂げなければならぬ。

ヨーキは逡巡したが、エンジンをかけて、ゴムボートを進ませた。五代明は五代芽を抱えると、水神晴玄が運転するバイクの後部座席に乗せる。

「水神、芽をつれて戻ってくれ」

「五代さんは？」

「こいつと決着をつける」

決着？ 水神晴玄は怪訝に思う。なにかこの二人には個人的ななにかがあるのだろうか。

五代明と、占拠犯のボス、ワシントンとかいう男は、双方睨みあっている。

「よくわからないけど、わかった。無事戻ってこいよ」

水神晴玄はホテルへ引き返した。

それを見届けると、ワシントンは不適に笑う。

『いいだろう、わが息子よ。決着をつけよう』

薄暗い下水道に懐中電灯の薄暗い明かりが灯り、対峙する二人の姿をぼんやりと映す。

『しかし、驚いたよ。あの少年は、お前と同じように、なにか特別な訓練でも受けたのかな?』

ロイヤルハントの問いに、五代明は少し返答に困ったように答える。

『ただの平和な日本の子供だ』

『そうは思えない。お前も知っているだろう。私は最強の兵士を育成するための方法を考案し、実験し続けたのだ。あれほどの強さを手に入れるには、過酷な訓練を受け、そして数々の実践を経験しなければならぬ』

ロイヤルハントが少年兵を専門的に扱う傭兵会社を運営していたのは、最強の大人の兵士を育成するためだった。ひいては最強の兵士によって構築された、最強の部隊を作るために。

五代明は少し嘆息した。ロイヤルハントの考えに呆れたように。

『……今ならわかるが、あんた、平和な国つてのを、過小評価してないか』

『どういう意味だ?』

『あいつは白兵戦なら俺より強い』

水神清玄は、武装した兵士が占拠したホテルで、日本刀一本で銃を相手に何度か戦ったらしい。そんな芸当は五代明にも不可能だ。少なくとも同じ銃器類の入手に成功しなければ、自分はこのホテルで生存できなかっただろう。

そしてイベントホールで見たあの斬撃。人間の体を一瞬で分断するなど、まさに達人の侍。

『だが、別に戦場で育ったわけでも、特殊な訓練を受けたわけでもない。普通の中学生だ。あんたの優秀な部下は、その普通の子供にやられたんだ』

平和な国の、武道を教える道場の、畳の上で習っただけ。たったそれだけで、数々の戦場を渡り歩いた兵士たちを倒した。戦闘における強さは、結局のところ個人の才能によるところが大きく、環境や訓練だけで成立するわけではない。生まれつきの戦士がいるのだ。そして水神清玄は、本人に自覚はないだろうが、まさにそれだ。

『……それは、皮肉か？』

『事実だよ。あんたがやろうとした最強の兵士の育成は、平和な国の普通の人間と結局大して変わらなかったってことだ』

それが最強の兵士を育成するカリキュラムを受けた五代明の結論だった。

『そんなことは、始めから知っていた』当然のことのようにロイヤルハントは笑う。

『なに？』

『兵士とはなにか？ 戦士とはなにか？ それは己の意思を持って戦うことを選択した者だ。そこには、特殊訓練を受けたことや、戦場で生き延びたことなど、なんの意味もない。ただ、少し経験があるという程度のことだ。最強の戦士とは、己の意思を持って戦う者が到達しうる領域なのだ。生き延びるために戦う者は、ただ生存しているだけに過ぎない。新に強い戦士になるには、自ら戦う意思が絶対的に必要なのだ！』

『じゃあ、あんたはなんのために少年兵派遣会社なんて……』

『ライトマン。平和な日本はどうだった。ここにお前の居場所はあるか？ 戦いのない国。銃弾が襲うこともなければ、手榴弾を投げられることも、空爆されることも、地雷に怯えることもない。その中に暮らし、おまえはなにを得た。脆弱な者が力ある者を貶め、生きる価値のない者が生きる価値のある者を貪り喰らう。虚実を虚実で塗り固め、虚構に虚構を上塗りし、醜い蛆虫どもが権力を得て

のさばり、華の如き輝きを放つ美しきものがゴミ溜めの中に押しやられる。それが平和の正体だ！　だが、戦場はどうだ？　虚構などない。虚実など存在する余地などない！　それが、私の目指するのだ』

五代明は冷ややかな目を返す。

『話が見えない』

『単純な話だよ、ライトマン。私は、新たな戦争を起こす！　この、エンプレスホテル占拠は、そのための手始めだ！』

『手始め？』

『そうだ、ライトマン。金と方法を手手するために起こしたのだ。一つ目の金。これは成功を収めた』

『警察は百億円を払ってない』

『やつらが払うとは始めから思っていない。目的は、地下金庫にあるデータだ。総額五百億円の香港マネーの在り処を記したCD。あのホテルの支配人はなかなかの食わせ者だ。表向きは合法的なホテルを経営し、裏では公にすることのできないものを保管し、保管料で多くの利益を得る。そういったものの一つに紛失した香港マネーの所在を記したCDがあった。それを入手するためにはホテルを占拠するのが一番単純で成功率が高かった』

やはり百億円は警察を牽制するための嘘だったか。

『ディスクの入手は成功した。そしてもう一つ、戦争を起こす方法だ』

『どうする気だ？』

戦争を起こすには国を動かす必要がある。だが個人にできることなどたかがしれている。

『その結果はおまえが知っている』

『なに？』

『おまえが修学旅行生の中に入っていることは始めから知っていた。それを狙って占拠したんだよ』

『どういう意味だ？』

『かつて戦場を駆け巡り、そして平和な国で安寧と安逸を貪ったお前が、再び銃を手にするかどうかという実験だ！』

五代明はしばらく言葉を失う。

『この国は、いや、現在世界を支配している大国は、一種の洗脳によつて成立している。学校教育から始まり、大衆娯楽にいたるまで、支配者階級への反発をいかに抑えるか、いかに逸らすか、そして個人の欲望を以下に満足させる……いや、満足したと錯覚させるか』

『平和は支配者階級の洗脳の結果だと言いたいのか？』

『そうだ。だが、その洗脳を解除することができるかどうか。それが、問題なのだ』

『日本人を戦争に駆り立てるつもりか？』

『いいや。平和な国に潜伏し、溶け込んだ兵士が、それでもなお戦うことを決意できるかどうかだ』

『いったいどういう？』

『平和な国に潜伏した兵士の大半は、そのまま姿を消す。平和を感じ、二度と戦場へ向かおうとしない。戦いに赴くには、理由と覚悟、そして決意が必要なのだ！ それも、麻薬のごとき享墮に落ちてもなお貫くことのできる強い意志！ 本来それは個人が自ら得るもの、自ら見出すものだ。だが私は、それを意図的に引き起こす方法を考案した』

五代明は少しずつ理解し始めた。

『まさか、俺たちが故郷の国に帰ったのは……』

『そうだ、私がそう仕向けたのだ』

ワシントンは断言する。

『お前の両親を殺したのは私だと思ひ込ませ、私を殺させ、私は死を偽装した。そして、お前は生き延びるための方法を考え、実行し、お前たち十三人は、平和な国へ向かった。戦争の存在しない国で一定期間過ごし、平和に完全に馴染む頃合を見計らって、戦場を思い出させる。その時、平和に馴染んだ者は、戦いを選択するかどうか。そうだ！ どのような状況下にあっても自ら戦いを決意した者も

つとも強い！ 不可能とも思える作戦を完遂できるのは、他人に命令された者ではない！ 自ら選択した者だけだ！ そのために必要な強い意思。そして強い意志を支えるのは人間としての感情だ！ 残虐な欲求でもなければ、冷徹な心でもない。友を救いたいという心。家族を守りたいという心。人を思う愛こそが最強の戦士を誕生させる！』

『それをコントロールして発生させる方法を俺で実験したのか！？』
『そうだ。当初は武装占拠されたホテルでおまえがどう行動するか観察する程度だったが、おまえは実に見事に戦った。私の予想を遥かに上回って！ 平和を貪り喰らい、安寧に満ちたおまえが、友を助けるために再び銃を取り、かつての強さを、いや、それ以上の強さで我々が用意した兵士を打ち破った。それどころか、私の計画の一部を見破り、こうして逃走さえ妨害している。実験演習は予想以上の、大成功を収めたと言えるだろう』

『ドモチエフスキーたちも？』

『やつはここまでは知らなかった。おまえと戦わせるための対戦相手として、百億円を餌にして祖国再建を夢見る男を連れてきたただだ』

ドモチエフスキーの顔を思い出す。祖国を愛し、祖国に人生の全てを捧げ、そして祖国から追放された男。それでもなお帰郷することを夢見てやまなかった、その哀愁の思いさえも、この男はそれを知っているから、利用したというのか。

『マクスエルは？』

『あいつは私たちに手を貸した。そうだ、イギリスでも同じことをしたのだ。もつとも規模は今回より小さかったが、あいつもお前と同じように、再び戦場に引き戻した。そして、あいつは友を見捨てた。いや、始めからいなかったのかもしれない。だからこそ、私がいることを知ったとき、あいつは事態の解決に当たらず、私の側に付き、作戦に乗った。これもまた実験の予想通りだ。平和な国において、仲間がいなかったとき、かつての兵士はどのように行動するの

か確信が得られたよ』

マクスエル。かつて戦場を駆け巡り、そして自分のように友を得ることができず、そして戦場に自らの意志で戻った。たとえ一人でも、あいつと打ち解ける誰かがいれば、戦場には戻らなかっただろう。

『……その方法でいつたいなにをするつもりだ？』

仲間を助けるために銃を手にする者と、かつての仲間の元へ帰る者。二つの実験結果と、莫大な金を使ってなにを企んでいるのか。

『言っただろう、ライトマン。新たな戦争だよ』

『戦争、戦争、戦争。お前はそんなに戦争が好きか！？』

『いいや、戦争は人間が持つ欲求だ。世界の歴史を紐解けばすぐにもわかる。一時の平和は次の戦争のための準備期間に過ぎないことを。戦争は次の戦争を生み出し、その戦争は新たな戦争を引き起こす。永遠に終わらない死の螺旋だ！』

ロイヤルハントは五代明を見据える。かつて息子と呼び、父と呼んでいた時と同じ、どこか慈愛を持った瞳で。

『ライトマン。私が手塩にかけた息子たちの中で、おまえだけが私の実験に、いや、試験に合格した。マクスエルをも超えて。そう、おまえこそが私の後継者としてふさわしい』

そして手を差し伸べる。まるで救いの手のように。

『私と一緒に来い。再びおまえの生きる場所を、生きる価値のある場所を、真実だけが支配する場所を与えよう』

五代明はその手を少しだけ見つめた。

やがて大きく息を吐く。

『俺は、あんたのことを本当に父親のように思っていた。いや、それは今でも変わらない』

ロイヤルハントはかすかに期待と喜びが浮かぶ。

『だが……いや、だからこそ、俺はあんたを倒し、俺は自由になる』
五代明は強い決意を喜びを持って宣言した。

『俺は、俺が見出した、俺だけの自由の鐘を鳴らす』
リバティベル

ロイヤルハントは、寧ろ歡喜の笑い声を上げた。
『よくぞ言った！　それでこそ私の息子だ！』

二人は歡喜に満ちて対峙した。

チャンネル5の三人は、救助作業が行われていたヘリ墜落現場を離れて、ホテルへ戻ろうとしていた。

しかし、局から連絡が来て撤退するよう命令された。他のレポーターを送るというこらしい。

自分のスクープを横から取られるようなものだが、小野坂冬香はあまり逆らおうという気にはならなかった。人が死ぬ現場を、死んでいくさまを直視した精神的打撃が大きく、正直早く家に帰りたかった。慣れない山歩きで疲れたということもある。

「冬香さん、大丈夫ですか？」

バンを運転するアシスタントが尋ねた。

「ん、徹夜ですごく眠い」

適当に答えて車の外に目を向けた。展望台から離れ、ホテルからも遠ざかっていく。

もう夜は明けている。山間の隙間から朝日が見え始めていた。対向車線からすれ違いに同じチャンネル5のバンが通り過ぎていった。きっと、自分とは違い人気も運もある、同期のレポーターが乗っているのだろう。

あとは彼女に任せよう。もうホテルの占拠事件に興味はない。

小野坂冬香は改めて前を向いて座り直した。不意に運転しているアシスタントは、主要道を外れて細い道に車を入れた。地元の間人しか知らない、地図に掲載されていない近道。地図に載っていない

ということとは、封鎖されたということかもしれないが、主要道を使うより早く街に下りることができるので、地元の人間は勝手に使っている。

「よくこんな道知ってるわね」

眠そうな目ながら、小野坂冬香は感心する。

「地元ですから」

アシスタントもこの地域が出身だったので知っていたのだ。

ふと窓の外を見ると、山林の向こう、道路の下側にある川で誰かがいるのが見えた。少し遠く、樹木が視界の邪魔をしてよく見えな
いが、しかし人影が動いていることはわかる。

「いったいなにをしているのだろうか。」

「ちよつと、停めて」

アシスタントは何事だろうかと思いつつも、車を停めた。

「あれ、なにをしているのかしら？」

小野坂冬香が指差す。

「えーと、ちよつと待って」

カメラマンが望遠鏡代わりにカメラを向けて操作すると、バンに
備え付けてあるテレビに拡大映像が映った。

「……ねえ、これってもしかして」

小野坂冬香が彼らの持つている物を指差す。明確に判別できない
が、形状からしてサブマシンガンらしい。

あの川にいるのは、エンプレスホテルを占拠した犯人たちなのか。
「なんでこんなところに？」

アシスタントがささやく。話し声が聞こえるのではないかと恐
れているのだろうが、ここからならば大声でも出さない限り声は届
かない。

「ねえ、この車、向こうに発見されるんじゃない？」

小野坂冬香が指摘するが、カメラマンが否定する。

「いや、向こうからは見えにくい位置にある。多分大丈夫だ。だ
けど念の為、端に寄ったほうがいいな」

川は道路の位置より下にあるため、反対側に車を寄せれば、角度の問題で完全に見えなくなる。

車を移動させると外へ出て、彼らから見えないように腹這いになる。

車の中にあつた双眼鏡で小野坂冬香はよく観察し、カメラマンが映像を捉えている。アシスタントは車に待機。もし見つかった時のために、全力で逃げる準備をしておく。事件の最初にホテル前でのような恐ろしい体験は二度とたくない。

そういえば、あとで映像を確認したら、誰かが助けてくれたらしいことがわかった。占拠犯が銃弾を受けたような映像が撮れていたのだ。しかし、ほんの数秒のことで、映っていたのは自分たちを殺そうとした男だけ。肝心の命の恩人の映像は全く映っていないかった。できれば知りたいが、事件が解決するまで無理だろう。

それより気になるのは、占拠犯がこんなところでなにをしているのかだった。

警察がホテルの周辺を包囲しているはずなのに、どうやってここへ来ることができたのか。

「あ、わかった。わかりました」アシスタントが無線でささやく。
「たぶんこの辺にホテルにつながっている下水用水路の出口があるんですよ」

それでエンプレスホテルから離れたここにいるのか。木々に隠れて見えにくい、確かに下水用水路の出口らしき大きなトンネルがあり、そこから水が流れている。

「どうする？」カメラマンが尋ねる。

「しばらくここで様子を見ましょう。近づくのは危険よ」

確かに最初の時のように、いきなり銃撃を受けるのは避けたい。

占拠犯と思われる者たちは、ゴムボートの空気を抜いて、土砂や枯葉などで隠蔽すると、川を下り始めた。やはり撤退するのだろうか。しかし、どうして四人しかないのだろうか。占拠犯はかなり多かったはずだが。

「どうしよう？ 追いかける？」

小野坂冬香が判断に迷っている、アシスタントが連絡をしてきた。

「今ディレクターと話をしました。今の映像を流すそうです」

「流すって、生中継するつもり？」

「はい」

となると追いかける必要はないのだろうか。正直これ以上危険にさらされるのはイヤだった。

不意に、下水道の出口から、声が聞こえたような気がした。

「なに？」

それは小さく、だがやがて明確に聞こえ始めた。

周囲がコンクリートの狭い下水道の中では、拳銃を使うと兆弾を起こして危険だ。

五代明はワシントンを押さえ込むように下水の中へ押し倒そうとした。向けられる拳銃を持ち手ごと押さえ込んで、窒息させようとする。

だが、ロイヤルハントは体を捻り、逆に五代明を下水の中へ押し込んだ。

呼吸ができなくなり、行動が大幅に制限される。だが、背中からなにか浮力のある物が浮き上がってきた。

ゴムボートだ。先程エンジンを撃ち抜いたゴムボートが、どういふわけか一時的に水面下に沈んだのが、再び浮き上がった。緊急時に空気を供給して膨らませる機構が作動したためだが、結果的に五代明とワシントンを載せる形になった。

そして撃ちぬかれたはずのエンジンが、火を吹く勢いで回転し始めた。銃弾がブレーキをかけるなにかの機関を破壊してしまったらしい。一度は止まったそれは、今度は制御が利かずに、速度を上げ

て水面を走り始めた。

ゴムボートの上で五代明はロイヤルハントを逆に押し倒し殴打しようとするが、ロイヤルハントは再び五代明を押し倒す。それを何度も繰り返す。

「うおおお！」

『ぬあああ！』

技術云々というより、完全に力任せの戦い。

だが、それも強制的に終わることになる。下水の出口が見え、朝の光が闇の通路の中に差し込んでいた。

そしてゴムボートはブレーキを全くかけないまま、出口から飛び出した。

勢いのついたゴムボートはまるでスキージャンプのように飛び、短いながらも川を越える飛距離を作って、川原へ落下した。

そして五代明とロイヤルハントの体が投げ出される。

二人は川原を転がり、それが止まると周囲を確認し、同時にすぐ隣にいたお互いの視線が一致する。

下水道の外。周囲は広く、兆弾は起きない。

二人は同時にハンドガンを抜いた。

銃口を同時に眉間へ向け、引き金を引くと同時に、相手の拳銃を空いている手で弾き飛ばす。

弾丸がお互いのこめかみのすぐ真横を通過。

再び互いに銃口を向けて同時に発砲。引き金を引く寸前、同時に横へ体をステップさせて銃口から外れる。胸元を弾丸が掠める。

その体勢から体を回転させ、後ろ回し蹴りを入れる。その動きも同じで、足先が同時に鼻先を掠めた。

そしてハンドガンに向けたが、お互いの腕を開いている腕で掴んで銃口の方を力任せに変える。同時に二発発砲。五代明の銃口から弾丸が右側へ。ワシントンの銃口から弾丸が左側へ。

五代明は忌々しく歯を食いしばり、ロイヤルハントはどこか嬉しそうに笑みを浮かべた。

動きが完全に同じだ。それはロイヤルハントから学んだことから何一つ進んでいないということなのか、それともモチエフスキー以上の兵士であるロイヤルハントに匹敵するようになったということなのか。

いずれにしても決着がつかない。
どうする？

チャンネル5から生中継されているその映像は、エンプレスホテル占拠事件対策本部でも流されていた。

「なんてことだ」

佐伯真人があまりのことに呆然とする。

中学生と占拠犯が殺しあっている光景が生放送されている。

状況から考えれば、彼らが五代明とワシントンだろう。電話の内容とも一致する。

レポーターが状況を説明している。

今、ホテルを占拠した犯人と、人質となった中学生が戦っている。戦って……だから、どうしよう、このままじゃあの子殺されるわ。早く助けないと

半ば泣きそうな声で、カメラマンに乞っているようだ。

そんなこといったって、どうすればいいんだよ。拳銃撃ってるんだよ。近付いただけでこっちが撃たれる

ああ、どうしよう。警察の方、見ていますか。早く来てください。私たちじゃどうすればいいかわからないんです。ああ、ため。間に合うわけない。どうしよう、考えなきゃ。考えないと。どうすればいいか考えるのよ

テレビの仕事を半ば放棄して、レポーターはどうやって五代明を助けることができるのか考えているようだ。

だが、事実彼らに止める手段などないだろう。近付いただけで流

れ弾に命中する危険があるのだ。

「あの場所へ至急迎え！ 五代明を助けるんだ！」

桐嶋長平がホテル現場の警官に、至急生中継が行われている現場へ急行するように命令したが、戦いが終わるまでとても間に合わない。

決着がつくのはせいぜい数分程度。警官隊が到着することには、どちらか一方が殺されている。

うつ、ええい！

テレビ映像でレポーターが突然、道路から降りて川へ向かった。

冬香ちゃん？！ 冬香ちゃん！

カメラマンが止めようと何度も名前を呼んでいるが、彼女は止まらずにそのまま川へ向かった。

会議室でチャンネル5の映像を見ていた佐伯真人は、本部長の席から立ち上がると、イスにかけてあったコートを羽織る。

「本部長、どこへ？」

副署長の問いに、強い意志で答える。

「私もホテルへ向かいます」

「うん、私も行こう」

桐嶋長平も自分のコートを羽織った。

もう会議室で安穩と事態の経過を待ってられない。今あの場所で闘っている五代明を助けなければ。

たとえ間に合わなくとも、大人しくははいられなかった。

「副署長、ここの指揮を任せます」

副署長は自分に指揮権を与えられたことに呆気にとられたようだが、唐突に姿勢を正して敬礼した。

「はい！ 指揮を任せました！」

本部長の佐伯真人と、署長の桐嶋長平は敬礼を返すと、二人は走って現場へ向かった。

銃口を向けられた瞬間はじいて銃口を逸らし、銃口を向けた途端はじかれて銃口が逸らされる。

接近戦において銃器類が扱いにくい最大の理由がここにある。

弾丸は銃口が向いている方向にしか飛ばない。だからお互い手が届く範囲で銃器類を使うと、銃を素手で弾くか抑えられるなどされると、それだけで弾は相手に命中しない。

しかし今は武器を切り替える余裕がない。最初にハンドガンを武器として選択したため、お互い弾切れを起こすまでハンドガンを使い続けるしかなかった。

（これで最後）

五代明はハンドガンの銃口をロイヤルハントの眉間に定め、同時にロイヤルハントも銃口を五代明の眉間に定め、そしてお互いの空いている手を、同時に押さえ込み、銃口はずらされることなく、引き金が引かれた。

銃声が同時に鳴り響く。

首を曲げて射線上から回避し、弾丸は二人とも外れた。

そしてお互いこれで弾切れだった。

二人はそのまま動かなくなり、動けなくなった。

お互い左手を押さえ込んでいる。

右手は弾のない拳銃。

次の武器に切り替えなければならないが、その瞬間がもつとも無防備となる。そこを狙われれば素手でも取り押さえることが可能だろう。

だが、お互い素手で戦えば、さらに泥沼とかし、最悪相打ちとなるかもしれない。

決着をつけるには武器が必要だ。

だがその武器を手にする瞬間が敵にチャンスを与えてしまう。お互い動けない。

小野坂冬香はハイヒールを履いていたことを後悔した。

舗装されていない山の斜面は歩きにくく、まともに歩くことさえ困難だった。

それでも少しずつ斜面を降りて川の手前まで来た。

銃撃格闘が止まっており、占拠犯と中学生はお互いに拳銃を向けたまま動かないでいる。

まるで西部劇の決闘シーンのようだ。

実際、お互い動けない状態になってしまったのだろう。

だとすると、今が彼を助けるチャンスかもしれない。

ちようど、自分の位置は占拠犯の背後だ。その辺の石で思いっきり殴ってやればきつと気絶するに違いない。

小野坂冬香はゆっくりと慎重に接近し、足元に転がる手ごろな石を見つけて拾い上げようとした。

唐突に、ハイヒールの踵が石の隙間に挟まり、バランスを崩して尻餅をついた。

「きゃ！」

短い悲鳴を上げて、それが大失敗だとすぐに気付いたが、もう遅かった。

占拠犯が振り向いた。

ロイヤルハントは背後から突然上がった声に思わず反応して振り向くと同時に、もう一丁懐にあった拳銃を抜いた。

同時に五代明はその場で屈み、足首に巻きつけてあったナイフを抜き、ワシントンが突然現れた女の人へ発砲する前に、そのままの体勢でワシントンの左アキレス腱を切断する。

（しまった！）

ロイヤルハントは自分が致命的な失敗を犯したことに気付いたが、もはや手遅れだった。足にとてつもない激痛が走り、体重を支えることもできず、思考能力さえ失いかける。

五代明は続けて拳銃を持つ左手の肩にナイフを突き立てた。間接部分に達したそれは、左手の筋肉から筋をいくつか切断した。

ロイヤルハントは手にする拳銃を握り続けることができずに落とし、そして体が倒れるのを自覚しても踏ん張ることができずに、仰向けに転倒した。

そして五代明がロイヤルハントの鳩尾へ懇親の右拳を叩き込んだ。避けることなど全くできなかったロイヤルハントの体に、パンチの衝撃が伝わり、体の中でなにかがはじけたかのような感覚がしたかと思うと、その意識を失った。

小野坂冬香はどこか呆然と一連の出来事を見ていた。

中学生がこちらを見ている。酷く疲れた顔で。

「やあ」

軽い挨拶をする中学生。

「ええ」

戸惑い気味に返答をする小野坂冬香。

「あんた、チャンネル5のレポーターだよな？」

「ええ、そうよ」

どうして知っているのだろうか。

疑問を察したのか、少年は「エンプレスホテルで、あんたの生中継見たよ。ホテルの正面入り口の」

「そうなの？」

「ああ。それで、一言言いたかったんだ」

「なに？」

「危険を感じたら悠長に生放送してないで早く逃げたほうがいいと

思う」

小野坂冬香はなんと返答したらわからなかった。

「それからもう一つ」

「なに？」

「ありがとう。助かった」

彼女がワシントンの注意を一瞬でも引き付けてくれなければ、ここに倒れていたのは自分かもしれないなかった。

五代明はその場でしゃがみこんだ。

「……疲れた」

五代明は小野坂冬香と一緒にバンのところまで戻り休んでいた。ディレクターが電話で、占拠犯と戦った少年にインタビューしろといていたが、小野坂冬香は止めておいた。人気取りや視聴率のために、そこまで無神経なこととはしたくない。そしてやはり自分にはこの仕事に向いていないと悟った。

カメラマンとアシスタントが警察に位置を連絡し、十分ほどしてパトカーが数台と救急車が到着した。救急隊員が五代明に怪我がないかを調べ、足に銃弾を受けているのを発見して応急処置を始めた。警官が周囲の調査を始め、逃走した占拠犯の追跡を始めたが、残りを捕まえることは難しいだろう。

それからしばらくして、佐伯真人と桐嶋長平がやってきた。

「……君が、五代明くん？」

救急車の中で座って休んでいる五代明を発見した桐嶋長平は、疑念の声だった。

五代明は無言でうなずく。

その少年は確かに年齢の割には逞しい体つきで精悍ではあったが、しかしそれだけだ。映画に登場するアクションヒーローには程遠い、普通の少年にしか見えなかった。

その普通の少年は、汚水と血にまみれて酷い格好をしている。まるで彼がこれまで歩んできた道のりを現すように。そしてそんな姿になってもなお、決然と生きる意思を挫くことはなく、戦場を、そして今回の事件を生存したのだ。

「あんたたちは、対策本部の？」

二人は自己紹介をすると、少年と握手する。

「こいつと、後のことは頼んだ」

救急車の寝台に寝かせられているロイヤルハントを指差す。完全に気絶しているが、念のため動けないように拘束されている。専用の拘束具ではなく、患者を固定するために使うものだが、少なくともこれで自由に身動きをとることはできない。もともと、左アキレス腱を切断されているのだ、手術によって接合し、リハビリを行わなければ、歩くこと自体できないだろうが。

「わかった。任せてくれ。今度こそ我々に任せてくれ」

佐伯真人は念入りに請け負う。

五代明はそれで、彼らの制止を二度も無視して行動したことを思い出し、苦笑した。

「ああ、今度こそ、あんたたちに任せる」

彼らは五代明の無事を確認すると、安堵してエンプレスホテルに向かった。主要道に仕掛けられた爆弾の解除が終わり、今人質たちがホテルから救出されている最中だという。

そしてさらに十数分後、水神晴玄が五代芽を乗せてバイクで現れた。エンプレスホテルに到着した二人から聞いたらしい。

「お兄ちゃん！」

五代芽は兄の姿を見ると、飛びついて抱きしめた。その眼に涙をたくさん溜めて。

水神晴玄がどこかからかうような笑みで、五代明に告げる。

「酷い格好だぞ」

「あんな汚水の中で格闘したんだ」

汚物がついている上、とてつもなく酷い臭いがしている。

「早くホテルへ戻ってシャワーを浴びて着替えたい。それから、この服は絶対に捨てる。ほら、芽。汚れるから」

五代明は妹に離れるように言うが、五代芽はけして離れようとしなかった。

そして水神晴玄は、救急車で運ばれていく占拠犯の首謀者ジョー・ワシントンことロイヤルハントを見送った。

「殺さなかったんだな」

てつきり過去と決別するために、あの男を殺すつもりなのだと思うっていた。詳しい事情は全く知らないが。

五代明は水神晴玄に答える。

「ここは、日本だからな」

誰かを殺したり、殺されたりすることのない、平和な国。たとえそれが虚構の上に成り立っているのだとしても。

水神晴玄は、自分が人を殺すことや、誰かが人を殺すことに対して、抵抗感がなくなっていることに気付いた。疲れているだけなのかもしれないし、一時的に感覚が麻痺しているだけかもしれない。

もしかすると、今回の事件を通じて、あいつらと同じような精神に変化したのだろうか。

「おまえはあいつらとは違う」五代明が心中を読み取ったかのように「少し強くなったただけだ。精神的に、些細なことで動揺したり、うるたえたりしなくなった。それだけだ」

そういうものなのだろうか。自分にはわからない。だが、断言する五代明は、もしかすると同じような経験をしてきたのだろうか。

詳しい話はまだ聞いていないが、あの事件の首謀者や、中学三年生で十八才であること、銃器類を扱いが上手いこと。

だが、五代明から見れば自分も同じなのかもしれない。ただの中学生が武装兵が占拠するホテルの中で最後まで生存しているなど、少し信じられないだろう。それこそ、占拠犯たちが勘違いしたようにニンジャかなにかだと思っているのかもしれない。

不意に五代明は「ところで、一つ聞きたいんだが」

「なんだ？」

「おまえ、バイクの免許持ってるのか？」

「……」水神晴玄は答えなかった。

「大体、まだ中学生だろ」

「……」水神晴玄は目を朝日へ向けた。

「ついでに、ここ警官が山ほどれぞ」

「……」水神晴玄はバイクに跨ると、当然のような顔で走り去った。警官たちは彼に目を向けたが、占拠事件に意識が向いていたためか、中学生が無免許運転をしていることに思い当った者は誰もいなかった。

五代明と五代芽はお互い顔を見合わせて、やがて笑い始めた。

エピローグ

エンプレスホテルの爆弾解体や、地雷撤去作業は難航したが、人質となった宿泊客、ホテルの従業員、そして葉山中学校三年生は、全員その日のうちにホテルから出ることができた。

占拠犯三十六名のうち、三十名が中学生の手によって死亡するという異常な事態に、警視庁上層部は困惑し、どう対処するべきか、方針を決定するのに難航したという。

また五代明と水神晴玄の行ったことが、過剰防衛ではないかという非難の声が一部から上がったようだが、これは警察庁と警視庁の上層部が黙らせた。警察がろくに対応できずに終わったことを、二人を非難し告訴することで、再び蒸し返してしまうことを避けたかったのだろう。

葉山中学校修学旅行生も、無事家に帰ることができた。

一カ月後、事件のために亡くなった人々の葬儀が合同で行われた。残っている占拠犯はだれも捕まっていない。武器をどこから持ち込んだのか。エンプレスホテル設計に詳しいのはなぜなのか。そして彼らはいったい何者なのか。

数々の謎は解かれず、捜査は一向に進展していない。

良い知らせもあった。銃弾を腹部に受けて重傷を負った大滝由美は、病院で順調に回復し、卒業式には無事出席できるという。

そして、半年後。

葉山中学校三年生の卒業式が終わり、彼らは三年間を過ごした学び舎を後にした。

五代明と五代芽の兄妹。

まだ車椅子から立てないが、リハビリは順調に続いている大滝由美。

その看病を自ら引き受けた瀬戸口大輔。

最近、従姉妹の話をよくする水神晴玄。

桜が舞う中、彼らは中学校を最後にした。

校門の所で、佐伯真人と桐島長平が待っていた。事件のあと、事情聴取などで何度か会うことになった彼らとはすっかり顔なじみになっていた。

「卒業おめでとう」

佐伯真人の、その言葉とは裏腹、祝福しに来たとは思えないほど硬い顔をしていた。

それは、本人が普段から真面目な顔をしているという理由だけではないと、五代明は感じ取った。

「なにかあったのか？」

佐伯真人は言い難そうに、だがはっきりと告げた。

「ジョージ・ワシントン……いや、ロイヤルハントが脱獄した」

全員の顔が強張る。

「何者かの手引きによるものだ。おそらく、まだ捕らえていないあの時の占拠犯だろう。すぐに追ったが、その日のうちに国外に逃亡したようだ。君たちに危険はないと思う。だが、念のためしばら

く護衛をつける。構わないかな？」

異論などあるはずなかった。

「あいつは、またなにかをするつもりだ」

五代明は確信を持って告げる。

そして取引するあの男とはいったい何者なにか。

次の戦争。戦争のための戦争。永遠に終わらない死の螺旋。

「ロイヤルハント……なにをするつもりだ？……」

？

公に報道されたありきたりな事件、あるいは日常的に存在する平凡な現在に……

2001年九月十一日、アメリカのニューヨークとワシントンに於いて同時多発テロ事件が発生。

同年十月。アメリカ合衆国はアフガニスタンへの武力攻撃を開始。翌2002年一月二十九日、イラク・イラン・北朝鮮が、大量破壊兵器を保有するテロリスト国家であるとして、悪の枢軸発言を行った。相手国がアフガニスタンに続く攻撃目標であることを含ませたこの演説は、これらの国の強い反発を招き、対立が激化した。

2004年三月十九日、米英軍はバグダッドなど主要都市に対して空爆を開始し、イラク戦争へと突入した。

世界は戦争の一途を辿っていく。

永遠に続く死の螺旋のように。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0880o/>

Ordinary

2010年11月22日18時40分発行